7 休学・復学・退学等

（1）休学

①「休学願」

病気等のやむをえない理由により、引き続き3か月以上修学できない場合は、休学を願い出ることができます。休学を希望する者は、「休学願」に理由と休学期間を書き、保証人と連署のうえ、学年担当教員の承諾を得て、原則として休学開始の1か月前までに教務課を通じて学長に許可を願い出てください。休学の理由が病気である場合は、医師の診断書も添付してください。

なお、授業料が納付されていないと、「休学願」は受理されません。休学を願い出る際は、授業料の納付状況を確認してください。

②休学の期間

休学の期間は、1年以内と定められています。ただし、特別の理由がある場合は、学長の許可を得て、引き続き休学することができます。休学の延長を希望するときは、「休学願」を改めて教務課に提出してください。休学の理由が病気である場合は、医師の診断書も添付してください。

休学の期間は、通算して3年を超えることはできません。

休学の期間は、在学期間には含まれません。

（2）復学

休学期間内に、休学の理由が消滅した場合は、学長の許可を得て復学することができます。復学を希望するときは、「復学願」に理由と復学予定日を書き、保証人と連署のうえ、学年担当教員の承諾を得て、原則として復学予定日の1か月前までに教務課を通じて学長に許可を願い出てください。

（3）退学

やむをえない理由で退学を希望する場合は、学長に願い出て、その許可を受けなければなりません。退学を希望する者は、「退学願」に理由と退学予定日を書き、保証人と連署のうえ、学年担当教員の承諾を得て、原則として退学予定日の1か月前までに教務課を通じて学長に許可を願い出てください。退学の理由が病気である場合は、医師の診断書も添付してください。

なお、授業料が納付されていないと、「退学願」は受理されません。退学を願い出る際は、授業料の納付状況を確認してください。

(4)再入学

正　本学を退学した者、または授業料未納により除籍となった者が再入学を志願する場合、選考のうえ、許可することがあります。

誤　本学を退学した者が再入学を志願する場合、選考のうえ、許可することがあります。

（4）留学を希望する場合

「留学（海外派遣留学制度）」については、第2章「8 充実した学習のための諸制度」（13ページ～）で述べたとおりですが、この制度を活用するためには、「教育実習」など学年指定のある科目の履修と留学時期が重ならないように考えて履修計画を立てる必要があります。

留学を計画する際の注意事項については、留学に関するガイダンスでお話しますが、必要があれば研究・国際交流支援室にお問い合わせください。

2 履修型の登録（特別支援教育教員養成課程のみ）

（1）履修型の登録

特別支援教育教員養成課程の学生は、卒業要件を満たすことによって特別支援学校教諭一種（コースに応じて領域が指定される）の免許状と、小学校教諭一種または中学校教諭一種（1教科選択）の免許状の所要資格が得られますが、小学校教諭一種免許状の所要資格を取得するのか中学校教諭一種免許状の所要資格を取得するのか選択して、「履修型」の登録を行わなければなりません。

卒業要件として小学校教諭一種免許状の所要資格を取得する場合は「小履修型」を、中学校教諭一種の免許状の所要資格を取得する場合は「中履修型」（教科を必ず一つ選択すること）を登録する必要があります。

履修型の登録時期と登録手続きの方法は、下記のとおりです。

◆履修型の登録期日

1年次の10月（登録期間の詳細は、掲示にてお知らせします）

◆手続きの方法

「履修型登録願」（所定の用紙を教務課の窓口で配付）に必要事項を記入し、教務課を通じて**（正）学部長（誤）学務担当副学長**に願い出てください。

（2）履修型の変更

登録した「履修型」と「中履修型の教科」の変更は、特別な事情が生じた場合を除いて認められません。

特別な事情が生じた場合は、「履修型変更願」あるいは「中履修型の教科変更願」に理由等必要事項を記し、学年担当教員の意見書を添えて、教務課を通じて**（正）学部長（誤）学務担当副学長**に願い出てください。

3 授業科目の履修登録

授業科目を履修するためには、年度ごとに履修登録をする必要があります。履修登録をしなかった授業科目は、たとえ授業に出席していても、単位の認定を受けることができません。

次の（1）（2）の手続きをして、履修登録を行ってください（手続きの流れは、次ページの図参照）。

（1）「履修届」の提出

授業科目を履修する際には、開講日から2週間以内に、「履修届」を授業担当教員に直接提出してください。

※令和3年度は履修届を使用しません。

（2）ポータルサイトによる履修登録

履修する授業科目はすべて、年度はじめ（4月）の所定の期日に、本学ホームページからアクセスできるポータルサイトを通じて登録する必要があります。後期開始時（10月）にも追加登録期間がありますが、後期の登録期間は年度途中に特別な理由が生じた場合に備えて設けられたものですので、原則として年度当初に、その年度に履修する科目をすべて登録してください。

履修のしおり

令和３年度（2021 年度）入学生用

Miyagi University of Education

履修に関する問合せ・手続きは、教務課（2号館1階）へ

取扱時間は、月曜日から金曜日の8：30～18：00
ただし、休業期間中は、月曜日から金曜日の8：30～17：15

窓口番号	担当内容	電話番号
②	履修関係書類の交付、履修手続き、履修に関する相談 成績（単位修得）証明書、卒業（見込）証明書、 教育職員免許状取得見込証明書等の発行 （使用目的が教員採用試験および就職関係以外のもの） 学生証の発行 休学・退学等の手続き 電子化シラバス関係 授業用機器の貸し出し 教室使用関係	(214)3331 (214)3683 (214)3626
③	非常勤講師関係 研究生・科目等履修生の受け入れ	(214)3332 (214)3654 (214)3717
④	教育実習・介護等体験・社会教育実習等について 教育職員免許状の申請	(214)3333 (214)3442

宮城教育大学附属校園連絡先

施設名	所在地	電話番号
附属幼稚園	〒980-0011　仙台市青葉区上杉6丁目4－1	(234)0305
附属小学校	〃	(234)0318
附属中学校	〃	(234)0347
附属特別支援学校	〒980-0845　仙台市青葉区荒巻字青葉395－2	(214)3353

はじめに

1 『履修のしおり』とは

『履修のしおり』は、**本学の教育課程と、授業科目の履修方法等を説明するルールブック**です。

みなさんが在学中に履修できる科目、取得できる資格が示されています。また、卒業までに、どのような授業科目を、どの順に、どれだけ取らなければならないのか、授業科目の履修にはどのような手続きが必要なのかが記されています。

『履修のしおり』に記載されているルールに従って、しっかりと履修計画を立て、必要な授業を履修してください。

なお、**『履修のしおり』は、入学時に渡されたものを卒業まで使います。**入学年度によって内容が異なる場合があり、**他年度のものでは代用できません**ので、なくさないように注意してください。

2 『履修のしおり』と『開講科目一覧』との関係

『履修のしおり』には、みなさんが在学中に履修できる授業科目が掲載されていますが、すべての科目が毎年開講されるわけではありません。**その年に開講されている科目の具体的な情報（授業担当教員名や時間割も含む）は、『開講科目一覧』に記載されています**ので、年度の初めに『開講科目一覧』を受け取り、その内容を確認して履修登録をしてください。

3 履修に関する諸連絡の伝達方法

履修に関わる手続きの締め切り日時や、集中講義・教育実習等に関する連絡、授業の教室変更や休講・補講、試験等の情報は、原則的にポータルサイトで情報配信します。また、教務関係の個人呼び出しも、ポータルサイトを通して行います。

ポータルサイトは、登下校時には必ず確認するようにしてください。

ポータルサイトを見なかったことによって生じる不利益については、各自の責任になりますので、十分に注意してください。

なお、ポータルサイトの詳細については、第2章「7 授業情報の調べ方」（11ページ～ 13ページ）及び第3章「3 授業科目の履修登録」（16ページ～ 17ページ）を参照してください。

目次

はじめに

第1章
教育課程のポリシー、卒業要件等

001 1 本学の教育目標(ディプロマ・ポリシー)
001 2 教育課程の特色(カリキュラム・ポリシー)
003 3 入学者受入方針(アドミッション・ポリシー)
003 4 課程・コース・専攻
004 5 卒業するための要件
(1)卒業するためには
(2)修業年限と在学期間
005 6 学位と取得資格
(1)学位
(2)取得資格
006 7 休学・復学・退学等
(1)休学
(2)復学
(3)退学
(4)再入学
(5)除籍

第2章
授業

007 1 学期と授業期間
007 2 授業の形態
007 3 単位制と授業時間、学習時間
007 4 授業科目の区分
(1)基礎教育科目
(2)基盤教養科目
(3)現代的課題科目
(4)専門教育科目
008 5 自由選択科目
009 6 「授業科目表」の見方
011 7 授業情報の調べ方
(1)『履修のしおり』(本冊子)掲載の「授業科目表」
(2)『開講科目一覧』
(3)電子化シラバス
(4)ポータルサイト
013 8 充実した学習のための諸制度
(1)留学(海外派遣留学制度)
(2)学都仙台単位互換ネットワーク(単位互換制度)
014 9 学生による授業評価アンケート

第3章
履修方法等

015 1 履修計画の立て方
(1)卒業要件を満たすために
(2)副免許状の取得
(3)資格取得を希望する場合
(4)留学を希望する場合
016 2 履修型の登録(特別支援教育教員養成課程のみ)
(1)履修型の登録
(2)履修型の変更
016 3 授業科目の履修登録
(1)「履修届」の提出
(2)ポータルサイトによる履修登録
(3)履修登録の変更・取消し
017 4 履修にあたっての留意事項
(1)履修登録単位数の上限〔CAP制〕
(2)履修条件と履修制限
(3)授業のクラス分けとクラス指定
(4)「重ね履修」
(5)再履修
(6)履修登録前の授業
(7)履修登録以外に手続きが必要な科目
018 5 履修関係の相談、学習支援

第4章
成績評価・単位認定等

019 1 成績評価
019 2 追試験・再試験
(1)追試験
(2)再試験
019 3 成績評価の評語・評点と単位認定
019 4 GPA
(1)GPAとは
(2)GPAの算出方法
020 5 成績の確認
020 6 入学前に修得した単位の認定
020 7 留学や単位互換制度によって修得した単位の認定
021 8 単位認定に関する留意事項
(1)単位の取消し
(2)不合格となった科目の単位修得

第5章
各教育課程と教育課程表

023 1 初等教育教員養成課程の教育課程
(1)教育目的と教育課程
(2)卒業するために必要な単位数
(3)教育職員免許状取得の資格およびその他の資格
024 2 初等教育教員養成課程・教育課程表(卒業に要する単位数)
025 3 初等教育教員養成課程の授業科目と履修方法
(1)基礎教育科目
(2)基盤教養科目
(3)現代的課題科目【発達・教育系は除く】
(4)専門教育科目
(5)自由選択科目
026 4 中等教育教員養成課程の教育課程
(1)教育目的と教育課程
(2)卒業するために必要な単位数
(3)教育職員免許状取得の資格およびその他の資格
026 5 中等教育教員養成課程・教育課程表(卒業に要する単位数)
027 6 中等教育教員養成課程の授業科目と履修方法
(1)基礎教育科目
(2)基盤教養科目
(3)現代的課題科目
(4)専門教育科目
(5)自由選択科目
028 7 特別支援教育教員養成課程の教育課程
(1)教育目的と教育課程
(2)履修型の登録と、卒業するために必要な単位数
(3)教育職員免許状取得の資格およびその他の資格
029 8 特別支援教育教員養成課程・教育課程表(卒業に要する単位数)
030 9 特別支援教育教員養成課程の授業科目と履修方法
(1)基礎教育科目
(2)基盤教養科目
(3)専門教育科目
(4)自由選択科目

第6章
全課程共通科目

031 1 基礎教育科目
031 2 基盤教養科目
031 3 その他の全課程共通科目
(1)情報処理専門教育科目
(2)資格取得関連科目
032 4 授業科目表
授業科目表1(基礎教育科目)
授業科目表2(基盤教養科目)
授業科目表3(情報処理専門教育科目)

第7章
現代的課題科目

037 1 教育目的と特徴
037 2 「科目群」の設定方針
038 3 必要単位数と履修方法等
(1)必要単位数と授業科目
(2)履修方法・履修手続き
040 4 授業科目表
授業科目表5(現代的課題科目)

第8章
初等教育教員養成課程専門教育科目

045 1 専門教育科目　その1　教職科目
授業科目表6―①（初等教育・教職科目）
053 2 専門教育科目　その2　小学校の教科科目
授業科目表7（小学校の教科科目）
054 3 専門教育科目　その3　コース専門科目
授業科目表8―①（幼児教育コース）
授業科目表8―②（子ども文化コース）
授業科目表8―③（教育学コース）
授業科目表8―④（教育心理学コース）
授業科目表8―⑤（国語コース）
授業科目表8―⑥（社会コース）
授業科目表8―⑦（英語コミュニケーションコース）
授業科目表8―⑧（数学コース）
授業科目表8―⑨（理科コース）
授業科目表8―⑩（情報・ものづくりコース）
授業科目表8―⑪（家庭科コース）
授業科目表8―⑫（音楽コース）
授業科目表8―⑬（美術コース）
授業科目表8―⑭（体育・健康コース）
071 4 専門教育科目　その4　選択コース科目【発達・教育系のみ】
071 5 専門教育科目　その5　卒業研究
071 6 自由選択科目

第9章
中等教育教員養成課程専門教育科目

073 1 専門教育科目　その1　教職科目
授業科目表6―②（中等教育・教職科目）
081 2 専門教育科目　その2　専攻専門科目
授業科目表9―①（国語教育専攻）
授業科目表9―②（社会科教育専攻）
授業科目表9―③（英語教育専攻）
授業科目表9―④（数学教育専攻）
授業科目表9―⑤（理科教育専攻）
授業科目表9―⑥（技術教育専攻）
授業科目表9―⑦（家庭科教育専攻）
授業科目表9―⑧（音楽教育専攻）
授業科目表9―⑨（美術教育専攻）
授業科目表9―⑩（保健体育専攻）
081 3 専門教育科目　その3　卒業研究
081 4 自由選択科目

第10章
特別支援教育教員養成課程専門教育科目

107 1 専門教育科目　その1　教職科目
授業科目表6－③(特別支援教育・教職科目)
117 2 専門教育科目　その2
小学校の教科科目【小履修型のみ】
117 3 専門教育科目　その3
中学校の教科科目【中履修型のみ】
117 4 専門教育科目　その4　特別支援専門科目
授業科目表10－①(視覚障害教育コース)
授業科目表10－②(聴覚・言語障害教育コース)
授業科目表10－③(発達障害教育コース)
授業科目表10－④(健康・運動障害教育コース)
118 5 専門教育科目　その5　卒業研究
118 6 自由選択科目
127 7 免許法相当科目表

第11章
教育実習

139 1 「教育実習とそれに直接関連した科目」の履修
(1)「教育実習とそれに直接関連した科目」とは
(2)「教育実習とそれに直接関連した科目」の目的
(3)各授業科目の履修方法
140 2 教育実習の履修資格
142 3 実習校・実習期間
142 4 教育実習の履修登録
142 5 教育実習履修の留意事項
(1)「教育実習生記録」の提出
(2)「事前・事後指導」
142 6 追実習
142 7 成績評価等
143 8 教育実習等特例措置

第12章
介護等体験

145 1 介護等体験
145 2 実施学年・実施施設・体験期間
145 3 実施施設の種類
145 4 体験内容
145 5 介護等体験の費用
145 6 介護等体験を行うための要件
146 7 介護等体験の参加手続き
146 8 介護等体験の証明書の提出

第13章
教職実践演習

147 1 教職実践演習
147 2 単位数と履修資格等
(1)履修時期と単位数
(2)履修資格
(3)履修方法
147 3 教職実践演習と履修カルテ
(1)資料の蓄積と履修カルテ
(2)履修カルテの作成と管理
148 4 授業科目表
授業科目表6－①(初等教育・教職科目)
授業科目表6－②(中等教育・教職科目)
授業科目表6－③(特別支援教育・教職科目)

第14章
卒業研究

149 1 卒業研究
149 2 卒業研究の参加資格
149 3 卒業論文の作成・提出・審査
(1)卒業論文の作成
(2)卒業論文題目の提出
(3)卒業論文の提出
(4)卒業論文の審査

第15章
副免許状の取得

151 1 本学で所要資格を取得できる免許状
151 2 副免許状の取得に関わる教育実習の履修
152 3 幼稚園、小学校、中学校、高等学校教諭の免許状取得を希望する場合
(1)「教科(領域)に関する科目」の履修
(2)「各教科(保育内容)の指導法に関する科目」の履修
(3)「教育の基礎的理解に関する科目」の履修
(4)「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」の履修
(5)「教育実践に関する科目」の履修
(6)「大学が独自に設定する科目」の履修
157 4 特別支援学校教諭の免許状取得を希望する場合
160 5 中学校、高等学校教諭の免許状の「教科に関する科目」(免許法相当科目表)

第16章
その他の資格の取得

171 1 学校図書館司書教諭の任用資格の取得
(1)学校図書館司書教諭とは
(2)任用資格の取得
(3)履修上の留意点
172 2 社会教育主事の任用資格の取得
(1)社会教育主事とは
(2)任用資格の取得
(3)履修上の留意点
(4)「社会教育士」の称号の付与
174 3 授業科目表
授業科目表11－①(学校図書館司書教諭)
授業科目表11－②(社会教育主事)

I

第１章
教育課程のポリシー、卒業要件等

1 本学の教育目標（ディプロマ・ポリシー）
2 教育課程の特色（カリキュラム・ポリシー）
3 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）
4 課程・コース・専攻
5 卒業するための要件
(1)卒業するためには
(2)修業年限と在学期間
6 学位と取得資格
(1)学位
(2)取得資格
7 休学・復学・退学等
(1)休学
(2)復学
(3)退学
(4)再入学
(5)除籍

第1章 教育課程のポリシー、卒業要件等

1 本学の教育目標（ディプロマ・ポリシー）

みなさんは宮城教育大学で4年間、教師となるための学修を重ね、「学士（学校教育学）」の学位（ディプロマ）を取得して卒業することになります。大学では以下のようなディプロマ・ポリシー（学位授与方針）を定め、卒業に際してみなさんが身につけているべき力を明示しています。

宮城教育大学（教育学部）ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）

宮城教育大学の学生は、教育の未来と子どもたちの未来を担う教師として、次のような力を身につけて卒業します。

1．広い視野と高度な専門性を具え、実践的な指導力を身につけた教師

1-1　広い視野と豊かな教養に裏付けられた深い人間観と、世界を正しく見つめ、異文化を受容できる確かな社会観を身につけている。

1-2　専門とする教科や得意とする分野・領域について、確かな学力と高度な専門性、実践的な指導力を身につけている。

1-3　子どもの発達や心身の状況に応じて、それぞれが抱える問題を理解し、適切に指導できる知識と能力を身につけている。

1-4　常に学び続け、自己研鑽に励み、創意工夫して、よりよい教育を目指す確かな基礎力とひたむきな向上心を身につけている。

2．強い使命感と責任感を持ち、豊かな人間力を具えた教師

2-1　教育に対する強い使命感と責任感を持ち、愛情をもって子どもに接することのできる健康な心身と豊かな人間力を具えている。

2-2　組織の一員として、高い倫理観と規範意識、自己制御力を持って、教師としての職責を果たそうとする真摯な姿勢を身につけている。

2-3　子どもとの間はもとより、他の教職員、保護者や地域の関係者とも良好な信頼関係を築きつつ、着実に教育に取組む姿勢を身につけている。

2-4　時代の状況や社会の変化のなかで、自ら培ってきた知識や体験を活かしつつ、新たな課題に立ち向かう柔軟さや粘り強さを具えている。

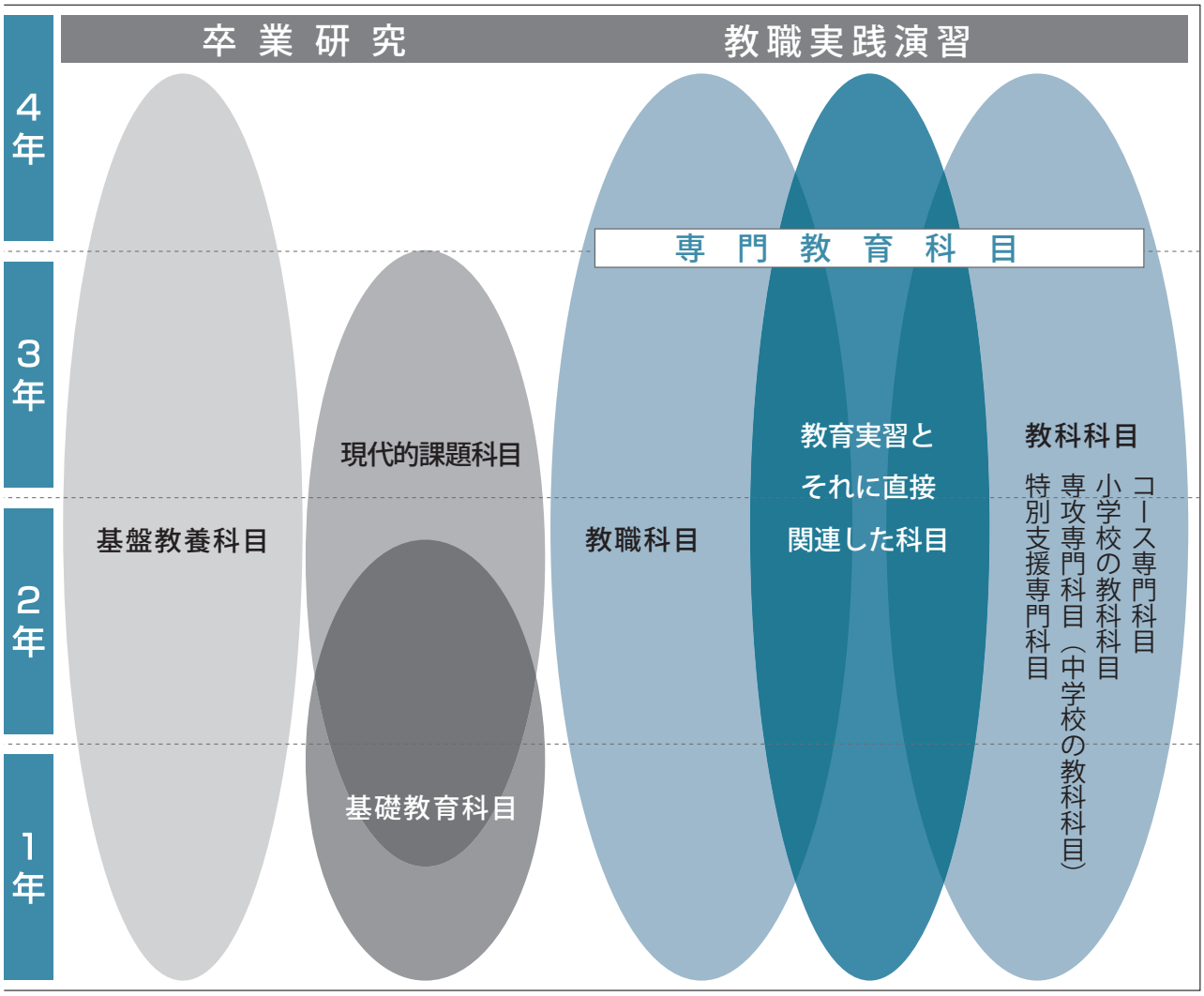
2 教育課程の特色（カリキュラム・ポリシー）

教育課程（カリキュラム）とは、学部・課程の教育目的に応じて必要な授業科目を段階的・系統的に編成した教育内容の系列のことです。本学では以下のようなカリキュラム・ポリシー（教育課程編成方針）に基づいてカリキュラムを編成しています。

宮城教育大学（教育学部）カリキュラム・ポリシー（教育課程編成方針）

宮城教育大学では、広い視野と高度な専門性を具え、実践的な指導力を身につけた教師、また強い使命感と責任感を持ち、豊かな人間力を具えた教師を養成するために、以下のような方針に基づいてカリキュラム（教育課程）を編成しています。

1. 広い視野と豊かな教養に基づく、均衡のとれた深い人間観と確かな社会観・世界観を有する社会人を養成するためのカリキュラムを編成しています。
2. 力量ある教師を養成するために、教職や教科等の専門科目の学力を重視し、「教育職員免許法」で定められた単位数を大幅に超えて学修するカリキュラムを編成しています。
3. 実践的指導力を具えた教師を養成するために、教育現場と連携した実践的な授業科目を系統的に設定し、大学における学修と教育現場における学修の往還、理論と教育実践の結合を可能にするカリキュラムを編成しています。
4. 環境教育や特別支援教育、国際理解教育など、教育現場で求められる現代的な諸課題について、深い教養と実践的な問題解決能力を具えた教師を養成するために、それらを学ぶことの可能なカリキュラムを編成しています。
5. 教育に対する強い使命感と責任感を持って、常に学び続け、愛情と理解をもって子どもを指導できる豊かな人間力を具えた教師を養成するためのカリキュラムを編成しています。



各課程・コース・専攻の教育課程の特色と、授業科目の詳細については、本冊子の第5章（各教育課程と教育課程表）、第8章（初等教育教員養成課程専門教育科目）、第9章（中等教育教員養成課程専門教育科目）、第10章（特別支援教育教員養成課程専門教育科目）に示します。自分の所属する課程のページをよく読んでください。

3 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）

宮城教育大学は、広い視野と高度な専門性を具え、実践的な指導力を身につけた教員、また強い使命感と責任感を持ち、豊かな人間力を具えた教員を養成する教員養成大学です。将来、幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校等において優れた資質・能力をもった教員として活躍するために、第一に、教員となることへの強い目的意識を持ち、教員として、人間としての成長を目指す使命感・向上心を有する学生を求めています。そして、基礎的な知識および技能の上に、これらを活用して、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力を育み、主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度を有した学生を受け入れます。

1. 初等教育教員養成課程

1-1　初等教育教員には、全教科に対応しうる学力とともに、幅広い年齢層にわたる、子どもたちの多様な発達段階に応じた適切な指導力が必要です。

1-2　入学する学生には、高等学校において、全般的な教科・科目の基礎学力を十分に習得することが望まれます。

1-3　また、子どもたちを取り巻く環境も変化し、学校現場ではさまざまな問題が生じています。初等教育をめぐる諸問題に対して幅広い視野と強い関心を持つ学生を求めています。

2. 中等教育教員養成課程

2-1　中等教育教員には、特定の教科に関する専門的な学力とともに、子どもから大人へと変容し始める生徒に、適切に対応する指導力が必要です。

2-2　入学する学生には、高等学校において、志望する専攻に対応する教科・科目の十分な学力に加え、関連する幅広い分野の基礎学力を習得することが望まれます。

2-3　また、生徒を取り巻く環境も変化し、学校現場ではさまざまな問題が生じています。中等教育をめぐる諸問題に対して幅広い視野と強い関心を持つ学生を求めています。

3. 特別支援教育教員養成課程

3-1　特別支援教育教員には、担当する校種・教科に対応しうる十分な学力とともに、障害のある児童・生徒と向き合って、その可能性を引きだし、一人一人の異なるニーズに的確に応えることのできる指導力が必要です。

3-2　入学する学生には、特別支援教育教員免許状の基礎免許として初等教育教員免許状を取得する場合には、全般的な教科・科目の十分な学力を、中等教育教員免許状を取得する場合には、志望する教科・科目の十分な学力を、高等学校において習得することが望まれます。

3-3　また、インクルージョン（困難を抱える人々の存在を当然のこととした社会の構成）をめぐる世界的な流れの中で、学校現場でも対応すべきさまざまな課題が見出されています。特別支援教育に強い関心と意欲があり、その教育に対する使命感を持ち続けることのできる学生を求めています。

4 課程・コース・専攻

本学教育学部は、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等における教育を担う、優れた資質・能力をもった教員を養成することを目的として、「初等教育教員養成課程」、「中等教育教員養成課程」、「特別支援教育教員養成課程」の三つの課程を設置しています。各課程には、次ページのとおり、コース・専攻が置かれています。

初等教育教員養成課程	発達・教育系	幼児教育コース
		子ども文化コース
		教育学コース
		教育心理学コース
	言語・社会系	国語コース
		社会コース
		英語コミュニケーションコース
	理数・生活系	数学コース
		理科コース
		情報・ものづくりコース
		家庭科コース
	芸術・体育系	音楽コース
		美術コース
		体育・健康コース
中等教育教員養成課程	国語教育専攻	
	社会科教育専攻	
	英語教育専攻	
	数学教育専攻	
	理科教育専攻	
	技術教育専攻	
	家庭科教育専攻	
	音楽教育専攻	
	美術教育専攻	
	保健体育専攻	
特別支援教育教員養成課程	視覚障害教育コース	
	聴覚・言語障害教育コース	
	発達障害教育コース	
	健康・運動障害教育コース	

5 卒業するための要件

（1）卒業するためには

本学を卒業するためには、4年（修業年限）以上在学し、定められた履修方法に従い、定められた単位数を修得しなければなりません。

卒業に必要な単位数（授業科目区分別の単位数、および総単位数）は、課程別に示された「教育課程表」に記載されています。初等教育教員養成課程については24～25ページを、中等教育教員養成課程については26～27ページを、特別支援教育教員養成課程については29～30ページを確認してください。

（2）修業年限と在学期間

修業年限とは、教育課程を修了して卒業するために必要な在学期間で、本学では4年間と定められています。休学期間は在学期間に含まれません。

在学期間については、本学では「6年を超えることができない。ただし、別に定める特別の事由がある場合に限り、2年を超えない範囲内で、在学期間の延長を許可することがある」（学則第43条）と定められています。

6 学位と取得資格

（1）学位

卒業の要件を満たした者は、卒業が認定され、学士（学校教育学）の学位を授与されます。

（2）取得資格

①教育職員免許状

各課程・コース・専攻の卒業の要件を満たすことにより、次の表に掲げる教員の免許状を取得する所要資格が得られます。ただし、卒業要件以外に「介護等体験」(詳細は、145ページ～参照）を行うことが必要です。

また、卒業するために必要な単位に加えて、さらに所定の単位を修得すれば、次の表の右の欄に掲げた教員免許状取得の所要資格も得られます。この冊子ではこれを「副免許状」と呼んでいます。

ただし、副免許状については、次の表に記載されていても、時間割の都合等で、修業年限内での所要単位の修得ができない場合があります。

また、副免許状の特別支援学校教諭免許状については、希望者数が特別支援学校教育実習の受入人数を大幅に超える場合は、人数制限を行う可能性があるため、必ずしも希望者全員が取得できるとは限りません。

所属する課程・コース・専攻			卒業の要件を満たせば取得資格が得られる教員免許状	副免許状
初等教育教員養成課程	発達・教育系	幼児教育コース	幼稚園1種 小学校1種	中学校1種（2種）、高等学校1種 特別支援学校1種（2種）
		子ども文化コース	小学校1種	幼稚園1種（2種） 中学校1種（2種） 高等学校1種 特別支援学校1種（2種）
		教育学コース		
		教育心理学コース		
	言語・社会系	国語コース		
		社会コース		
		英語コミュニケーションコース		
	理数・生活系	数学コース		
		理科コース		
		情報・ものづくりコース		
		家庭科コース		
	芸術・体育系	音楽コース		
		美術コース		
		体育・健康コース		
中等教育教員養成課程	国語教育専攻		中学校1種（国語）、高等学校1種（国語）	幼稚園1種（2種） 小学校1種（2種） 中学校（他教科）1種（2種） 高等学校（他教科）1種 特別支援学校1種（2種）
	社会科教育専攻		中学校1種（社会）	
	英語教育専攻		中学校1種（英語）、高等学校1種（英語）	
	数学教育専攻		中学校1種（数学）、高等学校1種（数学）	
	理科教育専攻		中学校1種（理科）、高等学校1種（理科）	
	技術教育専攻		中学校1種（技術）	
	家庭科教育専攻		中学校1種（家庭）、高等学校1種（家庭）	
	音楽教育専攻		中学校1種（音楽）、高等学校1種（音楽）	
	美術教育専攻		中学校1種（美術）、高等学校1種（美術）	
	保健体育専攻		中学校1種（保健体育）、高等学校1種（保健体育）	
特別支援教育教員養成課程	視覚障害教育コース		特別支援学校1種（コースに応じて領域が指定される） 小学校1種または中学校1種（1教科選択）	特別支援学校1種（指定以外の領域） 幼稚園1種（2種） 小学校1種（2種） 中学校1種（2種） 高等学校1種
	聴覚・言語障害教育コース			
	発達障害教育コース			
	健康・運動障害教育コース			

②その他の資格

本学では、次の資格を取得するための科目も開設しています。これらの資格を取得するためには、卒業の要件以外に所定の単位を修得する必要がありますので、第16章をよく読んで履修計画を立ててください。

●学校図書館司書教諭の任用資格（詳細は、171ページ）　●社会教育主事の任用資格（詳細は、172ページ）

7 休学・復学・退学等

（1）休学

①「休学願」

病気等のやむをえない理由により、引き続き3か月以上修学できない場合は、休学を願い出ることができます。休学を希望する者は、「休学願」に理由と休学期間を書き、保証人と連署のうえ、学年担当教員の承諾を得て、原則として休学開始の1か月前までに教務課を通じて学長に許可を願い出てください。休学の理由が病気である場合は、医師の診断書も添付してください。

なお、授業料が納付されていないと、「休学願」は受理されません。休学を願い出る際は、授業料の納付状況を確認してください。

②休学の期間

休学の期間は、1年以内と定められています。ただし、特別の理由がある場合は、学長の許可を得て、引き続き休学することができます。休学の延長を希望するときは、「休学願」を改めて教務課に提出してください。休学の理由が病気である場合は、医師の診断書も添付してください。

休学の期間は、通算して3年を超えることはできません。

休学の期間は、在学期間には含まれません。

（2）復学

休学期間内に、休学の理由が消滅した場合は、学長の許可を得て復学することができます。復学を希望するときは、「復学願」に理由と復学予定日を書き、保証人と連署のうえ、学年担当教員の承諾を得て、原則として復学予定日の1か月前までに教務課を通じて学長に許可を願い出てください。

（3）退学

やむをえない理由で退学を希望する場合は、学長に願い出て、その許可を受けなければなりません。退学を希望する者は、「退学願」に理由と退学予定日を書き、保証人と連署のうえ、学年担当教員の承諾を得て、原則として退学予定日の1か月前までに教務課を通じて学長に許可を願い出てください。退学の理由が病気である場合は、医師の診断書も添付してください。

なお、授業料が納付されていないと、「退学願」は受理されません。退学を願い出る際は、授業料の納付状況を確認してください。

（4）再入学

本学を退学した者が再入学を志願する場合、選考のうえ、許可することがあります。

（5）除籍

除籍とは、大学の命によって学籍から名を除く措置のことで、次のいずれかに該当する者は、教授会で審議のうえ、学長が除籍します。

①入学料の免除もしくは徴収猶予を願い出て、免除もしくは徴収猶予が許可されなかった者で、所定の日までに入学料を納付しない者。

②入学料の半額免除もしくは徴収猶予が許可された者で、所定の日までに入学料を納付しない者。

③授業料の納付を怠り、督促してもなお納付しない者。（卒業に必要な単位を修得した者で、授業料が未納の場合は、当該学期末で除籍となる。それ以外の学生は、前期分授業料未納であればその年次の後期末日、後期分授業料未納であれば次の年次の前期末日で除籍となる。）

④学則に定める在学期間を超えた者。

⑤休学期間が通算して3年を超えて、なお復学できない者。

⑥長期にわたって行方不明の者。

II

第２章
授業

1 学期と授業期間
2 授業の形態
3 単位制と授業時間、学習時間
4 授業科目の区分
(1)基礎教育科目
(2)基盤教養科目
(3)現代的課題科目
(4)専門教育科目
5 自由選択科目
6 「授業科目表」の見方
7 授業情報の調べ方
(1)『履修のしおり』(本冊子)掲載の「授業科目表」
(2)『開講科目一覧』
(3)電子化シラバス
(4)ポータルサイト
8 充実した学習のための諸制度
(1)留学(海外派遣留学制度)
(2)学都仙台単位互換ネットワーク(単位互換制度)
9 学生による授業評価アンケート

第2章 授業

1 学期と授業期間

本学では、1年を前期（4月1日～9月30日）と後期（10月1日～3月31日）の2学期に分けて授業期間を設定しています。各学期の授業期間等の詳細は、毎年、年度当初に配付される『開講科目一覧』に掲げてある「授業計画」で確認してください。

授業科目には、前期だけ、または後期だけに開講される科目と、1年を通して開講される科目（通年科目）があります。前期または後期だけに開講される科目は15週、通年科目は30週にわたって行われますが、一定期間に集中して行われる集中講義もあります。

2 授業の形態

授業は、「講義」「演習」「実験」「実習」「実技」のいずれかの形態で行われます。

授業形態	典型的な授業の特徴
講　　義	教員が学生に対して、学問研究の内容を説明することによって知識を授ける、という授業形態
演　　習	学生が主体的に研究発表や討議を行いながら教員の指導を受ける、という授業形態
実　　験	理論や推論が正しいかどうか、いろいろな条件下で実際に試してみる、という授業形態
実　　習	学んだ知識をもとに、実践しながら学習する、という授業形態
実　　技	学んだ知識をもとに、実際に技を活用しながら技術を磨く、という授業形態

3 単位制と授業時間、学習時間

本学は、教育上の目的に沿って多様な履修が可能となるように単位制を採用しており、単位数を定めて各授業科目を開設しています。

単位とは、授業科目を修得するために必要な学習量を数で表したもので、1単位の授業科目は、45時間（授業時間と授業外の学習時間の合計）の学修を必要とする内容で構成することを標準としています。

この標準をもとに、本学における授業科目の単位数は、授業の形態に応じて次の基準により計算しています。「講義」の場合、1単位あたりの授業時間は15時間ですが、これは授業時間以外に30時間分の学習をする必要があることを示しています（授業15時間＋教室外での学習30時間＝45時間）。

なお、本学では、上記単位制度の趣旨を踏まえて、履修科目の過剰登録を防ぐことにより、学生の主体的な学習を促し、教室及び教室外を合わせて充実した学習ができるように履修登録単位数の上限を定めています（17ページ参照）。

授業形態	1単位あたりの授業時間
講　　義	15時間
演　　習	15～30時間
実験・実習・実技	30～45時間

4 授業科目の区分

本学の授業科目は、教育目的・内容によって大きく四つのグループに区分されています。「基礎教育科目」「基盤教養科目」「現代的課題科目」「専門教育科目」の四つです。

（1）基礎教育科目

全課程に共通して設けられている科目です。

高等学校における教育からの円滑な接続を図り、大学で専門各分野の学習を進めるための基礎を固める科目です。

現代のすべての教員に必要とされる基礎的な資質・能力を修得させるため、教育職員免許法で履修が義務付けられている「日本国憲法」「情報機器の操作」「健康・運動系科目」「外国語コミュニケーション」に加えて、「環境・防災教育」を必修科目として設定しています。

また、「外国語科目」から4単位を必修として、基礎教育選択科目から4単位以上を選択必修として学びます。

（2）基盤教養科目

基礎教育科目と同様に、全課程に共通して設けられている科目です。

「人間の発見」「世界の発見」「科学の発見」の3分野について学びます。大学での専門分野の勉学を深めるため、また社会人として生涯学び続ける姿勢を身につけるため、その確かな知的基盤を形成する科目が設定されています。

（3）現代的課題科目

初等教育教員養成課程（発達・教育系の4コースを除く）と、中等教育教員養成課程の学生を対象とした科目です。

所属するコース・専攻の専門性に加えて、もう一つの学際的な専門性を培うため、また地球的視野と変化の時代に対応する力を養成するために設けられています。特定のテーマの下に編成された「科目群」を一つ選択して、その「科目群」に属する科目を段階的に履修することになります。

（4）専門教育科目

専門教育科目は、「教職科目」と「教科科目」、「卒業研究」の三つに区分することができます。

「教職科目」は、全課程に共通する科目と、校種別の専門性に応じて設定された科目とから成り立っています。いずれも、学校教育に関わる分野についての知識・経験を十分に身につけることができるように、教育職員免許法の定めに従って多面的に開設されたものです。教職の意義等に関する科目や、教育の基礎理論に関する科目、教育課程および指導法に関する科目、生徒指導・教育相談・進路指導に関する科目等があります。また、本学の教育課程の特色にあげた「教育実習とそれに直接関連した科目」も、この授業区分に属します。

「教科科目」は、教科に関する専門的知識を深めるとともに、特定の分野についての専門性を高め、研究を推進できる能力・態度を培うために、課程・コース・専攻に応じて履修すべき科目がそれぞれ開設されています。「コース専門科目」「専攻専門科目」「特別支援専門科目」は、それぞれ自分の所属する課程・コース・専攻の専門科目を履修してください。

「卒業研究」は、4年間の学修成果を集約したものとして、コース・専攻ごとに定められた方法で取り組みます。

5 自由選択科目

上記の（1）～（4）までの四つの授業科目に加えて、課程ごとに指定された単位数を履修して、卒業に必要な単位数合計を満たしてください。

なお、自由選択科目は、本学で開設しているすべての授業科目から選択して履修することができます。

6 「授業科目表」の見方

「授業科目表」(第6章以降に掲載）は、本学で開設している授業科目を、授業区分別に一覧表の形で示したもので、各授業科目に関する基本的な情報や、履修にあたっての指示事項が記載されています。授業科目の履修にあたっては、「授業科目表」を確認し、その指示に従う必要があります。

次に示すのは、「授業科目表」の一部です。この表の、矢印を引き出して番号を振った欄を見る際の留意事項について、以下①から⑦（矢印の先の番号と対応）の7項目にわたって説明します。

見方① 授業科目名	見方② 授業概要	見方③ 単位数	見方④ 毎週授業時数	見方⑤ 講義・演習・実験等	見方⑥ 対象年次	見方⑦ 備考
教職入門	現場の実状を通して、教職の意義や、教員の職務内容、課題となっていることについて学び、自己の教職像とそのための準備（進路選択）について考える。	2	(2)	講義	1	必修
教育の原理	教育の理念・歴史・思想を含む、教育の基礎理論を学ぶ。表面的には多様な諸教育実践を根底で支え成り立たせている教育の原理は、網羅的で概説的な手法ではとらえることができない。そこで、この講義では、各担当教員が専門とするアプローチを介して、表面的には隠されている教育原理に迫る。	2	(2)	講義	2	必修
発達と学習の心理	本講義では、心理学実験を一部交えながら、学習活動全般についての理解を深める。これまで行ってきた学習活動がどのように位置づけられるかを、相対化して理解できることを目標としたい。また、心理学的な知能の捉え方を紹介しながら、学習障害のある生徒の処遇などについても解説する。	2	(2)	講義	1	必修

見方

①「授業科目名」

この欄には、授業科目名が記されています。授業科目名に付された記号の意味は次のとおりです。

- 頭に**※印**のついている授業科目は、繰り返して履修することができます。（詳細は、18ページの「**重ね履修**」の項目参照）
- 授業科目名に**A、B、C等のアルファベットの大文字**がついているものがありますが、これは**授業の種類**を示す記号です。AとBは別の授業ですので、同じ学期に並行して履修し、それぞれ単位を修得することができます。
- 授業科目名に**a、b、c等のアルファベットの小文字**がついているものがありますが、これは授業の**クラス分け**を示す記号です。同じ授業名にa、b、c等が付されている場合、これらは同じ内容の授業ですので、いずれかひとつの授業の単位しか修得することができません。
- 授業科目名に**Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ等のローマ数字**がついているものがありますが、これは**履修の順序**を示す記号です。Ⅰの授業の単位を修得しなければ、Ⅱの授業は履修できません。
- 授業科目名に**ⅠA、ⅡA等のローマ数字とアルファベットの大文字が組み合わされてついている場合**は、先に示された記号が優先されます。ⅡAは、ⅠAの単位を修得していなくてもⅠBやⅠC等の単位を修得していれば履修できます。

見方
②「授業概要」

この欄には、開講年度や担当者が異なっても変わることのない、各授業科目の基本的なねらい・概要が簡潔にまとめられています。ねらいを達成するために取りあげる題材をはじめ、その年度に開講されている授業の具体的な内容については、電子化シラバスを確認してください。

見方
③「単位数」

「単位数」の欄には、その授業科目を履修し、成績評価が合格圏内であった場合に修得できる単位数が示されています。

見方
④「毎週授業時数」

この欄には、授業が行われる期間と時間数が示されています。

欄内の数字にカッコが付されている場合は半年間（前期のみ、または後期のみ）の科目、カッコがない場合は通年（1年間）の科目です。本学の時間割上の1時限は授業時数2となっていますので、毎週授業時数欄に「2」とある場合は、1年間、毎週1時限（90分間）の授業が行われることを意味しています。「(2)」のように、数字がカッコでくくられている場合は、半年間（前期のみ、または後期のみ）、毎週1時限（90分間）の授業が行われるという意味です。「(4)」とある場合は、半年間、毎週2時限（1時限90分が週に2回）授業が行われます。

見方
⑤「講義・演習・実験等」

「講義・演習・実験等」の欄には、その授業科目の授業形態が記されています。用語の意味については、第2章「2 授業の形態」(7ページ）に記されている説明を参照してください。

見方
⑥「対象年次」

各授業科目には「対象年次」の指定があります。

「対象年次」は、そこに示された年次（学年）に履修することが望ましいという意味で、指示された年次よりも上の年次であれば履修できますが、指定年次より下の年次では履修できません。

例えば、「1」、「1・2」、「1～3」、「全」(全年次の意味）等の表示であれば、1年次から履修可能です。対象年次の欄に「2・3」、「3・4」等と記されている場合は、1年次学生は履修できません。

見方
⑦「備考」

この欄には、「必修」「選択必修」等、履修に関する指示が記載されています。

ここに「必修」と記されている科目は、必ず単位を修得しなければならない「必修科目」です。

「選択必修」と記されている科目は、指定された科目の中から選択して、決められた単位数以上を必ず修得しなければならない科目です。「2単位以上選択必修」と記されていれば、指定された範囲の授業科目から最低2単位は必ず修得してください。

7 授業情報の調べ方

授業科目に関する情報は、本冊子掲載（第6章以降に掲載）の**「授業科目表」**や、別に配付する**『開講科目一覧』**、**電子化シラバス**によって確認することができます。

「授業科目表」、**『開講科目一覧』**、**電子化シラバス**は、それぞれ別の角度から情報を提供していますので、3種類すべてを目的に応じて活用し、必要な情報を入手してください。

なお、授業に関する情報（集中講義の日程、教室の変更、休講、補講など）は、授業によっては後述するポータルサイトや2号館入り口掲示板の用紙の掲示で提供されるものもありますので、毎日必ず確認してください。

（1）『履修のしおり』（本冊子）掲載の「授業科目表」

課程・コース・専攻ごとに定められた「教育課程表」の授業区分別に、開設されているすべての授業科目を表の形で掲載しています。

「授業概要」のほか、「必修科目」「選択必修科目」等の指定や、「対象年次」ほか、履修に関する重要な指示事項が記されており、履修計画を立てるには、また卒業に必要な単位を確認するには、これを見る必要があります。

『履修のしおり』の「授業科目表」に記載された授業情報は、入学時から卒業時まで有効なものです。入学時に手渡された『履修のしおり』は大切に保管し、在学中の全期間を通じて活用してください。

（2）『開講科目一覧』

『○○年度開講科目一覧』と表紙にあるとおり、その年度に開講されている授業科目についての情報が掲載されています。また、履修手続きに関する注意や、教育実習の事前・事後指導の日程など、重要な事項も記されています。

その年度の履修科目を決定し、自分の時間割を作成するにあたっては、これをよく読んで、クラス指定等の履修上の指示に従ってください。

『開講科目一覧』は、毎年、年度当初に新しいものが配付されます。授業時間割等は年度によって異なりますので、『開講科目一覧』は常にその年度のものを活用してください。

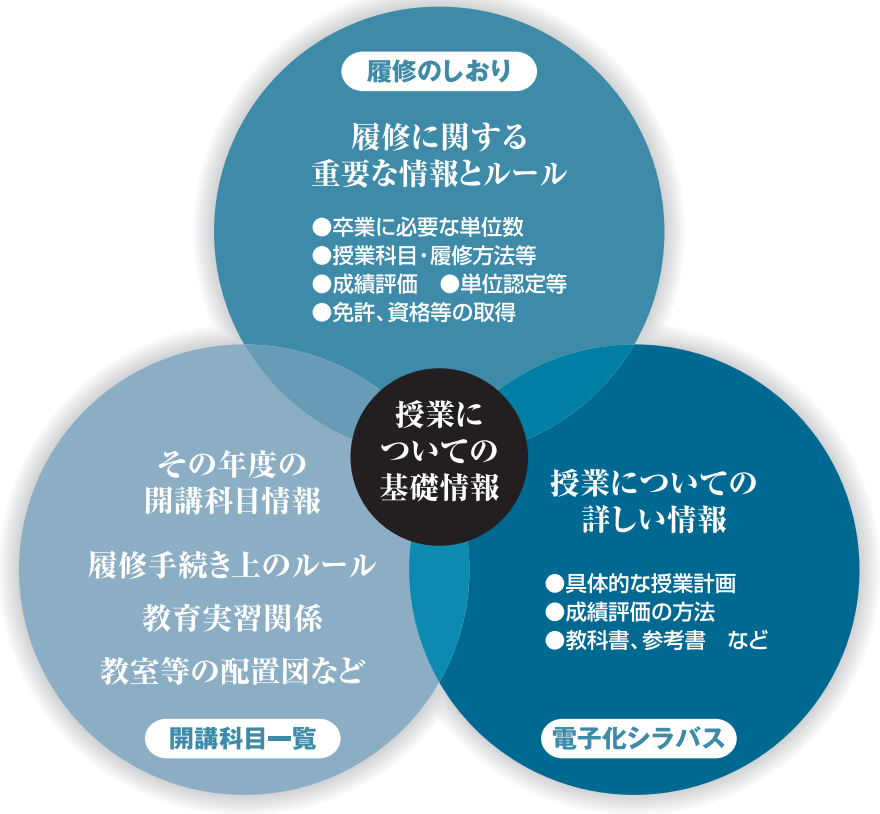
（3）電子化シラバス

本学ホームページ（http：//www.miyakyo-u.ac.jp/）からアクセスできる電子化シラバスには、その年度に開講されている授業科目についての具体的な情報（授業内容や授業計画、授業の到達目標、成績評価の方法、教科書・参考書、履修上の注意など）が掲載されています。

電子化シラバスを見ないと、各授業の具体的な内容や履修上の注意点、使用する教科書等はわかりませんので、第1回目の授業に出席する前に必ず確認してください。

電子化シラバスは、学内の情報基盤推進室第1演習室および第2演習室（情報基盤推進室1階および2階）、情報基盤推進室第3演習室（3号館1階）、図書館などに設置してあるネットワークに接続されたパソコンから見ることができるほか、学外からもインターネットを通じて閲覧できます。

在学中の全期間を通じて活用する基本的な情報



その年度に開講されている授業に関する詳しい情報

(4) ポータルサイト

授業や履修等の教務関係情報は、ポータルサイト（https://kportal.miyakyo-u.ac.jp/）でも確認することができます。このポータルサイトは、パソコンだけでなく携帯電話からも見ることができます。皆さんに関係のある情報が記載された場合に、パソコンや携帯電話へ電子メールを配信することもできます。必要であれば、携帯電話の電子メールアドレスを追加することも可能です。

最初にログインした時には、必ず自分の大学メールアドレスを登録して下さい。

ポータルサイトの使い方

◆アクセス方法

https://kportal.miyakyo-u.ac.jp/ にアクセスする
（右の QR コードを使っても構いません）。

◆ログイン方法

ユーザ ID には、自分の学籍番号を入れ、パスワードを入れると、ログインすることが出来ます。

※自分自身のパスワードについては、1年次必修授業の「情報機器の操作」で教わります。

◆メッセージ：受信一覧

自分宛に送られたお知らせ、連絡、休講・補講・呼び出し情報を見ることができます。

◆履修・成績

履修登録（16ページ参照）や成績の確認（20ページ参照）を行う事ができます。

◆ My 時間割

履修登録した自分の授業が、いつどこで行われるか確認することができます。

◆休講情報一覧、補講情報一覧、時間割変更情報一覧

自分が履修している授業で、休講・補講・授業時間変更の予定のあるものを確認することができます。

◆講義連絡一覧

自分が履修している授業で、連絡事項があるものを確認することができます。

◆メッセージ転送設定

ポータルサイトの情報を、電子メール配信させる設定を行う事ができます。

①電子メールで受け取りたい情報を選択します。
②転送したいメールアドレスを入力します。
③転送する内容を、各情報のタイトルにするか、各情報の合計件数だけにするか決めます。
④転送する時刻を最大3回設定します。
⑤転送設定できるメールアドレスは、最大3つです。必要に応じて複数の転送設定をして下さい。

※電子メールへの転送は、指定された時間に行われます。新たに情報が追加されるたびに電子メールが転送されるわけではないので、注意してください。
※上記の情報は、パソコンからログインしても、携帯電話からログインしても見ることができます。しかし、添付ファイルのある連絡などは、パソコンからログインしないと確認することはできません。

8 充実した学習のための諸制度

（1）留学（海外派遣留学制度）

本学では、次の11大学と国際交流協定を締結し、毎年数名の学生を派遣しています。語学力を伸ばすとともに国際的な視野を育む良い機会として、この派遣制度を積極的に活用してください。留学に関する詳しい情報については、宮城教育大学留学希望者への情報のページに説明があります。

（本学ホームページ→「国際交流・留学生」→「留学希望者への情報」）

留学先の大学で修得した単位は、本学に該当する科目がある場合、帰国後に本学の単位として認められます。また、留学期間は本学の在学期間に算入されますので、卒業に必要な単位を満たすことができれば、在学中に留学をしても4年間で卒業することができます。

留学希望者は、ガイダンスに必ず出席してください。留学制度や、留学者の募集・選考の手順等について詳しく説明します。ガイダンスの開催日時は、掲示・ポータルサイトにてお知らせします。

国　名	大 学 名
イギリス	エセックス大学
イタリア	ペルージャ外国人大学
スウェーデン	ダーラナ大学
オーストラリア	セントラル・クイーンズランド大学（CQU）
韓国	大邱教育大学校
	南ソウル大学校
中国	東北師範大学
台湾	中華大学
	國立高雄大学
アメリカ合衆国	ハワイ大学マノア校、デラウェア州立大学

（協定校や協定の内容は変わることがあります。）

（2）学都仙台単位互換ネットワーク（単位互換制度）

本学は、在仙の大学（短大・高専も含む）と単位互換協定を結んでいます。教務課で必要な手続きをして許可を受ければ、単位互換ネットワーク参加校の授業科目（指定された科目）を無料で履修することができます。修得した単位は、本学の単位として認められます。その単位が卒業の要件となる単位に認定されるかどうかは、科目によって異なりますが、いずれにしても本学にはない講義を受講できる機会といってよいでしょう。

毎年3月に下記の「学都仙台単位互換ネットワーク」参加校から、開講される授業科目とその内容、応募条件等が送られてきます。詳しくは、教務課にお問い合わせください。

学都仙台単位互換ネットワーク参加校（令和2年4月現在）

石巻専修大学、尚絅学院大学、仙台白百合女子大学、仙台大学、東北学院大学、東北芸術工科大学、東北工業大学、東北生活文化大学、東北大学、東北福祉大学、東北文化学園大学、東北医科薬科大学、宮城学院女子大学、宮城教育大学、宮城大学、聖和学園短期大学、東北生活文化大学短期大学部、仙台高等専門学校、仙台青葉学院短期大学、宮城誠真短期大学、仙台赤門短期大学、放送大学

9 学生による授業評価アンケート

授業期間が終了する時期（前期開講科目は前期末、後期開講科目・通年科目は後期末）に、授業評価アンケートを実施します。質問項目は、授業内容の評価を問う項目と、受講者自身の授業への取り組みについて問う項目から成り立っています。このアンケートは、今後の授業改善に役立てるために行っていますので、ご協力をお願いします。

なお、アンケートの結果については、学内から本学ホームページで閲覧することができます。

III

第３章
履修方法等

1 履修計画の立て方
(1)卒業要件を満たすために
(2)副免許状の取得
(3)資格取得を希望する場合
(4)留学を希望する場合
2 履修型の登録（特別支援教育教員養成課程のみ）
(1)履修型の登録
(2)履修型の変更
3 授業科目の履修登録
(1)「履修届」の提出
(2)ポータルサイトによる履修登録
(3)履修登録の変更･取消し
4 履修にあたっての留意事項
(1)履修登録単位数の上限
(2)履修条件と履修制限
(3)授業のクラス分けとクラス指定
(4)「重ね履修」
(5)再履修
(6)履修登録前の授業
(7)履修登録以外に手続きが必要な科目
5 履修関係の相談、学習支援

第3章 履修方法等

1 履修計画の立て方

履修計画は、各学年のはじめに、その年度の履修登録を行うにあたって立てるとともに、入学時に、卒業までの期間を見通して立てる必要があります。教育実習、卒業研究および教職実践演習には履修資格が定められており、必要な単位が修得できていないと参加することができません。その結果、4年間では卒業できなくなりますので、しっかりと履修計画を立てて、必要な科目を指定された学年で履修するようにしてください。

履修計画を立てるにあたって留意すべき事項や、確認する必要のある本冊子のページについて、以下に示します。

(1) 卒業要件を満たすために

卒業するために単位を修得する必要のある授業科目の種類と単位数、その履修方法は、課程・コース・専攻によって異なっています。卒業要件を満たすように履修計画を立てるにあたっては、自分の所属する課程・コース・専攻の「教育課程表（卒業に要する単位数）」をまず確認し、そのうえで授業区分ごとに授業科目を具体的に示した「授業科目表」を確かめて、その指示をよく読んでください。また、「教育実習」「卒業研究」「教職実践演習」に関しては、いつまでにどの科目の単位を修得しておけば履修資格が得られるのか、その指示も確認してください。本冊子の該当箇所は、それぞれ以下のとおりです。

- 初等教育教員養成課程・中等教育教員養成課程・特別支援教育教員養成課程の「教育課程表」は、第5章、23ページから30ページ。
- 全課程共通科目の「授業科目表」は、第6章、32ページから36ページ。
- 現代的課題科目の「授業科目表」は、第7章、40ページから44ページ。
- 初等教育教員養成課程専門教育科目の「授業科目表」は、第8章、46ページから70ページ。
- 中等教育教員養成課程専門教育科目の「授業科目表」は、第9章、74ページから105ページ。
- 特別支援教育教員養成課程専門教育科目の「授業科目表」は、第10章、108ページから126ページ。
- 教育実習は、第11章、139ページから143ページ。
- 教職実践演習は、第13章、147ページから148ページ。
- 卒業研究は、第14章、149ページから150ページ。

(2) 副免許状の取得

卒業要件を満たすことによって取得資格が得られる教員免許状以外に、いわゆる「副免許状」の取得を希望する場合は、第15章をよく読んで必要な授業科目・単位数等を確認し、履修計画を立ててください。

同じ時間に二つ以上の授業科目を履修することはできませんので、4年間で「副免許状」を何種類も取得することは実際には不可能です。「副免許状」の取得を希望する場合には、どの免許を取得するとよいのかよく考えて、無理のない履修計画を立ててください。

(3) 資格取得を希望する場合

「学校図書館司書教諭」や「社会教育主事」の資格取得を希望する場合は、本冊子の第16章を参照して履修計画を立ててください。該当するページは以下のとおりです。

- 学校図書館司書教諭については、171ページ。
- 社会教育主事については、172ページ。

資格取得関連科目は、隔年開講（毎年ではなく、1年おきに開講される）科目が多いので、入学時から計画を立てて履修しないと4年間では必要な単位を修得することが困難です。

また、「社会教育主事」の資格取得のためには「社会教育実習」を履修する必要があります。この実習に関しては履修資格も定められていますので、いつまでに、どの科目の単位を修得しなければならないのか、説明をよく読んで履修計画を立てるようにしてください。

（4）留学を希望する場合

「留学（海外派遣留学制度）」については、第2章「8 充実した学習のための諸制度」（13ページ～）で述べたとおりですが、この制度を活用するためには、「教育実習」など学年指定のある科目の履修と留学時期が重ならないように考えて履修計画を立てる必要があります。

留学を計画する際の注意事項については、留学に関するガイダンスでお話しますが、必要があれば研究・国際交流支援室にお問い合わせください。

2 履修型の登録（特別支援教育教員養成課程のみ）

（1）履修型の登録

特別支援教育教員養成課程の学生は、卒業要件を満たすことによって特別支援学校教諭一種（コースに応じて領域が指定される）の免許状と、小学校教諭一種または中学校教諭一種（1教科選択）の免許状の所要資格が得られますが、小学校教諭一種免許状の所要資格を取得するのか中学校教諭一種免許状の所要資格を取得するのか選択して、「履修型」の登録を行わなければなりません。

卒業要件として小学校教諭一種免許状の所要資格を取得する場合は「小履修型」を、中学校教諭一種の免許状の所要資格を取得する場合は「中履修型」（教科を必ず一つ選択すること）を登録する必要があります。

履修型の登録時期と登録手続きの方法は、下記のとおりです。

◆履修型の登録期日

1年次の10月（登録期間の詳細は、掲示にてお知らせします）

◆手続きの方法

「履修型登録願」（所定の用紙を教務課の窓口で配付）に必要事項を記入し、教務課を通じて学務担当副学長に願い出てください。

（2）履修型の変更

登録した「履修型」と「中履修型の教科」の変更は、特別な事情が生じた場合を除いて認められません。

特別な事情が生じた場合は、「履修型変更願」あるいは「中履修型の教科変更願」に理由等必要事項を記し、学年担当教員の意見書を添えて、教務課を通じて学務担当副学長に願い出てください。

3 授業科目の履修登録

授業科目を履修するためには、年度ごとに履修登録をする必要があります。履修登録をしなかった授業科目は、たとえ授業に出席していても、単位の認定を受けることができません。

次の（1）（2）の手続きをして、履修登録を行ってください（手続きの流れは、次ページの図参照）。

（1）「履修届」の提出

授業科目を履修する際には、開講日から2週間以内に、「履修届」を授業担当教員に直接提出してください。

※令和3年度は履修届を使用しません。

（2）ポータルサイトによる履修登録

履修する授業科目はすべて、年度はじめ（4月）の所定の期日に、本学ホームページからアクセスできるポータルサイトを通じて登録する必要があります。後期開始時（10月）にも追加登録期間がありますが、後期の登録期間は年度途中に特別な理由が生じた場合に備えて設けられたものですので、原則として年度当初に、その年度に履修する科目をすべて登録してください。

指定の期間以外には、履修登録をすることができませんので、注意してください。履修登録の期日については、掲示、ポータルサイトにより周知します。

ポータルサイトによる履修登録の方法は、「**履修登録の手引き**」に記載されています。「履修登録の手引き」を熟読して、操作方法等を十分に理解し、ミスのないように入力してください。そして、入力後は、登録内容に誤りがないかどうか繰り返し見直しをしてください。**登録のミスによって生じる不利益は、各自の責任となります。**

（3）履修登録の変更・取消し

履修登録の変更・取消しの時期等については掲示により周知しますので、その指示に従ってください。

履修登録を行った科目は、取消しをしない限り、成績評価の対象となります。たとえ一度も出席していなくても、不合格と評価されることになりますので、履修する意思のなくなった授業科目に関しては、決められた期間内に履修取消しの手続きをするようにしてください。

4 履修にあたっての留意事項

（1）履修登録単位数の上限【CAP 制】

履修科目として登録できる単位数には、上限が定められています（以下「**CAP 制**」という）。以下に示す単位数の範囲内で履修登録をしてください。

履修登録単位数の上限：通年52単位。ただし、本学入学後の授業の履修における成績優秀者に対しては、履修登録単位数の上限を通年60単位まで緩和する制度があります。その詳細については、掲示等によってお知らせします。

なお、以下の科目は **CAP 制の適用から除きます。**

学校図書館司書教諭、社会教育主事の資格関連科目（※）
教育実習とそれに直接関連した科目（教育実践体験演習、実践研究A、実践指導法 A、実践研究B、実践指導法 B）
集中講義
卒業研究
「学都仙台単位互換ネットワーク」の制度により他大学で履修する授業科目

ただし、**CAP 制の適用から除かれる資格関連科目（※）のうち、基礎教育科目、基盤教養科目、現代的課題科目又は専門教育科目のいずれかに係る以下の科目は CAP 制の単位数に含みますので、留意してください。**

環境・防災教育、人権教育（基礎教育科目、社会教育主事）
教育と地域社会、生涯学習論（専門教育科目：教職科目、社会教育主事）
社会教育講義（専門教育科目：教育コース、社会教育主事）
情報メディアの活用（現代的課題科目：メディア情報教育、図書館司書教諭、社会教育主事）

（2）履修条件と履修制限

授業科目には、履修にあたって条件を設けているものや、授業方法や内容の都合で履修人数制限を行っているものもあります。履修登録の前には、必ず『履修のしおり』や『開講科目一覧』、電子化シラバスで授業情報を確認し、掲示にも注意してください。また、第一回目の授業で履修条件が提示される場合もありますので、授業に出席して教員の指示を確認してください。

なお、同一曜日の同一時限に複数の科目を履修登録することはできません。

(3) 授業のクラス分けとクラス指定

『開講科目一覧』および電子化シラバスに記載されている授業科目名に、a、b、c 等のアルファベットの小文字が付されている場合、これらはクラス分けを表しています。a、b、c 等の記号が異なっても同一授業ですので、これらの科目を複数履修することはできません（授業科目名に付された記号の意味に関しては、9ページの授業科目名に関する説明参照）。

さらに留意しなければならないのは、クラス分けを行っている授業科目の中には、コース・専攻ごとに受講できるクラスを指定している授業科目が少なからずあるということです。クラス指定のある授業科目は、指定されたクラスしか履修できません。履修登録の前に、必ず『開講科目一覧』でクラス指定の有無を確認し、指定のある場合はそれに従ってください。

(4)「重ね履修」

既に単位を修得した授業科目は、再び履修することができません。ただし、「授業科目表」の「授業科目名」欄に**※印**が付されている授業科目は、既に単位を修得していても、重ねて履修して単位を修得することができます。これを本学では「重ね履修」と呼んでいます。

(5) 再履修

履修したが単位を修得できなかったという科目については、履修登録の手続きを再度行えば、再び履修することができます。

ただし、クラス指定のある授業科目の場合、前期に履修して単位を修得できなかった科目を後期に再履修する（指定外のクラスを履修する）ことは、4年次学生以外はできません。4年次以外の学年の学生は、次年度にクラスを一つ選び、再履修してください。年度が替われば、所属するコース・専攻の指定クラス以外のクラスも選ぶことができます。

(6) 履修登録前の授業

授業開始日から履修登録の期限まで約2週間ありますが、その間の授業に出席していない場合は欠席扱いとなります。履修登録前であっても、授業には第一回目から出席するようにしてください。

(7) 履修登録以外に手続きが必要な科目

履修にあたって、履修登録以外にも手続きが必要な授業科目があります。**「教育実習」**(詳細は、第11章、139ページ～)、**「卒業研究」**(詳細は、第14章、149ページ～)、**「社会教育実習」**(詳細は、第16章、171ページ～）などです。履修の前年度に履修届等の提出が必要な科目もありますから、説明をよく読んで、忘れずに手続きをしてください。

その他、必要な手続きを掲示にてお知らせする場合もありますので、見落とさないように注意してください。

5 履修関係の相談、学習支援

履修計画の立て方や、授業の履修、大学での学習等に関して、質問や相談があれば、遠慮なく学年担当教員（各コース・専攻の学年担当教員の名前、研究室の位置に関しては、『開講科目一覧』参照）を訪ねてください。また、履修関係の配付書類、連絡事項、履修登録の手続き等に関して疑問や不明の点があれば、教務課にお問い合わせください。教務課窓口の担当内容については、本冊子の表紙裏に記載があります。

Ⅳ

第４章
成績評価・単位認定等

1 成績評価
2 追試験・再試験
(1)追試験
(2)再試験
3 成績評価の評語・評点と単位認定
4 GPA
(1)GPAとは
(2)GPAの算出方法
5 成績の確認
6 入学前に修得した単位の認定
7 留学や単位互換制度によって修得した単位の認定
8 単位認定に関する留意事項
(1)単位の取消し
(2)不合格となった科目の単位修得

第4章 成績評価・単位認定等

1 成績評価

成績評価は、電子化シラバスの「成績評価の方法」欄に提示してある方法によって、授業期間終了後に授業担当教員が行います。「成績評価の方法」は、授業によって異なります。履修に際しては、電子化シラバスを確認のうえ、授業中の指示も聞き漏らさないようにしてください。試験の実施日時等に関しては、掲示・ポータルサイトを通して通知する場合もあります。

2 追試験・再試験

(1) 追試験

成績評価のために試験を行う科目があります。この試験を、病気・災害・事故その他のやむをえない理由によって受けることができなかった場合、追試験が認められることがあります。原則として、その科目の試験日から7日以内に、受験できなかった理由を証明する資料（医師による診断書や、災害証明の写し、事故証明の写し等）を添えて、追試験願を教務課に提出してください。

(2) 再試験

不合格となった授業科目の再試験は、原則として行いません。

3 成績評価の評語・評点と単位認定

成績評価の評語、評点（GP；グレード・ポイント）と、合格・不合格の判定は次のとおりです。
成績評価の判定が合格の場合、その授業科目の単位は認定されます。

合否の判定	評　価	評　　語	評点（GP）
合　　格	S	きわめて優秀な水準に達している	4.0
	A	優れた水準に達している	3.0
	B	ねらい通りの水準に達している	2.0
	C	合格に足る水準に達している	1.0
不　合　格	D	合格に足る水準に達していない	0.0

4 GPA

(1) GPA とは

GPA（グレード・ポイント・アベレージ）とは、各科目の成績から特定の方式によって算出された成績評価値のこと、あるいはその成績評価方式のことをいいます。本学では、この GPA を導入することにより、①皆さんが自ら学業成績の現状を的確に判断し適切な履修計画を立てることにより主体的な学習を進めること、②履修行動と学習態度の改善を促して卒業認定の質的保証をすること、③成績評価を厳密に行うことで教育効果を高め、皆さんの学習意欲を触発し学習目標を明確化すること、④成績優秀者に対して、CAP 制による履修登録単位数上限を緩和する際の基準とすること、そして⑤科目間の成績評価基準のばらつきを標準化することを目的としています。本学の GPA の算出方法は以下のようになっています。

（2）GPA の算出方法

①対象となるのは、本学在籍中に履修登録したすべての科目です。

②「S」「A」「B」「C」の評価に対する評点（GP）に、修得した科目の単位数を掛けて足しあわせます。

③履修登録したすべての授業の単位数を足しあわせます（履修登録期間内に履修登録を抹消した科目は含みません。ただし、不合格の授業は含みます）。

④ GPA は以下の算出方法で計算します（GPA ＝②の数値÷③の数値）。

$$\frac{(\text{S 評点単位数}\times 4.0)+(\text{A 評点単位数}\times 3.0)+(\text{B 評点単位数}\times 2.0)+(\text{C 評点単位数}\times 1.0)}{\text{総履修登録単位数}}$$

⑤ GPA の成績例

履修科目	単位数	成績評価	評点（GP）
物理学講義Ⅰ	4	B	2.0
日本国憲法	2	A	3.0
歴史学入門	2	C	1.0
英米文学	2	A	3.0
化学実験Ⅰ	2	D	0.0
教職入門 a	2	B	2.0
比較教育事情	2	S	4.0

$$\text{GPA}=\frac{(2\times 4.0)+(4\times 3.0)+(6\times 2.0)+(2\times 1.0)}{(4+2+2+2+2+2+2)}=\frac{34}{16}\fallingdotseq 2.1$$

5 成績の確認

成績は、本学ホームページからアクセスできるポータルサイトを通して、各自確認してください。確認方法の詳細は、掲示でお知らせします。ポータルサイトにアクセスすることで、履修したすべての授業科目の成績評価を見ることができます。

成績証明書が必要な場合は、教務課窓口に申し出てください。ただし、使用目的が就職関係のものは、キャリアサポートセンターに申し込んでください。証明書の交付は、申込日の**2日後の午後（土・日・祝日を除く、英文の場合は10日後）**になります。

6 入学前に修得した単位の認定

本学に入学する前に、大学または短期大学、高等専門学校等において修得した単位（科目等履修生として修得した単位を含む）は、本学に該当する授業科目がある場合、所定の基準により本学で修得した単位として認定されます。この認定を希望する者は、所定の期日までに申請書類を教務課に提出してください。詳細は教務課にお問い合わせください。

なお、入学前の既修得単位として単位認定された授業科目については、成績評価は「認定」と表示され、GPA の算出には含まれません。

7 留学や単位互換制度によって修得した単位の認定

第2章「8 充実した学習のための諸制度」で述べたように、留学によって修得した単位や、「学都仙台単位互換ネットワーク」の制度を活用して修得した単位は、所定の基準により、本学で修得した単位として認定されます。

単位が認定された場合、成績評価は「認定」または「合格」と表示され、GPA の算出には含まれません。

8 単位認定に関する留意事項

（1）単位の取消し

修得した単位は、取消すことはできません。したがって、単位が認定された授業科目は、その評価を取消したり、再履修したりすることはできません。

（2）不合格となった科目の単位修得

不合格となった授業科目の単位を修得するためには、次年度以降に改めて履修登録手続きをして、その科目を再履修し、合格する必要があります。履修登録の仕方や、受講の仕方は、最初の履修時と同じです。再履修の場合も、成績評価に関わる試験の受験だけではなく、授業にも出席する必要があります。

V

第5章
各教育課程と教育課程表

1 初等教育教員養成課程の教育課程
(1)教育目的と教育課程
(2)卒業するために必要な単位数
(3)教育職員免許状取得の資格およびその他の資格
2 初等教育教員養成課程・教育課程表(卒業に要する単位数)
3 初等教育教員養成課程の授業科目と履修方法
(1)基礎教育科目
(2)基盤教養科目
(3)現代的課題科目【発達・教育系は除く】
(4)専門教育科目
(5)自由選択科目
4 中等教育教員養成課程の教育課程
(1)教育目的と教育課程
(2)卒業するために必要な単位数
(3)教育職員免許状取得の資格およびその他の資格
5 中等教育教員養成課程・教育課程表(卒業に要する単位数)
6 中等教育教員養成課程の授業科目と履修方法
(1)基礎教育科目
(2)基盤教養科目
(3)現代的課題科目
(4)専門教育科目
(5)自由選択科目
7 特別支援教育教員養成課程の教育課程
(1)教育目的と教育課程
(2)履修型の登録と、卒業するために必要な単位数
(3)教育職員免許状取得の資格およびその他の資格
8 特別支援教育教員養成課程・教育課程表(卒業に要する単位数)
9 特別支援教育教員養成課程の授業科目と履修方法
(1)基礎教育科目
(2)基盤教養科目
(3)専門教育科目
(4)自由選択科目

第5章 各教育課程と教育課程表

この章では、初等教育教員養成課程、中等教育教員養成課程、特別支援教育教員養成課程の教育課程（カリキュラム）と授業科目の履修方法について説明します。本冊子の第1章から第4章までを理解したうえで、自分が所属する課程についての説明をよく読んでください。

なお、授業科目の詳細は本冊子の第6章以降に掲載されていますので、履修計画を立てる際に参照してください。

1 初等教育教員養成課程の教育課程

（1）教育目的と教育課程

初等教育教員養成課程の教育課程（カリキュラム）は、下記のような資質・能力と、教育者としての使命感とをあわせもつ教員の育成を目指して編成されています。

- ●全教科にわたり専門性を授業づくりに発揮できる学力
- ●教科横断的な学習指導にも対応できる創造的な資質
- ●子どもの発達段階に対する深い理解力と、発達段階に応じて適切に支援する能力
- ●子どもを取り巻く社会の多様な課題を捉え得る広い視野と、それに柔軟に対応できる能力
- ●所属するコースに応じた得意分野の専門性

教育課程の全容は、次ページの**「初等教育教員養成課程・教育課程表（卒業に要する単位数）」**のとおりです。

（2）卒業するために必要な単位数

初等教育教員養成課程に所属する学生は、卒業するために、指定された授業科目を、定められた履修方法に従って、**合計133単位**修得しなければなりません。授業区分ごとに必要な単位数については、**「初等教育教員養成課程・教育課程表（卒業に要する単位数）」**を確認してください。

なお、必要な授業科目・単位数は、コースによって異なりますので、注意してください。

（3）教育職員免許状取得の資格およびその他の資格

初等教育教員養成課程の場合、「教育課程表」に従って卒業に必要な単位をそろえ、さらに大学の授業以外に「介護等体験」（145ページ～参照）を行えば、幼児教育コースは**幼稚園教諭一種**と**小学校教諭一種**、その他のコースは**小学校教諭一種**の免許状取得の資格を得ることができます。

また、卒業するために必要な単位に加えて、さらに所定の単位を修得すれば、第1章「6 学位と取得資格」（5ページ参照）に示したとおり、他の校種の教育職員免許状取得の資格も得ることができます。

その他、必要な単位を修得すれば、「学校図書館司書教諭」や「社会教育主事」の任用資格を取得することもできます。これらの資格の取得を希望する場合は、**第16章（171ページ～）**の説明をよく読んでください。

2 初等教育教員養成課程・教育課程表（卒業に要する単位数）

次の表は、初等教育教員養成課程の「教育課程表」です。
この表には、コース別に、初等教育教員養成課程を卒業するために必要な単位数が記されています。
授業科目の詳細と履修の決まりについては、備考欄に示された「授業科目表」を確認してください。

区分		コース名等／授業科目（群）名等	幼児教育	子ども文化教育学教育心理学	左記以外のコース	備考
基礎教育科目		日本国憲法	2	2	2	授業科目表1（32ページ～参照）
		情報機器の操作	2	2	2	
		健康・運動系科目	2	2	2	
		外国語科目	4	4	4	
		外国語コミュニケーション	2	2	2	
		環境・防災教育	2	2	2	
		基礎教育選択科目	2	2	2	
基盤教養科目		人間の発見	2	2	2	授業科目表2（34ページ～参照）
		世界の発見	2	2	2	
		科学の発見	2	2	2	
現代的課題科目					8	授業科目表5（40ページ～参照）
専門教育科目	教職科目	教職入門	2	2	2	授業科目表6－①（46ページ～参照）
		教育の原理	2	2	2	
		発達と学習の心理	2	2	2	
		教育の制度・経営 教育と地域社会	2	2	2	
		各教科の教育法（初等）	20	20	20	
		各教科の教育法（中等）				
		特別支援教育理解	2	2	2	
		教育課程と教育方法	2	2	2	
		道徳の理論と指導	2	2	2	
		総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	2	2	2	
		幼稚園教育課程論	2			
		保育内容指導法	10			
		児童・生徒理解（生徒・進路指導論を含む。）	2	2	2	
		幼児理解	2			
		教育相談（カウンセリングを含む。）	2	2	2	
		教育実践体験演習	2	2	2	
		実践研究	4	4		
		実践指導法			4	
		教育実習（事前・事後指導を含む。）	7	7	7	
		教職実践演習	2	2	2	
		教育の歴史 比較教育事情 子ども学 生涯学習論 教育現場と法	4	4	4	

区分	コース名等 / 授業科目（群）名等		幼児教育	子ども文化教育学教育心理学	左記以外のコース	備考
	教科科目	小学校の教科科目	10	20	20	授業科目表7（53ページ参照）
		コース専門科目	16	16	16	授業科目表8－①～⑭（54ページ～参照）
		選択コース科目	4	8		第8章（71ページ参照）
	卒業研究		6	6	6	第14章（149ページ～参照）
自由選択科目			2	2	2	第8章（71ページ参照）
単位数合計			133	133	133	

3 初等教育教員養成課程の授業科目と履修方法

初等教育教員養成課程の全授業科目について、その詳細と履修方法を次に説明します。各授業区分の履修の要点を記した後に、個々の授業科目の情報をまとめた「授業科目表」を掲載しますが、表の見方については**第2章「6 授業科目表の見方」(9ページ～）を参照**してください。

（1）基礎教育科目（16単位以上）

基礎教育科目は全課程共通の科目です。この科目群に関しては、**第6章「1 基礎教育科目」(31ページ）**で説明しますので、そちらを確認してください。

（2）基盤教養科目（6単位以上）

基盤教養科目も全課程共通の科目です。この科目群に関しては、**第6章「2 基盤教養科目」(31ページ）**で説明しますので、そちらを確認してください。

（3）現代的課題科目【発達・教育系は除く】(8単位以上）

現代的課題科目は、初等教育教員養成課程の発達・教育系以外のコースと、中等教育教員養成課程の全専攻を対象として開設されている科目です。この科目群については、**第7章（37ページ～44ページ）**を確認してください。

（4）専門教育科目

第8章（45ページ～）で説明しますので、そちらを確認してください。

（5）自由選択科目（2単位以上）

第8章（71ページ）で説明しますので、そちらを確認してください。

4 中等教育教員養成課程の教育課程

（1）教育目的と教育課程

中等教育教員養成課程の教育課程（カリキュラム）は、下記のような資質・能力と、教育者としての使命感とをあわせもつ教員の育成を目指して編成されています。

- ●特定の教科に関する深い専門性を授業づくりに発揮できる学力
- ●教科横断的な学習指導にも対応できる創造的な資質
- ●子どもから大人へと変容し始める時期の生徒に対する深い理解力
- ●中等教育の諸問題に対処し、適切に生徒の成長を支援する能力
- ●現代社会の多様な課題を捉え得る地球的視野と、それに柔軟に対応できる能力

教育課程の全容は、このページの**「中等教育教員養成課程・教育課程表（卒業に要する単位数）」**のとおりです。

（2）卒業するために必要な単位数

中等教育教員養成課程に所属する学生は、卒業するために、指定された授業科目を、定められた履修方法に従って、**合計133単位**修得しなければなりません。授業区分ごとに必要な単位数については、**「中等教育教員養成課程・教育課程表（卒業に要する単位数）」**を確認してください。

（3）教育職員免許状取得の資格およびその他の資格

中等教育教員養成課程の場合、「教育課程表」に従って卒業に必要な単位をそろえ、さらに大学の授業以外に「介護等体験」（145ページ～参照）を行えば、社会科教育専攻と技術教育専攻は**中学校教諭一種**、その他の専攻では**中学校教諭一種**と**高等学校教諭一種**の免許状（いずれも、専攻の専門性と対応する1教科の免許状）取得の資格を得ることができます。

また、卒業するために必要な単位に加えて、さらに所定の単位を修得すれば、第1章「6 学位と取得資格」（5ページ参照）に示したとおり、他の教科、または他の校種の教育職員免許状取得の資格も得ることができます。

その他、必要な単位を修得すれば、「学校図書館司書教諭」や「社会教育主事」の任用資格を取得することもできます。これらの資格の取得を希望する場合は、**第16章（171ページ～）**の説明をよく読んでください。

5 中等教育教員養成課程・教育課程表（卒業に要する単位数）

次の表は、中等教育教員養成課程の「教育課程表」です。
この表には、中等教育教員養成課程を卒業するために必要な単位数が記されています。
授業科目の詳細と履修の決まりについては、備考欄に示された「授業科目表」を確認してください。

区分	コース名等 ／ 授業科目（群）名等	全専攻	備考
基礎教育科目	日本国憲法	2	授業科目表1（32ページ～参照）
	情報機器の操作	2	
	健康・運動系科目	2	
	外国語科目	4	
	外国語コミュニケーション	2	
	環境・防災教育	2	
	基礎教育選択科目	2	

区分	コース名等 / 授業科目（群）名等		全専攻	備考
基盤教養科目	人間の発見		2	授業科目表2（34ページ～参照）
	世界の発見		2	
	科学の発見		2	
現代的課題科目			8	授業科目表5（40ページ～参照）
専門教育科目	教職科目	教職入門	2	授業科目表6－②（74ページ～参照）
		教育の原理	2	
		発達と学習の心理	2	
		教育の制度・経営	2	
		教育と地域社会		
		各教科の教育法（初等）		
		各教科の教育法（中等）	4	
		特別支援教育理解	2	
		教育課程と教育方法	2	
		道徳の理論と指導	2	
		総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	2	
		幼稚園教育課程論		
		保育内容指導法		
		児童・生徒理解（生徒・進路指導論を含む。）	2	
		幼児理解		
		教育相談（カウンセリングを含む。）	2	
		教育実践体験演習	2	
		実践研究		
		実践指導法	4	
		教育実習（事前・事後指導を含む。）	7	
		教職実践演習	2	
		教育の歴史	4	
		比較教育事情		
		子ども学		
		生涯学習論		
		教育現場と法		
	教科科目	専攻専門科目	40	授業科目表9－①～⑩（82ページ～参照）
	卒業研究		6	第14章（149ページ～参照）
自由選択科目			14	第9章（81ページ参照）
単位数合計			133	

6 中等教育教員養成課程の授業科目と履修方法

中等教育教員養成課程の全授業科目について、その詳細と履修方法を次に説明します。各授業区分の履修の要点を記した後に、個々の授業科目の情報をまとめた「授業科目表」を掲載しますが、表の見方については**第2章「6 授業科目表の見方」（9ページ～）を参照**してください。

（1）基礎教育科目（16単位以上）

基礎教育科目は全課程共通の科目です。この科目群に関しては、**第6章「1 基礎教育科目」(31ページ）**で説明しますので、そちらを確認してください。

（2）基盤教養科目（6単位以上）

基盤教養科目も全課程共通です。この科目群に関しては、**第6章「2 基盤教養科目」(31ページ）**で説明しますので、そちらを確認してください。

（3）現代的課題科目（8単位以上）

現代的課題科目は、中等教育教員養成課程の全専攻と、初等教育教員養成課程（発達・教育系の4コースを除く）を対象として開設されている科目です。この科目群については、**第7章（37ページ～44ページ）**を確認してください。

（4）専門教育科目（89単位以上）

第9章（73ページ～）で説明しますので、そちらを確認してください。

（5）自由選択科目（14単位以上）

第9章（81ページ）で説明しますので、そちらを確認してください。

7 特別支援教育教員養成課程の教育課程

（1）教育目的と教育課程

特別支援教育教員養成課程の教育課程（カリキュラム）は、下記のような資質・能力と、教育者としての使命感とをあわせもつ教員の育成を目指して編成されています。

- ●ひとりひとりの異なる願いや要求に的確に応えることのできる力
- ●特別支援教育に関わる専門的な学力
- ●障害のある子どもの可能性を引き出す力
- ●教科の専門性を授業づくりに発揮する学力

教育課程の全容は、次ページの**「特別支援教育教員養成課程・教育課程表（卒業に要する単位数）」**のとおりです。

（2）履修型の登録と、卒業するために必要な単位数

特別支援教育教員養成課程に所属する学生は、1年次の10月に、履修型を選択して登録する必要があります。履修型の登録については、第3章「2 履修型の登録」(16ページ）を参照してください。

卒業に必要な授業科目は履修型によって異なりますが、いずれの場合も、卒業するためには、指定された授業科目を、定められた履修方法に従って、**合計136単位**修得しなければなりません。それぞれの履修型において、授業区分ごとに必要な単位数については、**「特別支援教育教員養成課程・教育課程表（卒業に要する単位数）」**を確認してください。

（3）教育職員免許状取得の資格およびその他の資格

特別支援教育教員養成課程の場合、「教育課程表」に従って卒業に必要な単位をそろえれば、**特別支援学校教諭一種**（コースに応じて領域が指定される）と、**小学校教諭一種**（「小履修型」の場合）または**中学校教諭一種**（「中履修型」の場合、1教科選択）の免許状取得の資格を得ることができます。

また、卒業するために必要な単位に加えて、さらに所定の単位を修得すれば、第1章「6 学位と取得資格」(5ページ参照）に示したとおり、他の教科、または他の校種の教育職員免許状取得の資格も得ることができます。

その他、必要な単位を修得すれば、「学校図書館司書教諭」や「社会教育主事」の任用資格を取得することもできます。これらの資格の取得を希望する場合は、**第16章（171ページ～）**の説明をよく読んでください。

8 特別支援教育教員養成課程・教育課程表（卒業に要する単位数）

次の表は、特別支援教育教員養成課程の「教育課程表」です。
この表には、履修型別に、特別支援教育教員養成課程を卒業するために必要な単位数が記されています。
授業科目の詳細と履修の決まりについては、備考欄に示された「授業科目表」を確認してください。

区分		授業科目（群）名等 ＼ 履修型	小履修型	中履修型	備考
基礎教育科目		日本国憲法	2	2	授業科目表1（32ページ～参照）
		情報機器の操作	2	2	
		健康・運動系科目	2	2	
		外国語科目	4	4	
		外国語コミュニケーション	2	2	
		環境・防災教育	2	2	
		基礎教育選択科目	2	2	
基盤教養科目		人間の発見	2	2	授業科目表2（34ページ～参照）
		世界の発見	2	2	
		科学の発見	2	2	
現代的課題科目					
専門教育科目	教職科目	教職入門	2	2	授業科目表6－③（108ページ～参照）
		教育の原理	2	2	
		発達と学習の心理	2	2	
		教育の制度・経営	2	2	
		教育と地域社会			
		各教科の教育法（初等）	20		
		各教科の教育法（中等）		4	
		特別支援教育理解	2	2	
		教育課程と教育方法	2	2	
		道徳の理論と指導	2	2	
		総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	2	2	
		幼稚園教育課程論			
		保育内容指導法			
		児童・生徒理解（生徒・進路指導論を含む。）	2	2	
		幼児理解			
		教育相談（カウンセリングを含む。）	2	2	
		教育実践体験演習	2	2	
		実践研究	4		
		実践指導法		4	
		教育実習（事前・事後指導を含む。）	7	7	
		教職実践演習	2	2	

区分	授業科目（群）名等 ＼ 履修型		小履修型	中履修型	備　考
専門教育科目	教職科目	教育の歴史			
		比較教育事情			
		子ども学			
		生涯学習論			
		教育現場と法			
	教科科目	小学校の教科科目	20		授業科目表7（53ページ参照）
		中学校の教科科目		32	授業科目表9－①～⑩（82ページ～参照）
		特別支援専門科目	31	31	授業科目表10－①～④（118ページ～参照）
	卒業研究		6	6	第14章（149ページ～参照）
自由選択科目			2	6	第10章（118ページ参照）
単位数合計			136	136	

9 特別支援教育教員養成課程の授業科目と履修方法

特別支援教育教員養成課程の全授業科目について、その詳細と履修方法を次に説明します。各授業区分の履修の要点を記した後に、個々の授業科目の情報をまとめた「授業科目表」を掲載しますが、表の見方については**第2章「6 授業科目表の見方」(9ページ～）を参照**してください。

（1）基礎教育科目（16単位以上）

基礎教育科目は全課程共通の科目です。この科目群に関しては、**第6章「1 基礎教育科目」(31ページ）**で説明しますので、そちらを確認してください。

（2）基盤教養科目（6単位以上）

基盤教養科目も全課程共通です。この科目群に関しては、**第6章「2 基盤教養科目」(31ページ）**で説明しますので、そちらを確認してください。

（3）専門教育科目

第10章（107ページ～）で説明しますので、そちらを確認してください。

（4）自由選択科目（小履修型 2単位以上、中履修型 6単位以上）

第10章（118ページ）で説明しますので、そちらを確認してください。

VI

第６章
全課程共通科目

1 基礎教育科目
2 基盤教養科目
3 その他の全課程共通科目
(1)情報処理専門教育科目
(2)資格取得関連科目
4 授業科目表
授業科目表1(基礎教育科目)
授業科目表2(基盤教養科目)
授業科目表3(情報処理専門教育科目)

第6章 全課程共通科目

初等教育教員養成課程と中等教育教員養成課程、特別支援教育教員養成課程の3課程に共通する科目として、教職科目の一部のほか、「基礎教育科目」と「基盤教養科目」があります。また、「情報処理専門教育科目」と「資格取得関連科目」も全課程共通科目です。この章では、これらの科目について、「授業科目表」を掲載し、授業科目の詳細と履修方法を説明します。表の見方については**第2章「6 授業科目表の見方」(9ページ～）を参照**してください。

1 基礎教育科目（16単位以上）

基礎教育科目は、教員となるためにもっとも基礎となる力をつける科目であり、教育職員免許法で履修が義務づけられている科目と、教員になるために必須の基礎的な知識や実践的スキルを習得するための科目で構成されています。必修の「日本国憲法」「情報機器の操作」「健康・運動系科目」「外国語科目」「外国語コミュニケーション」と、教育現場での今日的な課題に対応するための必修科目である「環境・防災教育」、及び教育現場の多様な課題に対応するための「基礎教育選択科目」を履修します。必修・選択必修の科目を含めて合計16単位以上修得する必要があります。授業科目の詳細と履修方法については、次ページ以降の**「授業科目表1」**を確認してください。

なお、必修科目の多くは履修できるクラスが定められていますので、『**開講科目一覧**』でクラス指定の指示も確認してください。

2 基盤教養科目（6単位以上）

基盤教養科目は、大学での専門分野の勉学を深めるために、また社会人として生涯学び続ける姿勢を身につけるために、確かな知的基盤を形成するための科目であり、「人間の発見」「世界の発見」「科学の発見」の3つの分野に分けられた様々な科目で構成されています。基盤教養科目では、広い視野と豊かな教養に基づく均整のとれた深い人間観と、世界を正しく見つめ、異文化を受容できる確かな社会観・世界観を身につけるために用意された多様な科目を履修します。これらの3分野から、各2単位以上、合計6単位以上修得する必要があります。授業科目の詳細と履修方法については、**「授業科目表2」(34ページ～）**を、開講予定については『**開講科目一覧**』を確認して、計画的に履修してください。

3 その他の全課程共通科目

以下の科目は、所属する課程の教育課程表とそれに対応する授業科目表に名前が出ていません。どの課程の学生も「自由選択科目」としてこれを履修し、単位を修得することができます。

（1）情報処理専門教育科目

情報処理専門教育科目は、情報処理に関して、より高度な専門性を獲得するための科目です。授業科目の詳細と履修方法については、**「授業科目表3」(36ページ）**を確認してください。

（2）資格取得関連科目

「学校図書館司書教諭」「社会教育主事」の任用資格の取得に関連する科目は、全課程共通科目です。授業科目の詳細と履修方法については、**「授業科目表11」(173ページ～）**を確認してください。

4 授業科目表

授業科目表1（基礎教育科目）

次の表の科目から、必修・選択必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名		授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
日本国憲法		憲法学の基本概念を含め、日本国憲法の骨格を概説する。	2	(2)	講義	1	必修
情報機器の操作		本学における情報教育の基盤になる、情報機器の操作に関わる基礎的な内容を扱う。コンピュータの基本的な使用方法、インターネットの利用方法とモラルなどを修得する。宮城教育大学内の情報関係システムの構成を理解し、その正しい利用方法を学ぶ。	2	(2)	講義	1	必修
健康・運動系科目	体育実習	基本的運動の実践を通して心身の円満な発達を図るとともに、体力および運動能力の向上を目指す。陸上運動、山野歩走（体操）、トレーニング、ボール運動および器械運動の5種目のうちの4種目について受講する。	1	2	実習	1	必修
	健康・運動論	自分自身の健康形成のための考え方と実践への応用力を身に付けるとともに、教職についた場合に、児童生徒の健康管理や健康教育に生かせるための基礎的・基本的内容を学ぶ。	1	(1)	講義	1	必修
外国語科目	英語A	外国語での円滑なコミュニケーションをとることのできる、十分な英語の4技能（読む、書く、話す、聞く）を養うことを目指す。	1	(2)	演習	1	必修
	英語B		1	(2)	演習	1	必修
	英語C		1	(2)	演習	1	必修
	英語D		1	(2)	演習	1	必修
	日本語A	留学生が大学で論文やレポートを書いたりする上で必要な日本語を学ぶ。特にこの授業は、日本語を2年以上学んだ人を対象に、書く力・読む力を伸ばすことをねらいにしている。	2	2	演習	1	（外国人留学生が英語A・B・C・Dに代えて選択することができる）
	日本語B	留学生が大学で研究や発表を行う上で必要な日本語を学ぶ。特に、この授業では日本語を2年以上学んだ人を対象に、話す力、聞く力を伸ばすことをねらいにしている。	2	2	演習	1	
外国語コミュニケーション	英語コミュニケーションA	英語コミュニケーションのための英語運用能力を養うことを目的とする。	1	(2)	演習	2	必修
	英語コミュニケーションB		1	(2)	演習	2	必修
	日本語コミュニケーション	日本語能力をさらに向上させるために、特に、読む力、書く力、話す力のほか、情報を日本語でわかりやすく見せる方法やわかりやすく伝える力を伸ばすことをねらいにしている。	2	2	演習	2	（外国人留学生が英語コミュニケーションA・Bに代えて選択することができる）
環境・防災教育		気候変動に伴う環境の変化や災害リスクの想定に関する基礎的知識をもとに、想定外の事態に対応できる能力を多様なアプローチで育成する。環境問題に関わる国内外の議論や取り組み、自然環境の本質や災害発生のメカニズム、危機的状況に対応できる野外活動など、学校における防災教育、安全管理及び環境保全教育について最低限身に付けておくべき事柄を学ぶ。	2	(2)	講義	1・2	必修

授業科目名		授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
基礎教育選択科目	教職基礎技法	教職に就くために必要な基礎的技法として、学級経営の方法や教師としての表現方法（発声、板書など）、評価に関連することなどを取り上げ、実践力を身につける。教育実習及びその関連授業、本学の様々な学修において活用できる基礎的な技法を身につける。	2	(2)	講　義	1	2単位以上選択必修
	人権教育	近年、人権教育をめぐる議論が盛んになってきた。「国連人権教育の10年」や「子どもの権利条約」に関する国内外の行動に触れつつ、日本における子どもの人権保護と教育をめぐる問題、子どもの人権意識の形成にかかわる問題について検討する。	2	(2)	講　義	1·2	
	学校給食	学校給食を題材に学校給食の実際、食教育のあり方、食生活の見直しについて講義する。日本でも数少ない学校給食に関する総合的講義である。講師は本学教員の他、栄養職員、行政機関などの専門家で対応する。学校給食の試食体験や農産物直売所体験も行なう。	2	(2)	講　義	1·2	
	情報機器の活用	情報機器を活用するための原理であるコンピュータサイエンスについて，教員として何を理解して，何を指導すべきか理論と実践について学びます。	2	(2)	講　義	1·2	
	性・文化・ジェンダー	自分の性とジェンダー意識を問い直し、性の学力を身につけて生きる力にすること、性とジェンダー教育のできる教師としての基礎的素養を育むことに関連した内容を扱う。	2	(2)	講　義	1·2	
	保幼小連携教育論	保育所・幼稚園・認定こども園と小学校の間で展開される連携活動について、その理論と実践について解説していく。様々な実践事例を取りあげながら、計画、援助・指導方法、評価等、PDCA の観点から保幼小連携・接続を理解することで、初等教育教員としての職能形成の一助とする。	2	(2)	講　義	2·3	
	※発展英語 A	TOEIC などの資格試験や海外研修（留学）などで必要とされる英語力を養う。	1	(2)	演　習	2	
	※発展英語 B		1	(2)	演　習	2	
	※発展英語 C		1	(2)	演　習	2	
	※発展英語 D		1	(2)	演　習	2	
	運動部活動の教育学	今日の教育現場では、全ての教師が運動部活動の顧問になる可能性がある。そのことをふまえ、この講義では、教育現場で直面しうる運動部活動の課題や問題を確認し、それがどのように継承されてきたのかを学ぶ。そのうえで、全ての教師が担うことのできる、運動部活動指導の原理について解説していく。	2	(2)	講　義	1·2	
	学校防災教育概論	「環境・防災教育」での学習を踏まえ、学校防災に関連する様々な学問領域（教育学、心理学、地理学など）の理論知や過去の災害の教訓・経験に基づく実践知の習得をめざす。これらを通して、教師として児童・生徒の命を守るとともに、児童・生徒が自らを守るために必要な思考力・判断力・表現力を身につけられることができるよう、学校防災教育の実践的指導力の基礎を身に付ける。	2	(2)	講　義	2	
	学校防災教育演習	「環境・防災教育」「学校防災教育概論」での学習をもとに、実習や対話・討論や被災地でのフィールドワークなど、すでに習得した知識の活用や探究を含めた高度な学習を行う。ハザードの理解、避難、他者理解、共感力、豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力など、学校の防災管理・防災教育に必要とされる高度な応用力・実践力を身につける。	2	(2)	演　習	2	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表2（基盤教養科目）

次の表の区分（「人間の発見」「世界の発見」「科学の発見」）から各2単位以上を含めて合計6単位以上修得してください。

区分	授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
人間の発見	東北の文学	東北にゆかりのある作品や作家を取り上げて、文学と東北との関連について考察する。作品の具体的な表現に触れながら、その特色について検討する。	2	(2)	講義	全	2単位以上選択必修
	日本の言語と文化	古代（文献以前）から現代にいたる日本語の歴史の中のいくつかのトピックに関して、特に一般言語学的な観点および他言語との関係という観点から資料をもとに検討し、日本語の変遷や現代日本語の諸相についての知識と理解を深める。	2	(2)	講義	全	
	人間と思想	人間の存在意味など、現代に生きる私たちが人生のなかで突き当たる哲学的な諸問題を考察する。哲学者・思想家たちの思想を紹介し、それらをヒントにして現代のわれわれの心の内部を探索したい。	2	(2)	講義	全	
	人間と音楽	特定のジャンルの音楽を取り上げ、その音楽が生み出された時代や文化の背景を考えながら音楽とは何かについて考察する。	2	(2)	講義	全	
	教養音楽	各種楽器の基本的な奏法を学習する。又、教材としてとり上げられる様々な時代の曲をアンサンブルの形で演奏しながら、演奏上の諸点について学習する。	2	(2)	演習	全	
	美術による表現A	この授業では陶芸の基本的な技法を学び、生活の中で使用することを前提に制作する。制作した器に料理を盛り付け、その様子をレポートにまとめる。また、作品の鑑賞を通して相互理解の方法について学習する。	2	(2)	演習	全	
	美術による表現B	この授業では日本の伝統的な陶芸の基本的な技法習得に重点を置き、作品制作を行う。具体的には紐作り、板作りの粘土成形から絵付け等の装飾技法や釉薬調合、焼成等の方法について学習する。また、陶芸の歴史や日本の美術についても考察を深める。	2	(2)	演習	全	
	英米文学	英米の文学作品を取り上げて論じることを主眼とするものの、日本の文学作品を脇に置き、比較文学的視点から検討を加えるなど、枠を広げて考えてみることも大事な目標となる。ねらいは、文学のおもしろさを実感することである。	2	(2)	講義	全	
	言語学	「ことば」を研究する言語学について概観する。前半は音声学、音韻論および形態論（語形成）について概観し、後半は統語論、意味論、語用論について概説する。	2	(2)	講義	全	

区分	授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
世界の発見	社会科学入門	近代以降の社会科学史上に現れた内外の思想やそれらを表わす基本的な諸文献を、それらの社会的及び歴史的背景にも触れながら紹介することを通じて、社会科学的なものの見方・考え方の基礎を理解させる。	2	(2)	講　義	全	2単位以上選択必修
	歴史学入門	歴史学とは如何なる学問なのか。どのようなものを素材に研究がなされており、どういったテーマが研究対象となっているのか。歴史学を学ぶ上での基本的な考え方やものの見方、そして、様々な事象を通して見えてくる歴史像・社会像について講義していく。	2	(2)	講　義	全	
	法の世界	現代社会における諸問題、およびそれらに関連する法と政策を検討する。	2	(2)	講　義	全	
	現代のコミュニケーション問題	現代社会におけるコミュニケーションをめぐる様々な問題について、現代的自我の特質や時代状況に着目しながら検討を加える。	2	(2)	講　義	全	
	日本の芸能	日本には、民衆が古くから楽しみ、伝えてきた踊り・うた・太鼓などの民俗芸能がある。明治以来の学校教育では、それを教育することにはあまり積極的ではなかったが、これらの中には民族の文化として受け継ぐべきすぐれたものが数多くある。この授業では、それらを取り上げて実技を中心に学習する。	2	(2)	演　習	全	
	フランス語入門	この授業では「フランス語」を学びます。発音、文字から始まり、基本的な文法や会話を学習して、フランス語の基礎力を養成することを目的としています。話す・聞くといったコミュニケーション力をつけるのみならず、文学、歴史、自然科学などの研究に必要な読解力の習得も目的としています。この授業は、外国語を学びたいすべての専攻の学生に開かれています。	2	(2)	演　習	全	
	ドイツ語入門	この授業では「ドイツ語」を学びます。発音、文字から始まり、基本的な文法や会話を学習して、ドイツ語の基礎力を養成することを目的としています。話す・聞くといったコミュニケーション力をつけるのみならず、文学、歴史、自然科学などの研究に必要な読解力の習得も目的としています。全学全専攻に開かれています。	2	(2)	演　習	全	
	中国語入門	この授業では「中国語」を学びます。発音、文字から始まり、基本的な文法や会話を学習して、中国語の基礎力を養成することを目的としています。話す・聞くといったコミュニケーション力をつけるのみならず、文学、歴史、自然科学などの研究に必要な読解力の習得も目的としています。全学全専攻に開かれています。	2	(2)	演　習	全	
	韓国語入門	この授業では「韓国語」を学びます。発音、文字から始まり、基本的な文法や会話を学習して、韓国語の基礎力を養成することを目的としています。話す・聞くといったコミュニケーション力をつけるのみならず、文学、歴史、自然科学などの研究に必要な読解力の習得も目的としています。全学全専攻に開かれています。	2	(2)	演　習	全	
	海外総合演習A	夏休みや春休みを利用して、海外の姉妹校などに2週間程度滞在しながら、語学研修、文化体験、学生交流、教育実習、フィールドワーク、ホームステイなどを体験する授業です。4月初めのガイダンスで、行先によってA、B、Cの3つのグループに分かれます。希望者は掲示に注意してください。 ただし、4年次学生については、4年目の2月・3月に実施される授業は履修できません。 卒業、卒業研究参加資格、教育実習参加資格に影響が出ないよう本人が確認することを参加要件とします。また、政治情勢や感染症流行等によって、渡航自体を中止せざるをえない場合もあることを考えて履修計画を立ててください。	2	(2)	演　習	全	
	海外総合演習B		2	(2)	演　習	全	
	海外総合演習C		2	(2)	演　習	全	

区分	授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
科学の発見	数学概論	数学Ⅱの復習から始めて、微積分の基礎について解説する。	2	(2)	講義	全	2単位以上選択必修
	数学の世界	数学のいくつかの興味深いテーマについてやさしく講義する。	2	(2)	講義	全	
	現代生活の科学	わたしたちの現代生活や身体の成り立ち、そしてそれらを支えるさまざまな材料、道具、環境、情報などについて、科学・技術的な視点から解説する。ただし、これら全般の概説ではなく、この中に含まれる専門分野からひとつのテーマをとりあげて、深く掘り下げながら考察を進めるものである。	2	(2)	講義	全	
	理科基盤講義A	物理学分野の基盤となる知識・解法等に関する講義。高等学校物理の補習的内容を含む。	2	(2)	講義	1	
	理科基盤講義B	化学分野の基盤となる知識・解法等に関する講義。高等学校化学の補習的内容を含む。	2	(2)	講義	1	
	理科基盤講義C	生物学分野の基盤となる知識・解法等に関する講義。高等学校生物の補習的内容を含む。	2	(2)	講義	1	
	理科基盤講義D	地学分野の基盤となる知識・解法等に関する講義。高等学校地学の補習的内容を含む。	2	(2)	講義	1	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表3（情報処理専門教育科目）

次の表の科目は、全課程共通科目です。修得した単位は、自由選択科目の単位と認定されます。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
情報科学基礎	本講義ではパソコンの仕組みやインターネットなどの歴史的背景に迫り、デジタル情報がどのような構成要素により成り立っているのかなど、情報科学の基礎を学習する。	2	(2)	講義	2	
情報メディア基礎演習	本講義は情報科学分野における基本的な考え方を見据えたパソコン演習を実施し、自己表現力の育成と普遍的な情報センスの獲得を目指す。	2	(2)	演習	2	
情報科学	この講義では情報環境を構築するための基本技術であるコンピュータとソフトウェアを基盤とした情報処理について学ぶ。	2	(2)	講義	2	
情報技術	児童・生徒の学習、発表の手段としてマルチメディア対応コンピュータの利用機会が増えている。Visual 型言語（Visual BASIC.NET）によって、アナログ時計やモグラたたきゲーム、三択ドリルなどのアプリケーション作品を制作することによって、情報技術の楽しさを学ぶ。	2	(2)	演習	3	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

VII

第７章
現代的課題科目

1 教育目的と特徴
2 「科目群」の設定方針
3 必要単位数と履修方法等
(1)必要単位数と授業科目
(2)履修方法・履修手続き
4 授業科目表
授業科目表5(現代的課題科目)

第7章 現代的課題科目

現代的課題科目は、初等教育教員養成課程（発達・教育系の4コースを除く）と、中等教育教員養成課程を対象とする科目です。この章では、本学の教育の特色の一つであるこの科目の教育目的と教育内容、履修方法等について説明するとともに、授業科目の詳細を記した「授業科目表」を掲載します。表の見方については**第2章「6 授業科目表の見方」(9ページ～）を参照**してください。

1 教育目的と特徴

現代的課題科目は、教育現場で求められていながら、従来の教科や学問分野に収まりきらない現代的な諸課題について学ぶための科目です。所属するコース・専攻の専門分野のほかにもうひとつの専門分野を身につけたり、自分の専門分野について異なる角度から統合的な見方を獲得することを目指します。この科目は、特定のテーマの下に編成された9つの科目群が設定されており、そのうちのひとつの科目群を選択して履修します。

- 地球的視野に立って行動できること
- 変化の時代を生き抜いていけること
- 教員として必然的に求められる資質を持っていること

このような目的を達成するため、学生各自が特定のテーマのもとに編まれた「科目群」を一つ選択して、その「科目群」に属する科目を段階的に履修することにより、学習が展開する仕組みになっています。「科目群」を編成している科目は、設定されたテーマに基づいて有機的に関連づけられているとともに、実践的要素を豊富に含むという特徴を持っています。

2 「科目群」の設定方針

現代的課題科目の「科目群」は次のページに掲げた表のとおりですが、どの「科目群」も、下記のねらいのうち二つ以上を必ず含むという方針で設定されています。

- 地球・国家・人間をめぐる問題に対する理解力の育成。
- 変化の著しい現代社会の諸問題に柔軟に対処できる能力の育成。
- 地域社会とのつながりを意識した教育を企画し実践する力の育成。
- 人権を尊重できる豊かな人間性の育成。
- 異文化に対する理解力と共生の思想を身につけた、国際的人間の育成。
- 自ら課題を発見し、解決していける、課題解決能力を養う。
- 豊かな人間関係を築けるコミュニケーション能力を養う。
- 情報化、国際化の時代に必要とされる知識・技能（外国語や情報処理など）を養う。
- 現代の子ども、および教育現場が抱える問題に対する理解力と、適切な支援を行う力を育む。
- 教職に対する責任感や誇りを育む。
- 児童・生徒の指導に必要な知識・技能を習得する。

これらのねらいは、現代的課題科目の履修によって、みなさんが第二の得意分野を獲得するだけでなく、人間としての幅を広げてゆくことを期待して設けたものです。この科目の趣旨を十分に理解したうえで、主体的に学習を進めてください。

〈現代的課題科目「科目群」一覧〉

	科目群の名称	キーワード	こんな教員を育てます
1	特別支援教育	特別支援教育、ノーマライゼーション、共生社会	特別な教育的支援を要する児童・生徒の教育的ニーズを把握し、共生社会の実現に向けての適切な指導・対応ができる教員を育てる。
2	適応支援教育	臨床教育、カウンセリング、心の教育、いじめ、不登校、非行、学習支援	いじめ、不登校、非行など「適応」が問題となる局面で、臨床的なアプローチにより指導・対応のできる教員を育てる。
3	多文化教育	学校の国際化、国際理解教育、日本語教育、開発教育、外国籍児童生徒	国際理解教育にかかわる総合学習や交流行事を企画立案できる教員、外国籍児童生徒や帰国子女の指導ができる教員、日本人学校や途上国など海外の教育現場で活躍できる教員を育てる。
4	現代世界論	持続可能な開発、地域社会、開発と公害、伝統と近代化	激動する現代世界を様々な視点からとらえ、適切な指導ができる教員を育てる。
5	食・健康教育	食教育、学校給食、健康教育	生きる力の基本となる食と健康に関する素養をもち、児童生徒に適切に指導できる教員を育てる。
6	自然環境教育	地域自然環境、野外活動・学習、エネルギー、物質環境、生命環境	自然科学的な視点で、体験的な環境教育を企画・立案し、実践のできる教員を育てる。
7	芸術表現教育	芸術活動、表現活動、総合的企画運営	ことば、音、イメージ、からだなどを柱に五感を通した芸術表現を学び、参加・体験型の表現活動を企画・実施できる教員を育てる。
8	メディア情報教育	情報社会、ホームページ、データベース、ネットワーク技術	様々な情報処理の方法と技術を活用でき、その利点と留意点についての見識をもって教科等の指導に役立てられる教員を育てる。
9	自然科学論	科学史・数学史からみた現代科学、日常生活の中の先端科学と数理科学	現代の自然科学の動向を多角的にとらえ、正確な情報の収集法やその活用法もこめて、児童生徒に適切な指導ができる教員を育てる。

3 必要単位数と履修方法等

（1）必要単位数と授業科目

初等教育教員養成課程（発達・教育系の4コースを除く）と、中等教育教員養成課程の学生は、選択した一つの「科目群」の中から、**卒業までに必修・選択必修を含めて合計8単位以上**、現代的課題科目の単位を修得する必要があります。

現代的課題科目の各「科目群」に属する授業科目の詳細と履修方法については、**授業科目表5（40ページ～）**を確認してください。

（2）履修方法・履修手続き

現代的課題科目の履修は、1年次の後期から始まります。

「科目群」の選択・決定から、各授業科目の履修登録までの流れは、以下の①～④のとおりです（図も参照）。

①1年次の6月に、現代的課題科目の履修ガイダンスを実施（日時はポータルサイトおよび掲示で周知）
　上記ガイダンスでの説明に従って、「科目群」の選択・登録を行う
②人数調整（各「科目群」につき30名程度）をへて、所属「科目群」の決定（掲示にて周知）
③1年次後期の追加履修登録期間に、その年度の後期に履修する科目の履修登録を行い、履修開始
④以後、その年度ごとに、授業科目の履修登録を行い、単位を修得する

なお、この現代的課題科目では、定められたテーマのもとに編成された「科目群」を1年次後期から段階的に履修しますので、原則として途中で他の「科目群」に変更することはできません。

① 履修ガイダンス
1年次の6月
（日時はポータルサイト･掲示で周知）
ガイダンスの時間中、
希望する科目群への登録を行います。

↓

② 所属「科目群」の決定
前期末
（掲示で周知）

→

③ 1年次後期履修科目の履修登録
10月
（追加履修登録期間）

④ 以後、その年度ごとに履修登録を行う。

4 授業科目表

授業科目表5（現代的課題科目）

次の表の、一つの「科目群」(所定の手続きをへて所属が決定された「科目群」）から、必修・選択必修を含めて8単位以上修得してください。

科目群	授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
特別支援教育	特別支援教育入門	特別支援教育の理念・制度と各地域での指導の実際に関するグループワークや討論、附属特別支援学校の見学などを通して、特別支援教育の概要を把握するとともに、具体的な教育支援の在り方について理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	演　習	1	必　修
	軽度発達障害への教育支援A	特別支援教育に関するいくつかのテーマ（AD/HD 等）を取り上げて詳述する。	2	(2)	講　義	2·3	必　修
	軽度発達障害への教育支援B	この講義では、その多くが通常学級に在籍する学習障害（LD)、注意欠如多動性障害（ADHD)、自閉症スペクトラム障害（ASD）などいわゆる知的障害を伴わない発達障害についてその定義・学習困難の特徴・行動上の問題と具体的対応について理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講　義	2·3	必　修
	特別支援教育実践演習	特別な教育的配慮を必要とする児童・生徒に対する学習・行動支援のための教材・教具、環境整備・設定などについて、実践事例（特に宮城県を中心とした地域の支援実践）の収集及び受講者自身による作成・工夫、それらの有効性や改善点等に関する議論を通じ、児童・生徒への具体的な支援の在り方について理解を深める。	2	(2)	演　習	3	必　修
適応支援教育	臨床心理学概論	「心理学」という学問の基礎的事項と、応用心理学の一領域である「臨床心理学」の研究課題と研究方法の基本的事項を、頭だけではなく、体全部で学習してもらう。	2	(2)	講　義	1	
	学校論	学校において集団で学ぶことが、個人と社会にとって、どのような意味があるのかについて考える。実際のすぐれた事例をもとに、豊かな学びの場としての学校の可能性をさぐる。	2	(2)	講　義	1	
	適応支援論A	適応支援にかかわる「いじめ」「子ども虐待」「不登校」「非行」等について、講義・グループワーク等を通して理解を深める。	2	(2)	講　義	2	
	適応支援論B	学校臨床における教育相談／スクールカウンセリングの考え方について学ぶ。	2	(2)	講　義	2	
	※教育臨床実習A	教育の臨床的問題に対応できる知識と技法を、実際の教育の臨床場面に関与しながら体得することを目指す。	1	(2)	実　習	全	
	教育臨床実習B	不登校等の学校臨床の問題をめぐる実際的な対応について学ぶ。適応指導の臨床現場での体験的実習が含まれる。	1	(2)	実　習	3	
多文化教育	多文化教育入門	この科目は、現代的課題科目群「多文化教育」の入門科目です。地域と学校の国際化と多文化化が進む中で、異なる文化とはどういうものなのかを体験的に捉えるとともに、異なる文化背景の人々とのコミュニケーションについて考えます。学校現場の多文化化に対応するための基礎知識を身につけます。	2	(2)	講　義	1	必　修
	日本語教育概論	この授業は、多文化教育の科目として、外国人に日本語を教える方法を知ること、世界の中の日本語教育の現状について知ることを目的としています。タスク学習やプロジェクトワークを通して、体験的・経験的に理解します。英語教育や国語教育、特別支援教育など幅広い応用ができます。	2	(2)	講　義	1~3	必　修

科目群	授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
	国際理解教育概論	この授業では、①多文化教育の理論や国際理解教育の方法について学びます。また、②国際理解教育の中身をつくるために、アジアや欧米地域の言語や文化を、日本と比較しながら学びます。国際理解教育をどのようにつくっていったらよいのか習得できます。	2	(2)	講　義	2·3	2単位 選択必修
	※フランス語演習	この授業では「フランス語」の初級段階の習得を目指します。教養科目「フランス語入門」で学んだ基礎力をもとに、文法や会話を学習して、話す・聞くといったコミュニケーション力をつけます。また、文学、歴史、自然科学などの研究に必要なフランス語の読解力をつけることも目的としています。	2	(2)	演　習	2·3	
	※ドイツ語演習	この授業では「ドイツ語」の初級段階の習得を目指します。教養科目「ドイツ語入門」で学んだ基礎力をもとに、文法や会話を学習して、話す・聞くといったコミュニケーション力をつけます。また、文学、歴史、自然科学などの研究に必要なドイツ語の読解力をつけることも目的としています。	2	(2)	演　習	2·3	
	※中国語演習	この授業では「中国語」の初級段階の習得を目指します。教養科目「中国語入門」で学んだ基礎力をもとに、文法や会話を学習して、話す・聞くといったコミュニケーション力をつけます。また、文学、歴史、自然科学などの研究に必要な中国語の読解力をつけることも目的としています。	2	(2)	演　習	2·3	
	※韓国語演習	この授業では「韓国語」の初級段階の習得を目指します。教養科目「韓国語入門」で学んだ基礎力をもとに、文法や会話を学習して、話す・聞くといったコミュニケーション力をつけます。また、文学、歴史、自然科学などの研究に必要な韓国語の読解力をつけることも目的としています。	2	(2)	演　習	2·3	
	多文化教育総合演習	この科目は、これまで学習した「多文化教育」の諸科目のまとめの科目です。小学校外国語活動や国際理解教育、開発教育、外国籍児童生徒教育や学校の国際交流、などについての基礎知識や理論をまとめます。教案作成や模擬授業で実践力をつけ、学校の国際交流や多文化化へ対応できる力を養います。	2	(2)	講　義	2~4	必　修
現代世界論	持続可能な社会	21世紀のはじめにあたって、国連は「持続可能な開発のための教育の10年（ESD)」のキャンペーンを始めた。本講義では「持続可能な社会」とは、どんな社会なのか考えることにしている。キーワードは、環境、経済、社会である。ESD の地域モデルを事例に、Sustainability を考える。	2	(2)	講　義	1	
	伝統と近代化	農業・牧畜を基幹産業とする伝統社会から、工業・情報を中心とする近代社会への転換による豊かさの追求は、いまなお非ヨーロッパ諸国においては、大きな国家的な課題である。この講義では、近代化に関する人間的・社会的な諸条件を、進行しつつあるグローバリズムと関係づけながら考える。	2	(2)	講　義	1	
	民族と国家	中華人民共和国は55の少数民族を包む多民族国家である。この広大な領土と膨大な人口を要する多民族国家の原型は清代に形成され、近現代を通じて、文化や宗教・言語の異なる多様な人々を統合し近代国民国家を形成・維持する努力が続けられてきた。また、中国ナショナリズムの形成は、海外移民（華僑・華人）にも影響を与えた。この授業では、中国の少数民族と海外移民に対する政策の変遷を概説し、中国の多様性とそれに起因する現代中国の国家統合に関わる諸問題の歴史的背景を説明する。	2	(2)	講　義	2	

科目群	授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
	環境と開発	人類の生存にはさまざまな開発行為が必要である。しかし開発が自然環境の荒廃をもたらし、人類の生存に対して危機的状況を生み出していることも少なくない。本講義では、世界各地の事例を通して、環境と開発を両立させるために現在どのような考え方や行動が求められているのかを探ってみたい。	2	(2)	講　義	2	
	人権と法	「人権」とは何かについて考察する。人権（宣言）の歴史を概観し、裁判制度を含む人権保障システムについて講述し、そのうえで、現代日本における種々の「人権」問題をとりあげたい。受講生が、みずから「人権」問題を発見し、その背景や解決を考えることができれるようになればよいと考えている。	2	(2)	講　義	2	
	国際政治	ポスト冷戦下の世界は、当初の予想に反し、国際紛争が噴出した。この現状をどう把握するのか。本講義は、伝統的な国際政治の分析枠組から、新たに登場した平和研究、国際関係学などの提起を検討し、変動する現状を原理的に分析する視座と、今後の世界を規範的観点から現実的に構想する視座とを学ぶ。	2	(2)	講　義	2	
食・健康教育	食・健康教育の基礎	食・健康教育が必要となる社会的背景や学校での取り上げられ方などについて基礎的な知識を学ぶ。	2	(2)	講　義	1	
	人間と健康	健康を守るために現代人に必要とされる医学的知識を学び、健康や食への理解を深める。	2	(2)	講　義	1·2	
	生活と健康	被服や住居の環境が、健康にどのような影響を及ぼすのかを学ぶ。	2	(2)	講　義	1·2	
	健康と食物	食品中の栄養素やその他の含有物質が、健康にどのような影響を及ぼすかを学ぶ。	2	(2)	講　義	2·3	
	食と栄養	食品中の主要栄養素や微量栄養素について学び、それらの体の中での働きを知る。	2	(2)	講　義	1·2	
	食の生産	多様な作物について播種から収穫・利用までを体験しながら、食品材料の生産技術について学ぶ。特に、化学農薬・化学肥料をなるべく使用しない栽培を実践する中で、環境にやさしくかつ安全な食料生産について考える。	2	(2)	講　義	2·3	
自然環境教育	自然誌	地球における自然と、それを知るための考え方や方法はどのように変化してきたのだろう。現在、地球上に見られる生物の多様性と、その相互の関係はどのようなものなのか。人間は他の生物とどのように異なる存在であるのかといった問題を、進化史的な見地から解説し、自然と人間の関係について考える。	2	(2)	講　義	1·2	
	環境教育の方法と技術	児童・生徒の環境理解を高める方法について多角的に分析し、保全に向けた実践教育の方法として、学校現場の環境教育の様々な課題の学習を概観し、環境教育の進め方の方法を学ぶ。	2	(2)	講　義	3	必　修
	生命環境科学	この授業では、進化学の理論を通して動物の行動・生態や生物間の相互作用を学ぶ。これらの学習を通して、ヒトの生態系における位置、人間と環境の相互作用について正しく認識できるようになることが目的である。	2	(2)	講　義	1·2	
	自然フィールドワーク実験	この授業ではフィールド調査を重視し、動植物の観察を通して、地域生態系の特性を学ぶ。また実習を通して、人間と自然の関わり方について興味を持ち考える視点を身につける。さらに、学んだことを生かして子どもを対象とする教育実践を行うための能力を培う。	2	(6)	実　験	3	

科目群	授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
	ビオトープ論	「生物の生息場所」を意味するビオトープは、自然と共存するための知識・技能を体験的に学習する場として注目されている。本講義ではバタフライガーデンやミツバチガーデンを例にして、ビオトープの保全、復元・創出、維持・管理、環境教育での活用等に関する知識・技能を、体験や実践を通して学ぶ。	2	(2)	講　義	2	
芸術表現教育	表現の基礎	「ことば」「音」「イメージ」「からだの動き」などの五感を通した表現活動の基礎概念を学ぶとともに、表現教育に関わる文化事業の鑑賞や小ワークショップなども取り入れて多様な表現活動への興味関心を育む。2年次以降の分野別授業への道案内的な内容の授業とする。	2	(2)	講　義	1	必　修
	ことばと表現	戯曲や詩、物語などのことばは、どのように語られ演じられると説得力を持つのだろうか。他人に対して自分の意図を正しく伝えることのできる発語とはどのようなものか。朗読や劇的表現のワークショップを体験することを通して、ことばによる表現への理解を図る。	2	(2)	演　習	2	
	音と表現	音とは何か、どのような素材を用いてどのような動作をすると、どのような音が出せるのか、音や声を使ってどのような表現が可能なのか、また世界にはどのような音による表現があるのかなど様々な事例を研究するとともに、実践を通して音と表現の在りようを体験する。	2	(2)	演　習	2	
	イメージと表現	多様化する現代の美術表現の中での平面・立体・デザイン・映像やアートプロジェクトなど様々なアートを知り、基礎的な演習も行う。創造的な活動を通して豊かな表現力や技術を身に付ける。	2	(2)	演　習	2	
	からだと表現	日常生活におけるからだや動きを捉え直し、感覚を覚醒させることによって、からだを探り実感しながら動くことを学ぶ。また、他者のからだ、自然、物などとかかわる動きの課題に取り組むことを通して、からだと心を解放し、からだによる表現のさまざまな可能性を探求する。	2	(2)	演　習	2	
	表現の応用	2年次で修得した多様な表現活動を総合した発表作品を学生参加により構想し、準備する。芸術表現や文化創造に関するゲストによる講義や企画構想、リサーチや実施計画なども含め、文化創造活動の全体像について予備的学習を行う。	2	(2)	演　習	3	必　修
メディア情報教育	情報社会の安全対策と倫理	ネット事故の動向、情報社会で必要なルールとマナー、パソコンのウイルス対策、ネットでの安全対策、学校サーバでの安全対策、著作権、個人情報の保護について学ぶ。	2	(2)	講　義	1	
	情報メディアの活用	学校図書館を中心に、教育現場における多様な情報メディアの特性と活用の方法を学ぶ。コンピュータや教育用ソフトウェアの活用のほか、視聴覚メディアの活用、データベースと情報検索、インターネットによる情報検索と発信について理解を深める。	2	(2)	講　義	2·3	
	情報ネットワーク論	情報ネットワークの理論、コンピュータネットワークを使用するユーザとして必要な知識、ネットワークの利用方法、学校でのネット接続、校内 LAN の構築を行う管理者に必要な知識、心構えについて学ぶ。	2	(2)	講　義	2·3	
	コンピュータグラフィックス	教育現場における教授方法や教材開発などにおいて、視覚表現の技術やプレゼンテーションの効果的な伝達方法は重要である。グラフィックソフトの基礎的な技術と画面の構成方法などを実際のテーマに沿った作品制作により習得していく。	2	(2)	演　習	2·3	

科目群	授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
	マルチメディア活用法	教育現場で使用する情報メディア機器、学校行事の記録や教材作成のためのビデオの撮影と編集等に必要な知識を学ぶ。	2	(2)	演習	2·3	
	コンピュータ統計	各種の学力評価のベースとなる統計的な概念を表計算ソフトを活用しながら学ぶ。また、分析対象となるデータを収集するために、質問紙を用いた調査演習も行う。	2	(2)	講義	2·3	
	情報教育実践論	教育の情報化、情報教育の必要性、情報教育用教材、情報機器を活用する技術とその方法を学ぶ。	2	(2)	講義	3	
自然科学論	数理の潮流	具体的な問題の数理的処理においては、抽象化により問題が解決される場合が多くあり、その過程で多くの数理的概念が獲得されてきた。又、そうして獲得された概念自体が具体的実態となり、そこから更に抽象化が行われることもある。このように数理の概念形成にはレベルがあり、「具体物」とそこから抽出される概念との関係は複雑微妙であるが、時代によらず解決すべき問題は常に「具体的な形」で提出されるものである。この講義では「具体物」との交渉を通して、数理的抽象概念が形成される過程と現代的問題とのかかわりを講義する。	2	(2)	講義	1~3	
	数理の展望	芸術などの文化がそうであるように、数理科学も長い時間をかけて多くの人々の関わりによって発展してきた。こうした数理科学の発展、展開について歴史的・社会的背景を考慮しつつ、数学の過去から現在へ向かう流れの幾筋かを展望し、現代的な数理科学を身近な話とのかかわりにおいて講義する。	2	(2)	講義	1~3	
	数理の考え方	現代社会における人間の思考法は、様々な種類の論理をもとに構成されているが、その中でも極めて強力なもののひとつに数学的な論証法と思考法がある。それは教科としての「数学」に限らず、物事を深く考察し判断すること、自分の考えを正しく表現し伝えること、他の人に理解してもらうこと、などに広く適用可能なものである。この講義は具体的な数学の事例を通して、このような力をつけることを目的とする。	2	(2)	講義	1~3	
	自然科学とくらし	日常生活でよく体験する自然現象がどのような仕組みで起こるのか、またよく目にする物質やよく耳にする科学技術とはどのようなものであるのか、これらを理解するために必要な現代の自然科学の知識をやさしく講義することで、自然科学に対する興味を呼び起こさせる。	2	(2)	講義	1~3	
	自然科学のひろがり	現代の自然科学の発達は、私達の自然に対する認識を大きく変化させてきている。その自然科学の先端で現在進行しつつある発見や技術開発を、平易な言葉で解説することで、人類が現在、そして未来に直面する問題にどのように対処するべきかを考える素養を育む。	2	(2)	講義	1~3	
	自然科学のなりたち	自然科学の知識は、様々な科学者の考えや、その科学者が生きた時代の要請に培われてきたものである。自然科学のなりたちの歴史を学ぶことで、自然科学を成り立たせている基本原理への理解を深める。このことを通して、現在直面している諸問題に対する自然科学の役割を考える。	2	(2)	講義	1~3	
	自然科学のすすめ	太陽からもたらされる光エネルギーは、地球上の様々な物理現象を生み出すとともに、地球上に存在する全ての生物の生活を支えている。本講義では、「光」と「エネルギー」をキーワードに、自然科学を研究することの意義や楽しさについて伝えてゆく。	2	(2)	講義	1~3	

注1）　※印の授業科目は、重ねて履修することができる。

注2）　毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

VIII

第８章

初等教育教員養成課程専門教育科目

1 専門教育科目　その1　教職科目
授業科目表6－①（初等教育・教職科目）
2 専門教育科目　その2　小学校の教科科目
授業科目表7（小学校の教科科目）
3 専門教育科目　その3　コース専門科目
授業科目表8－①（幼児教育コース）
授業科目表8－②（子ども文化コース）
授業科目表8－③（教育学コース）
授業科目表8－④（教育心理学コース）
授業科目表8－⑤（国語コース）
授業科目表8－⑥（社会コース）
授業科目表8－⑦（英語コミュニケーションコース）
授業科目表8－⑧（数学コース）
授業科目表8－⑨（理科コース）
授業科目表8－⑩（情報・ものづくりコース）
授業科目表8－⑪（家庭科コース）
授業科目表8－⑫（音楽コース）
授業科目表8－⑬（美術コース）
授業科目表8－⑭（体育・健康コース）
4 専門教育科目　その4　選択コース科目【発達・教育系のみ】
5 専門教育科目　その5　卒業研究
6 自由選択科目

第8章　初等教育教員養成課程専門教育科目

この章では、初等教育教員養成課程の教育課程表（卒業に要する単位数）の中の「専門教育科目」と「自由選択科目」について、「授業科目表」を掲載し、授業科目の詳細と履修方法を説明します。表の見方については、**第2章「6 授業科目表の見方」(9ページ～)** を参照してください。

1 専門教育科目　その1　教職科目

（コースによって、卒業に要する単位数は異なります）

教職科目は、幼児教育コースとその他のコースとでは、卒業に必要な授業科目と単位数が異なります。修得が必要な単位数は、**幼児教育コースは73単位以上、その他のコースは59単位以上**です。

教職科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次ページ以降の**「授業科目表6－①」**で確認してください。コースによって履修する授業科目が定められている場合や、必要とする単位数が異なる場合は、「備考欄」にその指示が記してあります。

なお、所属するコースによって履修できるクラスが定められている科目もありますので、**『開講科目一覧』でクラス指定の指示も確認してください。**

教職科目のうち、「教育実習とそれに直接関連した科目」に関しては、**第11章（139ページ～143ページ）**の説明をよく読んで履修してください。「教育実習」には履修資格が設けられています。

授業科目表6ー①（初等教育教員養成課程・教職科目）

次の表の科目から、幼児教育コースは73単位以上、その他のコースは59単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教職入門	現場の実状を通して、教職の意義や、教員の職務内容、課題となっていることについて学び、自己の教職像とそのための準備（進路選択）について考える。	2	(2)	講義	1	必修
教育の原理	教育の理念・歴史・思想を含む、教育の基礎理論を学ぶ。表面的には多様な諸教育実践を根底で支え成り立たせている教育の原理は、網羅的で概説的な手法ではとらえることができない。そこで、この講義では、各担当教員が専門とするアプローチを介して、表面的には隠されている教育原理に迫る。	2	(2)	講義	2	必修
発達と学習の心理	本講義では、心理学実験を一部交えながら、学習活動全般についての理解を深める。これまで行ってきた学習活動がどのように位置づけられるかを、相対化して理解できることを目標としたい。また、心理学的な知能の捉え方を紹介しながら、学習障害のある生徒の処遇などについても解説する。	2	(2)	講義	1	必修
教育の制度・経営	教育の制度の成り立ちとその運営に関する基本的特質について理解し、課題となっていることならびにそれに関する自己のあり方について考える。	2	(2)	講義	1	2単位以上選択必修
教育と地域社会	社会教育における学習活動と学習支援のしくみについて、理論的・学説史的な整理とともに具体的な事例の検討を行う。学校教育のみにとどまらない教育の豊かな可能性を理解するとともに、学校および教員の立場から見た社会教育との関わり方（連携・協力を含む）について理解を深めることをめざす。	2	(2)	講義	1	
国語科教育法(初等)	言語の教育としての国語の授業づくりにおける教材研究のあり方について検討する。小学校国語科の目標や指導内容について理解するとともに、音声言語（話など）並びに文字言語（文章作品など）の教材としての可能性について考える。	2	(2)	講義	2	必修
社会科教育法(初等)	小学校社会科に焦点を当て、社会科とは何をめざす教科なのか、どういう内容をどのように教えたらよいのかについて、近年の研究動向や実践例と関連づけながら、教科目標論、教科内容論、単元構成論、学習活動論、教材論、授業論などの視点から考察する。	2	(2)	講義	3	必修
算数科教育法(初等)	学習指導要領・カリキュラムの内容、性格について概観し、教える立場から教材を分析することを考える。	2	(2)	講義	2	必修
理科教育法（初等）	理科教材の研究成果に学び理科教材を検討する方法、理科教材の検討演習を行う。理科教材の検討と教科書、授業との関係について実践例を含めて検討する。	2	(2)	講義	3	必修
生活科教育法(初等)	子供たちの身近な技術や生産に関わる題材を通して体験的な学習活動を行いながら生活科の指導に必要な知識・技能等の習得をはかる。また、教育現場での具体的な実践事例の紹介等を通して、生活科の授業や教材について分析する。	2	(2)	講義	3	必修
音楽科教育法(初等)	小学校における音楽教育の目的と目標と指導法について考え、日本の子どもの文化的なアイデンティティを育成することのできる教材とは何かという視点に立って、歌唱・器楽・鑑賞の教材について教材性についての検討を行う。授業では、音楽活動を通して実際にさまざまな教材の特質を体験的に学ぶ。また、グループごとに総合的な課題である音楽パフォーマンス創りとその発表を行う。	2	(2)	講義	2	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
図画工作教育法（初等）	小学校図画工作科学習指導要領を「子どもの実態」、「題材と主題」などの視点から分析、検討する。その後、現行指導要領の内容として「表したいことを表す」の題材実践を行う。また「指導案作成」及び「総合学習としての美術」などの企画の立て方についても学び構想力を高める。	2	(2)	講　義	2	必　修
体育科教育法(初等)	小学校体育科に焦点をあて、教材づくりの事例を手がかりに、体育科の目的・内容・方法を考察し、体育科の授業づくりの原則と方法を学ぶ。	2	(2)	講　義	2	必　修
家庭科教育法(初等)	実際の家庭科の授業を念頭において授業の目標、教材、教授行為などについて考察し、受講者が自ら授業を構想できることをめざす。実際の授業を追試するプロセスを経て、家庭科の授業づくりの能力を培う。教科書教材を用いる場合と自ら考え出す教材の場合とがあるが、それぞれの留意点を明らかにする。	2	(2)	講　義	3	必　修
外国語活動・外国語教育法(初等)	小学校における外国語活動（中学年）・外国語（高学年）についての基本的な知識・理解（学習指導要領、主教材等）、児童期の第二言語習得についての知識とその活用（音声中心のインプット、やり取り等）、指導技術（指導計画、ティーム・ティーチング、ICT の活用等）について身に付ける。	2	(2)	講　義	2	必　修
幼児教育実践体験演習	附属幼稚園での見学実習を通じて、フィールドワークの基礎知識を学び、保育実践者に求められる基本的な資質・能力について理解する。また、大学生活のスタートにあたり、コース内での円滑な人間関係を築き、4年間の修学についての見通しを開く機会とする。	2	(2)	演　習	1	所属するコースの科目、2単位選択必修
子ども文化実践体験演習	子どもとは何か、大人は子どもとどのように関わるべきなのか等々の問題をめぐって、文献や映像を材料として検討するとともに、教育関係諸施設での観察や実践体験に基づく考察も行い、大学において何を学んでゆく必要があるのか自分の課題を把握する。また、大学での学びの姿勢と技法を習得する。	2	(2)	演　習	1	
教育学実践体験演習	理論と教育の実際を往還させつつ学んでいくための基礎演習。小学校の観察を中心として、文献や小学校以外の諸機関における子どもの実際を参照しつつ、考察を行なう。	2	(2)	演　習	1	
教育心理学実践体験演習	これまでの被教育経験を把握し直すことによって、教育者の立場にたてる教育観を育み、教育心理学等の知見を生かした教職に対する問題意識を育成する。さらに入門的な授業案づくりと模擬授業実践を経験する。可能な範囲で教育関係諸施設の見学実習を実施する。	2	(2)	演　習	1	
国語科教育実践体験演習(初等)	教育現場での体験を踏まえつつ、国語コースで学んでいくための基本的な姿勢を身につける。	2	(2)	演　習	1	
社会科教育実践体験演習(初等)	小学校社会科に焦点をあて、附属小学校との連携を図りながら、実際の小学校現場における社会科授業の現状に触れることを通して、社会科授業をめぐる諸問題に対する関心を高めるとともに、その諸問題を考察していく視点を習得する。	2	(2)	演　習	1	
英語コミュニケーション教育実践体験演習	小学生を対象とした英語の授業において、言語の発達段階や過程についての理解を深め、必要とされる基本的な技術の習得を目指す。	2	(2)	演　習	1	
数学科教育実践体験演習(初等)	実際の教育現場での体験を踏まえて、大学に於ける学習に要求される算数に関する基本事項について討論する。	2	(2)	演　習	1	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
理科教育実践体験演習(初等)	高等学校までの理科教育を見直すとともに、附属小学校等における授業観察を踏まえ、教員の立場で理科教育の内容及び方法を学ぶ視点を身につける。	2	(2)	演習	1	
情報・ものづくり教育実践体験演習（初等）	高校と大学の学びの違いを意識し、特に「もの」に対する見方と、「情報」とのつきあい方に関する基礎を培う。主に、情報技術を適切に活用し、自らの手でものを作ることをベースとする教育大生として、授業を見る観点を理解し、授業作りの素養を習得する。また情報・ものづくりコース学生を担当する教員の研究紹介を通して、研究に対する視野も広げる。	2	(2)	演習	1	
家庭科教育実践体験演習(初等)	小学校家庭科の授業観察を通して、授業を成り立たせる条件を分析的に捉えることができるようにする。その際、特に教師の指示・発問・説明などでのパフォーマンスの役割について学び、自ら体験することを通して、実践できるようにする。	2	(2)	演習	1	
音楽科教育実践体験演習(初等)	学校における音楽教育のさまざまな課題について、学生自身のこれまでの体験をふまえて討議し、これからの音楽教育のあり方について考える。また、音楽教師としてどのような知識・技能を身につける必要があるのかを、附属学校での授業観察や、ビデオ等による授業記録の分析を通して検討する。	2	(2)	演習	1	
美術科教育実践体験演習(初等)	大学での学びの姿勢について考えるとともに、これからの自分の課題を把握する機会とする。ここでは、小学校図画工作に焦点を当て、教育機関での観察体験（附属小、美術館等）、教材研究（実技）、現場での諸問題の考察など実践を通じて教職について基本的な理解、関心を高める。※附属小学校で観察体験や美術館訪問を予定しています（一部集中）。	2	(2)	演習	1	
体育・健康教育実践体験演習(初等)	今後の大学での学びに向けて、コースのカリキュラムの構造と主旨を理解する。その上で、体育・スポーツ・健康を教える立場から小学生の体育学習やスポーツ活動などを観察し、その報告と他者との交流を通して、教員として教育や体育科の専門的内容を学ぶ姿勢や観点を得る。	2	(2)	演習	1	
幼児教育実践研究 A	幼児教育の実践研究の基礎を理解するとともに、幼児の行動観察を通して、幼児の行動の記録方法、記録のまとめ方と解釈の方法を学習し、各自が取った実際の記録を基に幼児理解を深める。さらに、保育計画の立案や保育実践の観察を通じて、実践的援助方法について幼児理解の視点から考察していく。	2	(2)	演習	2	所属するコースの科目、2単位選択必修
子ども文化実践研究 A	3年次の教育実習に向けて、子ども文化コースの専門性を活かした授業づくりについて検討しながら、教材／学習材の研究の仕方、学習活動の組織の仕方、授業設計の仕方、子どもの発達段階に応じた指導計画・学習指導案の作成方法等の基礎を学ぶ。	2	(2)	演習	2	
教育学実践研究 A	教育実習の準備をするための「場」を制度的に提供する。従来、学生間で自発的に行なわれてきた活動（模擬授業、教材研究など）をカリキュラム上に位置づける。	2	(2)	演習	2	
教育心理学実践研究 A	授業案の執筆と読解の指導を通じて、授業を分析的に振り返るための記録メモの取り方を学習する。また、既存の授業案の分析を用いて教材の批判的検討を行い、幼稚園から中学までの教育課程を視野に入れた教科の体系性の重要性を理解する。	2	(2)	演習	2	
国語科教育実践指導法 A(初等)	3年次学生と協同で、教育実習に備えていくつかの教材分析を行ないながら指導案の作成、また模擬授業等を行なう。	2	(2)	演習	2	
社会科教育実践指導法 A(初等)	小学校社会科に焦点をあて、3年次学生の附属小学校における教育実習での授業づくりにいっしょに参加することを通して、小学校社会科に関する指導計画および本時の授業設計についての基礎的な素養を習得する。	2	(2)	演習	2	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
英語コミュニケーション教育実践指導法A(初等)	授業を実践するにあたり、具体的な指導案とともに教材を開発する。実際に授業で使用することにより、改善・工夫を加える。	2	(2)	演習	2	
数学科教育実践指導法A(初等)	算数科の授業の構成の仕方を実践的に学ぶことを目的とする。教育実習を経験した直後の3年生にとっては、2年生と共同学習することによって自分の実習を反省的に分析するとともに、次年度の教育実習の準備も含まれている。	2	(2)	演習	2	
理科教育実践指導法A(初等)	教職科目ならびに理科に関わる専門科目の学習を基に、授業づくり、授業分析の初歩を学び、3年次教育実習を目標に、3年生との共同により、理科授業の実践力を養う。	2	(2)	演習	2	
情報・ものづくり教育実践指導法A(初等)	授業を考える上で基礎となる、授業の記録や分析を通して、様々な視点で授業を理解する。さらに教材観も養い、自分がイメージする学習指導案を作成する。	2	(2)	演習	2	
家庭科教育実践指導法A(初等)	小学校家庭科の授業設計について3年次の取り組みをともに取り組むことを通して、家庭科の授業の特徴を捉えさせる。学級単位の児童理解、教育目的に沿った教材、時間系列に合わせた指示や発問なども含めた具体的な計画について具体的に理解させる。	2	(2)	演習	2	
音楽科教育実践指導法A(初等)	歌唱、器楽、鑑賞等の授業において、児童の発達段階にそった教材選択の視点を考える。教材となる楽曲の難易度を音楽的側面と技術的側面の両面から分析し、教材として選択した楽曲で児童にどのような音楽の知識・技能を身につけさせることができるのかを考える。	2	(2)	演習	2	
美術科教育実践指導法A(初等)	学校教育における図画工作科の中で行われている各領域の教材研究及び制作発表、鑑賞等の活動を通して、幅広い技術や知識を習得する。また授業サポートなども行い、図画工作科授業づくりの基礎を学ぶ。	2	(2)	演習	2	
体育・健康教育実践指導法A(初等)	小学校体育科に焦点をあて、3年次教育実習（附属小学校）における授業づくりに協同で参加することによって、授業研究法（授業記録・授業調査）を習得するとともに指導計画および授業の指導過程に対する基礎的な素養を身につける。	2	(2)	演習	2	
幼児教育実践研究B	附属幼稚園の保育を参観することで、幼稚園実習に対する心構えを養い、展望を開く。また、9月からの幼児の育ち、保育環境・指導方法・保育内容の変化について考察して、幼児理解を深めていく。	2	(2)	演習	3	所属するコースの科目、2単位選択必修
子ども文化実践研究B	実践研究Aの内容をふまえて、教育実習での実践を目的に、子ども文化コースの専門性を活かした授業づくりに実際に取り組む。教材／学習材の研究と子どもの実態把握にもとづいて学習指導案を作成、模擬授業を行うとともに、授業を省察する授業検討会を行い、より良い授業づくりについて考察する。	2	(2)	演習	3	
教育学実践研究B	教育実習の準備をするための「場」を制度的に提供する。従来、学生間で自発的に行なわれてきた活動（模擬授業、教材研究など）をカリキュラム上に位置づける。	2	(2)	演習	3	
教育心理学実践研究B	教育心理学実践研究Aの内容を受けて、授業分析をよりきめ細かく行う。教育実習で作成した研究授業の指導案を持ち寄り、その反省点、改善点について討議する。	2	(2)	演習	3	
国語科教育実践指導法B(初等)	各自の行なった指導案作成、模擬授業、教育実習等について、2年次学生と協同で省察を行なう。	2	(2)	演習	3	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
社会科教育実践指導法B（初等）	小学校社会科に焦点をあて、3年次での附属小学校における教育実習との関連に配慮しつつ、2年次学生の協力を得ながら、当該単元に関する教材開発および学習指導案の作成や授業分析などを通して、社会科の授業づくりを体験的に学ぶ。	2	(2)	演習	3	
英語コミュニケーション教育実践指導法B（初等）	授業を実践するにあたり、具体的な指導案とともに教材を開発する。実際に授業で使用することにより、改善・工夫を加える。「英語コミュニケーション教材実践研究A」での学習を踏まえ、さらに発展させる。	2	(2)	演習	3	
数学科教育実践指導法B（初等）	算数科の授業の構成の仕方を実践的に学ぶことを目的とする。教育実習を経験した直後の3年生にとっては、2年生と共同学習することによって自分の実習を反省的に分析するとともに、次年度の教育実習の準備も含まれている。	2	(2)	演習	3	
理科教育実践指導法B（初等）	教職科目ならびに理科に関わる専門科目の学習を基に、指導案作成、模擬授業等を行い、3年次教育実習を目標に、2年生との共同により理科授業の実践力を養う。	2	(2)	演習	3	
情報・ものづくり教育実践指導法B（初等）	自分がイメージする授業を行うことを前提として、専門的な教材研究と教材作成を行い、様々な教授スキルを習得しながら模擬授業を行う。授業後には授業検討会を行い、自分自身の授業に対して客観的に分析する。	2	(2)	演習	3	
家庭科教育実践指導法B（初等）	小学校家庭科の授業設計を受講生各自ができるようにする。学級単位の生徒理解、教育目的に沿った教材、時間系列に合わせた指示や発問なども含めた具体的な計画を作成できることをめざす。年間計画、実習室の管理などへの配慮もできるようにしたい。	2	(2)	演習	3	
音楽科教育実践指導法B（初等）	附属学校での授業記録を題材として、授業の分析方法について学習する。その際、教師の働きかけが児童の音楽活動にどのように関わっているのかを詳細に検討する。総まとめとして模擬授業を行い、音楽の授業において必要とされる指揮、ピアノ伴奏、歌唱などの音楽的技能の実践的な育成をはかる。	2	(2)	演習	3	
美術科教育実践指導法B（初等）	図画工作・美術科に焦点を当て、3年次での教育実習との関連に配慮しつつ、2年次生の協力を得ながら、当該単元に関する教材研究および学習指導案の作成や模擬授業などを通して、図画工作・美術科の授業づくりを体験的に学ぶ。	2	(2)	演習	3	
体育・健康教育実践指導法B（初等）	小学校体育科に焦点をあて、3年次教育実習（附属小学校）における授業づくりに向けて教材づくりと指導過程を構想することによって教育実習をより有益なものにするとともに、授業検討会を通じて授業づくりに向けての視点を習得する。	2	(2)	演習	3	
特別支援教育理解	特別支援教育講座の全教員が担当する1年次対象の講義である。特別支援教育とその周辺領域を網羅し、基本的理解を得られるように、キャップハンディ体験等を入れ込んで授業を展開する。	2	(2)	講義	1	必修
教育課程と教育方法	学校で計画的・系統的・意図的な教育活動を実施するための教育課程編成（カリキュラム・マネジメント）をどのように行うか。授業実践で子どもたちの学習要求・課題に即して、いかなる方法・技術を選択・実施し、評価するのか。以上の点について理論的・実践的知見を学ぶ。また、情報機器を授業の中でいかに活用すべきかについても学ぶ。	2	(2)	講義	2	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
道徳の理論と指導	道徳に関する心理学等の諸理論を踏まえつつ、学校教育における道徳教育のあり方を実際的に検討する。学校における道徳教育の実際、道徳教育の諸理論、道徳教育の課題などについて解説する。指導案づくりや模擬授業の実施なども予定している。	2	(2)	講　義	3	必　修
総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	総合的な学習の時間を指導するために必要な、原理と方法について、すぐれた実践例を踏まえて理解する。特に、総合的な学習の時間における「探究」のあり方と、単元構成と学習展開の具体的方法についての理解を深める。また、総合的な学習の時間と関連性の深い、特別活動を指導するための原理と方法についても理解する。	2	(2)	講　義	3	必　修
幼稚園教育課程論	幼稚園のカリキュラムについての基礎理論や実践課題について解説する。幼稚園教育要領について理解を深めた上で、指導計画や指導要録を作成するためのスキルを習得していく。	2	(2)	講　義	3	幼児教育コースのみ必修
保育内容（健康）指導法	子どもの心と体の発達について概要をとらえ、幼児の健康教育について考える。子どもの心と体がどんな道筋をたどって変化し成長発達していくのかについて、具体的な子どもの姿を通しながら知り、さらに教師の望ましい指導と援助の在り方についても考えていく。	2	(2)	講　義	2·3	
保育内容（人間関係）指導法	子どもたちにとって初めて経験する集団生活で養われる基本的な人との関わりは、その後の社会適応にも影響を及ぼす。また、幼稚園という集団生活の中で、子どもたちは様々な人間関係を形成し、こうした人間関係が直接的・間接的に影響しあいながら、子どもたちは成長していく。このような子どもをとりまく人間関係について、様々な事例を取り上げながら学んでいく。	2	(2)	講　義	2·3	
保育内容（環境）指導法	幼児と環境（自然・もの・人・こと）との関わりについて、幼稚園教育要領や保育実践に基づきながら考察する。また、グループワークを通じて、教材としての花卉、野菜、果物、小動物についての理解を深めていく。	2	(2)	講　義	2·3	
保育内容（言葉）指導法	人間としての言語の持つ役割、母子関係の言語獲得における重要性を保育実践をもとに論ずる。具体的な実践内容や子どものエピソード、ビデオ等を交えながら子どもの言語獲得の様子を分かりやすく紹介する。また保育における援助のあり方についても実践的に学習する。	2	(2)	講　義	2·3	
保育内容（表現）指導法	幼児が初めて出会う造形活動は、そのあり方によって興味を失うどころか劣等意識を与え、大人側の主導する勇み足の活動になってしまう。幼児にとって造形活動が、子ども達の出会いや夢や精神の冒険をもたらす遊びになるようにするための指導や援助のあり方を、なるべく実体験を通して学ぶ。	2	(2)	講　義	2·3	
児童・生徒理解（生徒・進路指導論を含む。）	児童・生徒理解上の課題と対応について講義する。理解とはどんなことかを、児童・生徒理解、学級集団、進路指導、カウンセリング等を通して考察する。その中で、被教育者であったこれまでの立場と教師の立場とを相互に行き交いながら、教師の訓練的側面について考察する。	2	(2)	講　義	3	必　修
幼児理解	子どもの言動の背景や要因を探り、よりよい育ちを促すための教育方法について考察する。また、保護者との関係作りの基礎知識を習得する。	2	(2)	講　義	3	幼児教育コースのみ必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育相談（カウンセリングを含む。）	「不登校」を含め子どもが直面する「心身症」「いじめ」「自殺」など様々の危機について、その現象と対応の両面から理解する。教育相談活動における相談的・個別的・受容的指導の重要性について学び、カウンセリングの体験学習を通じてカウンセリングの理論と技法の基礎を習得する。あわせて学校内外の関係機関の理解とその連携について学ぶ。	2	(2)	講義	3	必修
幼稚園実習（事前・事後指導1単位を含む。）		3		実習（事前・事後指導は講義）	3	幼児教育コースのみ必修
小学校3年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）		3		実習（事前・事後指導は講義）	3	幼児教育以外のコース必修
小学校4年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）		4		実習（事前・事後指導は講義）	4	必修
教職実践演習（幼・小）	幼稚園・小学校教諭にふさわしい資質や諸能力の確認をし、これまでの履修のあり方をまとめ上げると共に、実際の授業力に結びつける形で学修の内容の総まとめを行う。	2	(2)	演習	4	必修
教育の歴史	幕末・維新の時期から近年までの教育の歩みを、VTR なども用いて、とくに学校教育に重点をおいて話す。瑣瑣な事実の習得などではなく、教育事象を時間の大きな流れの中でとらえるための基礎を提供したい。	2	(2)	講義	2	4単位以上選択必修
比較教育事情	他国の教育事情から、自己の経験を相対化し、日本の教育制度とその運営に対して新たな視点をもつことをめざす。	2	(2)	講義	2	
子ども学	子どもは、おとなとは異なる固有の世界を生きている。この講義では、子どもの表情や行動や遊び、言葉や描画や歌といった諸表現から、その奥に潜む子ども固有の世界を、私たちおとなが慣れ親しんでいる常識的・概念的な見方を超えて、理解することを試みる。	2	(2)	講義	2	
生涯学習論	「生涯教育」から「生涯学習」に至る国内外の議論や事業・政策の動向をふまえた上で、学校教育・家庭教育・社会教育の各領域において「生涯学習」の理念がもつ意味を検討する。学校以外を含む多様な機会に子どもからおとなまでが関わる営みとしてとらえることで、教育の本質について理解を深める。	2	(2)	講義	2	
教育現場と法	今、学校では、新しい教育課程の推進、不登校やいじめ、児童生徒の安全、学校の開放や情報公開、教員の資質の事柄等多くの課題をもっている。このような状況を踏まえ、これらの解決にむけての日々の教育活動と法との関連を具体的な事例を通して考察する。	2	(2)	講義	3	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

2 専門教育科目　その2　小学校の教科科目

（幼児教育コースは10単位以上、その他のコースは20単位）

小学校の教科科目は、小学校の各教科に関する専門知識を習得し、教科指導の基礎となる確かな学力を身につけるための科目です。卒業に必要な授業科目と単位数は、幼児教育コースとその他のコースとでは異なります。授業科目の詳細と履修方法については、下の**「授業科目表7」**を確認してください。

なお、小学校の教科科目はすべて、所属するコースによって履修できるクラスが定められています。**クラス指定については、『開講科目一覧』の指示を確認してください。**

授業科目表7（小学校の教科科目）

次の表の科目のうち、幼児教育コースは、「国語」「数学」「生活」「音楽」「図画工作」「体育」から5科目以上選択して、10単位以上修得してください。

その他のコース、および特別支援教育教員養成課程の小履修型は、全科目、全20単位修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
国語	初等国語科教育の果たすべき役割や内容を理解したうえで、国語を教えるために必要な語学・文学的知識を学ぶ。また、効果的な指導を行ないうるよう小学校国語科教材の分析や言語表現にかかわる問題意識の啓発も含め、自己学習力を高めていくための基本的な訓練を行なう。	2	(2)	講義	1	幼児教育コースは、「国語」「数学」「生活」「音楽」「図画工作」「体育」の中から、5科目10単位以上選択必修 その他のコースは、全科目必修 特別支援教育教員養成課程の小履修型も、全科目必修
社会	人々の生きる生活圏（地域）を中心にして、地域やわが国の自然、政治、経済、文化的諸要素など、社会を維持・再生産するに必要な複数の柱と、またその変化の要因などについて、国際社会との関わりを意識しつつ、複数の教員が、それぞれの専門領域を生かしながら、教授する授業科目である。	2	(2)	講義	2	
数学	学習指導要領の主旨にのっとり、小学校算数科の背景となる数学各分野の基本的な理解及び教材研究を行う上で、その基礎となる素養を身につけるための講義を行う。	2	(2)	講義	1	
理科	小学校理科の学習内容に関して、科学的に調べる能力と態度を自ら育むとともに、自然の事物や現象について理解を深め、科学的な見方や考え方を養う。複数の理科教員が分担し、講義・解説、観測・観察・計測などの実験、実験結果の整理と科学的な考察など、一連の実体験を重視した内容で授業を行う。	2	(4)	実験	2	
生活	生活科の授業を裏打ちする基本的な諸科学にもとづいた知識を学ぶ。	2	(2)	講義	2	
音楽	音楽に関わる基礎的な知識と技術を学ぶ。	2	(2)	演習	1	
図画工作	「美術の教育」ではなく「美術を通した教育」であるという基本的な考えに立って授業を構築する。また、小学校における図画工作を中心とした情操教育を理解し、技術指導のみならず適時性に合わせた教材研究を通して、これからの初等教育を担う人材養成を目標としている。	2	(2)	演習	1	
体育	体育の運動内容領域の基礎的な技術・ルール・知識について学習するとともに、練習の仕方や指導法についても学習する。	2	2	演習	2	
家庭	家庭科の専門的内容について学習する。食物領域では栄養や食品成分の役割について、被服領域では被服に求められる機能について、住居領域では住居の成り立ちや役割について扱う。	2	(2)	講義	2	
外国語活動・外国語	小学校における外国語活動・外国語の授業を担当するために必要な実践的英語力である、英語の語学的知識（音声、語彙、文構造、文法、正書法等）や、第二言語習得、異文化理解の知識を身につけることを目指す。また、同時に、児童文学の基礎知識についても、習得することを目指す。	2	(2)	講義	1	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

3 専門教育科目　その3　コース専門科目（16単位以上）

コース専門科目は、所属するコースに応じて得意分野の専門性を身につけるために設けられている科目です。自分の所属するコースの専門科目を履修してください。他のコースの専門科目を履修し、単位を修得しても、「コース専門科目」の単位には認定されません。

コース専門科目の授業科目の詳細と履修方法については、下記の指示に従って、**「授業科目表8」**を確認してください。

幼児教育コース ⇒ **「授業科目表8－①」(54ページ)**
子ども文化コース ⇒ **「授業科目表8－②」(55ページ)**
教育学コース ⇒ **「授業科目表8－③」(56ページ)**
教育心理学コース ⇒ **「授業科目表8－④」(57ページ)**
国語コース ⇒ **「授業科目表8－⑤」(58ページ)**
社会コース ⇒ **「授業科目表8－⑥」(59ページ)**
英語コミュニケーションコース ⇒ **「授業科目表8－⑦」(61ページ)**
数学コース ⇒ **「授業科目表8－⑧」(62ページ)**
理科コース ⇒ **「授業科目表8－⑨」(63ページ)**
情報・ものづくりコース ⇒ **「授業科目表8－⑩」(64ページ)**
家庭科コース ⇒ **「授業科目表8－⑪」(66ページ)**
音楽コース ⇒ **「授業科目表8－⑫」(67ページ)**
美術コース ⇒ **「授業科目表8－⑬」(68ページ)**
体育・健康コース ⇒ **「授業科目表8－⑭」(69ページ)**

授業科目表8－①（幼児教育コース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
幼児教育学	幼児教育の基本（理念、歴史、制度、遊び論、指導法、カリキュラム等）について解説する。また、現代日本における子育て事情についても考察し、子育て支援や保育制度改革の行方について検討していく。	2	(2)	講義	1	必修
幼児心理学	生涯にわたる人間形成の基礎を培う乳幼児期の発達の様相とその重要性を理解し、発達援助についてのあり方を考える。	2	(2)	講義	2	必修
子どもと文学	近代・現代の主要な児童文学作品（絵本や海外の児童文学も含む）を読み解き、その特徴と歴史を検討しながら、文学とは何か、子どもとは何かという問題を多角的に考える。	2	(2)	講義	2	2単位以上選択必修
障害児保育学	心身の発達がもっとも著しい乳幼児期において、障害がある乳幼児は、園生活においてさまざまな困難さを抱えている。さらに、保護者の思いに寄り添いながら保護者を支援していく必要がある。このことを踏まえ、障害のある乳幼児について発達の特性を明らかにし、適切な支援の方法を解説する。	2	(2)	講義	2	
臨床心理学A	臨床心理学の研究方法、代表的な理論、臨床心理アセスメントについて学ぶ。	2	(2)	講義	2	
臨床心理学B	臨床心理学の歴史、関連する諸概念、各領域における実践等について学ぶ。	2	(2)	講義	2	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
小児保健・小児栄養	子どもの健康の成り立ちを考える。小児医学の視点から子どもの発達と栄養、病気の予防や症状への対応等について学ぶ。	2	(2)	講　義	2·3	4単位以上選択必修
幼児と保育A	就学前教育・保育をめぐる諸課題について、グループ研究やディスカッションを通じて理解を深め、幼児教育の現代的課題について考察していく。	2	(2)	講　義	2·3	
幼児と保育B	文献研究や事例研究、フィールドワークの技法等、卒業研究に必要なアカデミック・スキルを磨くとともに、幼児教育における現代的課題を解決する方法を探っていく。	2	(2)	講　義	2·3	
子どもと表現	幼児のさまざまな表現活動について、その意義を追求する。また身体表現や音楽表現について実技を通して理解する。	2	(2)	講　義	2·3	
※幼児教育研究演習A	幼児教育の思想的系譜を辿りながら、近代の子ども観、教育観、保育施設の成立過程について理解する。幼児教育の展開を歴史的に捉えることで、保育者に必要な教養知を身に付ける。	2	(2)	演　習	3	4単位以上選択必修
※幼児教育研究演習B	保育の場で出会う配慮を必要とする幼児の特性を理解するうえで、活用できる発達スケールとその読み取りを演習形式で学習する。	2	(2)	演　習	3	
※幼児教育研究演習C	幼稚園実習を前にして、保育実践の基本（保育者論、環境構成論等）を再確認する。また、模擬保育を通じて、保育指導案の作成、指導・援助の技法、点検・反省の視点等、保育実践力を養う。	2	(2)	演　習	3	

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。
注2）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8ー②（子ども文化コース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
子ども文化基礎演習	子ども文化に関する基本的な文献を読み、それをめぐって討議するとともに、教育関係諸施設での観察や実践体験等も行いながら、本コースにおける学びの方向性と課題を確認する。また、あわせて、読解力と思考力、情報収集能力、コミュニケーション能力、表現力等、学問の基礎となる技術や能力を養う。	2	(2)	演　習	1	必　修
幼児教育学	幼児教育の基本（理念、歴史、制度、遊び論、指導法、カリキュラム等）について解説する。また、現代日本における子育て事情についても考察し、子育て支援や保育制度改革の行方について検討していく。	2	(2)	講　義	1·2	4単位以上選択必修
教育学講義	教育実践と生きた関係を保っている教育学や人間学の、基礎的な理論と技法を学ぶ。	2	(2)	講　義	2·3	
子どもと文学	近代・現代の主要な児童文学作品（絵本や海外の児童文学も含む）を読み解き、その特徴と歴史を検討しながら、文学とは何か、子どもとは何かという問題を多角的に考える。また、初等教育教員に必要な児童文学に関する基礎知識を習得する。	2	(2)	講　義	2·3	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
子どもと表現	造形・身体表現・言語・映像などを通じて、子ども理解の基礎を培うとともに、子どもとかかわりを持つための基本的な考え方や技術の習得を目的とする。	2	(2)	講　義	2·3	
※子ども文化テーマ研究	子どもに視点を据えながら、トピック的にテーマを設定し、子どもや子ども文化に対する理解を深める。	2	(2)	講　義	2·3	
※子ども文化研究法 A	卒業研究に向けて、受講者による研究報告と討議をもとに、子ども文化をめぐる諸問題とその研究方法について考える。また、研究テーマの設定の仕方、資料の収集方法と扱い方、調査・分析の方法、論文の組み立て方、論理的文章の書き方、口頭発表の仕方等について学ぶ。	2	(2)	演　習	3·4	
※子ども文化研究法 B	卒業研究に向けて、受講者による研究報告と討議をもとに、子ども文化をめぐる諸問題とその研究方法について考える。また、研究テーマの設定の仕方、資料の収集方法と扱い方、調査・分析の方法、論文の組み立て方、論理的文章の書き方、口頭発表の仕方等について学ぶ。（「子ども文化研究法 A」の継続）	2	(2)	演　習	3·4	
※子ども文化実習	講義や演習で学んできたことを生かし、毎回自分なりのテーマをもって主体的に実習に参加し、活動のなかの子どもたちを観察する。また、子どものための活動の企画・運営を通じて、子ども理解に裏打ちされた実践的な力量を育んでいく。	1	(2)	実　習	2·3	

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。

注2）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8ー③（教育学コース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、選択必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育学講義	教育実践と生きた関係を保っている教育学や人間学の、基礎的な理論と技法を学ぶ。	2	(2)	講　義	2·3	
教育史講義	学校教育の改革の歴史を検討する。時期は大正～昭和前期。この時期は学校教育の改革運動が多様に展開され、実際に改革が試みられた時期である。この改革に取り組んだ先人から、教育のとらえ方、課題の迫り方、さらには時代のなかで教師として如何に生きたのかを、正負の両面から学んでいきたい。	2	(2)	講　義	2·3	
教育内容・方法講義	教育内容と教育方法について、基本的な知識と考え方を学ぶとともに、これからの学校教育にふさわしい教育内容・方法のあり方を考えていく。教育内容と教材の関係を、教育方法が用いられる生きた授業実践のなかで捉える視点を身につける。	2	(2)	講　義	2·3	
教育制度講義	比較教育学的アプローチにより、「教育制度」（「学校」）についての自己認識を相対化し、再構築することをめざす。	2	(2)	講　義	2·3	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育社会学講義	本講義では、様々な「教育問題」や、教育システムやその外部の諸社会で生じた新たな変化を素材に、教育社会学の基礎的な知識や概念について学ぶ。教育を社会学的に捉える視座の特徴を理解し、社会学的な概念や知見を用いて教育社会の現状を把握・分析する力を養うことが本講義の目的である。	2	(2)	講　義	2·3	
社会教育講義	社会教育における学習活動と学習支援のしくみについての理解を前提としながら、学校教育と社会教育との関わりについてさまざまな角度から検討をおこなう。両者の共通点と違いを把握した上で、両者の間の連携・協力の理念と実態について理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講　義	2·3	
教育学特設講義 A	教育研究や教育実践における今日的なテーマについて、その領域で研鑽を積んだ研究者や実践者が講義する。A は、教育学、教育史、教育方法・内容に関するテーマであり、B は、社会学、教育制度、生涯学習に関するテーマを扱う。	2	(2)	講　義	2~4	2単位以上選択必修
教育学特設講義 B		2	(2)	講　義	2~4	
学校教育基礎演習	学校教育に関する基礎的な知識や概念及び技能を学ぶことをとおして教育研究・実践のスキルを獲得する。	4	(4)	演　習	3	必　修
学校教育応用演習	卒業研究の前段階として、共通テーマをもとに文献講読や調査活動を行う。各自、報告して質疑・討論を重ね、全体の理解を深める。これらをとおして、研究の技法を獲得する。	2	(2)	演　習	3	必　修

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8ー④（教育心理学コース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教育心理学文献講読	教育心理学の分野において、文献収集・講読・調査・実験・レポート作成などを行う。	2	(2)	講　義	1	必　修
教育心理学研究法	教育心理学的な研究法の講義と情報機器を用いたデータ処理を学ぶ。	2	(2)	講　義	2	必　修
教育心理学実験実習	実験や演習などを通じて教育心理学に関する基礎的な概念を学ぶ。	2	(6)	実　習	2	必　修
発達心理学	人間の発達という変化の過程について学び関連する諸問題に触れる。	2	(2)	講　義	2·3	6単位以上選択必修
幼児心理学	生涯にわたる人間形成の基礎を培う乳幼児期の発達の様相とその重要性を理解し、発達援助についてのあり方を考える。	2	(2)	講　義	1·2	
学習心理学	学習という現象の基本的ことがらについて概説し、付随する特徴的な諸問題を取り扱う。	2	(2)	講　義	2·3	
臨床心理学 A	臨床心理学の研究方法、代表的な理論、臨床心理アセスメントについて学ぶ。	2	(2)	講　義	2·3	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
臨床心理学B	臨床心理学の歴史、関連する諸概念、各領域における実践等について学ぶ。	2	(2)	講義	2·3	
教育心理学特殊講義A	臨床心理学・発達心理学的観点から、現代の教育関連問題を取り上げて論じる。	2	(2)	講義	2~4	
教育心理学特殊講義B	学習心理学・認知心理学的観点から、現代の教育関連問題を取り上げて論じる。	2	(2)	講義	2~4	
教育心理学研究演習	受講生が各自テーマを設定し、調査・実験・観察などの結果を整った形式でまとめる。	2	(2)	演習	3	必修
発達心理学演習	発達領域における心理学的アプローチについて学ぶ。	2	(2)	演習	3	2単位以上選択必修
学習心理学演習	学習領域における心理学的アプローチについて学ぶ。	2	(2)	演習	3	
臨床心理学演習	臨床領域における心理学的アプローチについて学ぶ。	2	(2)	演習	3	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8−⑤（国語コース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
国語基礎講読	古文や漢文を読むために必要な知識や手続きについて学ぶ。辞書・索引等の使用法や、文献の検索の仕方など、読解のための基礎的な力を身につけることを目的とする。	2	(2)	演習	1	必修
国語学概論	音韻・アクセント、文法、意味・語彙、文章・文体など、日本語の種々相について平易に概説する。	2	(2)	講義	2	必修
国文学概論	「国文学」とは日本文学とその研究を意味する。国文学の成立と展開をたどりながら、さまざまな研究法にふれつつ、古典から近代文学にいたる主要な作品について具体的に鑑賞していく。	2	(2)	講義	2	必修
漢文学概論	漢文・漢詩を読み味わうためにはどのような知識や方法が必要か。その基礎的な力を養うために、具体的な作品に即してわかりやすく解説し、鑑賞や分析の方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2	必修
書道演習	中学校において書写（毛筆・硬筆）指導を行ううえで必要な用筆法を学ぶ。その他、仮名や生活の中の書も学ぶ。	2	(2)	演習	1·2	必修
国語理解A	小学校国語科の教材（物語文・説明文）や日本近代・現代の主要な詩・小説・童話・評論・随筆等を読みながら、文章読解の技術、作品分析の技法を学ぶとともに、現代文の諸ジャンルの特徴に関する基礎的な知識を習得する。	2	(2)	講義	2·3	2単位以上選択必修
国語理解B	小学校国語科の教材と教材に関連する文学作品を読みながら、文字表記や語彙の使い方、言い回しや文体等、表現者の意図と聞き手・読み手の理解とのギャップについての理解を深め、言葉や文章の理解力をつけさせる指導について学ぶ。	2	(2)	講義	2·3	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
国語表現A	音声言語による表現(朗読・スピーチ・討論など)、文章による表現(作文・手紙文・報告文など)、プレゼンテーションの技法（資料の作成、パワーポイントの使用等を含む）など、小学校教員として必要な表現能力を養う。	2	(2)	演習	2·3	2単位以上選択必修
国語表現B	主に文章表現を通して日本語の構造と特質を教える。文章を書かせながら、文法、文章・文体などに関する基礎的知識を習得させ、国語科に関する関心を深めさせる。日本語の語彙・表現・表記に対する他言語からの影響も視野に入れ、文献資料の考察を通して、日本語の歴史と変遷についての知識と理解を深める。	2	(2)	演習	2·3	
※国語教育課題演習	国語の授業を中心として小学校教育現場における諸課題・諸問題から研究テーマを設定し、卒業研究へ発展させてゆく。現状把握・先行研究入手といった情報収集の方法と情報の扱い方、調査・分析の方法、論文の組み立て方、論理的文章の書き方、口頭発表のレジュメ・資料作成・話し方等について実践的に学ぶ。	1	(2)	演習	3·4	

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。
注2）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8ー⑥（社会コース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、選択必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
社会ゼミナールA	小学校の教員を志望する学生に必要な基礎的思考力、読解力、コミュニケーション能力を、演習形式での文献解読、資料解読、討論等を通して養う。地域社会や生活、歴史に関連の深い題材を主に扱う。	2	(2)	演習	1	2単位以上選択必修
社会ゼミナールB	小学校の教員を志望する学生に必要な基礎的思考力、読解力、コミュニケーション能力を、演習形式での文献解読、資料解読、討論等を通して養う。政治・経済・社会・思想など、人々の社会意識を規定している諸条件についての題材を主に扱う。	2	(2)	演習	1	
資料調査法A	小学校「社会」地歴系で、教科書をより深く理解し教授するために必要な資料調査や地域調査の方法を教授する。身近な地域の調査方法や郷土資料、歴史資料の調査方法について、現地調査（町探検の実際を含む）や博物館、資料館体験を通じて学習する。	2	(2)	講義	2	2単位以上選択必修
資料調査法B	小学校「社会」公民系で、教科書をより深く理解し、教授するのに必要な資料の所在、またその調べ方について、教授する。学生時代に、文献資料だけではなく、図書館、博物館、資料館などの公共利用機関などについての体験を積んでおくことが、教師になってから活きてくる事に留意する。	2	(2)	講義	2	
日本史概論	日本における国家史的な歴史の大きな流れの中にあって、人びとは如何なる社会を築き上げてきたのか。古代～現代にわたる日本史の通史的な理解を前提にしながらも、個別的な事例を通して見えてくる日本社会の諸側面について講義していく。	2	(2)	講義	1	2単位以上選択必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
外国史概論	外国史を学ぶ価値と意味について考えていく。文化的背景を異にする人々への理解を深め、常に現在の世界を過去とのつながりの中で捉える視点を養う。講義の具体的な考察対象として、東洋史と西洋史の歴史的事象を隔年で扱う。	2	(2)	講義	1	
人文地理学概論	地理学の基本である地域形成の要因を講義する。事例として、戦後日本の地域形成の過程を取り上げる。講義では、人口、産業、社会の変化を取り上げながら、日本経済社会の地域構造の変化を考察する。	2	(2)	講義	1	2単位以上選択必修
自然地理学概論	人類の主たる活動の場である地球表面の自然環境を、地域的観点から理解しようとするのが自然地理学である。本講義では、地形・気候・水・植生といった地域の自然的基盤を理解するために必要な基礎的概念および観点について講義する。	2	(2)	講義	1	
法律学概論	法学の基礎的事項を概観するとともに、現代社会における法的諸問題について、それらの歴史的背景をも検討しながら考察する。	2	(2)	講義	1	4単位以上選択必修
政治学概論	現代政治を分析する上で必要な政治学上の議論を学ぶ。特に、現代の政治的仕組みとして、選挙制度、議会制度、政党政治、利益集団、官僚制などを検討する。	2	(2)	講義	2	
経済学概論	価値、価格、貨幣、成長、貿易、国際収支などの理論経済学及び国際経済の基礎概念について説明し、理論経済学及び国際経済論の概要を理解させる。	2	(2)	講義	2	
社会学概論	社会学の基礎的視角とは何かという問題を焦点に据えながら、その成立根拠に遡りながら社会学的諸理論の特徴を吟味し、現代社会の分析視角としての社会学の意義を明らかにする。	2	(2)	講義	2	
哲学概論	哲学の基礎について講述する。具体的なテーマをとりあげ、原典資料を参照することにより哲学的な問題のとらえ方と考え方に親しむことをねらいとする。講義をつうじて人間の生存の根本問題を考えるきっかけをつかんでほしい。	2	(2)	講義	2	
倫理学概論	日本思想史の諸問題について、神道、仏教、儒教、キリスト教など、それぞれの時代の主要な思想潮流と、無常・幽玄などの美意識・死生観、武士道と士道、芭蕉・近松など日本文化を構成する中心的なテーマについて中国、西洋思想との比較を念頭に置きつつ講義する。	2	(2)	講義	2	
※日本史演習	日本史関係論文の輪読や卒業論文作成に向けての研究発表を行う。史料の取り扱いや先行研究の整理方法など基礎的な作業を学び、発表と討議を通して日本史の研究方法について理解することが課題である。	2	2	演習	3·4	4単位以上選択必修
※外国史演習A	異なる歴史時代、文化背景、民族の生い立ちにある人間一般への興味を養い、その理解を深める。そのために西洋史に関する文献（資料、史料）の精読と集団学習によって事実認識の幅を広げ、批判的方法を身につける。	2	2	演習	3·4	
※外国史演習B	異なる歴史時代、文化背景、民族の生い立ちにある人間一般への興味を養い、その理解を深める。そのために東洋史に関する文献（資料、史料）の精読と集団学習によって事実認識の幅を広げ、批判的方法を身につける。	2	2	演習	3·4	
※地理学演習A	人文地理学の基本的な文献である農業地理、工業地理、商業・サービス業地理の各産業分野に関する文献や都市地理学・農村地理学の社会的分野の文献を講読して地理学文献の読み方や論文構成の方法、資料の取り扱い方を議論する。	2	2	演習	3·4	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※地理学演習B	自然地理学関連の文献講読を行う。自然地理学的手法を用いて、身近な景観や環境の仕組み、およびその成立史などを解明する過程を学ぶ。	2	2	演習	3·4	
※法律学演習	資料・文献講読及び討論を通して、現代社会の諸問題を、法学の観点から分析・考察する力を養う。	2	2	演習	3·4	
※政治学演習	政治学の基礎的文献の講読などを通して、デモクラシー、ナショナリズム、国際紛争などの現代社会が抱える政治的諸問題について、自ら分析する力を持つことを目的とする。	2	2	演習	3·4	
※経済学演習	理論経済学及び国際経済論への理解とそれらの現実経済分析への応用力とを深めさせるため、経済学の古典的文献資料等を実際に読ませ、その内容や意義を研究させる。	2	2	演習	3·4	
※社会学演習	社会学の基礎的文献の精読を基礎に、そこから学びとることのできる社会学的基礎概念を駆使して、現代社会の諸問題を読み解く基礎的力量を身につけることを課題とする。	2	2	演習	3·4	
※哲学演習	哲学の課題と方法をつかみとり、自ら研究テーマを設定し追求していくための基礎能力を養うことを目標とする。そのために、古典文献の読解と各自の研究発表とを主な内容として演習を進める。	2	2	演習	3·4	
※社会科教育演習A	教科教育学の立場から、小・中学校での社会科教育が直面している諸課題および社会科授業改善の視点について考察する。その際に、発表や討論など受講者の主体的な学習活動を重視することによって、論理的かつ自律的に研究課題を追究していくことのできる自己研究能力の育成をめざす。	2	2	演習	3·4	
※社会科教育演習B	社会科および社会科に関係する生活科・総合的学習・国際理解教育・学習心理などについて、実践的・授業理論的・調査分析的・外国比較教育的などのアプローチから演習を進めていく。	2	2	演習	3·4	

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。
注2）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8ー⑦（英語コミュニケーションコース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
小学校英語教育概論	小学校における英語教育の土台となる理論の習得を踏まえ、それを実践に結びつけることを目指す。	2	(2)	講義	2	必修
第二言語習得論	第二言語・外国語習得理論を理解し、日本での英語教育の実践的諸問題を検討する。	2	(2)	講義	3	必修
※英会話A（初等）	この授業は、初等教育教員養成課程の学生用である。本コースを通して、英語でのプレゼンテーションの仕方などを学ぶ。	2	2	演習	1	2単位以上選択必修
※英会話B（初等）	リーディングやパッセージの理解・解釈をもとに、英語でディスカッションを行う。	2	2	演習	2	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※英会話C（初等）	将来の英語活動を見据えて、英語の基本的スキル向上を目指す。	2	2	演習	2	
※英作文A	英語の表現力の養成を行う。	1	(2)	演習	1	2単位以上選択必修
※英作文B		1	(2)	演習	1	
※英語コミュニケーション総合演習A	実践的コミュニケーション活動を通して、英語コミュニケーションスキルを高めることを目的とする。	1	(2)	演習	3	必修
※英語コミュニケーション総合演習B		1	(2)	演習	3	必修
※異文化理解講読A	主にイギリス文学及びアメリカ文学関係の基礎的文献を講読し、欧米文化における異文化理解の概念を歴史的及び文学的観点から検討し、理解を深める。	1	(2)	講義	2·3	2単位以上選択必修
※異文化理解講読B	英語学・対照言語学・比較言語学関係の基礎的文献を講読し、言語学的観点から異文化理解の概念を検討し、理解を深める。	1	(2)	講義	2·3	
※異文化理解講読C	外国語教育、第二言語教育、バイリンガル教育に関する基本的文献を講読し、グローバル化における言語教育の現状分析をとおし、異文化理解の概念を検討し、理解を深める。	1	(2)	講義	2·3	
※異文化理解講読D	コミュニケーション論に関する基本的文献を講読し、現代社会の異文化理解の諸問題を検討し、理解を深める。	1	(2)	講義	2·3	
英文法概論A	学校英文法の学習。	1	(2)	講義	1·2	必修
英文法概論B		1	(2)	講義	1·2	必修
英語音声学概論	英語音声学の基礎と応用を学び、英語の発音についての正しい知識を身につけることをめざす。	2	(2)	講義	1·2	必修

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。
注2）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8ー⑧（数学コース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
微分と積分A	高等学校の数学Ⅱを基礎として、微分・積分とその応用について講義する。	2	(2)	講義	1	
微分と積分B	微分と積分Aの知識にひきつづいて、微分・積分とその応用について講義する。	2	(2)	講義	1	
代数学入門	複素数の基本的な性質を調べ、3次、4次方程式の解の公式について講義をする。	2	(2)	講義	2	
代数の基礎	ユークリッドの互除法から始めて、初等整数論を講義する。	2	(2)	講義	3·4	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
線形代数学A	線形代数学の基礎的な部分及び応用上重要な連立方程式の解法について講義する。行列・行列式の基本的性質を講義する。	2	(2)	講義	1～3	
幾何学入門A	ユークリッド幾何学の基礎的概念について講義する。	2	(2)	講義	2	
幾何学入門B	幾何学入門Aの知識にひきつづいて、ユークリッド幾何学の基礎的概念について講義する。	2	(2)	講義	2	
幾何の基礎	平面上や空間内のいろいろな図形の性質について講義する。	2	(2)	講義	3·4	
解析学入門	解析学の重要な概念である集合と測度について、その基本的な事項を講義する。	2	(2)	講義	2	
解析の基礎	複素数の関数について、その基本的事項を講義する。	2	(2)	講義	3·4	
初等数学特選題目	算数や初等教育に関わる数学の話題を取り上げて紹介する。	2	(2)	講義	3·4	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8ー⑨（理科コース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
理科講義A	小学校理科の学習内容に沿った物理学の基礎概念を理解し、幅広い視野に立った知識の修得を行う。特に、力学、波動現象、電気・磁気的現象を中心に基礎的な内容の理解を行う。	2	(2)	講義	1·2	6単位以上選択必修
理科講義B	小学校理科では、水溶液の性質や物の燃焼のような、身の回りの物質に関わる化学的な内容を扱うが、それらを深く理解するために、その背景にある化学的な考え方について講義する。	2	(2)	講義	1·2	
理科講義C	小学校教員にとって必須となる生物学の基礎力を養うことを目標として、特に動物の体のつくり、栄養分の摂取や蓄積、生殖や遺伝、環境との関わり合いなどについて講義を行う。また、近年問題となっている種々の環境問題についても触れる。	2	(2)	講義	1·2	
理科講義D	理科の学習内容のうち、地質、流水、天体、気象、大気などの身近な地学現象に関する基本的な原理や認識方法などについて解説する。	2	(2)	講義	1·2	
物理学実験Ⅰ	理科講義Aの内容を深く理解し物理学の本質を体現するために、理科講義Aで修得する内容に則した基礎的な実験を行う。また、実験教材の開発を視野に入れ、自ら実験を考案する内容や実験結果を発表する場を盛り込む。	2	(6)	実験	2·3	必修
化学実験Ⅰ	物理化学、無機化学・分析化学、有機化学の基本的な実験手法やデータの解析方法を習得するとともに、物質の基本的な性質やその変化である化学反応を自ら実験することにより学び、化学の理解を深める。	2	(6)	実験	2·3	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
生物学実験Ⅰ	生物学分野の一般的・包括的内容の実験を行う。動物や植物など生物の取扱方法や観察を含む基本的な実験手法を修得し、将来学校現場において児童や生徒に生物実験を実践し、指導することができる力を養うことを目標とする。	2	(6)	実験	2·3	必修
地学実験Ⅰ	地学分野の一般的・包括的内容の実験。地質、岩石鉱物、気象－気候、天体などの地学的な諸事象について、観察、観測、分析、データ解析などの基本的手法を習得する。	2	(6)	実験	2·3	必修
理科演習A	物理学分野の発展的内容の演習。４年次の卒業研究に入るためのトレーニングを含む。	2	(2)	演習	3	
理科演習B	化学分野の発展的内容の演習。４年次の卒業研究に入るためのトレーニングを含む。	2	(2)	演習	3	
理科演習C	生物学分野の発展的内容の演習。４年次の卒業研究に入るためのトレーニングを含む。	2	(2)	演習	3	
理科演習D	地学分野の発展的内容の演習。４年次の卒業研究に入るためのトレーニングを含む。	2	(2)	演習	3	
理科教育学演習	理科教育学分野の発展的内容の演習。4年次の卒業研究に入るためのトレーニングを含む。	2	(2)	演習	3	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8ー⑩（情報・ものづくりコース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
木材加工入門	木材資源とその利用および木材の組織・構造について学習し、木材の機械的性質と構造の関係および諸性質に対する水分の影響を各種データから理解する。木工道具の歴史および構造を学ぶとともに、簡単な木製品の設計製図と製作を通して、木工道具および木工機械の基本的な使用法を身に付ける。	2	(2)	講義	1	必修
機械技術入門	機械締結要素、機械要素、運動伝達機構などの基礎的事項を扱い、身近な機械のメカニズムが理解できることを目指す。	2	(2)	講義	2	必修
電気技術入門	電気現象を学ぶ上で基礎となる起電力・抵抗からなる電気回路について基本的な要素から学習をする。また、日常の生活の中で電気と関わる現象や電気の安全な使い方についても扱うことで、電気に関する興味関心を高める。	2	(2)	講義	2	必修
情報ものづくり教材演習	学習した各領域の講義、演習、実験の内容を総動員して設定された教材製作に取り組む。教材製作をとおしてものづくりの全体を体験し、自らの力で問題を探し出し、解決できる能力を養う。	2	(2)	演習	3	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
機械工作	木材、プラスチック及び金属が有する特性および機械的性質を学ぶとともに、その特長を活かした作品製作の実践を通してものづくりの技術技能を高める。各種機械加工法にも触れ、ものづくりの技術技能を活かした教材・教具づくりを実践し、様々な教材開発に応用できる力を身につける。	2	(2)	講義	2	
電気・情報ものづくり	小学校の理科で学習する電気・電子部品である、光電池・電磁石・モーター・LED・コンデンサなどの特性を理解しそれらを使ったものづくり工作への活用方法を学ぶ。また、簡単なコンピュータ制御学習の基礎・コンピュータを使ったものづくりについて学習する。	2	(2)	講義	2	
情報技術	コンピュータ言語（Visual BASIC）を使って、簡単なソフトウエアの教材の作成方法を学ぶ。モグラたたきゲームやアナログ時計の製作のようなゲーム的な要素をもったソフトウエアから、選択で問題を解くドリル学習のためソフトウエア教材を作成する。	2	(2)	講義	3	
コンピュータネットワークの活用	現場の教員にとって必要なネットワークサーバ利用と運用・管理などの基礎的な知識の習得と、スキルを身につける。主にデジタルコンテンツの作成や利用等による教育方法について、各種サーバ（web、mail、file）の運用と管理等を扱う。	2	(2)	講義	3	
教育と情報システム論	学校教育に求められる情報システムを実習を元に学び ICT（情報通信技術）活用能力を持つ教員になる基礎を身に付ける。	2	(2)	講義	1	必修
教材植物入門	学校教育で扱われる代表的な教材植物について、生理的特性と栽培法を学ぶ。また、栽培学習に関係する現代的な課題「食教育」、「地球環境問題と栽培」、「農業における IT」についても解説する。体験学習として、実際の植物栽培も取り入れる。	2	(2)	講義	1	必修
教材植物の栽培・利用	小学校「生活」「理科」および「総合的学習の時間」で教材として用いられる植物について、栽培技術のポイントと教材としての活用法を学ぶ。特に、小学校理科の教材植物については、教育現場で行われる代表的な観察・実験を行う。	2	(2)	講義	2	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8ー⑪（家庭科コース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
家庭科ゼミナール	実験データ処理の方法を基礎的な概念を用いて学ぶ。	2	(2)	演習	1	必修
被服の材料	繊維材料の特質や機能を学ぶ。	2	(2)	講義	3	必修
編織学	繊維、糸、織物の各段階での性質及び構造が被服性能に及ぼす影響を学ぶ。	2	(2)	講義	3	必修
食品の科学	食物学の基礎のうち食品成分の化学的性質を中心とする。	2	(2)	講義	2	必修
食物と栄養	食物の栄養機能および食生活の健康影響について概説する。	2	(2)	講義	2	必修
生活と住居	住居の成り立ちや役割について理解を深める。	2	(2)	講義	3	必修
発達と保育	生涯発達の視点と子どもの発達と保育について理解を深める。	2	(2)	講義	3	必修
初等教育家庭科演習	家庭科教育を支える科学研究をし、学校家庭科への展開を学ぶ。	2	2	演習	3	
家庭科実験	身の回りに存在する諸事象の科学的な理解の方法を学ぶ。	2	3	実験	2	
被服学実験・実習A	布作りを通して、繊維、糸、織物の基本的な性質及び構造、布設計方法について学ぶ。	1	(3)	実験	1	1単位以上選択必修
被服学実験・実習B	被服構成の基礎知識と技能を習得する。	1	(3)	実験	1	
食物学実験・実習A	食品成分の調理・加工過程における変化に関わる実験を行う。	1	(3)	実験	2	1単位以上選択必修
食物学実験・実習B	調理における食品成分の役割や変化を中心に体験的に実習を進める。	1	(3)	実験	2	
住居学実験・実習A	住居空間を表現するための製図法や模型制作法を学習する。	1	(3)	実験	1	
住居学実験・実習B	住居の仕組みや働きを理解するための実験や実習を行う。	1	(3)	実験	3	
保育学実験・実習A	幼児の「遊び」に焦点をあてることにより、幼児を理解し、大人の関わりや支援のあり方を考える。	1	(3)	実験	1	
保育学実験・実習B	発育・発達期の小児の栄養・食生活を対象に実験、実習をする。また、乳幼児やその親を理解するための調査研究を行う。	1	(3)	実験	3	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8ー⑫（音楽コース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
音楽基礎演習A（声楽）	小学校歌唱教材を通して、発声、発音、歌唱表現等の基礎について学ぶ。独唱、合唱など様々な形態の声楽曲のほか、日本の発声も体験する。実践の場で役立つ、発達段階を考慮した歌唱指導の力を養うことを目的としている。	2	2	演習	1·2	必修
音楽基礎演習B（ピアノ）	前期は音階、練習曲、平易な曲、連弾曲、伴奏などの課題曲を毎週1曲ずつ仕上げて演奏する。後期はバロックから近現代にいたるさまざまな様式のピアノ音楽を学習する。	2	2	演習	1·2	必修
音楽基礎演習C（指揮と表現）	音楽表現をするにあたって、指揮のテクニックを応用しながら様々な表現方法を研究する。	2	2	演習	1·2	必修
音楽基礎演習D（作曲・音楽理論）	楽典の基礎や簡単な分析とソルフェージュの初歩など、楽譜の約束事や西洋音楽の構造を理解するための知識や技術を学ぶ。	2	(2)	演習	1·2	必修
音楽基礎演習E（音楽学）	音楽の構造、音楽の伝承方法、音楽の社会的役割、文化による音楽のあり方の違いなど、さまざまな側面から、音楽について考える。	2	(2)	演習	1·2	必修
※ソルフェージュ	中等教育教員養成課程音楽教育専攻と混ぜてクラス分けを行う。西洋音楽の学習に必要な基礎能力（読む・聴く・書く）の育成をはかる。	2	(2)	演習	全	3科目6単位以上選択必修
※合唱	さまざまな形態、時代様式、ジャンルの合唱を経験し、その演奏法、指導法について学ぶ。豊かな声の響きと和声感を感じ取り、合唱における音楽づくりを体験・研究する。	2	2	演習	全	
※合奏（弦楽）	弦楽器の奏法を学び、西洋音楽の基本である合奏を通して、情操的教養を高めるとともに、共同で作り上げる音楽の意義を学ぶ。	2	2	演習	全	
※合奏（吹奏楽）	吹奏楽器や打楽器の奏法を学び、西洋音楽の基本である合奏を通して、情操的教養を高めるとともに、共同で作り上げる音楽の意義を学ぶ。	2	2	演習	全	
キーボード・ハーモニー	鍵盤和声の習得。和声法の基礎を、簡易伴奏づけ等を通して実践的に学ぶ。	2	(2)	演習	1·2	
※民族音楽演習B	実技の学習を通して諸民族の音楽を学び、あわせて音楽を育んだ文化的歴史的背景についても学習する。	2	(2)	演習	全	
音楽学概論	音楽学の基本的な考え方、音楽学研究の方法と範囲について概観する。また、多様な音楽文化の存在を前提とした上で、音楽とは何かについて検討する。	2	(2)	講義	1·2	

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。

注2）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8ー⑬（美術コース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
絵画基礎	造形の基礎としてデッサンを学び、観察力、描写力、構成力等の能力を養い、さまざまな表現の可能性を試みたい。	2	(2)	演習	1	必修
彫塑基礎	立体造形の基礎を空間においてボリューム・マッス等の関連において学習し、塑造制作を通じて基本的な立体を観る造形感覚を養う。塑造粘土を使用し、芯棒組から石膏取りまでの作業工程を学習する。	2	(2)	演習	1	必修
デザイン基礎	デザインという行為は、何を目的としているのか。また、その行為における実際の表現形態の実例とそれぞれのジャンルの特性や考え方を視覚的な教材を生かしながら構成して行く。	2	(2)	演習	1	必修
工芸基礎	学校現場における工芸の基礎的な知識理解を主に、陶芸及び張り子の制作	2	(2)	演習	1	必修
美術理論・美術史基礎	19世紀までの日本、東洋、西洋の美術、建築、デザインなどから横断的に題材を選び、視覚による認識や表現の基礎的な原理、人間、もの、風景、自然、都市などがどのように芸術に表現されてきたかなどについて実例をもとに概観する。	2	(2)	講義	1	必修
造形	小学校図画工作での「造形」についての考え方を、絵画と彫刻の二面から実践を通して学習する。	2	(4)	実技	2·3	
生活デザイン	実生活に関係するオブジェクトに対して、より豊かな空間や生活を獲得するために、より機能的であり美しいデザイン提案を実際に使用できる物の制作を通して学習する。	2	(4)	実技	2·3	
鑑賞	人間の造形活動の意味を理論的、歴史的に問いかける「鑑賞」のあり方について実践を通して学ぶ。美術館における実作品に触れて教育普及プログラムを実地に体験し、各自で学校や美術館で活用する鑑賞教材を制作してプレゼンテーションを行う。	2	(2)	演習	2·3	
クラフト	木工芸の基礎的技術の学習、及び染色に関する基礎的技術の学習を隔年で行う。	2	(4)	実技	2·3	
美術特殊演習A	絵画技法材料、美術解剖学、色彩学など、美術の科学的な見方や考え方を理論的かつ実践的に学習する。	2	(2)	演習	3·4	
美術特殊演習B	絵画技法材料、美術解剖学、色彩学など、美術の科学的な見方や考え方を理論的かつ実践的に学習する。	2	(2)	演習	3·4	
映像表現A	映像を効果的に表現する方法を静止画像（写真）を中心に制作を通して学んで行く。	2	(2)	演習	3·4	
映像表現B	映像を効果的に表現する方法を動画を中心に制作を通して学んで行く。	2	(2)	演習	3·4	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表8ー⑭（体育・健康コース・コース専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて16単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
体育基礎理論	学校および社会の中の体育・スポーツに関することがらの中からスポーツの魅力と問題点を探っていく。「スポーツとは何か」「体育とは何を教え・育てる教科か」を考察する。あわせて体育学・運動学・教育学などの課題を探る。	2	(2)	講義	1	必修
健康科学基礎理論	現代人、とりわけ子どもの健康問題を理解するための基本的な健康科学的理解を深めることがねらいである。主な内容としては、身体発達に関する科学、免疫に関する科学（感染予防、アレルギー疾患等の基礎）、生活習慣病の基礎科学、心身相関の科学、等について扱う。	2	(2)	講義	1	必修
体育・健康基礎演習	体育・健康に関する専門誌、新聞記事、基本的文献などを読みながら、体育・健康に関する問題意識を深める。また、文献を読む、レポートを作成して発表する、ディスカッションする、以上の内容をまとめて文章化するなどの学習・研究方法を学ぶ。	2	(2)	演習	1	必修
体育・健康・スポーツ演習	体育・健康・スポーツをめぐる諸問題の中から、自分が興味関心のある学習・研究課題を選んで、それについて文献・調査・実験・実践などを通して学習・研究し、その成果を発表して、相互に批評・検討を行う。	2	(2)	演習	2	必修
保健体育研究法演習	保健体育専攻専門分野の中から一つを選択し、担当教員による通年の演習を通じて専門分野における研究方法を学習し、4年生での卒業研究の基礎とする。	4	2	演習	3	必修
体育実技	体操、器械運動、陸上競技および水泳を中心に構成され、体育科の指導に必要な基本的知識・技術について学習し、技能の習熟を図る。またそれぞれの練習方法、指導法を学ぶ。	2	2	実技	1	必修
※器械運動	マット、とび箱、鉄棒、平均台における技や組合せの段階的習得と習熟を図る。また、器械運動の特性、技の技術と発展の系統性、練習方法と段階、連続技の構成、安全確保や幇助の仕方などを学習するとともに、技のできばえを観察、評価する能力の向上を図る。	1	(2)	実技	2·3	2科目 2単位以上 選択必修
※陸上競技	陸上競技の走・跳・投の各種目についての技術・ルール・知識について学習し、自分自身の基本的な技能の習熟をはかるとともに、陸上競技の練習法、トレーニング法、指導法、競技会の企画運営の仕方と審判法などについて学習する。	1	(2)	実技	2·3	
※水泳	クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライの各泳法を体系的に学習して、技能の確実な習熟をはかる。またスタートやターンの方法など重要な競技の方法と規則を学ぶとともに、水泳大会の運営や審判に必要な基本的事項、水泳の事故防止やプールの衛生管理の基本的事項を学習する。	1	(2)	実技	2·3	
※サッカーⅠ	サッカーの特性を理解するとともに、サッカーをプレイするための基本的技術、戦術（特に個人技術、個人戦術）の習得を主題にする。そして最終的にはチームプレイの最小単位である2対2におけるコンビネーションプレイからの攻防を理解して実践できるようになることがこの授業のねらいである。	1	(2)	実技	全	
※バスケットボールⅠ	バスケットボールをプレイするための基礎的な個人技術を学ぶとともに、チームゲームであるバスケットボールの特性を理解するために、主として攻撃のコンビネーション・プレイを理論的・実践的に学習することをねらいとする。	1	(2)	実技	全	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※舞踊AⅠ	創作ダンスの初歩段階の授業である。「恥ずかしくて踊れない」「どのようにからだを動かして踊ればよいのか分からない」などの問題を、からだや動きを実感することで解決していく。また、からだの感覚を覚醒し解放するさまざまなワークに取り組むことを通して「踊り表現するからだ」を育てる。	1	(2)	実技	全	
※舞踊B	舞踊は、芸術的なものから芸能まで、また儀式的なものから娯楽的なものまでさまざまである。それらの舞踊の中から自分の文化である日本の民俗舞踊をとりあげる。人々の生活にとっての踊りの意義、文化としての身体の動きの美しさについて、実践的に学習する。	1	(2)	実技	全	

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。

注2）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

4 専門教育科目　その4　選択コース科目 【発達・教育系のみ】

発達・教育系の4コースの学生は、下記の《選択コース》のうち、いずれか1コースを選択し、そのコースの**「授業科目表8」**に掲載された授業科目から、所定の単位を「選択コース科目」として修得する必要があります。

所定の単位

●幼児教育コース　→　4単位以上

●子ども文化コース
●教育学コース
●教育心理学コース
→　8単位以上

《選択コース》

国語コース ⇒ **「授業科目表8－⑤」(58ページ)**
社会コース ⇒ **「授業科目表8－⑥」(59ページ)**
英語コミュニケーションコース ⇒ **「授業科目表8－⑦」(61ページ)**
数学コース ⇒ **「授業科目表8－⑧」(62ページ)**
理科コース ⇒ **「授業科目表8－⑨」(63ページ)**
情報・ものづくりコース ⇒ **「授業科目表8－⑩」(64ページ)**
家庭科コース ⇒ **「授業科目表8－⑪」(66ページ)**
音楽コース ⇒ **「授業科目表8－⑫」(67ページ)**
美術コース ⇒ **「授業科目表8－⑬」(68ページ)**
体育・健康コース ⇒ **「授業科目表8－⑭」(69ページ)**

5 専門教育科目　その5　卒業研究 (6単位)

卒業研究は、全課程に共通して設定されている科目です。その内容、方法、履修の手順等は、所属する課程、コース、専攻ごとに定められています。また、卒業研究には参加資格があり、これに関しても課程、コース、専攻によって必要単位数が異なります。

卒業研究の履修に関しては、**第14章（149ページ～150ページ）**の説明を確認してください。

6 自由選択科目 (2単位以上)

自由選択科目は、本学で開設しているすべての授業科目から自由に選択して単位を修得する科目です。

教育課程表には授業区分ごとに卒業に必要な単位数が示されていますが、その数を超えて修得した単位は、自由選択科目の単位とすることができます。また、所属する課程の教育課程表・授業科目表に示されている科目以外の授業科目（他の課程の授業科目、情報処理専門教育科目、資格取得関連科目）を履修し、単位を修得した場合も、それを自由選択科目の単位とすることができます。

初等教育教員養成課程の学生は、その他の授業区分の必要単位を満たしたうえで、さらに2単位以上、自由選択科目の単位を修得してください。

IX

第９章
中等教育教員養成課程専門教育科目

1 専門教育科目　その1　教職科目
授業科目表6－②（中等教育・教職科目）
2 専門教育科目　その2　専攻専門科目
授業科目表9－①（国語教育専攻）
授業科目表9－②（社会科教育専攻）
授業科目表9－③（英語教育専攻）
授業科目表9－④（数学教育専攻）
授業科目表9－⑤（理科教育専攻）
授業科目表9－⑥（技術教育専攻）
授業科目表9－⑦（家庭科教育専攻）
授業科目表9－⑧（音楽教育専攻）
授業科目表9－⑨（美術教育専攻）
授業科目表9－⑩（保健体育専攻）
3 専門教育科目　その3　卒業研究
4 自由選択科目

第9章　中等教育教員養成課程専門教育科目

この章では、中等教育教員養成課程の教育課程表（卒業に要する単位数）の中の「専門教育科目」と「自由選択科目」について、「授業科目表」を掲載し、授業科目の詳細と履修方法を説明します。表の見方については、**第2章「6 授業科目表の見方」（9ページ～）**を参照してください。

1 専門教育科目　その1　教職科目（43単位以上）

中等教育教員養成課程では、必修・選択必修の科目を含めて、教職科目を**43単位以上**修得する必要があります。

教職科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次ページ以降の**「授業科目表6－②」**で確認してください。専攻によって履修する授業科目が定められている場合は、「備考欄」にその指示が記してあります。

教職科目のうち、「教育実習とそれに直接関連した科目」に関しては、**第11章（139ページ～143ページ）**の説明をよく読んで履修してください。「教育実習」には履修資格が設けられています。

授業科目表6ー②（中等教育教員養成課程・教職科目）

次の表の科目から、備考欄の指示に注意して、43単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教職入門	現場の実状を通して、教職の意義や、教員の職務内容、課題となっていることについて学び、自己の教職像とそのための準備（進路選択）について考える。	2	(2)	講義	1	必修
教育の原理	教育の理念・歴史・思想を含む、教育の基礎理論を学ぶ。表面的には多様な諸教育実践を根底で支え成り立たせている教育の原理は、網羅的で概説的な手法ではとらえることができない。そこで、この講義では、各担当教員が専門とするアプローチを介して、表面的には隠されている教育原理に迫る。	2	(2)	講義	2	必修
発達と学習の心理	本講義では、心理学実験を一部交えながら、学習活動全般についての理解を深める。これまで行ってきた学習活動がどのように位置づけられるかを、相対化して理解できることを目標としたい。また、心理学的な知能の捉え方を紹介しながら、学習障害をもった生徒の処遇などについても解説する。	2	(2)	講義	1	必修
教育の制度・経営	教育の制度の成り立ちとその運営に関する基本的特質について理解し、課題となっていることならびにそれに関する自己のあり方について考える。	2	(2)	講義	1	2単位以上選択必修
教育と地域社会	社会教育における学習活動と学習支援のしくみについて、理論的・学説史的な整理とともに具体的な事例の検討を行う。学校教育のみにとどまらない教育の豊かな可能性を理解するとともに、学校および教員の立場から見た社会教育との関わり方（連携・協力を含む）について理解を深めることをめざす。	2	(2)	講義	1	
国語科教育法Ⅰ（中等）	中学、高校における国語科教育論の問題および国語指導の課題について、「国語科経営」の視点から考察する。中・高等学校の学習指導要領の目標及び内容を理解するとともに、具体的な教材の取り扱いや教材（学習材）開発や授業づくりを演習的に行う。	2	(2)	講義	2	取得しようとする免許状の教科教育法4単位必修
国語科教育法Ⅱ（中等）	国語科教育法Ⅰを踏まえて、中学及び高等学校の教材開発及び新しい国語の授業展開の可能性を考える。音声言語教材及び文字言語教材の開発と具体的な言語活動の在り方と展開を追究する。	2	(2)	講義	3	
社会科教育法A（中等）	中学校社会科地理的分野・歴史的分野に焦点を当て、社会科とは何をめざす教科なのか、現在の社会科授業が直面している課題は何なのかについて、若者の実態や今後の社会像とも関連づけながら、目標論、教科構造論、内容構成論、教材論などの視点から、原理的に考察する。	2	(2)	講義	2	
社会科教育法B（中等）	中学校社会科公民的分野に焦点を当て、社会科とは何をめざす教科なのか、現在の社会科授業が直面している課題は何なのかについて、若者の実態や今後の社会像とも関連づけながら、目標論、教科構造論、内容構成論、教材論などの視点から、原理的に考察する。	2	(2)	講義	2	
数学科教育法Ⅰ（中等）	中学校、高等学校の数学教材と、その背景にある数学専門との関連性について考察する。	2	(2)	講義	2	
数学科教育法Ⅱ（中等）	中学校、高等学校数学を教える立場から再検討し、それをもとに授業を構成・分析する方法を考える。	2	(2)	講義	3	
理科教育法Ⅰ（中等）	理科教育の研究成果に学び理科教材、授業を検討する方法を演習を含めて学ぶ。理科教材の検討と教科書、授業との関係について実践例など検討する。	2	(2)	講義	2	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
理科教育法Ⅱ（中等）	理科の学習指導要領はエネルギー・粒子・生命・地球の4領域より構成され、各領域の特性に対応した教材や指導方法（情報機器の活用を含む）が存在する。授業や教材の具体例、指導案やビデオ等の授業記録をもとにして授業づくりの多様性を体験的に学修する。	2	(2)	講義	3	
音楽科教育法A（中等）	1）中学・高等学校の学習指導要領によって音楽科の目的・目標・内容を把握する。2）日本の音楽教育史および世界の音楽教育、多文化音楽教育について学ぶ。3）指導案を作成、模擬授業の試みの中で、音楽の指導法を研究する。以上の活動を通じて、中学・高等学校における音楽教育に関する考え方や問題意識をもって教育現場で実践できる力を身につける。	2	(2)	講義	2	
音楽科教育法B（中等）	西欧音楽、日本の音楽、アジアなどの諸民族の音楽の実技と指導法について学ぶとともに、授業実践に結びつける方法を学ぶ。模擬授業も行う。	2	(2)	講義	3	
美術科教育法A（中等）	第一に、学習指導要領、各種美術教育論を理論的に分析、検討することで、美術教育をめぐる諸概念と論理的考察力を身につける。第二に、学習指導要領の内容を現実化するような題材を各自が考案し、指導略案を作成する。第三に、与えられた題材を実践することで、指導力を獲得する。	2	(2)	講義	2	
美術科教育法B（中等）	近現代の美術表現の歴史を検証し、平面による多様な絵画・デザイン技法を実際に造形演習を行い理解する。	2	(2)	講義	2	
保健体育科教育法A（中等）	中学校保健体育科の保健分野に加え、教科外体育にも焦点をあてて、指導の考え方や計画の立て方を学習する。模擬授業などを通して、教育内容の構成、指導過程の原則、学習活動と自治集団活動の組織化について、実践的に学ぶ。	2	(2)	講義	3	
保健体育科教育法B（中等）	中学校保健体育科の体育分野に焦点をあて、基本的な体育授業の考え方と授業づくりを学習した上で、模擬授業を通して授業内容の構成、指導過程の原則、学習活動の組織化をいかにはかるかを実践的に学ぶ。	2	(2)	講義	2	
技術科教育法Ⅰ（中等）	技術教育の歴史、海外の技術教育及び教育現場の状況等を通して、中学校技術・家庭科における技術科教育の指導理念や教育内容、それらに基づく具体的な指導方法等について考察する。	2	(2)	講義	2	
技術科教育法Ⅱ（中等）	中学校での技術科教育の授業に焦点を絞り、学習指導要領の変遷、教科目標、教育内容、教育方法、教材教具、教科書、授業分析法、施設設備の管理運営（安全教育を含む）指導案の書き方等について具体的な例を挙げ考察する。また、授業練習や教育現場の実態と諸問題についても扱う。	2	(2)	講義	3	
家庭科教育法Ⅰ（中等）	家庭科の授業を成り立たせている目標、内容、教材、児童・生徒について、具体的な授業のしくみを考えながら、受講者各自が言語表現できるようにする。また、授業が時間と空間の制約のなかで行われていることをも受講者各自が実感できることをめざす。そのなかで、教材開発も追求する。	2	(2)	講義	2	
家庭科教育法Ⅱ（中等）	家庭科の教科の授業の特徴を家庭科の歴史研究を通して学ぶ。とくに、児童生徒の「生活離れ」のなかでの家庭科教育の目標について、現実の授業を批判的に見ることを通して見直しする。それを通して、新しい教科のありかたについて考えることができるようにする。	2	(2)	講義	3	
英語科教育法A（中等）	英語教育の理論と実践を学ぶ上での英語教育がかかえている基本的な諸課題の分析と把握を目的とする。具体的には、英語の授業等を実際に観察・体験し、課題・問題の認識を深めることを目指す。	2	(2)	講義	2	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
英語科教育法B(中等)	授業を実践するにあたり、具体的な指導案とともに教材を開発する。実際に授業で使用することにより、改善・工夫を加える。	2	(2)	講義	3	
工業科教育法A	中等技術教育の歴史、科学技術の発展と職業教育の多様化、工業高等学校の組織、教育課程、教育内容、それらに基づく具体的な指導方法等について講義する。教材製作も行う。	2	(2)	講義	3·4	
工業科教育法B	中等技術教育後半の工業高等学校では、革新的な技術の進歩に対応できる技術者の育成を目指し、基礎的な知識と技能を重視した柔軟性のある教育が大切である。本講義では、特に情報技術教育を中心に工業教育を考察する。	2	(2)	講義	3·4	
国語科教育法A(中等)	中学校を中心とする国語科に関する学習指導法について、「話すこと聞くこと」「書くこと」「読むこと」それぞれの領域における実践研究の動向や諸課題を理解したうえで、模擬授業および授業体験等の活動をとおして、国語科教員としての実践的な力量を養うことをめざす。	2	(2)	講義	2·3	
国語科教育法B(中等)	高等学校を中心とする国語科に関する学習指導法について、「話すこと聞くこと」「書くこと」「読むこと」それぞれの領域における実践研究の動向や諸課題を理解したうえで、模擬授業および授業体験等の活動をとおして、国語科教員としての実践的な力量を高めることをめざす。	2	(2)	講義	2·3	
社会・地歴科教育法(中等)	中学校社会科の地理的分野・歴史的分野および高等学校地理歴史科の各科目に焦点を当て、3年次での附属学校における教育実習との関連を図りながら、学習指導案の作成や模擬授業などを取り入れつつ、授業づくりを体験的に学ぶ。	2	(2)	講義	3	
社会・公民科教育法(中等)	中学校社会科の公民的分野および高等学校公民科に焦点を当て、3年次での附属学校における教育実習との関連を図りながら、学習指導案の作成や模擬授業などを取り入れつつ、授業づくりを体験的に学ぶ。また、そのことを基にして、理論と実践とを対比させながら授業改善の視点について省察する。	2	(2)	講義	3	
数学科教育法A(中等)	中学校数学・高等学校数学を、教える立場から再検討し、それをもとに授業を構成・分析する方法を考える。特に「数と式」「図形」の分野に焦点をあて、学習指導上の課題を踏まえた教材研究、教材開発と模擬授業等を通して、目標、内容、方法、評価について実践的に学修する。	2	(2)	講義	2·3	
数学科教育法B(中等)	中学校数学・高等学校数学を、教える立場から再検討し、それをもとに授業を構成・分析する方法を考える。特に「関数」「データの活用」の分野に焦点をあて、学習指導上の課題を踏まえた教材研究、教材開発と模擬授業等を通して、目標、内容、方法、評価について実践的に学修する。	2	(2)	講義	2·3	
国語科教育実践体験演習(中等)	教育現場での体験を踏まえ、各自の受けてきた国語教育をも振り返りながら、国語教育専攻で学んでいくための基本的な姿勢を身につける。	2	(2)	演習	1	所属する専攻の科目2単位選択必修
社会科教育実践体験演習(中等)	中学校社会科に焦点をあて、附属中学校との連携を図りながら、実際の中学校現場における社会科授業の現状に触れることを通して、社会科授業をめぐる諸問題に対する関心を高めるとともに、その諸問題を考察していく視点を習得する。	2	(2)	演習	1	
英語科教育実践体験演習(中等)	英語教育の理論と実践を学ぶ上での英語教育がかかえている基本的な諸課題の分析と把握を目的とする。具体的には、英語の授業等を実際に観察・体験し、課題・問題の認識を深めることを目指す。	2	(2)	演習	1	
数学科教育実践体験演習(中等)	実際の教育現場での体験を踏まえて、大学に於ける学習に要求される数学に関する基本事項について討論する。	2	(2)	演習	1	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
理科教育実践体験演習(中等)	高等学校までの理科教育を見直すとともに、附属中学校等における授業観察を踏まえ、教員の立場で理科教育の内容及び方法を学ぶ視点を身につける。また、中学校理科の学習内容を精査し、学問の理論的修得が中学校の理科を教授する上で必要であることを理解し、4年間の大学での学習への動機付けを行う。	2	(2)	演習	1	
技術科教育実践体験演習(中等)	高校と大学の学びの違いを意識し、特に技術科教員を目指す者としての基礎を積極的に培う態度を養う。観察実習等を通し、教員としての立場で授業を見る観点を理解し、授業作りの素養を習得する。また技術教育専攻学生を担当する教員の研究紹介を通して、研究に対する視野も広げる。	2	(2)	演習	1	
家庭科教育実践体験演習(中等)	中学校家庭科の授業観察を通して、授業を成り立たせる条件を分析的に捉えることができるようにする。その際、特に教師の指示・発問・説明などでのパフォーマンスの役割について学び、自ら体験することを通して、実践できるようにする。	2	(2)	演習	1	
音楽科教育実践体験演習(中等)	学校における音楽教育のさまざまな課題について、学生自身のこれまでの体験をふまえて討議し、これからの音楽教育のあり方について考える。また、音楽教師としてどのような知識・技能を身につける必要があるのかを、附属学校での授業観察や、ビデオ等による授業記録の分析を通して検討する。	2	(2)	演習	1	
美術科教育実践体験演習(中等)	美術科における表現題材と鑑賞題材を実践してみるとともに、望ましい造形指導法と鑑賞指導法のあり方、生徒の実態と表現活動及び鑑賞活動の関わりを考察する。また題材・教材開発と個別的方法論選択の関係に着目しながら、美術科授業の構造を学ぶ。	2	(2)	演習	1	
保健体育科教育実践体験演習(中等)	今後の大学での学びに向けて、専攻のカリキュラムの構造と主旨を理解する。その上で、体育・スポーツ・健康を教える立場から中学生の保健体育学習やスポーツ活動などを観察し、その報告と他者との交流を通して、教員として教育や保健体育科の専門的内容を学ぶ姿勢や観点を得る。	2	(2)	演習	1	
国語科教育実践指導法A(中等)	中学校国語科の授業づくりを基本とする。附属中学校における3年次学生の教育実習での授業づくりに参画させることを通して、中学校国語科の指導目標及び指導内容の理解を深めさせるとともに、教材研究や指導計画の作成、授業設計等を実地に体験させつつ、よりよい国語の授業づくりの基礎的・基本的な方法を習得させる。	2	(2)	演習	2	所属する専攻の科目2単位選択必修
社会科教育実践指導法A(中等)	中学校社会科に焦点をあて、3年次実習の附属中学校における教育実習での授業づくりにいっしょに参加することを通して、中学校社会科に関する指導計画および本実習の授業計画に対する基礎的な素養を習得する。	2	(2)	演習	2	
英語科教育実践指導法A(中等)	前半は、教科専門（主に英語学・英文法）等の講義を中心とした教材研究。後半は、教科教育の立場からの授業分析。	2	(2)	演習	2	
数学科教育実践指導法A(中等)	数学科の授業の構成の仕方を実践的に学ぶことを目的とする。教育実習を経験していない2年生にとっては、実習直後の3年生との共同学習によって、次年度の教育実習の準備も含まれている。	2	(2)	演習	2	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
理科教育実践指導法A（中等）	中等教育教員養成課程2年生に対して、中学校での理科教育の教材作成及び授業計画の立案に必要な基本的知識と技術を習得させることを目的に、資料の収集、レポートの作成、教科書の内容把握、理科実験の実施、及び附属学校での授業観察を行う。	2	(2)	演習	2	
技術科教育実践指導法A（中等）	授業を考える上で基礎となる、授業の記録や分析を通して、様々な視点で授業を理解する。さらに教材観も養い、自分がイメージする学習指導案を作成する。	2	(2)	演習	2	
家庭科教育実践指導法A（中等）	中学校家庭科の授業設計について3年次の取り組みをともに取り組むことを通して、家庭科の授業の特徴を捉えさせる。学級単位の生徒理解、教育目的に沿った教材、時間系列に合わせた指示や発問なども含めた具体的な計画について具体的に理解させる。	2	(2)	演習	2	
音楽科教育実践指導法A（中等）	歌唱、器楽、鑑賞等の授業において、それぞれの主題にそった教材選択の視点を考える。また、教材として選択した楽曲で生徒にどのような音楽の知識・技能を身につけさせることができるのかを考える。以上のような教材研究の成果をもとに、音楽の授業の構成について、指導案の作成をとおして研究する。	2	(2)	演習	2	
美術科教育実践指導法A（中等）	学校教育における美術教育や総合的な学習の時間、また文化施設や地域で行われる芸術普及活動の先駆的事例を学び、ディスカッションや自ら構想を練るなど創造的な企画力や中学校における美術の授業等の構想力を高める。	2	(2)	演習	2	
保健体育科教育実践指導法A（中等）	中学校保健体育科に焦点をあて、3年次教育実習（附属中学校）における授業づくりに協同で参加することによって、授業研究法（授業記録・授業調査）を習得するとともに指導計画および授業の指導過程に対する基礎的な素養を身につける。	2	(2)	演習	2	
国語科教育実践指導法B（中等）	中学校国語科の授業づくりを基本とする。2年次とともに附属中学校における教育実習での授業づくりの過程をもとに、中学校国語科の指導目標及び指導内容の理解を深めさせるとともに、教材研究や指導計画の作成、授業設計等を実地に体験させつつ、よりよい国語の授業づくりについて研究、考察させる。	2	(2)	演習	3	所属する専攻の科目2単位選択必修
社会科教育実践指導法B（中等）	中学校社会科に焦点をあて、3年次での附属中学校における教育実習との関連に配慮しつつ、2年次生の協力を得ながら、当該単元に関する教材開発及び学習指導案の作成や授業分析などを通して、社会科の授業づくりを体験的に学ぶ。	2	(2)	演習	3	
英語科教育実践指導法B（中等）	前半は、教科専門（主に音声学、児童英米文学）等の講義を中心として教材研究。後半は、教科教育の立場からの授業分析。	2	(2)	演習	3	
数学科教育実践指導法B（中等）	数学科の授業の構成の仕方を実践的に学ぶことを目的とする。教育実習を経験した直後の3年生にとっては、2年生と共同学習することによって自分の実習を反省的に分析するとともに、次年度の教育実習の準備も含まれている。	2	(2)	演習	3	
理科教育実践指導法B（中等）	中等教育教員養成課程3年生に対して、理科教育実践研究Aでの学習を基礎に、授業の指導案を作成し、その実践と相互評価を通して、理科授業を実践する力を養うことを目的とする。	2	(2)	演習	3	
技術科教育実践指導法B（中等）	自分がイメージする授業を行うことを前提として、専門的な教材研究と教材作成を行い、様々な教授スキルを習得しながら模擬授業を行う。授業後には授業検討会を行い、自分自身の授業に対して客観的に分析する。	2	(2)	演習	3	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
家庭科教育実践指導法B（中等）	中学校家庭科の授業設計を受講生各自ができるようにする。学級単位の生徒理解、教育目的に沿った教材、時間系列に合わせた指示や発問なども含めた具体的な計画を作成できることをめざす。年間計画、技術科との連携、実習室の管理などへの配慮もできるようにしたい。	2	(2)	演　習	3	
音楽科教育実践指導法B（中等）	附属学校での授業記録を題材として、授業の分析方法について学習する。その際、教師の音楽的技能や意思伝達能力等が音楽科の授業運営にどのように関わっているのかなどを詳細に検討する。総まとめとして模擬授業を行い、音楽の授業において必要とされる指揮、ピアノ伴奏、歌唱などの音楽的技能の実践的な育成をはかる。	2	(2)	演　習	3	
美術科教育実践指導法B（中等）	美術教育における教育内容、教材・題材に関する従来の事例を検討し、その成果のもとそれらの開発を新たに行う。また指導案事例を参考に美術科授業の構造を学び、教材・題材の効果的な運用のあり方を考察し、授業運営能力を育成する。	2	(2)	演　習	3	
保健体育科教育実践指導法B（中等）	中学校保健体育科に焦点をあて、3年次教育実習（附属中学校）における授業づくりに向けて教材づくりと指導過程を構想することによって教育実習をより有益なものにするとともに、授業検討会を通じて授業づくりに向けての視点を習得する。	2	(2)	演　習	3	
特別支援教育理解	特別支援教育講座の全教員が担当する1年次対象の講義である。特別支援教育とその周辺領域を網羅し、基本的理解を得られるよう、キャップハンディ体験等を入れ込んで授業を展開する。	2	(2)	講　義	1	必　修
教育課程と教育方法	学校で計画的・系統的・意図的な教育活動を実施するための教育課程編成（カリキュラム・マネジメント）をどのように行うか。授業実践で子どもたちの学習要求・課題に即して、いかなる方法・技術を選択・実施し、評価するのか。以上の点について理論的・実践的知見を学ぶ。また、情報機器を授業の中でいかに活用すべきかについても学ぶ。	2	(2)	講　義	2	必　修
道徳の理論と指導	道徳に関する心理学等の諸理論を踏まえつつ、学校教育における道徳教育のあり方を実際的に検討する。学校における道徳教育の実際、道徳教育の諸理論、道徳教育の課題などについて解説する。指導案づくりや模擬授業の実施なども予定している。	2	(2)	講　義	3	必　修
総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	総合的な学習の時間を指導するために必要な、原理と方法について、すぐれた実践例を踏まえて理解する。特に、総合的な学習の時間における「探究」のあり方と、単元構成と学習展開の具体的方法についての理解を深める。また、総合的な学習の時間と関連性の深い、特別活動を指導するための原理と方法についても理解する。	2	(2)	講　義	3	必　修
児童・生徒理解（生徒・進路指導論を含む。）	児童・生徒理解上の課題と対応について講義する。理解とはどんなことかを、児童・生徒理解、学級集団、進路指導、カウンセリング等を通して考察する。その中で、被教育者であったこれまでの立場と教師の立場とを相互に行き交いながら、教師の訓練的側面について考察する。	2	(2)	講　義	3	必　修
教育相談（カウンセリングを含む。）	「不登校」を含め子どもが直面する「心身症」「いじめ」「自殺」など様々の危機について、その現象と対応の両面から理解する。教育相談活動における相談的・個別的・受容的指導の重要性について学び、カウンセリングの体験学習を通じてカウンセリングの理論と技法の基礎を習得する。あわせて学校内外の関係機関の理解とその連携について学ぶ。	2	(2)	講　義	3	必　修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
中学校3年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）		3		実習（事前・事後指導は講義）	3	必修
中学校4年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）		4		実習（事前・事後指導は講義）	4	必修
教職実践演習（中・高）	中学校・高等学校教諭にふさわしい資質や諸能力の確認をし、これまでの履修のあり方をまとめ上げると共に、実際の授業力に結びつける形で学修の内容の総まとめを行う。	2	(2)	演習	4	必修
教育の歴史	幕末・維新の時期から近年までの教育の歩みを、VTR なども用いて、とくに学校教育に重点をおいて話す。瑣瑣な事実の習得などではなく、教育事象を時間の大きな流れの中でとらえるための基礎を提供したい。	2	(2)	講義	2	4単位以上選択必修
比較教育事情	他国の教育事情から、自己の経験を相対化し、日本の教育制度とその運営に対して新たな視点をもつことをめざす。	2	(2)	講義	2	
子ども学	子どもは、おとなとは異なる固有の世界を生きている。この講義では、子どもの表情や行動や遊び、言葉や描画や歌といった諸表現から、その奥に潜む子ども固有の世界を、私たちおとなが慣れ親しんでいる常識的・概念的な見方を超えて、理解することを試みる。	2	(2)	講義	2	
生涯学習論	「生涯教育」から「生涯学習」に至る国内外の議論や事業・政策の動向をふまえた上で、学校教育・家庭教育・社会教育の各領域において「生涯学習」の理念がもつ意味を検討する。学校以外を含む多様な機会に子どもからおとなまでが関わる営みとしてとらえることで、教育の本質について理解を深める。	2	(2)	講義	2	
教育現場と法	今、学校では、新しい教育課程の推進、不登校やいじめ、児童生徒の安全、学校の開放や情報公開、教員の資質の事柄等多くの課題をもっている。このような状況を踏まえ、これらの解決にむけての日々の教育活動と法との関連を具体的な事例を通して考察する。	2	(2)	講義	3	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

2 専門教育科目　その2　専攻専門科目（40単位以上）

専攻専門科目は、所属する専攻に応じて特定の教科の専門的な知識を身につけ、専門分野の研究を行うことのできる力を培うために設けられている科目です。自分の所属する専攻の専門科目を履修してください。他の専攻の専門科目を履修し、単位を修得しても、「専攻専門科目」の単位にはなりません。

専攻専門科目の授業科目の詳細と履修方法については、下記の指示に従って、**「授業科目表9」**を確認してください。

国語教育専攻　⇒　**「授業科目表9－①」(82ページ)**
社会科教育専攻　⇒　**「授業科目表9－②」(84ページ)**
英語教育専攻　⇒　**「授業科目表9－③」(88ページ)**
数学教育専攻　⇒　**「授業科目表9－④」(90ページ)**
理科教育専攻　⇒　**「授業科目表9－⑤」(91ページ)**
技術教育専攻　⇒　**「授業科目表9－⑥」(94ページ)**
家庭科教育専攻　⇒　**「授業科目表9－⑦」(96ページ)**
音楽教育専攻　⇒　**「授業科目表9－⑧」(98ページ)**
美術教育専攻　⇒　**「授業科目表9－⑨」(100ページ)**
保健体育専攻　⇒　**「授業科目表9－⑩」(102ページ)**

3 専門教育科目　その3　卒業研究（6単位）

卒業研究は、全課程に共通して設定されている科目です。その内容、方法、履修の手順等は、所属する課程、コース、専攻ごとに定められています。また、卒業研究には参加資格があり、これに関しても課程、コース、専攻によって必要単位数が異なります。

卒業研究の履修に関しては、**第14章（149ページ～150ページ）**の説明を確認してください。

4 自由選択科目（14単位以上）

自由選択科目は、本学で開設しているすべての授業科目から自由に選択して単位を修得する科目です。

教育課程表には授業区分ごとに卒業に必要な単位数が示されていますが、その数を超えて修得した単位は、自由選択科目の単位とすることができます。また、所属する課程の教育課程表・授業科目表に示されている科目以外の授業科目（他の課程の授業科目、情報処理専門教育科目、資格取得関連科目）を履修し、単位を修得した場合も、それを自由選択科目の単位とすることができます。

中等教育教員養成課程の学生は、その他の授業区分の必要単位を満たしたうえで、さらに14単位以上、自由選択科目の単位を修得してください。

授業科目表9ー①（国語教育専攻・専攻専門科目）

当該専攻の学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて40単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
国語基礎講読	古文や漢文を読むために必要な知識や手続きについて学ぶ。辞書・索引等の使用法や、文献の検索の仕方など、読解のための基礎的な力を身につけることを目的とする。	2	(2)	演習	1	必修
国語学概論	音韻・アクセント、文法、意味・語彙、文章・文体など、日本語の種々相について平易に概説する。	2	(2)	講義	2	必修
※国語学講義A	「国語学」は、日本語について、過去から現在に至る史的変化、あるいは特定時期のことばのありようを研究対象とする学問である。研究対象とする単位によって、音韻、文字、語彙、文法、文章・文体、言語生活などの領域に分類しうるが、この講義では、特定のテーマに即して基礎的知見を整理するとともに、日本語研究の基本的な方法を学んでいく。	2	(2)	講義	2~4	2単位以上選択必修
※国語学講義B		2	(2)	講義	2~4	
※国語学演習A	特定のテーマやテキストにもとづき、日本語研究の方法を学んでいく。進め方は扱うテーマやテキストによって若干異なるが、受講者各人の研究報告を軸に全員で討議しながら進めていく。語学的な見方・考え方のみならず、自力による調査・分析を通じて問題解決能力を身に付けていく。	2	(2)	演習	2~4	4単位以上選択必修
※国語学演習B		2	(2)	演習	2~4	
※国語学演習C		2	(2)	演習	2~4	
※国語学演習D		2	(2)	演習	2~4	
国文学概論	「国文学」とは日本文学とその研究を意味する。明治以後の国文学の成立と展開をたどりながら、さまざまな研究法にふれつつ、古典から近代文学にいたる主要な作品について具体的に鑑賞していく。	2	(2)	講義	2	必修
※国文学講義A	日本の古典文学を取り上げる。作品の具体的な検討を通して、その特色や表現史的位置づけについて考える。あわせて、文学、文化を思考する上での視点や方法について学ぶ。	2	(2)	講義	2~4	2単位以上選択必修
※国文学講義B	作家と時代との関係、外国文学との関連、作品の表現の分析などを通して具体的に作品を考察する視点や方法について学ばせ、近代文学の特質を理解させる。	2	(2)	講義	2~4	
※国文学演習A	古典文学を読み解くための基礎的な力を養う。作品の具体的な検討を通して、文学表現にかかわる問題を幅広く考えてゆく。また、授業は受講者各人が発表する形式で進め、問題発見力やプレゼンテーションの能力を高めることもねらいとする。	2	(2)	演習	2~4	2単位以上選択必修
※国文学演習B		2	(2)	演習	2~4	
※国文学演習C	近代文学を読み解くための基礎的な力を養う。主要な作品を取り上げ、作品の成立事情、本文の異同、作者の発言、研究史などを受講者に調べさせた上で、作品を具体的に分析させて発表させる。	2	(2)	演習	2~4	2単位以上選択必修
※国文学演習D		2	(2)	演習	2~4	
国文学史A	国文学史についての基礎的な知識を身につける。上代から中世までの主要な作品を取り上げ、具体的な表現に触れながら、日本文学の歴史的展開や特色について学ぶ。	2	(2)	講義	2~4	必修
国文学史B	国文学史についての基礎的な知識を身につける。近世から近代までの主要な作品を取り上げ、具体的な表現に触れながら、日本文学の歴史的展開や特色について学ぶ。	2	(2)	講義	2~4	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
漢文学概論	漢文・漢詩を読み味わうためにはどのような知識や方法が必要か。その基礎的な力を養うために、具体的な作品に即してわかりやすく解説し、鑑賞や分析の方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2	必修
※漢文学講義A	中国の思想や文学を特定の観点・テーマに即して分析検討する。関連する文献や作品をていねいに読み解きながら、中国の歴史や文化など、時代背景にも目を配りつつ、思想や作品の理解を深める。それを通じて漢文理解の方法や漢文教育の基礎力を身につける。	2	(2)	講義	2~4	2単位以上選択必修
※漢文学講義B		2	(2)	講義	2~4	
※漢文学演習A	中国の思想や文学の基礎的な文献を読み、テキストを一字一句、詳しく調べ深く理解していくために必要な方法を初歩から徹底して指導する。あわせて思想・文学研究の基本的な方法や態度について身につけられるようにする。	2	(2)	演習	2~4	2単位以上選択必修
※漢文学演習B		2	(2)	演習	2~4	
※書道演習	中学校において書写（毛筆・硬筆）指導を行ううえで必要な用筆法を学ぶ。その他、仮名や生活の中の書も学ぶ。	2	(2)	演習	1·2	必修
※国語教育演習A	主たる教材等を取り上げ、実際の授業づくりの過程を通して、教材研究や授業づくり、評価のあり方を検討するとともに具体的な方法・技能を身に付ける。また、学習指導要領や国語施策等の課題についても探る。	2	(2)	演習	3·4	2単位以上選択必修
※国語教育演習B		2	(2)	演習	3·4	

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。
注2）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表9ー②（社会科教育専攻・専攻専門科目）

当該専攻の学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて40単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
社会科教育ゼミナール	中学校の社会科の教員を志望する学生として必要な基礎的思考力、読解力、コミュニケーション能力を、演習形式での文献解読、資料解読、討論等を通して養う。	2	(2)	演習	1	必修
日本史概論	日本における国家史的な歴史の大きな流れの中にあって、人びとは如何なる社会を築き上げてきたのか。古代～現代にわたる日本史の通史的な理解を前提にしながらも、個別的な事例を通して見えてくる日本社会の諸側面について講義していく。	2	(2)	講義	1	必修
日本史講義A	日本社会の歴史や日本の文化について多角的な観点から理解するには、各時代ごとの特質や人びとが織りなす社会像について幅広い知識を持つことが必要となる。本講義では近世史・近代史を中心とした講義を行っていく。	2	(2)	講義	1	
日本史講義B	日本社会の歴史や日本の文化について多角的な観点から理解するには、各時代ごとの特質や人びとが織りなす社会像について幅広い知識を持つことが必要となる。本講義では主に古代史に関する講義を行っていく。	2	(2)	講義	1	
日本史講義C	日本社会の歴史や日本の文化について多角的な観点から理解するには、各時代ごとの特質や人びとが織りなす社会像について幅広い知識を持つことが必要となる。本講義では主に中世史に関する講義を行っていく。	2	(2)	講義	2	
日本史講義D	過去の人々の生活と活動の歴史について理解を深めるには、文字史料を扱う文献史学的な歴史の捉え方だけではなく、遺物や遺構などの研究を通して人類の歴史を掘り起こしていく考古学的な考え方や歴史の見方についても学ぶ必要がある。本講義では、考古学に関する講義を行っていく。	2	(2)	講義	2	
外国史概論	外国史を学ぶ価値と意味について考えていく。文化的背景を異にする人々への理解を深め、常に現在の世界を過去とのつながりの中で捉える視点を養う。講義の具体的な考察対象として、東洋史と西洋史の歴史的事象を隔年で扱う。	2	(2)	講義	1	必修
外国史講義A	今日の世界は、私たちのおかれた歴史的現在の位置からどのようにふりかえることができるか。この問題に答える努力を講義の課題とする。個々の素材はヨーロッパの歴史的事実から採りあげる。	2	(2)	講義	1	
外国史講義B	アジアの近現代をテーマとする。多様性をもつ人間の経験の集積、異なる背景を有する他者とのめぐり合いの経験、新しい文化の創造について触れる。	2	(2)	講義	2	
外国史講義C	アジアとくに中国史の近代史を中心に概観する。世界の一体化が急速に進んだこの時期、王朝国家から社会主義国家へという激変を経験した中国の人々の足跡を、日本をはじめとする諸外国との関係にも注意しつつ学び、中国社会への理解を深めていく。	2	(2)	講義	1	
外国史講義D	歴史学は自らの学説を発展させ、それ自身が歴史となる。人々は歴史に何を期待し、求めてきたかについて歴史的事実にあたり確かめる。それによって長い時間の感覚や時代の変化を理解することが課題となる。	2	(2)	講義	2	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
人文地理学概論	地理学の基本である地域形成の要因を講義する。事例として、戦後日本の地域形成の過程を取り上げる。講義では、人口、産業、社会の変化を取り上げながら、日本経済社会の地域構造の変化を考察する。	2	(2)	講義	1	必修
人文地理学講義	地理学の基本である系統地理学の立場から、農業を取り上げる。講義では日本農業の地域格差の形成要因を分析する。具体的には、土地利用図の作成、農業経営や農産物流通の変化を示す統計分析などの地理学の基本的技能を織り込みながら講義する。	2	(2)	講義	1	
自然地理学概論	人類の主たる活動の場である地球表面の自然環境を、地域的観点から理解しようとするのが自然地理学である。本講義では、地形・気候・水・植生といった地域の自然的基盤を理解するために必要な基礎的概念および観点について講義する。	2	(2)	講義	1	必修
自然地理学講義	自然地理学概論で習得した地形に対する見方を土台に、地球上のさまざまな地域・スケールの地形について、その特徴・成因・発達等を理解する。また地形理解の応用的意味についても考察する。	2	(2)	講義	1	
地誌学講義A	地誌学的な見方・考え方の基本である地域スケールの違いによる地域認識・地域分析の方法について講義する。地域認識の基本的な考え方を整理したうえで、具体的な地域としてアジアやオセアニアを取り上げて、地域スケールの観点から①一国の特徴②中間地域の特徴③都市の特徴を考察する。	2	(2)	講義	1	2単位以上選択必修
地誌学講義B	特定地域の性格を総合的に究明する地理学の分野を地誌学と呼ぶ。このような観点での地域研究の意味と重要性を、具体的事例の紹介を通して理解してもらうことを本講義のねらいとする。	2	(2)	講義	1	
法律学概論	法学の基礎的事項を概観するとともに、現代社会における法的諸問題について、それらの歴史的背景をも検討しながら考察する。	2	(2)	講義	1	必修
法律学講義	現行法制度上の諸問題について、国際的・国内的・歴史的位置づけを考察しつつ、検討する。	2	(2)	講義	1	
政治学概論	現代政治を分析する上で必要な政治学上の議論を学ぶ。特に、現代の政治的仕組みとして、選挙制度、議会制度、政党政治、利益集団、官僚制などを検討する。	2	(2)	講義	2	必修
政治学講義	今日、私たちが自明のものとして用いている政治学上の諸々の理念や価値の意味を検討する。特に、デモクラシー、公共性、国家、主権、権力分立、リベラリズムなどについての理解を深める。	2	(2)	講義	2	
経済学概論	価値、価格、貨幣、成長、貿易、国際収支などの理論経済学及び国際経済の基礎概念について説明し、理論経済学及び国際経済論の概要を理解させる。	2	(2)	講義	2	必修
経済学講義	理論経済学及び国際経済論の基本的知識を応用し、日本経済及び国際経済のこれまでの歩みを回顧するとともに、現代の日本及び世界の経済的諸問題への理解を深めさせる。	2	(2)	講義	2	
社会学概論	社会学の基礎的視角とは何かという問題を焦点に据えながら、その成立根拠に遡りながら社会学的諸理論の特徴を吟味し、現代社会の分析視角としての社会学の意義を明らかにする。	2	(2)	講義	2	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
社会学講義	社会学概論で捉えられた理論的基礎視角をもとに、現代社会に生じる多面的な問題群に関して、資料、データに基づく実証的アプローチによる検討を加え、現代社会を読み解く分析視角としての社会学の特質について検討する。	2	(2)	講義	2	
哲学概論	哲学の基礎について講述する。具体的なテーマをとりあげ、原典資料を参照することにより哲学的な問題のとらえ方と考え方に親しむことをねらいとする。講義をつうじて人間の生存の根本問題を考えるきっかけをつかんでほしい。	2	(2)	講義	2	必修
哲学講義	哲学における主要問題を取り上げ、その問題をめぐる哲学者たちの諸思想を考察する。哲学的な発想と思考方法に親しむことを目標とする。	2	(2)	講義	2	
倫理学概論	日本思想史の諸問題について、神道、仏教、儒教、キリスト教など、それぞれの時代の主要な思想潮流と、無常・幽玄などの美意識・死生観、武士道と士道、芭蕉・近松など日本文化を構成する中心的なテーマについて中国、西洋思想との比較を念頭に置きつつ講義する。	2	(2)	講義	2	
倫理学講義	日本の近代化過程における思想展開を、水戸学、国学など天皇制国家に繋がる思想系譜と、他方での、通俗道徳、一揆・打ち壊し、幕末の民衆宗教、など民衆の主体形成に関わる思想系譜について、近世社会の構造を踏まえつつ講義する。	2	(2)	講義	2	
※地理学実習A	地域調査の方法を講義する。地図を使った地域分析、地域統計処理の方法、GIS（地理情報システム）分析を学んだ後に、具体的な地域調査を行い、地域調査の手法を講義する。	2	(6)	実習	3	
※地理学実習B	自然地理学関連の実習・作業を行う。地形図および空中写真の判読や、野外での地形・植生・土壌の調査などを通じ、環境調査のためのデータ収集法とそのまとめ方を学ぶ。	2	(6)	実習	3	
※社会学実習	東北地方を中心とする地域を選定し、その基礎的データ（人口動態、就労状況、産業構造、地域の特色等）を事前学習し、質的調査法に基づく現地調査を実施することによって、社会学的観点からの地域社会の分析の方法を習得する。	2	(6)	実習	3	
※日本史演習	日本史関係論文の輪読や卒業論文作成に向けての研究発表を行う。史料の取り扱いや先行研究の整理方法など基礎的な作業を学び、発表と討議を通して日本史の研究方法について理解することが課題である。	2	2	演習	3·4	4単位以上選択必修
※外国史演習A	異なる歴史時代、文化背景、民族の生い立ちにある人間一般への興味を養い、その理解を深める。そのために西洋史に関する文献（資料、史料）の精読と集団学習によって事実認識の幅を広げ、批判的方法を身につける。	2	2	演習	3·4	
※外国史演習B	異なる歴史時代、文化背景、民族の生い立ちにある人間一般への興味を養い、その理解を深める。そのために東洋史に関する文献（資料、史料）の精読と集団学習によって事実認識の幅を広げ、批判的方法を身につける。	2	2	演習	3·4	
※地理学演習A	人文地理学の基本的な文献である農業地理、工業地理、商業・サービス業地理の各産業分野に関する文献や都市地理学・農村地理学の社会的分野の文献を講読して地理学文献の読み方や論文構成の方法、資料の取り扱い方を議論する。	2	2	演習	3·4	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※地理学演習B	自然地理学関連の文献講読を行う。自然地理学的手法を用いて、身近な景観や環境の仕組み、およびその成立史などを解明する過程を学ぶ。	2	2	演習	3·4	
※法律学演習	資料・文献講読及び討論を通して、現代社会の諸問題を、法学の観点から分析・考察する力を養う。	2	2	演習	3·4	
※政治学演習	政治学の基礎的文献の講読などを通して、デモクラシー、ナショナリズム、国際紛争などの現代社会が抱える政治的諸問題について、自ら分析する力を持つことを目的とする。	2	2	演習	3·4	
※経済学演習	理論経済学及び国際経済論への理解とそれらの現実経済分析への応用力とを深めさせるため、経済学の古典的文献資料等を実際に読ませ、その内容や意義を研究させる。	2	2	演習	3·4	
※社会学演習	社会学の基礎的文献の精読を基礎に、そこから学びとることのできる社会学的基礎概念を駆使して、現代社会の諸問題を読み解く基礎的力量を身につけることを課題とする。	2	2	演習	3·4	
※哲学演習	哲学の課題と方法をつかみとり、自ら研究テーマを設定し追求していくための基礎能力を養うことを目標とする。そのために、古典文献の読解と各自の研究発表とを主な内容として演習を進める。	2	2	演習	3·4	
※社会科教育演習A	教科教育学の立場から、小・中学校での社会科教育が直面している諸課題および社会科授業改善の視点について考察する。その際に、発表や討論など受講者の主体的な学習活動を重視することによって、論理的かつ自律的に研究課題を追究していくことのできる自己研究能力の育成をめざす。	2	2	演習	3·4	
※社会科教育演習B	社会科および社会科に関係する生活科・総合的な学習・国際理解教育・学習心理などについて、実践的・授業理論的・調査分析的・外国比較教育的などのアプローチから演習を進めていく。	2	2	演習	3·4	

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。

注2）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表9ー③（英語教育専攻・専攻専門科目）

当該専攻の学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて40単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考	
英語講読A	英語教育の教員として必要な英語の読解力養成を目指す。英語教育と関連する文学、英語学、言語教育、異文化理解などの比較的平易なテキストを材料にする。	1	(2)	演習	1	必修	
英語講読B		1	(2)	演習	1	必修	
英文法概論A	学校英文法の学習。	1	(2)	講義	1·2	必修	
英文法概論B		1	(2)	講義	1·2	必修	
英語音声学概論	英語音声学の基礎と応用を学び、英語の発音についての正しい知識を身につけることをめざす。	2	(2)	講義	1·2	必修	
英語文学作品論	取り上げた一つの作品をできる限り多方面から考察を加える、作品主体の授業である。取り上げる作品は、古典として評価の定まったもの、時代の先端を行くものなど様々である。	2	(2)	講義	1·2	必修	
英語文学テーマ論	文学作品相互には、作品と作品、時代と時代の境を突き抜けた共通のテーマが存在する。外観と内実といったものがそれである。一つの作品に集中して、またいくつもの作品を横に並べて、そのテーマの持つ意味について考察する。	2	(2)	講義	2·3	必修	
第二言語習得論	第二言語・外国語習得理論を理解し、日本での英語教育の実践的諸問題を検討する。	2	(2)	講義	2·3	必修	
※英会話A（中等）	様々なコミュニケーション活動を通して、4技能（リーディング、ライティング、スピーキング、リスニング）を育成する。	2	2	演習	1·2	2単位以上選択必修	6単位以上選択必修
※英会話B（中等）	英会話力を高めること。	2	2	演習	1·2		
※英会話C（中等）	内容は上級の英会話とする。	2	2	演習	2·3		
※英会話D（中等）	英語教師の資質としての十分な英語会話力を目指す。	2	2	演習	2·3		
※英作文A	英語の表現力の養成を行う。	1	(2)	演習	1·2	2単位以上選択必修	
※英作文B		1	(2)	演習	1·2		
※英語コミュニケーション演習A	英語教育の基本や英語の授業のやり方についての知識を深めること。	1	(2)	演習	2·3	必修	
※英語コミュニケーション演習B		1	(2)	演習	2·3	必修	
※英語コミュニケーション研究演習	英語教育についての知識を深めること。	2	2	演習	4	必修	
※異文化理解講読A	主にイギリス文学及びアメリカ文学関係の基礎的文献を講読し、欧米文化における異文化理解の概念を歴史的及び文学的観点から検討し、理解を深める。	1	(2)	演習	2·3	6単位以上選択必修	
※異文化理解講読B	英語学・対照言語学・比較言語学関係の基礎的文献を講読し、言語学的観点から異文化理解の概念を検討し、理解を深める。	1	(2)	演習	2·3		

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考	
※異文化理解講読 C	外国語教育、第二言語教育、バイリンガル教育に関する基本的文献を講読し、グローバル化における言語教育の現状分析をとおし、異文化理解の概念を検討し、理解を深める。	1	(2)	演　習	2·3		
※異文化理解講読 D	コミュニケーション論に関する基本的文献を講読し、現代社会の異文化理解の諸問題を検討し、理解を深める。	1	(2)	演　習	2·3		
※英語学演習 A	英語学の様々な分野（統語論、音韻論、意味論、語用論、形態論など）の基礎から応用までの概説を行う。	2	(2)	演　習	2·3	2単位以上選択必修	8単位以上選択必修
※英語学演習 B		2	(2)	演　習	2·3		
※英語学演習 C	英語学・英語教育学の理論的内容を踏まえ、英語教育の教授方法、教材等の問題を議論することを目指す。	2	(2)	演　習	2·3	2単位以上選択必修	
※英語学演習 D	英語学・英語教育学の理論的内容を踏まえ、英語（外国語）の習得過程を理論的かつ実証的に議論することを目指す。	2	(2)	演　習	2·3		
※英語文学演習 A	イギリスの文学作品（小説、詩、芝居）を取り上げ、読解力を高める訓練を行なう。おもしろさを味わうことは当然である。	2	(2)	演　習	2·3	2単位以上選択必修	
※英語文学演習 B	アメリカの文学作品（小説、詩、芝居）を取り上げ、読解力を高める訓練を行なう。おもしろさを味わうことは当然である。	2	(2)	演　習	2·3		
現代文法論	言語学における様々な分野である統語論、音韻論、意味論（語用論）などを主に基礎理論から最新理論にわたるまで概説する。	2	(2)	講　義	2·3	4単位以上選択必修	
英米文化論	ある時代、あるジャンルのイギリス、アメリカの文学を、イギリス、アメリカの歴史や文化とからめた形で取り上げ、考察する。	2	(2)	講　義	2·3		
英語文学論	文学を論じる際の「道具」は多種多様である。犬や猫といった動物、バラやユリといった花、自転車や汽車といった乗り物、待つことや見ることといった動詞など。そうした「道具」の中から一つ、もしくは複数を選び、英米の文学作品を論じていく。	2	(2)	講　義	2·3		
日英対照言語学	英語と日本語の対照言語学を講義する。	2	(2)	講　義	2·3		
西洋文化	ヨーロッパの文化、特に言語、歴史、文学などについて、概説する。	2	(2)	講　義	2·3		

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。
注2）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表9ー④（数学教育専攻・専攻専門科目）

当該専攻の学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて40単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
微分積分学A	すべての数学の基礎となっている微分・積分法とその応用について講義する。実数の性質、数列の極限、関数の連続性について述べた後に、主として1変数関数の微分・積分法及びその応用について講義する。	4	(4)	講義	1	必修
微分積分学B	すべての数学の基礎となっている微分・積分法とその応用について講義する。微分積分学Aの知識を前提として、主として多変数関数の微分・積分法及びその応用を中心に講義する。	4	(4)	講義	1	必修
線形代数学A	線形代数学の基礎的な部分及び応用上重要な連立方程式の解法について講義する。行列・行列式の基本的性質を講義する。	2	(2)	講義	1～3	
線形代数学B	数学の重要な柱である線形代数学の少し高度な取り扱いを講義する。行列の対角化とその応用等、行列の高度な部分を講義する。	2	(2)	講義	1～3	
代数学入門	一次分数変換の性質を調べることにより、複素数の世界を理解する。更に、代数方程式の解の公式を導き、ガロワ理論への入門となる講義をする。	2	(2)	講義	2	4単位以上選択必修
代数学基礎講義	線形代数学A、Bの内容を前提とし、高度な線形代数学を講義する。抽象的な線形空間、内積をもつ線形空間の概念とそれらの性質について講義する。	2	(2)	講義	2	
代数学講義A	代数学の重要な概念である群と環について、その基本的な事項を講義する。	2	(2)	講義	3·4	
代数学講義B	代数学講義Aの知識を前提とし、体及び整数論の基本的な事項から話題を選んで講義する。	2	(2)	講義	3·4	
代数学講義C	代数学講義A、Bの知識を前提とし、より発展的な事項から話題を選んで講義する。	2	(2)	講義	3·4	
幾何学入門A	ユークリッド幾何学の基礎的概念について講義する。	2	(2)	講義	2	4単位以上選択必修
幾何学入門B	幾何学入門Aの知識にひきつづいて、ユークリッド幾何学の基礎的概念について講義する。	2	(2)	講義	2	
幾何学講義A	曲線や曲面に対する基本的な概念とそれらの幾何学的性質について講義する。	2	(2)	講義	3·4	
幾何学講義B	ユークリッド幾何学とは異なる幾何学を紹介し、幾何学の多様性について講義する。	2	(2)	講義	3·4	
幾何学講義C	幾何学全般（位相幾何学、微分幾何学等）からの話題を取り上げて講義する。	2	(2)	講義	3·4	
解析学入門	解析学の重要な概念である集合と測度について、その基本的な事項を講義する。	2	(2)	講義	2	4単位以上選択必修
解析学基礎講義	解析学の重要な概念である距離と関数項級数について、その基本的な事項を講義する。	2	(2)	講義	2	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
解析学講義A	解析学の重要な分野である複素関数論の基本的な事柄について講義する。	2	(2)	講義	3·4	
解析学講義B	解析学講義Aに引き続いて、複素関数論の基本的な事柄について講義する。	2	(2)	講義	3·4	
解析学講義C	関数解析の基礎である、バナッハ空間とヒルベルト空間について講義する。	2	(2)	講義	3·4	
確率論・統計学A	確率の基本的概念とその応用について講義する。	2	(2)	講義	3	必修
確率論・統計学B	確率論・統計学Aで学んだ確率論の知識を前提として、統計学の初歩とその応用について講義する。	2	(2)	講義	3	必修
コンピュータ	コンピュータと数学の関わりについて、具体的な実践を通して、その意味と実例を講義する。	2	(2)	講義	2	必修
※数学特選題目	数学の各分野（代数・幾何・解析）にとらわれず、より専門的な分野の内容を講義する。	2	(2)	講義	3·4	

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。
注2）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表9ー⑤（理科教育専攻・専攻専門科目）

当該専攻の学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて40単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
理科基礎実験	理科で扱う器具・機器の使用法や手順、データの扱い方、レポートのまとめ方、などに関する基本的なトレーニング。	2	(6)	実験	1	必修
物理学講義Ⅰ	近代科学のあらゆる領域・分野にわたって最も基本的な原理であるエネルギー保存則とエントロピー増大則を力学と熱力学によって学ぶ。力学は私たちの自然観の根幹をなすものであり、熱力学は化学反応をはじめ生体組織、気象、宇宙の進化など多くの領域において必要不可欠な要素となっている。	4	(4)	講義	1	必修
化学講義Ⅰ	化学は物質の性質とその変化・反応を扱う科学である。これを理解するために必要な法則や原理などの理論的な側面と種々の物質の反応について化学の立場から述べる。	4	(4)	講義	1	必修
生物学講義Ⅰ	生物学全般について講義を行うことにより、生物の一般性と多様性についての基礎的理解力を養う。細胞、組織、器官の構造、構成成分、機能、生殖と発生、成長と増殖、遺伝、刺激応答などの各項目について、動物や植物などの多様な生物の生命現象を解説する。	4	(4)	講義	2	必修
地学講義Ⅰ	現在の地球観・天体観・環境観の基となる地球科学、大気 - 海洋科学、惑星科学 - 天文学の各領域の基礎的事項について解説する。	4	(4)	講義	2	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
物理学実験Ⅰ	基礎的な力学、光現象、電磁気実験などを通し、さまざまな物理量を測定する実験方法について理解を深める。また、コンピュータを活用して物理現象の解析や物理的概念を習得する。これらの観察や実験を通し、柔軟な思考力や現象の解析力を育み、考察する態度を養う。	2	(6)	実験	2	必修
化学実験Ⅰ	物理化学、無機・分析化学、有機化学の基本的な実験手法やデータの解析法を修得するとともに、物質の基本的な性質やその変化である化学反応を自ら実験することにより学び、化学の理解を深める。	2	(6)	実験	2	必修
生物学実験Ⅰ	生物学分野の一般的・包括的内容の実験を行う。動物や植物など生物の取扱方法や観察を含む基本的な実験手法を修得し、将来学校現場において児童や生徒に生物実験を実践し、指導することができる力を養うことを目標とする。	2	(6)	実験	2	必修
地学実験Ⅰ	地質、岩石鉱物、気象－気候、天体などの地学的な諸事象について、観察、観測、分析、データ解析などの基本を習得する。	2	(6)	実験	2	必修
物理学講義ⅡA	現代物理学を理解するためには、力学・熱力学以外に振動・波動を含む光学や電気・磁気現象の理解が不可欠である。特に、振動・波動では力学的振動や電磁場の振動としての電波や光の基礎を学ぶ。	2	(2)	講義	2·3	2単位以上選択必修
物理学講義ⅡB	現代物理学を理解するために、振動・波動に続いて電気・磁気現象を理解する。電磁気学は、電荷と電場、磁気と電流、電磁波など我々の生活に深く結びついた内容であり、エレクトロニクスを始めとする先端科学の基礎になっている。	2	(2)	講義	2·3	
物理学講義ⅡC	現代物理学を初等の量子力学や相対論、電磁気学を使いながら講義する。特にこの分野で重要な実験と、それを予想あるいは説明する理論を比較しながら、現代物理学の基礎の理解を進めてゆく。自然を構成する基本的な粒子の概念を学ぶことを目標とする。	2	(2)	講義	3·4	
化学講義ⅡA	分析化学の基礎となる化学反応や化学平衡、それを利用した分析方法について学ぶ。また、現在広く利用されている機器分析法についても述べる。	2	(2)	講義	2·3	2単位以上選択必修
化学講義ⅡB	炭素を中心とする有機化合物は、現在までに1000万以上もの種類が報告されており、全化合物中9割以上を占める。これらの膨大な有機化合物を系統的に分類し、理解するのに必要な有機化学を講述する。有機化合物の構造や、官能基による有機化合物の分類とその性質、反応などについて学修する。	2	(2)	講義	2·3	
化学講義ⅡC	化学講義Ⅰで修得した内容を基礎に、平衡や反応を理解するために必要な、物理化学的な考え方を学ぶ。熱力学の基礎とその化学への応用、化学平衡論を解説した後、反応速度論についても学ぶ。	2	(2)	講義	3·4	
生物学講義ⅡA	生物学講義Ⅰの内容を基礎に、主に植物界に属する生物の生理及び生態に関する、より専門性の高い内容を講義する。	2	(2)	講義	2·3	2単位以上選択必修
生物学講義ⅡB	生物学講義Ⅰの講義内容を受けて更に詳しく、動物が生存・繁殖するための様々な生物学的仕組みについて講義を行う。特に、動物がこれらの現象を起こす上で必須となる生理的機構の様々な役割について学ぶことを目的とする。	2	(2)	講義	2·3	
生物学講義ⅡC	生物学講義Ⅰの内容を基礎に、受精や発生のメカニズムを中心的なテーマとした専門性の高い内容を講義する。	2	(2)	講義	3·4	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
地学講義Ⅱ A	学校教育で取り扱われる天文領域のバックグラウンドとなる内容として，地球をはじめとする太陽系内の惑星の環境や運動について学修を深める。	2	(2)	講義	2·3	2単位以上選択必修
地学講義Ⅱ B	地学講義Ⅰの内容を発展させ、地球の大気や海洋の環境や、地球表層の物質の循環について学修を深める。	2	(2)	講義	2·3	
地学講義Ⅱ C	地学講義Ⅰの内容を基礎として，これまでの地球の物質の成り立ちや生命環境の変遷について，さらに発展させた内容を学修する。	2	(2)	講義	3·4	
物理学実験Ⅱ	光や放射線の性質、物質の多様な性質、物質の相互作用等を理解する。また、実験装置の製作や、温度・電磁場といった物理環境の制御方法を学習するとともに、エレクトロニクスやコンピュータの有効な活用技術を学ぶ。	2	(6)	実験	3	4単位以上選択必修
化学実験Ⅱ	化学実験Ⅰで修得した内容を基礎に、化学をより深く理解し、その実験的手法を修得することを目的とする実験である。化合物の性質、合成、精製、分析、反応、その理論的な取り扱いを学ぶ。	2	(6)	実験	3	
生物学実験Ⅱ	生物学実験Ⅰで修得した内容を基礎にした発展的な内容の実験を行う。生命現象を成り立たせている仕組みを解析する力を養うことを目標に、生物の形態、機能、多様性、成長と増殖、環境との相互作用などから厳選した課題を実施する。	2	(6)	実験	3	
地学実験Ⅱ	地学実験Ⅰで習得した内容を基礎にして、地質、岩石鉱物、気象－気候、天体などの地学的な諸事象の中で重要と思われる事象について、さらに高度で詳しい観察、観測、分析、データ解析などの手法を習得する。	2	(6)	実験	3	
物理学演習	4年次の卒業研究を視野に入れた物理学の演習を行う。主な内容は、固体物性、相対論、原子物理学、量子力学などの基礎的な学習である。また、実験の方法、結果の解析といった具体的な方法論を習得する。	2	(2)	演習	3	
化学演習	化学分野の講義・実験で化学の基礎を身につけた学生を対象に、化学をより深く理解し、また、卒業研究に進む上で必要とされる理論的および実験的手法を修得することを目的とする演習。	2	(2)	演習	3	
生物学演習	卒業研究や卒業後の学校現場における実践力を身につけることを目標に、生物学に関する学術論文を講読し、その内容を理解する。また、データベースの活用法についても学ぶ。	2	(2)	演習	3	
地学演習	地学分野の講義・実験での習得内容を基に、各領域の内容をさらに深化させ、地学事象の教材化も含めた実践的な演習を行う。4年次の卒業研究に入るためのトレーニングを含む。	2	(2)	演習	3	
理科教育学演習	理科教育学分野の発展的内容の演習。4年次の卒業研究に入るためのトレーニングを含む。	2	(2)	演習	3	

注1）Ⅱは、相当するⅠを修得してから履修すること。

注2）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表9ー⑥（技術教育専攻・専攻専門科目）

当該専攻の学生は、次の表の科目から、必修を含めて40単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
木材加工入門	木材資源とその利用および木材の組織・構造について学習し、木材の機械的性質と構造の関係および諸性質に対する水分の影響を各種データから理解する。木工道具の歴史および構造を学ぶとともに、簡単な木製品の設計製図と製作を通して、木工道具および木工機械の基本的な使用法を身に付ける。	2	(2)	講義	1	必修
金属加工入門	手仕上げ、塑性加工、切削加工、砥粒加工、溶接、鋳造、NC工作機械などによる金属加工について学ぶ。	2	(2)	講義	1	必修
木材加工実験実習	各種木工道具の構造および特徴を学び、道具の使用法および道具の調整（仕立て）方法を修得する。基本的な木工機械の構造および操作法を修得する。目的とする作品の設計・製図、材料取り、部品加工、組立・調整および完成までの合理的な作業手順や道具だてに関する方法を身に付ける。	2	(4)	実験	2	必修
金属加工実験実習	金属材料の曲げ、切削・研削および接合の実習を通して基本的な金属加工の技術を身に付けるとともに、製作課題の設計・製図およびその図面をもとにして材料および加工方法の選択、部品加工から組立までの手順を工夫し実践できるようにする。	2	(4)	実験	2	必修
機械技術入門	ねじや歯車などの機械要素、リンクやカムなどの機構などを用いた機械設計の基礎を学ぶとともに、材料力学、流体力学、熱力学など機械工学の基礎となる諸力学を学ぶ。	2	(2)	講義	2	必修
機械技術実験実習	機構設計および構造設計の基礎を学びメカニズム模型の設計・製作を行なう。また、後半では2人1台でロボットを設計・製作して学内ロボットコンテストを行なう。	2	(4)	実験	2	必修
電気技術入門	電気現象を学ぶ上で基礎となる起電力・抵抗からなる電気回路について基本的な要素から学習をする。また、日常の生活の中で電気と関わる現象や電気の安全な使い方についても扱うことで、電気に関する興味関心を高める。	2	(2)	講義	2	必修
電気技術基礎	電気に関する現象として静電気や磁気に関わる現象を学習する。さらに、電気回路の受動的要素のコンデンサやコイルを使った交流回路の基礎を学習する。また、電気技術基礎実験実習と連動させることで理解を深められるようにする。	2	(2)	講義	2	必修
電気技術応用	電子部品（ダイオード・トランジスタなど）の動作原理を理解する。アナログ電子回路・デジタル電子回路の基礎から、簡単な電子回路の設計・製作するために必要な知識と技術について学習する。	2	(2)	講義	3	必修
電気技術実験実習	電気回路の基礎的な内容（直流・交流）について実験を通じて学ぶ。回路計（電圧・電流・抵抗測定）などの基本的な計測機器の使用方法を習得する。電気技術基礎の内容と連動させることで電気に関する理解を深める。	2	(4)	実験	2	必修
情報工学入門	ディジタル回路の基本となる組み合わせ論理回路と記憶機能を有する順序論理回路を学習する。これらを組み合わせると、ディジタル計算機が構成できる。アナログとディジタルの世界の間のコミュニケーションを成立させる工夫についても学び、計算機社会のハードウェアの基礎知識を獲得する。	2	(2)	講義	2	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
情報技術実験実習	コンピュータを使ったプレゼンテーションの基本技術の基礎からはじめ、授業や学習におけるコンピュータ活用の実習を行う。また、コンピュータ制御に関する基礎実験として、電気や機械領域と情報領域の融合的な学習を行う。	2	(4)	実験	2	必修
教材植物入門	学校教育で扱われる代表的な教材作物について、生理的特性と栽培法を学ぶ。また、栽培学習に関係する現代的な課題「食教育」、「地球環境問題」、「農業におけるIT」についても解説する。体験学習として、実際の植物栽培も取り入れる。	2	(2)	講義	1	必修
栽培実験実習	多様な教材作物について、播種から定植・整枝・病害虫雑草防除・開花結実・収穫までの一連の栽培技術を体験的に学ぶ。また、施肥条件や栽培法を変えた栽培区における作物生育を比較検討することにより、実験計画法と栽培実験の基礎を学ぶ。	4	4	実験	2	必修
製図	製作のアイディアを図面に描き表すための手段および自分のアイディアを図面に表して人に伝える方法を習得し、スケッチが自由に行えることおよび機械製図が使えるようになることを目指す。併せてCADを使いこなせるようになり、図面を美しくすばやく描けるようにする。	2	(2)	演習	1	必修
情報ものづくり教材演習	学習した各領域の講義、演習、実験の内容を総動員して設定された教材製作に取り組む。教材製作をとおしてものづくりの全体を体験し、自らの力で問題を探し出し、解決できる能力を養う。	2	(2)	演習	3	必修
木材加工応用	木材の構造材としての欠点を改善する新しい加工法、木材成分から作られる新素材・材料および木構造の力学的性質（梁の変形・強度や骨組構造の力学など）について学ぶ。木製品の製作を通して木材部材の各種加工法、接合法および塗装法を習得する。	2	(2)	講義	2·3	
金属加工応用	金属を主として、木材・プラスチックなどの材料特性を活かした作品の設計および製作の実践力を身につける。材料特性、材料力学の基礎および機械要素の理論と実際を通して、適切な材料選択および構造体の設計・製作を実践し教材教具の製作能力および開発力を身に付ける。	2	(2)	講義	2·3	
機械技術応用	メカトロニクス機器要素、流体力学と熱力学の基礎的内容を取扱い、エネルギーの変換方法や力の伝達の仕組みを総合的に学ぶ。同時に機械領域および電気領域の要素を取り入れた教材の設計製作法およびエネルギー変換機構、エネルギー生産技術に関する内容についても取り扱う。	2	(2)	講義	2·3	
情報技術	コンピュータ言語（Visual BASIC）を使って、簡単なソフトウエアの教材の作成方法を学ぶ。ゲーム的な要素をもったソフトウエアやドリル学習のためのソフトウエア教材などを作成する。	2	(2)	講義	3	
コンピュータネットワークの活用	現場の教員にとって必要なネットワークサーバ利用と運用・管理などの基礎的な知識の習得と、スキルを身につける。主にデジタルコンテンツの作成や利用等による教育方法について、各種サーバ（web、mail、file）の運用と管理等を扱う。	2	(2)	講義	3	
生物育成技術	「教材植物入門」「栽培実験実習」では扱えなかった多様な教材作物の生理的特性・栽培技術について、より深く学ぶ。また、新しい栽培技術である養液栽培・植物工場・バイオテクノロジーについて解説する。さらに、学習指導要領に含まれる家畜・魚類の飼育技術にも触れる。	2	(2)	講義	3·4	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
職業指導	職業指導の理論とその歴史、産業社会の職業構造、学校教育と進路指導、キャリア教育、進路指導の方法と技術等の諸問題を取り上げ、特に工業高校を例に講義する。	2	(2)	講義	3·4	

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表9ー⑦（家庭科教育専攻・専攻専門科目）

当該専攻の学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて40単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
情報科学	生活の場における情報処理・活用の方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2	必修
機械基礎	家庭機器の動作原理や管理等についての基礎知識を習得する。	2	(2)	講義	全	必修
電気基礎	家庭における電気や機器の基礎的性質等について学習する。	2	(2)	講義	全	必修
材料加工	木質材料およびプラスチック材料の性質と構造について学ぶ。	2	(2)	講義	1	必修
被服の材料	繊維材料の特質や機能を学ぶ。	2	(2)	講義	3	必修
編織学	繊維、糸、織物の各段階での性質及び構造が被服性能に及ぼす影響を学ぶ。	2	(2)	講義	3	必修
生活と被服	衣生活を快適に過ごすために、快適性を考慮した被服設計方法と管理を学ぶ。	2	(2)	講義	3	
食品の科学	食物学の基礎のうち食品成分の化学的性質を中心とする。	2	(2)	講義	2	必修
食物と栄養	食物の栄養機能および食生活の健康影響について概説する。	2	(2)	講義	2	必修
生活と食物	食物における今日的課題について学ぶ。	2	(2)	講義	3	
生活と住居	住居の成り立ちや役割について理解を深める。	2	(2)	講義	3	必修
住居と環境	住環境形成のしくみや調整の方法について学習する。	2	(2)	講義	3	
発達と保育	生涯発達の視点と子どもの発達と保育について理解を深める。	2	(2)	講義	3	必修
家族と保育	日本の家族や子育てをめぐる諸問題を、主にジェンダーと子どもの権利の視点から考察する。	2	(2)	講義	3	
健康の科学	小児を中心に健康の成り立ちを個体および集団、社会生活の面から概説する。	2	(2)	講義	3	必修
家庭の経営	家庭と社会における課題に対応した生活創造の方法を学ぶ。	2	(2)	講義	全	2単位以上選択必修
家族と生活	家族、家事労働、職業、福祉など家庭生活に関わる領域全体を扱い、生活を経営する意義や課題を考察する。	2	(2)	講義	全	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
家庭科特別講義 A	衣生活についての現代的な課題と展望について学ぶ。	2	(2)	講　義	全	
家庭科特別講義 B	食生活についての現代的な課題と展望について学ぶ。	2	(2)	講　義	全	
家庭科演習	家庭科教育を支える基礎的な研究をし、学校家庭科への展開を学ぶ。	2	2	演　習	3	必　修
家庭科実験	身の回りに存在する諸事象の科学的な理解の方法を学ぶ。	2	3	実　験	2	必　修
被服学実験・実習 A	布作りを通して、繊維、糸、織物の基本的な性質及び構造、布設計方法について学ぶ。	1	(3)	実　験	1	必　修
被服学実験・実習 B	被服構成の基礎知識と技能を習得する。	1	(3)	実　験	1	必　修
食物学実験・実習 A	食品成分の調理・加工過程における変化に関わる実験を行う。	1	(3)	実　験	2	必　修
食物学実験・実習 B	調理における食品成分の役割や変化を中心に体験的に実習を進める。	1	(3)	実　験	2	必　修
住居学実験・実習 A	住居空間を表現するための製図法や模型制作法を学習する。	1	(3)	実　験	1	必　修
住居学実験・実習 B	住居の仕組みや働きを理解するための実験や実習を行う。	1	(3)	実　験	3	必　修
保育学実験・実習 A	幼児の「遊び」に焦点をあてることにより、幼児を理解し、大人の関わりや支援のあり方を考える。	1	(3)	実　験	1	必　修
保育学実験・実習 B	発育・発達期の小児の栄養・食生活を対象に実験、実習をする。また、乳幼児やその親を理解するための調査研究を行う。	1	(3)	実　験	3	必　修

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表9ー⑧（音楽教育専攻・専攻専門科目）

当該専攻の学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて40単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※ソルフェージュ	初等教育教員養成課程音楽コースと混ぜてクラス分けを行う。西洋音楽の学習に必要な基礎能力（読む・聴く・書く）の育成をはかる。	2	(2)	演習	1·2	必修
声楽基礎	中学校歌唱教材を通して、発声、発音、歌唱表現等の基礎について学ぶ。独唱、重唱のほか、日本の発声も体験する。実践の場で役立つ、発達段階を考慮した歌唱指導の力を養うことを目的とする。	2	2	演習	1	必修
声楽ⅠA	声楽の基本である発声を確立し、発音・歌唱表現について学ぶ。イタリア語・日本語・英語の楽曲を教材とし、無理なく自然に歌える発声法を身に付け、各国語を歌う際の発音法、楽曲としての様式と歌唱法、教材と関連した声楽史についても学ぶ。	1	(2)	演習	2~4	
声楽ⅠB		1	(2)	演習	2~4	
※声楽ⅡA	声楽Ⅰの内容を踏まえ、さらに高度な歌唱表現について学ぶ。声楽Ⅰにおけるイタリア語・日本語・英語の歌に加え、ドイツ語・フランス語の楽曲を経験する。詩を深く理解し、言語・作曲者・様式による演奏上の違いを学び、さらに高度な歌唱表現について研究する。	1	(2)	演習	3·4	
※声楽ⅡB		1	(2)	演習	3·4	
※声楽アンサンブル	オペラ、ミュージカル、その他のジャンルから重唱曲を取り上げ、少人数によるアンサンブルの歌唱表現を研究する。声量・音色・タイミングを揃えること、全体の構成、音楽づくりなどをグループで研究し発表する。曲によって、舞台美術、衣装などを伴った演劇的表現も学ぶ。	2	2	演習	2~4	
※合唱	様々な演奏形態や時代様式、ジャンルの合唱作品を体験しつつ、合唱演奏や指導の基礎について理解を深める。	2	2	演習	全	必修
ピアノ基礎	バロックから近現代にいたるさまざまな様式のピアノ音楽を学習する。それぞれの能力に応じた練習曲も学習し、ピアノ奏法の研究を深める。	2	2	演習	1	2単位以上選択必修
ピアノⅠ	ピアノ基礎に比べて、ピアノ学習経験が豊富な学生を対象とし、バロックから近現代にいたるさまざまな様式のピアノ音楽を学習する。それぞれの能力に応じた練習曲も学習し、ピアノ奏法の研究を深める。	2	2	演習	1·2	
※ピアノⅡ	ピアノ演奏で卒業研究を行う者を主な対象とし、バロックから近現代にいたるさまざまな様式のピアノ音楽を学習する。それぞれの能力に応じた練習曲も学習し、ピアノ奏法の研究を深める。	2	2	演習	2·3	
※オルガン・チェンバロ	17～8世紀の鍵盤音楽の様式を、当時の楽器（オルガン、チェンバロ）で実際に演奏して学ぶ。バロック音楽の特徴を理解することを目的とする。	2	(2)	演習	全	
※合奏（弦楽）	弦楽器の奏法や合奏を通して、演奏法や指導法を総合的に習得する。	2	2	演習	全	4単位以上選択必修
※合奏（吹奏楽）	管打楽器の奏法や合奏を通して、演奏法や指導法を総合的に学ぶ。	2	2	演習	全	
指揮法	指揮の基本技術やリハーサル・テクニックを習得することによって、より優れた指導力を育成する。指揮法を研究することにより、表現力やコミュニケーション力、さらには洞察力などの向上も含め、多方面での応用力を要請する。	2	2	演習	2	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※指揮実践演習	指揮法や音楽基礎演習C（指揮と表現）で習得したことを基礎にして、スコアの解釈法などのさらなる高度な技術を学ぶ。	2	(2)	演習	3·4	
※和楽器	箏における楽器の説明、調絃の仕方、演奏方法の基礎、邦楽理論と箏の歴史など、基本的な技法や知識を学ぶ。	2	(2)	演習	全	必修
※民族音楽演習A（ガムラン）	実技の学習を通して諸民族の音楽を学び、あわせて音楽を育んだ文化的歴史的背景についても学習する。バリ島のガムランを中心に学ぶ。	2	(2)	演習	全	2単位以上選択必修
※民族音楽演習B	実技の学習を通して諸民族の音楽を学び、あわせて音楽を育んだ文化的歴史的背景についても学習する。	2	(2)	演習	全	
音楽理論Ⅰ	西洋古典音楽を構造的に理解し、演奏や指導にも役立てていくための基礎理論を学ぶ。具体的には西洋古典音楽の「基礎文法」である和声学の理論（四声体書法の実施）を中心に実習していくことになるが、簡単な楽曲の分析、実作等も適宜取り入れていく。	2	2	演習	1	必修
音楽理論Ⅱ	音楽理論Ⅰで実習した和声法をもとに、更に深く和声理論を研究する。四声体課題の実施を通して、機能和声法の原理を理解するとともに、西洋古典・ロマン派を中心とする作品の楽曲分析を試みることによって、音楽構造を理解する。	2	(2)	演習	2~4	
※作曲演習	作曲を試みる。動機を創作し展開していく手法や音楽形式について、実際に作品を制作しながら、実践的に学んでいく。	2	(2)	演習	2~4	
※音楽理論演習	古典派、ロマン派から近代・現代の諸作品を分析し、音楽を構造的に理解することを目指す。履修の条件としては音楽理論Ⅰを履修済みであること。また音楽理論Ⅱ以上を履修済み、もしくは同時に履修中であることが望ましい。	2	(2)	演習	3·4	
※情報芸術演習	音楽など芸術分野における作品制作と表現において、コンピュータ等の機器やインターネット等の情報網というメディアが、どのように利用されているか、どのように芸術に影響を与えているか、また今後どのような展開を可能にしているかを、音楽や映像作品を制作する演習を通じて探る。	2	(2)	演習	1·2	
音楽学概論	音楽学の基本的な考え方、音楽学研究の方法と範囲について概観する。また、多様な音楽文化の存在を前提とした上で、音楽とは何かについて検討する。	2	(2)	講義	1	必修
※西洋音楽史	西洋芸術音楽の歴史を概観し、時代による音楽様式の変遷や、音楽家と社会の関係について、音楽例を聴きながら学ぶ。	2	(2)	講義	全	2単位以上選択必修
※日本音楽史	日本における音楽の歴史を概観し、日本音楽のさまざまなジャンルの特徴について、音楽例を聴きながら学ぶ。	2	(2)	講義	全	
※民族音楽学	世界のさまざまな地域の音楽文化を、視聴覚資料を使用しながら概観し、音楽と社会や文化の関係について考察する。	2	(2)	講義	全	
※音楽学演習	音楽に関する特定のテーマを設定し、文献講読やプレゼンテーションを通して、音楽学の研究方法を学ぶ。	2	(2)	演習	2~4	
※音楽療法の基礎と歴史	音楽療法とは何か、音楽療法における音楽とは、療法とは何かについて理解する。さらに音楽療法の歴史を概観し、諸外国の音楽療法と比較しながら、日本の音楽療法の現状と展望を概説する。また音楽療法の方法と基本的原理については、実践ビデオを見ながら学ぶ。	2	(2)	講義	全	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※音楽療法の構造と評価	音楽療法における構造と評価とは何かを具体的な事例を通して口述する。音楽療法士に求められることは、一つは療法士自身の即興的技術と判断力であり、もう一つは、療法目的に沿った構造と評価、つまり計画と査定、即興的対応と観察、記録と考察である。	2	(2)	講　義	全	
※音楽療法実践	音楽療法セッションの実践を、実践ビデオ、および実際の模擬実践を通して理解する。また音楽療法セッションに欠かせない即興演奏の実技を、毎回の授業中に取り入れて行う。	2	(2)	演　習	全	
※音楽療法各論	音楽療法セッションの対象者は、乳児、小児、青年、成人、高齢者まで広い領域にまたがるため、各対象者の症状や障害の程度、および文化的・社会的背景をも理解した上で、実践を行う。授業では各領域を実践ビデオ、実践現場見学、事例研究を通して学ぶ。	2	(2)	演　習	全	

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。
注2）Ⅱは、相当するⅠを修得してから履修すること。
注3）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表9ー⑨（美術教育専攻・専攻専門科目）

当該専攻の学生は、次の表の科目から、必修を含めて40単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
絵画基礎	造形の基礎としてデッサンを学び、観察力、描写力、構成力等の能力を養い、さまざまな表現の可能性を試みたい。	2	(2)	演　習	1	必　修
絵画Ⅰ	絵画の基礎造形としてデッサン、油彩画を学習する。さまざまな素材（鉛筆、木炭、コンテ、油絵具等）を使用し、三次元の視覚的世界を二次元に表現する基礎技法中心に、多様な表現方法を実践を通して学ぶ。	2	(4)	実　技	2	
※絵画ⅡA	版の基本的な原理を学び、各技法の演習により、表現効果を理論的かつ実践的に理解し、美術教育のための基本的能力を深める。	2	(4)	実　技	3	
※絵画ⅡB	近代絵画の美術形式、方法、考え方を実践を通して学び、更に現代絵画の多様な表現方法についても学ぶ。	2	(4)	実　技	3	
彫塑基礎	立体造形の基礎を空間においてボリューム・マッス等の関連において学習し、塑造制作を通じて基本的な立体を観る造形感覚を養う。塑造粘土を使用し、芯棒組から石膏取りまでの作業工程を学習する。	2	(2)	演　習	1	必　修
彫塑Ⅰ	実材制作を通じて、基本的な立体を観る造形感覚を養う。石材など実材加工に必要な道具の扱いや、彫る感覚を体得し、カービング彫刻の作品制作を学習する。	2	(4)	実　技	2	
※彫塑ⅡA	塑造制作を通じて、彫塑基礎において学習した造形感覚をさらに高める。塑造粘土を使用し、「モデル」のポーズをもとに全身像を制作し、人体の構成、量、動きなどの要素を学習する。	2	(4)	実　技	3	
※彫塑ⅡB	実材制作を通じて彫塑Ⅰにおいて学習した造形感覚をさらに高める。木材など実材加工に必要な道具の扱いや、彫る感覚を技術的に体得し、カービング彫刻の作品制作を学習する。	2	(4)	実　技	3	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
デザイン基礎	デザインという行為は、何を目的としているのか。また、その行為における実際の表現形態の実例とそれぞれのジャンルの特性や考え方を視覚的な教材を生かしながら構成していく。	2	(2)	演習	1	必修
デザインⅠ	デザインを行う場合に必要不可欠なプロセスとして、情報収集、コンセプトメイキングとそれらを造形化する行為がある。最低限の知識とスキルを課題作成を通して学んで行く。	2	(4)	実技	2	
※デザインⅡA	平面メディアを中心にグラフィックデザイン、パッケージデザインの世界を体験する。コンセプトを有効に伝える手法として様々な要素があることを課題制作を通して体感する。	2	(4)	実技	3	
※デザインⅡB	プロダクトデザインの授業である。コンセプトをメディアに移し替える作業としては、グラフィックと同様であるが、道具的機能性や素材特性を制作を通して学んで行く。	2	(4)	実技	3	
工芸基礎	学校現場における工芸の基礎的な知識理解を主に、陶芸及び張り子の制作	2	(2)	演習	1	必修
工芸Ⅰ	木工芸の基礎的技術の学習について主に作品制作を行い、また様々な工芸的な作品など、「用の美」について学ぶ	2	(4)	実技	2	
※工芸ⅡA	金属造形などの基礎的技術の学習について主に作品制作を行い、さらに焼き物などでオブジェ制作を行い、工芸的な作品としての造形性を学ぶ	2	(4)	実技	3	
※工芸ⅡB	陶芸は素地土から釉薬の原料、絵付けの顔料にいたるまでその素材の選択が制作を行う上で重要な要素となる。この授業では素材からの発想やイメージを重視し、工芸的造形を目指した作品制作を行う。	2	(4)	実技	3	
※クラフト	木工芸の基礎的技術の学習、及び染色に関する基礎的技術の学習を隔年で行う。	2	(4)	実技	2·3	
美術理論・美術史基礎	19世紀までの日本、東洋、西洋の美術、建築、デザインなどから横断的に題材を選び、視覚による認識や表現の基礎的な原理、人間、もの、風景、自然、都市などがどのように芸術に表現されてきたかなどについて実例をもとに概観する。	2	(2)	講義	1	必修
美術理論・美術史	20世紀美術の諸動向について主要な美術運動のマニフェストや批評言語を学ぶことにより、近・現代社会における芸術の役割や美術批評のあり方について多面的に分析し、近・現代の視覚文化について理解を深める。	2	(2)	講義	2	
美術理論・美術史演習	20世紀美術の諸動向について主要な美術運動のマニフェストや批評理論を読みながら、実作品の理解を深めるとともに、同時代の芸術文化の動向を知るためにインターネット配信される芸術分野の最新ニュース、評論を読んで各自が関心を持った記事を講読する。	2	(2)	演習	2·3	
※美術特殊演習A	絵画技法材料、美術解剖学、色彩学など、美術の料学的な見方や考え方を理論的かつ実践的に学習する。	2	(2)	演習	3·4	
※美術特殊演習B		2	(2)	演習	3·4	
映像表現A	映像を効果的に表現する方法を静止画像（写真）を中心に制作を通して学んで行く。	2	(2)	演習	3·4	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
映像表現B	映像を効果的に表現する方法を動画を中心に制作を通して学んで行く。	2	(2)	演習	3·4	

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。
注2）Ⅱは、相当するⅠを修得してから履修すること。
注3）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表9ー⑩（保健体育専攻・専攻専門科目）

当該専攻の学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて40単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
体育基礎理論	学校および社会の中の体育・スポーツに関することがらの中からスポーツの魅力と問題点を探っていく。「スポーツとは何か」「体育とは何を教え・育てる教科か」を考察する。あわせて体育学・運動学・教育学などの課題を探る。	2	(2)	講義	1	必修
健康科学基礎理論	現代人、とりわけ子どもの健康問題を理解するための基本的な健康科学的理解を深めることがねらいである。主な内容としては、身体発達に関する科学、免疫に関する科学（感染予防、アレルギー疾患等の基礎）、生活習慣病の基礎科学、心身相関の科学、等について扱う。	2	(2)	講義	1	必修
体育原理・体育史	体育・スポーツの歴史をたどりながら、体育やスポーツの概念と本質、それがかかえている今日的諸問題とこれからのあり方等について考察する。また、体育科教育の歴史と本質、目的・目標の設定、教育内容の選択、教授＝学習方法の検討など、体育教育を規定する諸問題について考える。	2	(2)	講義	1·2	2科目 4単位以上 選択必修
体育社会学	スポーツという現象を社会学的な視角から考察していく。なかでも現代の日本という社会で、具体的に生起している身近な問題を取り上げていく。	2	(2)	講義	1·2	
体育経営管理学	今日、スポーツ活動の場は、これまで中心となっていた学校から、広く地域社会へと移行していくことが求められ、そこでは経営管理の理論が必須となっている。本講義は、体育・スポーツ経営管理学の基本的な内容を学習し、さらにその周辺の諸論議についても考察する。	2	(2)	講義	1·2	
体育心理学	体育の授業やスポーツの競技場面における諸問題について、心理学的な視点から概観し、課題を達成するために教師やコーチは何をすべきかを考える。実際の授業やスポーツの競技場面での諸問題を題材にし、講義、討論、作業などを行い、各自が実際の場面に応用できる力を習得することをねらいとする。	2	(2)	講義	1·2	
スポーツバイオメカニクス	スポーツ・運動の動作を身体各部位の動きやその作用する力のメカニズムなどのバイオメカニクス的観点から分析し、身体運動の特性について理解を深めることが本講義のねらいである。内容としては、運動学の基礎、動作の画像解析法と動作分析法の原理および分析結果の活用の仕方等について学習する。	2	(2)	講義	2·3	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
スポーツ運動学	マイネルの「スポーツ運動学」の理論を基礎として、体育・スポーツにおける運動指導に関する実践的問題を検討する。実践における指導者や学習者の視点から見た、スポーツ運動の発生、構造、伝承に関する理論を学習する。	2	(2)	講義	2·3	必修
人体生理学	この講義では、人体における生命現象の機構について構造と機能の両面から理解することを目的とする。1)情報の伝達と統合、2)血液・循環・免疫、3）呼吸、4）エネルギーの補給と消費、5）内分泌、6）適応の機構・機序について考える。	2	(2)	講義	1	必修
機能解剖学	ヒトの運動の仕組みについて解説する。具体的には、筋の収縮機構、骨格系、筋系などについて解説し、さらに解剖学関係の専門書を通して身体各関節の運動とそれらを引き起こす個々の筋群・支配神経などについて理解を深める。	2	(2)	講義	1·2	
運動生理学実験	人体生理学で学んだ生命現象の機構を実験を通して確認し、保健体育分野の問題解決に用いられる生理学的な手法を修得する。測定・評価にかかわる基本的なデータ処理・統計処理法についても学習する。	2	3	実験	2·3	必修
衛生・公衆衛生学	人間集団を対象にして、病気を予防し健康の保持増進をはかり、そのために必要な環境を整える基礎と応用について学習する。疾病予防、健康教育、健康管理、環境保健、保健行政、医療制度などであるが、これらと生活の基盤である地域、職域、学校との関連についても考察する。	2	(2)	講義	2	必修
学校保健	教師が学齢期にある子どもたちのからだや健康を守り、育てられるための基本的な知識や技術を習得することをねらいとする。内容としては救急処置の知識と技能、健康診断の内容とあり方、子どもの身体発達やかかりやすい病気の知識、心の健康の問題、健康なライフスタイルや学校環境、及びそれらの指導を取りあげる。	2	(2)	講義	2	必修
保健体育研究法演習	保健体育専攻専門分野の中から一つを選択し、担当教員による通年の演習を通じて専門分野における研究方法を学習し、4年生での卒業研究の基礎とする。	4	2	演習	3	必修
体育実技	体操、器械運動、陸上競技および水泳を中心に構成され、体育科の指導に必要な基本的知識・技術について学習し、技能の習熟を図る。またそれぞれの練習方法、指導法を学ぶ。	2	2	実技	1	必修
※器械運動	マット、とび箱、鉄棒、平均台における技や組合せの段階的習得と習熟を図る。また、器械運動の特性、技の技術と発展の系統性、練習方法と段階、連続技の構成、安全確保や幇助の仕方などを学習するとともに、技のできばえを観察、評価する能力の向上を図る。	1	(2)	実技	2·3	必修
※陸上競技	陸上競技の走・跳・投の各種目についての技術・ルール・知識について学習し、自分自身の基本的な技能の習熟をはかるとともに、陸上競技の練習法、トレーニング法、指導法、競技会の企画運営の仕方と審判法などについて学習する。	1	(2)	実技	2·3	必修
※サッカーⅠ	サッカーの特性を理解するとともに、サッカーをプレイするための基本的技術、戦術（特に個人技術、個人戦術）の習得を主題にする。そして最終的にはチームプレイの最小単位である2対2におけるコンビネーションプレイからの攻防を理解して実践できるようになることがこの授業のねらいである。	1	(2)	実技	全	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※バスケットボールⅠ	バスケットボールをプレイするための基礎的な個人技術を学ぶとともに、チームゲームであるバスケットボールの特性を理解するために、主として攻撃のコンビネーション・プレイを理論的・実践的に学習することをねらいとする。	1	(2)	実技	全	必修
※水泳	クロール、平泳ぎ、背泳ぎ、バタフライの各泳法を体系的に学習して、技能の確実な習熟をはかる。またスタートやターンの方法など重要な競技の方法と規則を学ぶとともに、水泳大会の運営や審判に必要な基本的事項、水泳の事故防止やプールの衛生管理の基本的事項を学習する。	1	(2)	実技	2·3	必修
※舞踊AⅠ	創作ダンスの初歩段階の授業である。「恥ずかしくて踊れない」「どのようにからだを動かして踊ればよいのか分からない」などの問題を、からだや動きを実感することで解決していく。また、からだの感覚の覚醒と解放のワークに取り組むことを通して「踊り表現するからだ」を育てる。	1	(2)	実技	全	必修
※舞踊B	舞踊は、芸術的なものから芸能まで、また儀式的なものから娯楽的なものまでさまざまである。それらの舞踊の中から自分の文化である日本の民俗舞踊をとりあげる。人々の生活にとっての踊りの意義、文化としての身体の動きの美しさについて、実践的に学習する。	1	(2)	実技	全	必修
※バレーボール	バレーボールのルールと競技特性を理解し、個人的及び集団的技術を習得するとともに、それらを基にした戦術を展開して、ゲームの展開方法を学習する。	1	(2)	実技	全	必修
※柔道	柔道が国際化をたどっている今日、武道としてのスポーツとして、柔道を考えていかなければならない。本授業は、初心者から指導するということを前提にして、柔道の中核的技能となる基本動作を十分学習することをねらいとし、互いに相手を尊重し、礼法を正しく身につけて練習や試合ができるまでを目標とする。	1	(2)	実技	全	2科目 2単位以上 選択必修
※剣道	授業内容は初心者を対象としたもので、剣道における基礎動作と基本打突を重点的に習得することをねらいとする。「技」の習得はしかけ技の代表的な技のみに留めて、互格稽古及び簡易試合ができるまでを目標とする。	1	(2)	実技	全	
※特殊種目実技	ソフトボール、テニス、バドミントン及びフラッグフットボールのうち１種目の基本的技術の習得と技術練習、応用練習を通して、競技特性及び指導の仕方を学ぶとともに、ルール及びゲームの進め方を学習する。	1	(2)	実技	全	
※遠泳	遠泳を中心に海浜での水泳の技術を学習し、泳力の向上を図るとともに、海浜での水泳の際の安全確保のための知識と技術、水難救助法、人工呼吸法などを学習する。また、合宿経験を通して臨海学校などの海浜行事の運営や指導法を学習する。さらに、磯遊びや様々な海浜スポーツの基本を体験させる。	1	(2)	実技	全	2科目 2単位以上 選択必修
※野外活動	学校教育における児童・生徒の「野外活動」の指導はもとより、家庭や地域において行われる自然体験学習の指導に必要な知識、技術の基本を習得し、計画的なプログラムに沿って自然の中での活動能力を高める。	1	(2)	実技	全	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
※スキー	生涯スポーツとしてのスキー運動の特性を理論と実践を通して理解すると同時に、実際に冬山を体験することにより、冬季の自然を理解することをねらいとする。また、ゲレンデスキーにおける滑降・回転の基礎技術および応用技術を学習すると同時に、基本的なスキーの指導法を学習することも、重要なねらいである。	1	(2)	実技	1·2	
※サッカーⅡ	サッカーⅠにおいて習得した基本技術、戦術をベースに、攻守にわたるコンビネーションプレイ、チームプレイの仕方を理解し、実践ができるようになることがこの授業のねらいである。またチームの中での各ポジションの役割などの理解も重要な課題である。さらにルールの理解を深め、審判法についても学習する。	1	(2)	実技	2·3	2科目 2単位以上 選択必修
※バスケットボールⅡ	チームをいくつか編成し、バスケットボールⅠで習得した基礎的技術をベースにして、攻撃と防御のチームプレイを学習する。さらに、リーグ戦形式の試合を行い、審判やオフィシャルの方法を学ぶとともに、ゲームの観察・評価の仕方も学習する。	1	(2)	実技	2·3	
※舞踊AⅡ	「舞踊AⅠ」で踊り表現することの基礎的な力をつけた後で、この授業では、ひとりひとりの中にひそむ経験や想い、考えや興味などを掘り起こしながら踊り表現するグループ作品の創作に取り組む。	1	(2)	実技	2·3	

注1）※印の授業科目は、重ねて履修することができる。
注2）Ⅱは、相当するⅠを修得してから履修すること。
注3）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

X

第１０章

特別支援教育教員養成課程専門教育科目

1 専門教育科目　その1　教職科目
授業科目表6－③（特別支援教育・教職科目）
2 専門教育科目　その2
小学校の教科科目【小履修型のみ】
3 専門教育科目　その3
中学校の教科科目【中履修型のみ】
4 専門教育科目　その4　特別支援専門科目
授業科目表10－①（視覚障害教育コース）
授業科目表10－②（聴覚・言語障害教育コース）
授業科目表10－③（発達障害教育コース）
授業科目表10－④（健康・運動障害教育コース）
5 専門教育科目　その5　卒業研究
6 自由選択科目
7 免許法相当科目表

第10章 特別支援教育教員養成課程専門教育科目

この章では、特別支援教育教員養成課程の教育課程表（卒業に要する単位数）の中の「専門教育科目」と「自由選択科目」について、「授業科目表」を掲載し、授業科目の詳細と履修方法を説明します。表の見方については、**第2章「6 授業科目表の見方」（9ページ～）**を参照してください。

1 専門教育科目　その1　教職科目

（小履修型は55単位以上、中履修型は39単位以上）

教職科目は、小履修型と中履修型とでは、卒業に必要な授業科目と単位数が異なります。修得が必要な単位数は、**小履修型は55単位以上、中履修型は39単位以上**です。

教職科目に属する各授業科目の詳細と履修方法については、次ページ以降の**「授業科目表6－③」**で確認してください。

なお、科目によっては、履修できるクラスが定められている場合もありますので、**『開講科目一覧』でクラス指定の指示も確認してください。**

教職科目のうち、「教育実習とそれに直接関連した科目」に関しては、**第11章（139ページ～143ページ）**の説明をよく読んで履修してください。「教育実習」には履修資格が設けられています。

授業科目表6ー③（特別支援教育教員養成課程・教職科目）

次の表の科目から、履修型別に定められた必修・選択必修の科目を含めて、小履修型は55単位以上、中履修型は39単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	小履修型	中履修型
教職入門	現場の実状を通して、教職の意義や、教員の職務内容、課題となっていることについて学び、自己の教職像とそのための準備（進路選択）について考える。	2	(2)	講義	1	必修	必修
教育の原理	教育の理念・歴史・思想を含む、教育の基礎理論を学ぶ。表面的には多様な諸教育実践を根底で支え成り立たせている教育の原理は、網羅的で概説的な手法ではとらえることができない。そこで、この講義では、各担当教員が専門とするアプローチを介して、表面的には隠されている教育原理に迫る。	2	(2)	講義	2	必修	必修
発達と学習の心理	本講義では、心理学実験を一部交えながら、学習活動全般についての理解を深める。これまで行ってきた学習活動がどのように位置づけられるかを、相対化して理解できることを目標としたい。また、心理学的な知能の捉え方を紹介しながら、学習障害をもった生徒の処遇などについても解説する。	2	(2)	講義	1	必修	必修
教育の制度・経営	教育の制度の成り立ちとその運営に関する基本的特質について理解し、課題となっていることならびにそれに関する自己のあり方について考える。	2	(2)	講義	1	2単位以上選択必修	2単位以上選択必修
教育と地域社会	社会教育における学習活動と学習支援のしくみについて、理論的・学説史的な整理とともに具体的な事例の検討を行う。学校教育のみにとどまらない教育の豊かな可能性を理解するとともに、学校および教員の立場から見た社会教育との関わり方（連携・協力を含む）について理解を深めることをめざす。	2	(2)	講義	1		
国語科教育法（初等）	言語の教育としての国語の授業づくりにおける教材研究のあり方について検討する。小学校国語科の目標や指導内容について理解するとともに、音声言語（話など）並びに文字言語（文章作品など）の教材としての可能性について考える。	2	(2)	講義	2	必修	
社会科教育法（初等）	小学校社会科に焦点を当て、社会科とは何をめざす教科なのか、どういう内容をどのように教えたらよいのかについて、近年の研究動向や実践例と関連づけながら、教科目標論、教科内容論、単元構成論、学習活動論、教材論、授業論などの視点から考察する。	2	(2)	講義	3	必修	
算数科教育法（初等）	学習指導要領・カリキュラムの内容、性格について概観し、教える立場から教材を分析することを考える。	2	(2)	講義	2	必修	
理科教育法（初等）	理科教材の研究成果に学び理科教材を検討する方法、理科教材の検討演習を行う。理科教材の検討と教科書、授業との関係について実践例を含めて検討する。	2	(2)	講義	3	必修	
生活科教育法（初等）	子供たちの身近な技術や生産に関わる題材を通して体験的な学習活動を行いながら生活科の指導に必要な知識・技能等の習得をはかる。また、教育現場での具体的な実践事例の紹介等を通して、生活科の授業や教材について分析する。	2	(2)	講義	3	必修	

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	小履修型	中履修型
音楽科教育法（初等）	小学校における音楽教育の目的と目標と指導法について考え、日本の子どもの文化的なアイデンティティを育成することのできる教材とは何かという視点に立って、歌唱・器楽・鑑賞の教材について教材性についての検討を行う。授業では、音楽活動を通して実際にさまざまな教材の特質を体験的に学ぶようにする。また、グループごとに総合的な課題である創作ミュージカル創りとその発表を行う。	2	(2)	講義	2	必修	
図画工作教育法（初等）	小学校図画工作科学習指導要領を「子どもの実態」、「題材と主題」などの視点から分析、検討する。その後、現行指導要領の内容として「表したいことを表す」の題材実践を行う。また「指導案作成」及び「総合学習としての美術」などの企画の立て方についても学び構想力を高める。	2	(2)	講義	2	必修	
体育科教育法（初等）	小学校体育科に焦点をあて、教材づくりの事例を手がかりに、体育科の目的・内容・方法を考察し、体育科の授業づくりの原則と方法を学ぶ。	2	(2)	講義	2	必修	
家庭科教育法（初等）	実際の家庭科の授業を念頭において授業の目標、教材、教授行為などについて考察し、受講者が自ら授業を構想できることをめざす。実際の授業を追試するプロセスを経て、家庭科の授業づくりの能力を培う。教科書教材を用いる場合と自ら考え出す教材の場合とがあるが、それぞれの留意点を明らかにする。	2	(2)	講義	3	必修	
外国語活動・外国語教育法（初等）	小学校における外国語活動（中学年）・外国語（高学年）についての基本的な知識・理解（学習指導要領、主教材等）、児童期の第二言語習得についての知識とその活用（音声中心のインプット、やり取り等）、指導技術（指導計画、ティーム・ティーチング、ICT の活用等）について身に付ける。	2	(2)	講義	2	必修	
国語科教育法Ⅰ（中等）	中学、高校における国語科教育論の問題および国語指導の課題について、「国語科経営」の視点から考察する。中・高等学校の学習指導要領の目標及び内容を理解するとともに、具体的な教材の取り扱いや教材（学習材）開発や授業づくりを演習的に行う。	2	(2)	講義	2		取得しようとする免許状の教科教育法4単位必修
国語科教育法Ⅱ（中等）	国語科教育法Ⅰを踏まえて、中学及び高等学校の教材開発及び新しい国語の授業展開の可能性を考える。音声言語教材及び文字言語教材の開発と具体的な言語活動の在り方と展開を追究する。	2	(2)	講義	3		
社会科教育法A（中等）	中学校社会科地理的分野・歴史的分野に焦点を当て、社会科とは何をめざす教科なのか、現在の社会科授業が直面している課題は何なのかについて、若者の実態や今後の社会像とも関連づけながら、目標論、教科構造論、内容構成論、教材論などの視点から、原理的に考察する。	2	(2)	講義	2		
社会科教育法B（中等）	中学校社会科公民的分野に焦点を当て、社会科とは何をめざす教科なのか、現在の社会科授業が直面している課題は何なのかについて、若者の実態や今後の社会像とも関連づけながら、目標論、教科構造論、内容構成論、教材論などの視点から、原理的に考察する。	2	(2)	講義	2		
数学科教育法Ⅰ（中等）	中学校、高等学校の数学教材と、その背景にある数学専門との関連性について考察する。	2	(2)	講義	2		
数学科教育法Ⅱ（中等）	中学校、高等学校数学を教える立場から再検討し、それをもとに授業を構成・分析する方法を考える。	2	(2)	講義	3		

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	小履修型	中履修型
理科教育法Ⅰ（中等）	理科教育の研究成果に学び理科教材、授業を検討する方法を演習を含めて学ぶ。理科教材の検討と教科書、授業との関係について実践例など検討する。	2	(2)	講義	2		
理科教育法Ⅱ（中等）	理科の学習指導要領はエネルギー・粒子・生命・地球の4領域より構成され、各領域の特性に対応した教材や指導方法（情報機器の活用を含む）が存在する。授業や教材の具体例、指導案やビデオ等の授業記録をもとにして授業づくりの多様性を体験的に学修する。	2	(2)	講義	3		
音楽科教育法A（中等）	1）中学・高等学校の学習指導要領によって音楽科の目的・目標・内容を把握する。2）日本の音楽教育史および世界の音楽教育、多文化音楽教育について学ぶ。3）指導案を作成、模擬授業の試みの中で、音楽の指導法を研究する。以上の活動を通じて、中学・高等学校における音楽教育に関する考え方や問題意識をもって教育現場で実践できる力を身につける。	2	(2)	講義	2		
音楽科教育法B（中等）	西欧音楽、日本の音楽、アジアなどの諸民族の音楽の実技と指導法について学ぶとともに、授業実践に結びつける方法を学ぶ。模擬授業も行う。	2	(2)	講義	3		
美術科教育法A（中等）	第一に、学習指導要領、各種美術教育論を理論的に分析、検討することで、美術教育をめぐる諸概念と論理的考察力を身につける。第二に、学習指導要領の内容を現実化するような題材を各自が考案し、指導略案を作成する。第三に、与えられた題材を実践することで、指導力を獲得する。	2	(2)	講義	2		
美術科教育法B（中等）	近現代の美術表現の歴史を検証し、平面による多様な絵画・デザイン技法を実際に造形演習を行い理解する。	2	(2)	講義	2		
保健体育科教育法A（中等）	中学校保健体育科の保健分野に焦点をあて、基本的な保健授業の考え方と授業づくりを学習した上で、模擬授業を通して授業内容の構成、指導過程の原則、学習活動の組織化をいかにはかるかを実践的に学ぶ。	2	(2)	講義	3		
保健体育科教育法B（中等）	中学校保健体育科の体育分野に焦点をあて、基本的な体育授業の考え方と授業づくりを学習した上で、模擬授業を通して授業内容の構成、指導過程の原則、学習活動の組織化をいかにはかるかを実践的に学ぶ。	2	(2)	講義	2		
技術科教育法Ⅰ（中等）	技術教育の歴史、海外の技術教育及び教育現場の状況等を通して、中学校技術・家庭科における技術科教育の指導理念や教育内容、それらに基づく具体的な指導方法等について考察する。	2	(2)	講義	2		
技術科教育法Ⅱ（中等）	中学校での技術科教育の授業に焦点を絞り、学習指導要領の変遷、教科目標、教育内容、教育方法、教材教具、教科書、授業分析法、施設設備の管理運営（安全教育を含む）指導案の書き方等について具体的な例を挙げ考察する。また、授業練習や教育現場の実態と諸問題についても扱う。	2	(2)	講義	3		
家庭科教育法Ⅰ（中等）	家庭科の授業を成り立たせている目標、内容、教材、児童・生徒について、具体的な授業のしくみを考えながら、受講者各自が言語表現できるようにする。また、授業が時間と空間の制約のなかで行われていることをも受講者各自が実感できることをめざす。そのなかで、教材開発も追求する。	2	(2)	講義	2		
家庭科教育法Ⅱ（中等）	家庭科の教科の授業の特徴を家庭科の歴史研究を通して学ぶ。とくに、児童生徒の「生活離れ」のなかでの家庭科教育の目標について、現実の授業を批判的に見ることを通して見直しする。それを通して、新しい教科のありかたについて考えることができるようにする。	2	(2)	講義	3		

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	小履修型	中履修型
英語科教育法A(中等)	英語教育の理論と実践を学ぶ上での英語教育がかかえている基本的な諸課題の分析と把握を目的とする。具体的には、英語の授業等を実際に観察・体験し、課題・問題の認識を深めることを目指す。	2	(2)	講義	2		
英語科教育法B(中等)	授業を実践するにあたり、具体的な指導案とともに教材を開発する。実際に授業で使用することにより、改善・工夫を加える。	2	(2)	講義	3		
工業科教育法A	中等技術教育の歴史、科学技術の発展と職業教育の多様化、工業高等学校の組織、教育課程、教育内容、それらに基づく具体的な指導方法等について講義する。教材製作も行う。	2	(2)	講義	3·4		
工業科教育法B	中等技術教育後半の工業高等学校では、革新的な技術の進歩に対応できる技術者の育成を目指し、基礎的な知識と技能を重視した柔軟性のある教育が大切である。本講義では、特に情報技術教育を中心に工業教育を考察する。	2	(2)	講義	3·4		
国語科教育法A(中等)	中学校を中心とする国語科に関する学習指導法について、「話すこと聞くこと」「書くこと」「読むこと」それぞれの領域における実践研究の動向や諸課題を理解したうえで、模擬授業および授業体験等の活動をとおして、国語科教員としての実践的な力量を養うことをめざす。	2	(2)	講義	2·3		
国語科教育法B(中等)	高等学校を中心とする国語科に関する学習指導法について、「話すこと聞くこと」「書くこと」「読むこと」それぞれの領域における実践研究の動向や諸課題を理解したうえで、模擬授業および授業体験等の活動をとおして、国語科教員としての実践的な力量を高めることをめざす。	2	(2)	講義	2·3		
社会・地歴科教育法(中等)	中学校社会科の地理的分野・歴史的分野および高等学校地理歴史科の各科目に焦点を当て、3年次での附属学校における教育実習との関連を図りながら、学習指導案の作成や模擬授業などを取り入れつつ、授業づくりを体験的に学ぶ。	2	(2)	講義	3		
社会・公民科教育法(中等)	中学校社会科の公民的分野および高等学校公民科に焦点を当て、3年次での附属学校における教育実習との関連を図りながら、学習指導案の作成や模擬授業などを取り入れつつ、授業づくりを体験的に学ぶ。また、そのことを基にして、理論と実践とを対比させながら授業改善の視点について省察する。	2	(2)	講義	3		
数学科教育法A(中等)	中学校数学・高等学校数学を、教える立場から再検討し、それをもとに授業を構成・分析する方法を考える。特に「数と式」「図形」の分野に焦点をあて、学習指導上の課題を踏まえた教材研究、教材開発と模擬授業等を通して、目標、内容、方法、評価について実践的に学修する。	2	(2)	講義	2·3		
数学科教育法B(中等)	中学校数学・高等学校数学を、教える立場から再検討し、それをもとに授業を構成・分析する方法を考える。特に「関数」「データの活用」の分野に焦点をあて、学習指導上の課題を踏まえた教材研究、教材開発と模擬授業等を通して、目標、内容、方法、評価について実践的に学修する。	2	(2)	講義	2·3		
視覚障害教育実践体験演習	視覚障害教育の現場における体験や関係諸機関等の見学に基づきながら、特別支援教育の全体像を把握し、特別支援教育に関わる教員としての基礎的資質を養う。	2	(2)	演習	1	所属するコースの科目、2単位選択必修	所属するコースの科目、2単位選択必修
聴覚・言語障害教育実践体験演習	聴覚・言語障害教育の現場における体験や関係諸機関等の見学に基づきながら、特別支援教育の全体像を把握し、特別支援教育に関わる教員としての基礎的資質を養う。	2	(2)	演習	1		
発達障害教育実践体験演習	発達障害教育の現場における体験や関係諸機関等の見学に基づきながら、特別支援教育の全体像を把握し、特別支援教育に関わる教員としての基礎的資質を養う。	2	(2)	演習	1		
健康・運動障害教育実践体験演習	健康・運動障害教育の現場における体験や関係諸機関等の見学に基づきながら、特別支援教育の全体像を把握し、特別支援教育に関わる教員としての基礎的資質を養う。	2	(2)	演習	1		

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	小履修型	中履修型
幼児教育実践研究 A	幼児教育の実践研究の基礎を理解するとともに、幼児の行動観察を通して、幼児の行動の記録方法、記録のまとめ方と解釈の方法を学習し、各自が取った実際の記録を基に幼児理解を深める。さらに、保育計画の立案や保育実践の観察を通じて、実践的援助方法について幼児理解の視点から考察していく。（幼稚園実習参加予定学生のみ履修可）	2	(2)	演　習	2	2単位選択必修	
子ども文化実践研究 A	3年次の教育実習に向けて、子ども文化コースの専門性を活かした授業づくりについて検討しながら、教材／学習材の研究の仕方、学習活動の組織の仕方、授業設計の仕方、子どもの発達段階に応じた指導計画・学習指導案の作成方法等の基礎を学ぶ。	2	(2)	演　習	2		
教育学実践研究 A	教育実習の準備をするための「場」を制度的に提供する。従来、学生間で自発的に行なわれてきた活動（模擬授業、教材研究など）をカリキュラム上に位置づける。	2	(2)	演　習	2		
教育心理学実践研究 A	授業案の執筆と読解の指導を通じて、授業を分析的に振り返るための記録メモの取り方を学習する。また、既存の授業案の分析を用いて教材の批判的検討を行い、幼稚園から中学までの教育課程を視野に入れた教科の体系性の重要性を理解する。	2	(2)	演　習	2		
国語科教育実践指導法 A（初等）	3年次学生と協同で、教育実習に備えていくつかの教材分析を行ないながら指導案の作成、また模擬授業等を行なう。	2	(2)	演　習	2		
社会科教育実践指導法 A（初等）	小学校社会科に焦点をあて、3年次学生の附属小学校における教育実習での授業づくりにいっしょに参加することを通して、小学校社会科に関する指導計画および本時の授業設計についての基礎的な素養を習得する。	2	(2)	演　習	2		
英語コミュニケーション教育実践指導法A（初等）	授業を実践するにあたり、具体的な指導案とともに教材を開発する。実際に授業で使用することにより、改善・工夫を加える。	2	(2)	演　習	2		
数学科教育実践指導法 A（初等）	算数科の授業の構成の仕方を実践的に学ぶことを目的とする。教育実習を経験した直後の3年生にとっては、2年生と共同学習することによって自分の実習を反省的に分析するとともに、次年度の教育実習の準備も含まれている。	2	(2)	演　習	2		
理科教育実践指導法 A（初等）	教職科目ならびに理科に関わる専門科目の学習を基に、授業づくり、授業分析の初歩を学び、3年次教育実習を目標に、3年生との共同により、理科授業の実践力を養う。	2	(2)	演　習	2		
情報・ものづくり教育実践指導法A（初等）	授業を考える上で基礎となる、授業の記録や分析を通して、様々な視点で授業を理解する。さらに教材観も養い、自分がイメージする学習指導案を作成する。	2	(2)	演　習	2		
家庭科教育実践指導法 A（初等）	小学校家庭科の授業設計について3年次の取り組みをともに取り組むことを通して、家庭科の授業の特徴を捉えさせる。学級単位の児童理解、教育目的に沿った教材、時間系列に合わせた指示や発問なども含めた具体的な計画について具体的に理解させる。	2	(2)	演　習	2		
音楽科教育実践指導法 A（初等）	歌唱、器楽、鑑賞等の授業において、児童の発達段階にそった教材選択の視点を考える。教材となる楽曲の難易度を音楽的側面と技術的側面の両面から分析し、教材として選択した楽曲で児童にどのような音楽の知識・技能を身につけさせることができるのかを考える。	2	(2)	演　習	2		

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	小履修型	中履修型
美術科教育実践指導法A（初等）	学校教育における図画工作科の中で行われている各領域の教材研究及び制作発表、鑑賞等の活動を通して、幅広い技術や知識を習得する。また授業サポートなども行い、図画工作科授業づくりの基礎を学ぶ。	2	(2)	演習	2		
体育・健康教育実践指導法A（初等）	小学校体育科に焦点をあて、3年次教育実習（附属小学校）における授業づくりに協同で参加することによって、授業研究法（授業記録・授業調査）を習得するとともに指導計画および授業の指導過程に対する基礎的な素養を身につける。	2	(2)	演習	2		
国語科教育実践指導法A（中等）	中学校国語科の授業づくりを基本とする。附属中学校における3年次学生の教育実習での授業づくりに参画させることを通して、中学校国語科の指導目標及び指導内容の理解を深めさせるとともに、教材研究や指導計画の作成、授業設計等を実地に体験させつつ、よりよい国語の授業づくりの基礎的・基本的な方法を習得させる。	2	(2)	演習	2		取得しようとする免許状の科目、2単位選択必修
社会科教育実践指導法A（中等）	中学校社会科に焦点をあて、3年次実習の附属中学校における教育実習での授業づくりにいっしょに参加することを通して、中学校社会科に関する指導計画および本実習の授業計画に対する基礎的な素養を習得する。	2	(2)	演習	2		
英語科教育実践指導法A（中等）	前半は、教科専門（主に英語学・英文法）等の講義を中心とした教材研究。後半は、教科教育の立場からの授業分析。	2	(2)	演習	2		
数学科教育実践指導法A（中等）	数学科の授業の構成の仕方を実践的に学ぶことを目的とする。教育実習を経験していない2年生にとっては、実習直後の3年生との共同学習によって、次年度の教育実習の準備も含まれている。	2	(2)	演習	2		
理科教育実践指導法A（中等）	中等教育教員養成課程2年生に対して、中学校での理科教育の教材作成及び授業計画の立案に必要な基本的知識と技術を習得させることを目的に、資料の収集、レポートの作成、教科書の内容把握、理科実験の実施、及び附属学校での授業観察を行う。	2	(2)	演習	2		
技術科教育実践指導法A（中等）	授業を考える上で基礎となる、授業の記録や分析を通して、様々な視点で授業を理解する。さらに教材観も養い、自分がイメージする学習指導案を作成する。	2	(2)	演習	2		
家庭科教育実践指導法A（中等）	中学校家庭科の授業設計について3年次の取り組みをともに取り組むことを通して、家庭科の授業の特徴を捉えさせる。学級単位の生徒理解、教育目的に沿った教材、時間系列に合わせた指示や発問なども含めた具体的な計画について具体的に理解させる。	2	(2)	演習	2		
音楽科教育実践指導法A（中等）	歌唱、器楽、鑑賞等の授業において、それぞれの主題にそった教材選択の視点を考える。また、教材として選択した楽曲で生徒にどのような音楽の知識・技能を身につけさせることができるのかを考える。以上のような教材研究の成果をもとに、音楽の授業の構成について、指導案の作成をとおして研究する。	2	(2)	演習	2		
美術科教育実践指導法A（中等）	学校教育における美術教育や総合的な学習の時間、また文化施設や地域で行われる芸術普及活動の先駆的事例を学び、ディスカッションや自ら構想を練るなど創造的な企画力や中学校における美術の授業等の構想力を高める。	2	(2)	演習	2		

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	小履修型	中履修型
保健体育科教育実践指導法A（中等）	中学校保健体育科に焦点をあて、3年次教育実習（附属中学校）における授業づくりに協同で参加することによって、授業研究法（授業記録・授業調査）を習得するとともに指導計画および授業の指導過程に対する基礎的な素養を身につける。	2	(2)	演　習	2		
幼児教育実践研究B	幼児教育における実践的援助の方法について、具体的な保育場面を想定しながら考察し、保育者としての幼児理解の力を高める。（幼稚園実習参加予定学生のみ履修可）	2	(2)	演　習	3	履修した実践研究A又は実践指導法A（初等）と同じ科目名のBを2単位選択必修	
子ども文化実践研究B	実践研究Aの内容をふまえて、教育実習での実践を目的に、子ども文化コースの専門性を活かした授業づくりに実際に取り組む。教材／学習材の研究と子どもの実態把握にもとづいて学習指導案を作成、模擬授業を行うとともに、授業を省察する授業検討会を行い、より良い授業づくりについて考察する。	2	(2)	演　習	3		
教育学実践研究B	教育実習の準備をするための「場」を制度的に提供する。従来、学生間で自発的に行なわれてきた活動（模擬授業、教材研究など）をカリキュラム上に位置づける。	2	(2)	演　習	3		
教育心理学実践研究B	教育心理学実践研究Aの内容を受けて、授業分析をよりきめ細かく行う。教育実習で作成した研究授業の指導案を持ち寄り、その反省点、改善点について討議する。	2	(2)	演　習	3		
国語科教育実践指導法B（初等）	各自の行なった指導案作成、模擬授業、教育実習等について、2年次学生と協同で省察を行なう。	2	(2)	演　習	3		
社会科教育実践指導法B（初等）	小学校社会科に焦点をあて、3年次での附属小学校における教育実習との関連に配慮しつつ、2年次学生の協力を得ながら、当該単元に関する教材開発および学習指導案の作成や授業分析などを通して、社会科の授業づくりを体験的に学ぶ。	2	(2)	演　習	3		
英語コミュニケーション教育実践指導法B（初等）	授業を実践するにあたり、具体的な指導案とともに教材を開発する。実際に授業で使用することにより、改善・工夫を加える。	2	(2)	演　習	3		
数学科教育実践指導法B（初等）	算数科の授業の構成の仕方を実践的に学ぶことを目的とする。教育実習を経験した直後の3年生にとっては、2年生と共同学習することによって自分の実習を反省的に分析するとともに、次年度の教育実習の準備も含まれている。	2	(2)	演　習	3		
理科教育実践指導法B（初等）	教職科目ならびに理科に関わる専門科目の学習を基に、指導案作成、模擬授業等を行い、3年次教育実習を目標に、2年生との共同により理科授業の実践力を養う。	2	(2)	演　習	3		
情報・ものづくり教育実践指導法B（初等）	自分がイメージする授業を行うことを前提として、専門的な教材研究と教材作成を行い、様々な教授スキルを習得しながら模擬授業を行う。授業後には授業検討会を行い、自分自身の授業に対して客観的に分析する。	2	(2)	演　習	3		
家庭科教育実践指導法B（初等）	小学校家庭科の授業設計を受講生各自ができるようにする。学級単位の生徒理解、教育目的に沿った教材、時間系列に合わせた指示や発問なども含めた具体的な計画を作成できることをめざす。年間計画、実習室の管理などへの配慮もできるようにしたい。	2	(2)	演　習	3		
音楽科教育実践指導法B（初等）	附属学校での授業記録を題材として、授業の分析方法について学習する。その際、教師の働きかけが児童の音楽活動にどのように関わっているのかを詳細に検討する。総まとめとして模擬授業を行い、音楽の授業において必要とされる指揮、ピアノ伴奏、歌唱などの音楽的技能の実践的な育成をはかる。	2	(2)	演　習	3		

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	小履修型	中履修型
美術科教育実践指導法B（初等）	図画工作・美術科に焦点を当て、3年次での教育実習との関連に配慮しつつ、2年次生の協力を得ながら、当該単元に関する教材研究および学習指導案の作成や模擬授業などを通して、図画工作・美術科の授業づくりを体験的に学ぶ。	2	(2)	演　習	3		
体育・健康教育実践指導法B（初等）	小学校体育科に焦点をあて、3年次教育実習（附属小学校）における授業づくりに向けて教材づくりと指導過程を構想することによって教育実習をより有益なものにするとともに、授業検討会を通じて授業づくりに向けての視点を習得する。	2	(2)	演　習	3		
国語科教育実践指導法B（中等）	中学校国語科の授業づくりを基本とする。2年次とともに附属中学校における教育実習での授業づくりの過程をもとに、中学校国語科の指導目標及び指導内容の理解を深めさせるとともに、教材研究や指導計画の作成、授業設計等を実地に体験させつつ、よりよい国語の授業づくりについて研究、考察させる。	2	(2)	演　習	3		取得しようとする免許状の科目、2単位選択必修
社会科教育実践指導法B（中等）	中学校社会科に焦点をあて、3年次での附属中学校における教育実習との関連に配慮しつつ、2年次生の協力を得ながら、当該単元に関する教材開発及び学習指導案の作成や授業分析などを通して、社会科の授業づくりを体験的に学ぶ。	2	(2)	演　習	3		
英語科教育実践指導法B（中等）	前半は、教科専門（主に音声学、児童英米文学）等の講義を中心として教材研究。後半は、教科教育の立場からの授業分析。	2	(2)	演　習	3		
数学科教育実践指導法B（中等）	数学科の授業の構成の仕方を実践的に学ぶことを目的とする。教育実習を経験した直後の3年生にとっては、2年生と共同学習することによって自分の実習を反省的に分析するとともに、次年度の教育実習の準備も含まれている。	2	(2)	演　習	3		
理科教育実践指導法B（中等）	中等教育教員養成課程3年生に対して、理科教育実践研究Aでの学習を基礎に、授業の指導案を作成し、その実践と相互評価を通して、理科授業を実践する力を養うことを目的とする。	2	(2)	演　習	3		
技術科教育実践指導法B（中等）	自分がイメージする授業を行うことを前提として、専門的な教材研究と教材作成を行い、様々な教授スキルを習得しながら模擬授業を行う。授業後には授業検討会を行い、自分自身の授業に対して客観的に分析する。	2	(2)	演　習	3		
家庭科教育実践指導法B（中等）	中学校家庭科の授業設計を受講生各自ができるようにする。学級単位の生徒理解、教育目的に沿った教材、時間系列に合わせた指示や発問なども含めた具体的な計画を作成できることをめざす。年間計画、技術科との連携、実習室の管理などへの配慮もできるようにしたい。	2	(2)	演　習	3		
音楽科教育実践指導法B（中等）	附属学校での授業記録を題材として、授業の分析方法について学習する。その際、教師の音楽的技能や意思伝達能力等が音楽科の授業運営にどのように関わっているのかなどを詳細に検討する。総まとめとして模擬授業を行い、音楽の授業において必要とされる指揮、ピアノ伴奏、歌唱などの音楽的技能の実践的な育成をはかる。	2	(2)	演　習	3		
美術科教育実践指導法B（中等）	図画工作・美術教育における教育内容、教材・題材に関する従来の事例を検討し、その成果のもとそれらの開発を新たに行う。また指導案事例を参考に図画工作・美術科授業の構造を学び、教材・題材の効果的な運用のあり方を考察し、授業運営能力を育成する。	2	(2)	演　習	3		

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	小履修型	中履修型
保健体育科教育実践指導法B（中等）	中学校保健体育科に焦点をあて、3年次教育実習（附属中学校）における授業づくりに向けて教材づくりと指導過程を構想することによって教育実習をより有益なものにするとともに、授業検討会を通じて授業づくりに向けての視点を習得する。	2	(2)	演習	3		
特別支援教育理解	特別支援教育講座の全教員が担当する1年次対象の講義である。特別支援教育とその周辺領域を網羅し、基本的理解を得られるよう、キャップハンディ体験等を入れ込んで授業を展開する。	2	(2)	講義	1	必修	必修
教育課程と教育方法	学校で計画的・系統的・意図的な教育活動を実施するための教育課程編成（カリキュラム・マネジメント）をどのように行うか。授業実践で子どもたちの学習要求・課題に即して、いかなる方法・技術を選択・実施し、評価するのか。以上の点について理論的・実践的知見を学ぶ。また、情報機器を授業の中でいかに活用すべきかについても学ぶ。	2	(2)	講義	2	必修	必修
道徳の理論と指導	道徳に関する心理学等の諸理論を踏まえつつ、学校教育における道徳教育のあり方を実際的に検討する。学校における道徳教育の実際、道徳教育の諸理論、道徳教育の課題などについて解説する。指導案づくりや模擬授業の実施なども予定している。	2	(2)	講義	3	必修	必修
総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	総合的な学習の時間を指導するために必要な、原理と方法について、すぐれた実践例を踏まえて理解する。特に、総合的な学習の時間における「探究」のあり方と、単元構成と学習展開の具体的方法についての理解を深める。また、総合的な学習の時間と関連性の深い、特別活動を指導するための原理と方法についても理解する。	2	(2)	講義	3	必修	必修
児童・生徒理解（生徒・進路指導論を含む。）	児童・生徒理解上の課題と対応について講義する。理解とはどんなことかを、児童・生徒理解、学級集団、進路指導、カウンセリング等を通して考察する。その中で、被教育者であったこれまでの立場と教師の立場とを相互に行き交いながら、教師の訓練的側面について考察する。	2	(2)	講義	3	必修	必修
教育相談（カウンセリングを含む。）	「不登校」を含め子どもが直面する「心身症」「いじめ」「自殺」など様々の危機について、その現象と対応の両面から理解する。教育相談活動における相談的・個別的・受容的指導の重要性について学び、カウンセリングの体験学習を通じてカウンセリングの理論と技法の基礎を習得する。あわせて学校内外の関係機関の理解とその連携について学ぶ。	2	(2)	講義	3	必修	必修
小学校3年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）		3		実習（事前・事後指導は講義）	3	必修	
中学校3年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）		3		実習（事前・事後指導は講義）	3		必修
小学校4年次実習（事前・事後指導1単位を含む。）		4		実習（事前・事後指導は講義）	4	必修	

授業科目名	授　業　概　要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	小履修型	中履修型
中学校4年次実習(事前・事後指導1単位を含む。)		4		実　習(事前・事後指導は講義)	4		必　修
教職実践演習(幼・小)	幼稚園・小学校教諭にふさわしい資質や諸能力の確認をし、これまでの履修のあり方をまとめ上げると共に、実際の授業力に結びつける形で学修の内容の総まとめを行う。	2	(2)	演　習	4	必　修	
教職実践演習(中・高)	中学校・高等学校教諭にふさわしい資質や諸能力の確認をし、これまでの履修のあり方をまとめ上げると共に、実際の授業力に結びつける形で学修の内容の総まとめを行う。	2	(2)	演　習	4		必　修

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

2 専門教育科目　その2　小学校の教科科目

【小履修型のみ】(20単位)

小学校の教科科目は、小学校の各教科に関する専門知識を習得し、教科指導の基礎となる確かな学力を身につけるための科目です。小履修型の学生は、これを20単位修得する必要があります。

小学校の教科科目の詳細と履修方法については、第8章掲載の**「授業科目表7」(53ページ)**を確認してください。

なお、小学校の教科科目はすべて、所属するコース、専攻によって履修できるクラスが定められています。**クラス指定については、『開講科目一覧』の指示を確認してください。**

3 専門教育科目　その3　中学校の教科科目

【中履修型のみ】(32単位以上)

中学校の教科科目は、中学校の教科に関する深い専門性を獲得するための科目で、本学における必要単位数は、教育職員免許法で定められている単位数を超えて設定されています。中履修型の学生は、下記の①～③の要領で32単位以上修得してください。

①**本章末尾に掲載した「7 免許法相当科目表」(127ページ～138ページ)**のうち、取得を希望する免許状の教科に対応する表を確認する。

②**上記の表に掲載されている科目のうち、「必修」「選択必修」の科目を含めて、合計32単位以上修得する。**

③各科目の授業情報（授業概要・単位数・対象年次等。ただし、必修・選択必修の指示は「7 免許法相当科目表」に従うこと。）については、**第9章掲載の「授業科目表9」(82ページ～105ページ)**のうち、教科に対応する専攻の表で確認する。

4 専門教育科目　その4　特別支援専門科目

(31単位以上)

特別支援専門科目は、特別支援教育全般に関する専門的な知識と指導力を身につけるとともに、所属するコースの領域に応じた専門性を培うための科目です。自分の所属するコースの専門科目を履修してください。

特別支援専門科目の授業科目の詳細と履修方法については、所属するコースに応じて、**「授業科目表10－①」から「授業科目表10―④」まで（118ページ～126ページ）**の、該当する表を確認してください。

5 専門教育科目　その5　卒業研究（6単位）

卒業研究は、全課程に共通して設定されている科目です。その内容、方法、履修の手順等は、所属する課程、コース、専攻ごとに定められています。また、卒業研究には参加資格があり、これに関しても課程、コース、専攻によって必要単位数が異なります。

卒業研究の履修に関しては、**第14章（149ページ～150ページ）**の説明を確認してください。

6 自由選択科目（小履修型は2単位以上、中履修型は6単位以上）

自由選択科目は、本学で開設しているすべての授業科目から自由に選択して単位を修得する科目です。

教育課程表には授業区分ごとに卒業に必要な単位数が示されていますが、その数を超えて修得した単位は、自由選択科目の単位とすることができます。また、所属する課程の教育課程表・授業科目表に示されている科目以外の授業科目（他の課程の授業科目、情報処理専門教育科目、資格取得関連科目）を履修し、単位を修得した場合も、それを自由選択科目の単位とすることができます。

特別支援教育教員養成課程の学生は、その他の授業区分の必要単位を満たしたうえで、さらに小履修型は2単位以上、中履修型は6単位以上、自由選択科目の単位を修得してください。

授業科目表10ー①（視覚障害教育コース・特別支援専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて31単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
特別支援教育基礎理論	我々が持つ障害児のイメージはかなり疑わしく、誤解と偏見と差別に満ちていることが多い。この講義では、特別支援教育の理念・歴史・思想・制度等の基礎を把握し、こうした疑わしいイメージを払拭して、この教育が「教育の原点」と言われることの意味を探ることをねらいとする。	2	(2)	講　義	2	必　修
視覚障害の心理・生理・病理	視覚障害は視力、視野、色覚等の視機能の永続的低下であり、こうした機能や視覚障害に至る主な疾患について解説する。その上で全盲者や弱視者の心理的特性を探り、理解を深める。	2	(2)	講　義	2	必　修
視覚障害の教育課程・指導論	視覚障害児の学習には各教科に触覚や聴覚を活用するさまざまな工夫や教材教具が必要である。ここでは実体験も取り入れて具体的な指導方法を講述し、視覚障害のある幼児、児童、生徒の教育支援のあり方を検討する。	2	(2)	講　義	2	必　修
視覚障害への教育支援A	通常の教育環境では学習に困難が生じる視覚障害児の教育上の支援の課題について、自立活動に関連する内容を中心に理解を深め支援の方法を探る。	2	(2)	講　義	2	必　修
視覚障害への教育支援B	視覚障害児童生徒の将来の自立に向けた適切な支援の内容とその方策について、課題の設定からその解決をめざす指導内容と方法まで多角的に検討する。	2	(2)	講　義	2	必　修
聴覚・言語障害の心理・生理・病理	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒の心理に関し、生命活動の調整という視点から「言語」や「コミュニケーション」の問題に迫っていく。	2	(2)	講　義	2	8単位以上選択必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
聴覚・言語障害の教育課程・指導論	教育的係わり合いの場における係わり手と係われられ手のコミュニケーションの成立・促進に関する重要な諸点について事例をもとに解説し、それらを学校教育の中で展開する際に教育課程の編成とどのように関連をもたせるかを講義する。	2	(2)	講　義	2	
聴覚・言語障害への教育支援A	この講義では、聴覚障害児に対する教育支援のあり方について、聴覚障害やコミュニケーション手段（聴能・手話・読話等）の基本知識、聴覚障害教育の歴史的変遷、聴覚障害児の教育的ニーズに応じた指導方法を学ぶ。あわせてその関連領域である言語学、発達心理学、認知心理学等も学習する。	2	(2)	講　義	2	
聴覚・言語障害への教育支援B	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒に対する教育支援のあり方について、実践事例をもとに検討を進め、よりよい「教育的係わり合い」とは何かを検討する。	2	(2)	講　義	2	
知的障害の心理・生理・病理	知的障害及び関連する諸障害の定義及び関係諸概念、生理・病理的背景等について理解を深めるとともに、困難状況の把握と教育支援の方法に関する心理学的アプローチを学ぶことをねらいとする。	2	(2)	講　義	2	
知的障害の教育課程・指導論	特別支援教育とは、一斉指導だけでは不十分な子どもに対し、本人の固有なニーズを的確に把握し、必要な支援を提供する教育である。多くの子どもたちは生活や学習の困難を示しており、この講義では、それらを改善・克服するための教育内容、指導の理論と技術及び親支援について学習する。	2	(2)	講　義	2	
病弱の心理・生理・病理	障害や教育的ニーズの側面から明確な概念規定が難しい慢性疾患児・病弱児の置かれた生活行動における課題状況の分析と指導方法・内容を検討する。あわせて、特別支援学校や地域の学校等での指導・支援の実践や、小児病院などでの療育活動について紹介する。	2	(2)	講　義	2	
病弱の教育課程・指導論	病弱・身体虚弱について理解し、病弱・身体虚弱の児童生徒の教育課程と指導法について理解を深める。	2	(2)	講　義	2	
肢体不自由の心理・生理・病理	運動障害児・運動障害を併せもつ重症疾患児の置かれた生活行動における課題状況の分析とそれに基づく支援の方法・内容を検討する。あわせて、通常学校における運動障害児・病弱児の適応とその支援に関しても検討する。	2	(2)	講　義	2	
肢体不自由の教育課程・指導論	肢体不自由について理解し、肢体不自由の児童生徒の教育課程と指導法について理解を深める。	2	(2)	講　義	2	
軽度発達障害への教育支援A	特別支援教育に関するいくつかのテーマ（AD/HD 等）を取り上げて詳述する。	2	(2)	講　義	2	必　修
軽度発達障害への教育支援B	この講義では、その多くが通常学級に在籍する学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）などいわゆる知的障害を伴わない発達障害についてその定義・学習困難の特徴・行動上の問題と具体的対応について理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講　義	2	必　修
重度・重複障害への教育支援	特別支援教育における重度・重複障害教育のあり方について、その基本的定義から歴史的変遷、指導の実際を学ぶ。特に、コミュニケーションと探索活動という教育上の主要なテーマについて詳細に取り上げる。	2	(2)	講　義	2	必　修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
特別支援教育総論	国際社会ではインクルージョンの実現を目指している。なかでも障害のある人とない人との共生の在り方について、多様な形態とその実現のための具体的な工夫が求められている。特別支援教育理解で学習した基礎を土台にして5領域すべてにわたって専門的観点からの検討を行う。	2	(2)	講　義	2	必　修
視覚障害への教育支援演習A	視覚障害事例に対する支援方法等に関する情報（文献、映像、実際の現場での見聞等）をもとに検討し、その理解を深める。 また、それを通して視覚障害教育領域での研究方法を学び、卒業研究での取り組みに発展させる。	2	(2)	演　習	3	2単位以上選択必修
視覚障害への教育支援演習B	視覚障害児の発達と支援、教育と指導法、視覚障害者の生活と職業等に関する文献や資料を講読し研究討議を行う。また、視覚障害に関係する施設見学も取り入れて視覚障害教育への理解を深め、各自が卒業研究のテーマをつかめるようにする。	2	(2)	演　習	3	
視覚障害への教育支援演習C	視覚障害者の心理・生理・病理に関する内外の研究論文を講読し、視覚障害に関する研究の動向や研究方法を学ぶ。この中で各自の卒業研究のテーマを探る。	2	(2)	演　習	3	
特別支援学校教育実習（事前・事後指導1単位を含む）	特別支援学校で実習する。事前指導第1回目に、詳細についての説明を行う。	3		実　習	4	必　修

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表10ー②（聴覚・言語障害教育コース・特別支援専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて31単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
特別支援教育基礎理論	我々が持つ障害児のイメージはかなり疑わしく、誤解と偏見と差別に満ちていることが多い。この講義では、特別支援教育の理念・歴史・思想・制度等の基礎を把握し、こうした疑わしいイメージを払拭して、この教育が「教育の原点」と言われることの意味を探ることをねらいとする。	2	(2)	講　義	2	必　修
聴覚・言語障害の心理・生理・病理	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒の心理に関し、生命活動の調整という視点から「言語」や「コミュニケーション」の問題に迫っていく。	2	(2)	講　義	2	必　修
聴覚・言語障害の教育課程・指導論	教育的係わり合いの場における係わり手と係われられ手のコミュニケーションの成立・促進に関する重要な諸点について事例をもとに解説し、それらを学校教育の中で展開する際に教育課程の編成とどのように関連をもたせるかを講義する。	2	(2)	講　義	2	必　修
聴覚・言語障害への教育支援A	この講義では、聴覚障害児に対する教育支援のあり方について、聴覚障害やコミュニケーション手段（聴能・手話・読話等）の基本知識、聴覚障害教育の歴史的変遷、聴覚障害児の教育的ニーズに応じた指導方法を学ぶ。あわせてその関連領域である言語学、発達心理学、認知心理学等も学習する。	2	(2)	講　義	2	必　修
聴覚・言語障害への教育支援B	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒に対する教育支援のあり方について、実践事例をもとに検討を進め、よりよい「教育的係わり合い」とは何かを検討する。	2	(2)	講　義	2	必　修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
視覚障害の心理・生理・病理	視覚障害は視力、視野、色覚等の視機能の永続的低下であり、こうした機能や視覚障害に至る主な疾患について解説する。その上で全盲者や弱視者の心理的特性を探り、理解を深める。	2	(2)	講義	2	8単位以上選択必修
視覚障害の教育課程・指導論	視覚障害児の学習には各教科に触覚や聴覚を活用するさまざまな工夫や教材教具が必要である。ここでは実体験も取り入れて具体的な指導方法を講述し、視覚障害のある幼児、児童、生徒の教育支援のあり方を検討する。	2	(2)	講義	2	
視覚障害への教育支援A	通常の教育環境では学習に困難が生じる視覚障害児の教育上の支援の課題について、自立活動に関連する内容を中心に理解を深め支援の方法を探る。	2	(2)	講義	2	
視覚障害への教育支援B	視覚障害児童生徒の将来の自立に向けた適切な支援の内容とその方策について、課題の設定からその解決をめざす指導内容と方法まで多角的に検討する。	2	(2)	講義	2	
知的障害の心理・生理・病理	知的障害及び関連する諸障害の定義及び関係諸概念、生理・病理的背景等について理解を深めるとともに、困難状況の把握と教育支援の方法に関する心理学的アプローチを学ぶことをねらいとする。	2	(2)	講義	2	
知的障害の教育課程・指導論	特別支援教育とは、一斉指導だけでは不十分な子どもに対し、本人の固有なニーズを的確に把握し、必要な支援を提供する教育である。多くの子どもたちは生活や学習の困難を示しており、この講義では、それらを改善・克服するための教育内容、指導の理論と技術及び親支援について学習する。	2	(2)	講義	2	
病弱の心理・生理・病理	障害や教育的ニーズの側面から明確な概念規定が難しい慢性疾患児・病弱児の置かれた生活行動における課題状況の分析と指導方法・内容を検討する。あわせて、特別支援学校や地域の学校等での指導・支援の実践や、小児病院などでの療育活動について紹介する。	2	(2)	講義	2	
病弱の教育課程・指導論	病弱・身体虚弱について理解し、病弱・身体虚弱の児童生徒の教育課程と指導法について理解を深める。	2	(2)	講義	2	
肢体不自由の心理・生理・病理	運動障害児・運動障害を併せもつ重症疾患児の置かれた生活行動における課題状況の分析とそれに基づく支援の方法・内容を検討する。あわせて、通常学校における運動障害児・病弱児の適応とその支援に関しても検討する。	2	(2)	講義	2	
肢体不自由の教育課程・指導論	肢体不自由について理解し、肢体不自由の児童生徒の教育課程と指導法について理解を深める。	2	(2)	講義	2	
軽度発達障害への教育支援A	特別支援教育に関するいくつかのテーマ（AD/HD 等）を取り上げて詳述する。	2	(2)	講義	2	必修
軽度発達障害への教育支援B	この講義では、その多くが通常学級に在籍する学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）などいわゆる知的障害を伴わない発達障害についてその定義・学習困難の特徴・行動上の問題と具体的対応について理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講義	2	必修
重度・重複障害への教育支援	特別支援教育における重度・重複障害教育のあり方について、その基本的定義から歴史的変遷、指導の実際を学ぶ。特に、コミュニケーションと探索活動という教育上の主要なテーマについて詳細に取り上げる。	2	(2)	講義	2	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
特別支援教育総論	国際社会ではインクルージョンの実現を目指している。なかでも障害のある人とない人との共生の在り方について、多様な形態とその実現のための具体的な工夫が求められている。特別支援教育理解で学習した基礎を土台にして5領域すべてにわたって専門的観点からの検討を行う。	2	(2)	講　義	2	必　修
聴覚・言語障害への教育支援演習A	この演習では、『教育的係わり合い』の場において生じるさまざまな『障害状況』を対象に、実践を進める際に必要な『教育』、『言語』、『行動』、『コミュニケーション』を中心に、学生が自らの価値観と対峙させながら考え、『教育的係わり合い』の基本的視点について整理し、卒業研究に繋げていければと考えている。	2	(2)	演　習	3	2単位以上選択必修
聴覚・言語障害への教育支援演習B	研究法についての基本的知識を学びながら、実際の教育支援において重要となるケースへの係わりの視点や指導の構造などについて、文献紹介を基本に解説する。また参加学生が各自の関心あるテーマについてそれぞれに調べレポートを作成する。	2	(2)	演　習	3	
聴覚・言語障害への教育支援演習C	聴覚障害児に対する教育支援では、コミュニケーションと視覚的伝達が指導の基本的視点となる。乳幼児期－児童期における支援の取り組みを紹介しながら、聴覚障害児の視覚的注意の調整、手話を主とする視覚的伝達の調節、視覚的伝達と視覚教材との呈示等の方法を実践的に学ぶ。	2	(2)	演　習	3	
特別支援学校教育実習（事前・事後指導1単位を含む）	特別支援学校で実習する。事前指導第1回目に、詳細についての説明を行う。	3		実　習	4	必　修

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表10ー③（発達障害教育コース・特別支援専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて31単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
特別支援教育基礎理論	我々が持つ障害児のイメージはかなり疑わしく、誤解と偏見と差別に満ちていることが多い。この講義では、特別支援教育の理念・歴史・思想・制度等の基礎を把握し、こうした疑わしいイメージを払拭して、この教育が「教育の原点」と言われることの意味を探ることをねらいとする。	2	(2)	講　義	2	必　修
知的障害の心理・生理・病理	知的障害及び関連する諸障害の定義及び関係諸概念，生理・病理的背景等について理解を深めるとともに，困難状況の把握と教育支援の方法に関する心理学的アプローチを学ぶことをねらいとする。	2	(2)	講　義	2	必　修
知的障害の教育課程・指導論	特別支援教育とは、一斉指導だけでは不十分な子どもに対し、本人の固有なニーズを的確に把握し、必要な支援を提供する教育である。多くの子どもたちは生活や学習の困難を示しており、この講義では、それらを改善・克服するための教育内容、指導の理論と技術及び親支援について学習する。	2	(2)	講　義	2	必　修
視覚障害の心理・生理・病理	視覚障害は視力、視野、色覚等の視機能の永続的低下であり、こうした機能や視覚障害に至る主な疾患について解説する。その上で全盲者や弱視者の心理的特性を探り、理解を深める。	2	(2)	講　義	2	12単位以上選択必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
視覚障害の教育課程・指導論	視覚障害児の学習には各教科に触覚や聴覚を活用するさまざまな工夫や教材教具が必要である。ここでは実体験も取り入れて具体的な指導方法を講述し、視覚障害のある幼児、児童、生徒の教育支援のあり方を検討する。	2	(2)	講義	2	
視覚障害への教育支援A	通常の教育環境では学習に困難が生じる視覚障害児の教育上の支援の課題について、自立活動に関連する内容を中心に理解を深め支援の方法を探る。	2	(2)	講義	2	
視覚障害への教育支援B	視覚障害児童生徒の将来の自立に向けた適切な支援の内容とその方策について、課題の設定からその解決をめざす指導内容と方法まで多角的に検討する。	2	(2)	講義	2	
聴覚・言語障害の心理・生理・病理	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒の心理に関し、生命活動の調整という視点から「言語」や「コミュニケーション」の問題に迫っていく。	2	(2)	講義	2	
聴覚・言語障害の教育課程・指導論	教育的係わり合いの場における係わり手と係われられ手のコミュニケーションの成立・促進に関する重要な諸点について事例をもとに解説し、それらを学校教育の中で展開する際に教育課程の編成とどのように関連をもたせるかを講義する。	2	(2)	講義	2	
聴覚・言語障害への教育支援A	この講義では、聴覚障害児に対する教育支援のあり方について、聴覚障害やコミュニケーション手段（聴能・手話・読話等）の基本知識、聴覚障害教育の歴史的変遷、聴覚障害児の教育的ニーズに応じた指導方法を学ぶ。あわせてその関連領域である言語学、発達心理学、認知心理学等も学習する。	2	(2)	講義	2	
聴覚・言語障害への教育支援B	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒に対する教育支援のあり方について、実践事例をもとに検討を進め、よりよい「教育的係わり合い」とは何かを検討する。	2	(2)	講義	2	
病弱の心理・生理・病理	障害や教育的ニーズの側面から明確な概念規定が難しい慢性疾患児・病弱児の置かれた生活行動における課題状況の分析と指導方法・内容を検討する。あわせて、特別支援学校や地域の学校等での指導・支援の実践や、小児病院などでの療育活動について紹介する。	2	(2)	講義	2	
病弱の教育課程・指導論	病弱・身体虚弱について理解し、病弱・身体虚弱の児童生徒の教育課程と指導法について理解を深める。	2	(2)	講義	2	
肢体不自由の心理・生理・病理	運動障害児・運動障害を併せもつ重症疾患児の置かれた生活行動における課題状況の分析とそれに基づく支援の方法・内容を検討する。あわせて、通常学校における運動障害児・病弱児の適応とその支援に関しても検討する。	2	(2)	講義	2	
肢体不自由の教育課程・指導論	肢体不自由について理解し、肢体不自由の児童生徒の教育課程と指導法について理解を深める。	2	(2)	講義	2	
軽度発達障害への教育支援A	特別支援教育に関するいくつかのテーマ（AD/HD 等）を取り上げて詳述する。	2	(2)	講義	2	必修
軽度発達障害への教育支援B	この講義では、その多くが通常学級に在籍する学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）などいわゆる知的障害を伴わない発達障害についてその定義・学習困難の特徴・行動上の問題と具体的対応について理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講義	2	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
重度・重複障害への教育支援	特別支援教育における重度・重複障害教育のあり方について、その基本的定義から歴史的変遷、指導の実際を学ぶ。特に、コミュニケーションと探索活動という教育上の主要なテーマについて詳細に取り上げる。	2	(2)	講義	2	必修
特別支援教育総論	国際社会ではインクルージョンの実現を目指している。なかでも障害のある人とない人との共生の在り方について、多様な形態とその実現のための具体的な工夫が求められている。特別支援教育理解で学習した基礎を土台にして5領域すべてにわたって専門的観点からの検討を行う。	2	(2)	講義	2	必修
知的障害への教育支援演習A	この演習では、知的障害・自閉症・LD・ADHD 等を含む内外の文献講読、レポート発表と討議、プロジェクト研究、学級又は施設見学を行い、これらを通じて発達障害児に関わる研究動向、教育・福祉・労働の現状と課題を把握し、卒業研究につながる基礎的研究方法を学ぶことをねらいとする。	2	(2)	演習	3	2単位以上選択必修
知的障害への教育支援演習B	卒業研究を進める上で必要となる基礎的スキルを身に付けるとともに、各自の研究課題を明確化していくことをねらいとする。	2	(2)	演習	3	
知的障害への教育支援演習C	卒業研究を進める上で必要となる基礎的スキルを身に付けるとともに、知的障害及び関連する諸障害に関する文献講読や宮城県内の特別支援学校の見学を通じて、各自の研究課題を明確化していくことをねらいとする。	2	(2)	演習	3	
特別支援学校教育実習（事前・事後指導1単位を含む）	特別支援学校で実習する。事前指導第1回目に、詳細についての説明を行う。	3		実習	4	必修

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表10ー④（健康・運動障害教育コース・特別支援専門科目）

当該コースの学生は、次の表の科目から、必修・選択必修を含めて31単位以上修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
特別支援教育基礎理論	我々が持つ障害児のイメージはかなり疑わしく、誤解と偏見と差別に満ちていることが多い。この講義では、特別支援教育の理念・歴史・思想・制度等の基礎を把握し、こうした疑わしいイメージを払拭して、この教育が「教育の原点」と言われることの意味を探ることをねらいとする。	2	(2)	講義	2	必修
病弱の心理・生理・病理	障害や教育的ニーズの側面から明確な概念規定が難しい慢性疾患児・病弱児の置かれた生活行動における課題状況の分析と指導方法・内容を検討する。あわせて、特別支援学校や地域の学校等での指導・支援の実践や、小児病院などでの療育活動について紹介する。	2	(2)	講義	2	必修
病弱の教育課程・指導論	病弱・身体虚弱について理解し、病弱・身体虚弱の児童生徒の教育課程と指導法について理解を深める。	2	(2)	講義	2	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
肢体不自由の心理・生理・病理	運動障害児・運動障害を併せもつ重症疾患児の置かれた生活行動における課題状況の分析とそれに基づく支援の方法・内容を検討する。あわせて、通常学校における運動障害児・重症疾患児の適応とその支援に関しても検討する。	2	(2)	講義	2	必修
肢体不自由の教育課程・指導論	肢体不自由について理解し、肢体不自由の児童生徒の教育課程と指導法について理解を深める。	2	(2)	講義	2	必修
視覚障害の心理・生理・病理	視覚障害は視力、視野、色覚等の視機能の永続的低下であり、こうした機能や視覚障害に至る主な疾患について解説する。その上で全盲者や弱視者の心理的特性を探り、理解を深める。	2	(2)	講義	2	8単位以上選択必修
視覚障害の教育課程・指導論	視覚障害児の学習には各教科に触覚や聴覚を活用するさまざまな工夫や教材教具が必要である。ここでは実体験も取り入れて具体的な指導方法を講述し、視覚障害のある幼児、児童、生徒の教育支援のあり方を検討する。	2	(2)	講義	2	
視覚障害への教育支援A	通常の教育環境では学習に困難が生じる視覚障害児の教育上の支援の課題について、自立活動に関連する内容を中心に理解を深め支援の方法を探る。	2	(2)	講義	2	
視覚障害への教育支援B	視覚障害児童生徒の将来の自立に向けた適切な支援の内容とその方策について、課題の設定からその解決をめざす指導内容と方法まで多角的に検討する。	2	(2)	講義	2	
聴覚・言語障害の心理・生理・病理	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒の心理に関し、生命活動の調整という視点から「言語」や「コミュニケーション」の問題に迫っていく。	2	(2)	講義	2	
聴覚・言語障害の教育課程・指導論	教育的係わり合いの場における係わり手と係われられ手のコミュニケーションの成立・促進に関する重要な諸点について事例をもとに解説し、それらを学校教育の中で展開する際に教育課程の編成とどのように関連をもたせるかを講義する。	2	(2)	講義	2	
聴覚・言語障害への教育支援A	この講義では、聴覚障害児に対する教育支援のあり方について、聴覚障害やコミュニケーション手段（聴能・手話・読話等）の基本知識、聴覚障害教育の歴史的変遷、聴覚障害児の教育的ニーズに応じた指導方法を学ぶ。あわせてその関連領域である言語学、発達心理学、認知心理学等も学習する。	2	(2)	講義	2	
聴覚・言語障害への教育支援B	この講義では、聴覚や言語に障害のある幼児、児童又は生徒に対する教育支援のあり方について、実践事例をもとに検討を進め、よりよい「教育的係わり合い」とは何かを検討する。	2	(2)	講義	2	
知的障害の心理・生理・病理	知的障害及び関連する諸障害の定義及び関係諸概念、生理・病理的背景等について理解を深めるとともに、困難状況の把握と教育支援の方法に関する心理学的アプローチを学ぶことをねらいとする。	2	(2)	講義	2	
知的障害の教育課程・指導論	特別支援教育とは、一斉指導だけでは不十分な子どもに対し、本人の固有なニーズを的確に把握し、必要な支援を提供する教育である。多くの子どもたちは生活や学習の困難を示しており、この講義では、それらを改善・克服するための教育内容、指導の理論と技術及び親支援について学習する。	2	(2)	講義	2	
軽度発達障害への教育支援A	特別支援教育に関するいくつかのテーマ（AD/HD 等）を取り上げて詳述する。	2	(2)	講義	2	必修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
軽度発達障害への教育支援B	この講義では、その多くが通常学級に在籍する学習障害（LD）、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）などいわゆる知的障害を伴わない発達障害についてその定義・学習困難の特徴・行動上の問題と具体的対応について理解を深めることをねらいとする。	2	(2)	講義	2	必修
重度・重複障害への教育支援	特別支援教育における重度・重複障害教育のあり方について、その基本的定義から歴史的変遷、指導の実際を学ぶ。特に、コミュニケーションと探索活動という教育上の主要なテーマについて詳細に取り上げる。	2	(2)	講義	2	必修
特別支援教育総論	国際社会ではインクルージョンの実現を目指している。なかでも障害のある人とない人との共生の在り方について、多様な形態とその実現のための具体的な工夫が求められている。特別支援教育理解で学習した基礎を土台にして5領域すべてにわたって専門的観点からの検討を行う。	2	(2)	講義	2	必修
肢体不自由への教育支援演習	肢体不自由に関する研究論文をできるだけ多く講読し、肢体不自由に関する研究の動向や研究方法を学ぶ。そして、各自の卒業研究論文につなげていく。	2	(2)	演習	3	2単位以上選択必修
病弱への教育支援演習A	慢性疾患児・運動障害児および運動障害を併せもつ重症疾患児の心理社会的発達及び病状変動等を把握するための各種の標準的な心理・発達検査法、ならびに情報通信技術を活用した生活行動の分析とそれに基づく支援方法に関する実習と討論を行う。	2	(2)	演習	3	
病弱への教育支援演習B	臨床心理学や適応支援領域における教育支援に関連する調べ学習や先行研究・文献等の探索・学習を通して、各自の研究課題の発見や卒業研究に向けた準備・練習ともなる実践的な学びを行う。	2	(2)	演習	3	
特別支援学校教育実習（事前・事後指導1単位を含む）	特別支援学校で実習する。事前指導第1回目に、詳細についての説明を行う。	3		実習	4	必修

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

7 免許法相当科目表

国　語

次の表の科目から、必修・選択必修を含めて32単位以上修得してください。

免許法に定める区分	授業科目名	卒業に要する単位 単位数 必修	卒業に要する単位 単位数 選択	免許法相当科目 中学校	免許法相当科目 高等学校	備考
国語学（音声言語及び文章表現に関するものを含む）	国語学概論	2		○	○	音声言語及び文章表現に関するものを含む。
	国語学講義A		2	○	○	
	国語学講義B		2	○	○	
	国語学演習A		2	○	○	
	国語学演習B		2	○	○	
	国語学演習C		2	○	○	
	国語学演習D		2	○	○	
国文学（国文学史を含む）	国文学概論	2		○	○	
	国文学講義A		2	○	○	
	国文学講義B		2	○	○	
	国文学演習A		2	○	○	
	国文学演習B		2	○	○	
	国文学演習C		2	○	○	
	国文学演習D		2	○	○	
	国文学史A	2		○	○	
	国文学史B	2		○	○	
漢文学	漢文学概論	2		○	○	
	漢文学講義A		2	○	○	
	漢文学講義B		2	○	○	
	漢文学演習A		2	○	○	
	漢文学演習B		2	○	○	
書道（書写を中心とする）	書道演習	2		○		

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程国語教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9－①」を確認すること。

社　会

次の表の科目から、必修・選択必修を含めて32単位以上修得してください。

免許法に定める区分			授業科目名	卒業に要する単位		免許法相当科目			備考
	高等学校			単位数			高等学校		
中学校	地理歴史	公民		必修	選択	中学校	地理歴史	公民	
日本史・外国史	日本史		日本史概論	2		○	○		
			日本史講義A		2	○	○		
			日本史講義B		2	○	○		
			日本史講義C		2	○	○		
			日本史講義D		2	○	○		
			日本史演習		2	○	○		
	外国史		外国史概論	2		○	○		
			外国史講義A		2	○	○		
			外国史講義B		2	○	○		
			外国史講義C		2	○	○		
			外国史講義D		2	○	○		
			外国史演習A		2	○	○		
			外国史演習B		2	○	○		
地理学（地誌を含む）	人文地理学・自然地理学		人文地理学概論	2		○	○		
			人文地理学講義		2	○	○		
			自然地理学概論	2		○	○		
			自然地理学講義		2	○	○		
			地理学実習A		2	○	○		
			地理学実習B		2	○	○		
			地理学演習A		2	○	○		
			地理学演習B		2	○	○		
	地誌		地誌学講義A		2 } 1科目以上選択必修	○	○		
			地誌学講義B		2	○	○		

免許法に定める区分			授業科目名	卒業に要する単位		免許法相当科目			備考
				単位数					
中学校	高等学校			必修	選択	中学校	高等学校		
	地理歴史	公民					地理歴史	公民	
「法律学、政治学」		「法律学（国際法を含む）、政治学（国際政治を含む）」	法律学概論		2 1科目以上選択必修	○		○	国際法を含む。
			政治学概論		2	○		○	国際政治を含む。
			法律学講義		2	○		○	
			法律学演習		2	○		○	
			政治学講義		2	○		○	
			政治学演習		2	○		○	
「社会学、経済学」		「社会学、経済学（国際経済を含む）」	社会学概論		2 1科目以上選択必修	○		○	
			経済学概論		2	○		○	国際経済を含む。
			社会学講義		2	○		○	
			社会学実習		2	○		○	
			社会学演習		2	○		○	
			経済学講義		2	○		○	
			経済学演習		2	○		○	
「哲学、倫理学、宗教学」		「哲学、倫理学、宗教学、心理学」	哲学概論	2		○		○	
			哲学講義		2	○		○	
			倫理学概論		2	○		○	
			倫理学講義		2	○		○	
			哲学演習		2	○		○	

注）この表のうち「　　」は、当該科目群のうちから1科目以上について修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程社会科教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9－②」を確認すること。

数　学

次の表の科目から、必修・選択必修を含めて32単位以上修得してください。

免許法に定める区分	授業科目名	卒業に要する単位 単位数 必修	卒業に要する単位 単位数 選択	免許法相当科目 中学校	免許法相当科目 高等学校	備考
代数学	代数学入門		2	○	○	
	代数学基礎講義		2	○	○	
	代数学講義A		2	○	○	
	代数学講義B		2	○	○	
	代数学講義C		2	○	○	
	線形代数学A		2	○	○	
	線形代数学B		2	○	○	
幾何学	幾何学入門A		2	○	○	
	幾何学入門B		2	○	○	
	幾何学講義A		2	○	○	
	幾何学講義B		2	○	○	
	幾何学講義C		2	○	○	
解析学	微分積分学A	4		○	○	
	微分積分学B	4		○	○	
	解析学入門		2	○	○	
	解析学基礎講義		2	○	○	
	解析学講義A		2	○	○	
	解析学講義B		2	○	○	
	解析学講義C		2	○	○	
「確率論、統計学」	確率論・統計学A	2		○	○	
	確率論・統計学B	2		○	○	
コンピュータ	コンピュータ	2		○	○	

注）この表のうち「　　」は、当該科目群のうちから1科目以上について修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程数学教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9－④」を確認すること。

理　科

次の表の科目から、必修・選択必修を含めて32単位以上修得してください。

免許法に定める区分	授業科目名	卒業に要する単位 単位数 必修	卒業に要する単位 単位数 選択	免許法相当科目 中学校	免許法相当科目 高等学校	備考
物理学	物理学講義Ⅰ	4		○	○	
	物理学講義Ⅱ A		2	○	○	
	物理学講義Ⅱ B		2	○	○	
	物理学講義Ⅱ C		2	○	○	
化学	化学講義Ⅰ	4		○	○	
	化学講義Ⅱ A		2	○	○	
	化学講義Ⅱ B		2	○	○	
	化学講義Ⅱ C		2	○	○	
生物学	生物学講義Ⅰ	4		○	○	
	生物学講義Ⅱ A		2	○	○	
	生物学講義Ⅱ B		2	○	○	
	生物学講義Ⅱ C		2	○	○	
地学	地学講義Ⅰ	4		○	○	
	地学講義Ⅱ A		2	○	○	
	地学講義Ⅱ B		2	○	○	
	地学講義Ⅱ C		2	○	○	
物理学実験（コンピュータ活用を含む）	物理学実験Ⅰ	2		○	○	
	物理学実験Ⅱ		2	○	○	
化学実験（コンピュータ活用を含む）	化学実験Ⅰ	2		○	○	
	化学実験Ⅱ		2	○	○	
生物学実験（コンピュータ活用を含む）	生物学実験Ⅰ	2		○	○	
	生物学実験Ⅱ		2	○	○	
地学実験（コンピュータ活用を含む）	地学実験Ⅰ	2		○	○	
	地学実験Ⅱ		2	○	○	

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程理科教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9－⑤」を確認すること。

本表に掲げた科目に加えて、138ページに掲げた別表「大学が独自に設定する科目」のうちから「理科」に関する科目を履修することができる。

技　術

次の表の科目から、必修・選択必修を含めて32単位以上修得してください。

免許法に定める区分		授業科目名	卒業に要する単位 単位数		免許法相当科目		備考
中学校	高等学校（工業）		必修	選択	中学校	高等学校（工業）	
木材加工（製図及び実習を含む）	工業の関係科目	木材加工入門	2		○	○	製図及び実習を含む。
		木材加工実験実習	2		○	○	
		木材加工応用		2	○	○	
金属加工（製図及び実習を含む）		金属加工入門	2		○	○	製図及び実習を含む。
		金属加工実験実習	2		○	○	
		製図	2		○	○	
		金属加工応用		2	○	○	
機械（実習を含む）		機械技術入門	2		○	○	
		機械技術実験実習	2		○	○	
		機械技術応用		2	○	○	
電気（実習を含む）		電気技術入門	2		○	○	
		電気技術基礎	2		○	○	
		電気技術実験実習	2		○	○	
		電気技術応用	2		○	○	
情報とコンピュータ（実習を含む）		情報工学入門	2		○	○	実習を含む。
		情報技術実験実習	2		○	○	
		情報技術		2	○	○	実習を含む。
		コンピュータネットワークの活用		2	○	○	
栽培（実習を含む）		教材植物入門	2		○		
		栽培実験実習	4		○		
		生物育成技術		2	○		
	職業指導	職業指導				○	

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程技術教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9－⑥」を確認すること。

家　庭

次の表の科目から、必修・選択必修を含めて32単位以上修得してください。

免許法に定める区分		授業科目名	卒業に要する単位 単位数		免許法相当科目		備考
中学校	高等学校		必修	選択	中学校	高等学校	
家庭経営学（家族関係学及び家庭経済学を含む）	家庭経営学（家族関係学及び家庭経済学を含む）	家庭の経営		2（1科目以上選択必修）	○	○	家族関係学及び家庭経済学を含む。
		家族と生活		2	○	○	家族関係学及び家庭経済学を含む。
被服学（被服製作実習を含む）	被服学（被服製作実習を含む）	被服の材料	2		○	○	
		編織学	2		○	○	
		生活と被服		2	○	○	
		被服学実験・実習A	1		○	○	被服製作実習を含む。
		被服学実験・実習B	1		○	○	被服製作実習を含む。
食物学（栄養学、食品学及び調理実習を含む）	食物学（栄養学、食品学及び調理実習を含む）	食品の科学	2		○	○	食品学を含む。
		食物と栄養	2		○	○	栄養学を含む。
		生活と食物		2	○	○	食品学を含む。
		食物学実験・実習A	1		○	○	調理実習を含む。
		食物学実験・実習B	1		○	○	調理実習を含む。
住居学	住居学（製図を含む）	生活と住居	2		○	○	
		住居と環境		2	○	○	
		住居学実験・実習A	1		○	○	製図を含む。
		住居学実験・実習B	1		○	○	
保育学（実習を含む）	保育学（実習及び家庭看護を含む）	発達と保育	2		○	○	
		家族と保育		2	○	○	
		保育学実験・実習A	1		○	○	実習を含む。
		保育学実験・実習B	1		○	○	実習を含む。
		健康の科学	2		○	○	家庭看護を含む。
	家庭電気・家庭機械・情報処理	情報科学	2			○	
		機械基礎	2			○	
		電気基礎	2			○	

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程家庭科教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9－⑦」を確認すること。

本表に掲げた科目の他に、138ページに掲げた別表「大学が独自に設定する科目」のうちから「家庭」に関する科目を履修することができる。

音　楽

次の表の科目から、必修・選択必修を含めて32単位以上修得してください。

免許法に定める区分	授業科目名	卒業に要する単位 単位数 必修	卒業に要する単位 単位数 選択	免許法相当科目 中学校	免許法相当科目 高等学校	備考
ソルフェージュ	ソルフェージュ	2		○	○	
声楽（合唱及び日本の伝統的な歌唱を含む）	声楽基礎	2		○	○	日本の伝統的な歌唱を含む。
	声楽ⅠA		1	○	○	
	声楽ⅠB		1	○	○	
	合唱	2		○	○	
器楽（合奏及び伴奏並びに和楽器を含む）	ピアノ基礎		2（1科目以上選択必修）	○	○	伴奏を含む。
	ピアノⅠ		2（1科目以上選択必修）	○	○	伴奏を含む。
	オルガン・チェンバロ		2	○	○	
	合奏（弦楽）		2（1科目以上選択必修）	○	○	
	合奏（吹奏楽）		2（1科目以上選択必修）	○	○	
	和楽器	2		○	○	
指揮法	指揮法	2		○	○	
	指揮実践演習		2	○	○	
音楽理論・作曲法（編曲法を含む）・音楽史（日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む）	キーボード・ハーモニー		2	○	○	
	音楽理論Ⅰ	2		○	○	作曲法、編曲法を含む。
	作曲演習		2	○	○	音楽理論、編曲法を含む。
	音楽学概論	2		○	○	音楽史、日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む。
	西洋音楽史		2（1科目以上選択必修）	○	○	
	日本音楽史		2（1科目以上選択必修）	○	○	日本の伝統音楽を含む。
	民族音楽学		2（1科目以上選択必修）	○	○	音楽史（諸民族の音楽を含む）

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程音楽教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9－⑧」を確認すること。

美　術

次の表の科目から、必修・選択必修を含めて32単位以上修得してください。

免許法に定める区分	授業科目名	卒業に要する単位 単位数 必修	卒業に要する単位 単位数 選択	免許法相当科目 中学校	免許法相当科目 高等学校	備考
絵画（映像メディア表現を含む）	絵画基礎	2		○	○	映像メディア表現を含む。
	絵画Ⅰ		2	○	○	
	絵画Ⅱ A		2	○	○	
	絵画Ⅱ B		2	○	○	
	映像表現A		2	○	○	
彫刻	彫塑基礎	2		○	○	
	彫塑Ⅰ		2	○	○	
	彫塑Ⅱ A		2	○	○	
	彫塑Ⅱ B		2	○	○	
デザイン（映像メディア表現を含む）	デザイン基礎	2		○	○	映像メディア表現を含む。
	デザインⅠ		2	○	○	
	デザインⅡ A		2	○	○	
	デザインⅡ B		2	○	○	
	映像表現B		2	○	○	
工芸	工芸基礎	2		○		
	工芸Ⅰ		2	○		
	工芸Ⅱ A		2	○		
	工芸Ⅱ B		2	○		
	クラフト		2	○		
美術理論・美術史（鑑賞並びに日本の伝統美術及びアジアの美術を含む）	美術理論・美術史基礎	2		○	○	鑑賞並びに日本の伝統美術及びアジアの美術を含む。
	美術理論・美術史		2	○	○	
	美術理論・美術史演習		2	○	○	
	鑑賞		2	○	○	

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程美術教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9－⑨」を確認すること。

保健体育

次の表の科目から、必修・選択必修を含めて32単位以上修得してください。

免許法に定める区分	授業科目名	卒業に要する単位 単位数 必修	卒業に要する単位 単位数 選択	免許法相当科目 中学校	免許法相当科目 高等学校	備考
体育実技	体育実技	2		○	○	
	器械運動	1		○	○	
	陸上競技	1		○	○	
	サッカーⅠ	1		○	○	
	バスケットボールⅠ	1		○	○	
	水泳	1		○	○	
	舞踊AⅠ	1		○	○	
	舞踊B	1		○	○	
	バレーボール	1		○	○	
	柔道		1（1科目以上選択必修）	○	○	
	剣道		1	○	○	
	特殊種目実技		1	○	○	
	遠泳		1	○	○	
	野外活動		1	○	○	
	スキー		1	○	○	
	サッカーⅡ		1	○	○	
	バスケットボールⅡ		1	○	○	
	舞踊AⅡ		1	○	○	
「体育原理、体育心理学、体育経営管理学、体育社会学、体育史」・運動学（運動方法学を含む）	体育原理・体育史		2（2科目以上選択必修）	○	○	
	体育心理学		2	○	○	
	体育経営管理学		2	○	○	
	体育社会学		2	○	○	
	スポーツバイオメカニクス	2		○	○	
	スポーツ運動学	2		○	○	運動方法学を含む。
生理学（運動生理学を含む）	人体生理学	2		○	○	運動生理学を含む。
	運動生理学実験	2		○	○	
衛生学・公衆衛生学	衛生・公衆衛生学	2		○	○	
学校保健（小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む）	学校保健	2		○	○	小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む。

注）この表のうち「　　」は、当該科目群のうちから1科目以上について修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程保健体育専攻の専攻専門科目「授業科目表9－⑩」を確認すること。

英　語

次の表の科目から、必修・選択必修を含めて32単位以上修得してください。

免許法に定める区分	授業科目名	卒業に要する単位 単位数 必修	卒業に要する単位 単位数 選択	免許法相当科目 中学校	免許法相当科目 高等学校	備考
英語学	英語音声学概論	2		○	○	
	英文法概論A	1		○	○	
	英文法概論B	1		○	○	
	英語学演習A		2	○	○	
	英語学演習B		2	○	○	
	英語学演習C		2	○	○	
	英語学演習D		2	○	○	
	現代文法論		2	○	○	
英語文学	英語文学作品論	2		○	○	
	英語文学テーマ論	2		○	○	
	英語文学演習A		2	○	○	
	英語文学演習B		2	○	○	
	英語文学論		2	○	○	
英語コミュニケーション	英会話A(中等)		2 (1科目以上選択必修)	○	○	
	英会話B(中等)		2	○	○	
	英会話C(中等)		2	○	○	
	英会話D(中等)		2	○	○	
	英作文A		1 (1科目以上選択必修)	○	○	
	英作文B		1	○	○	
異文化理解	異文化理解講読A		1 (1科目以上選択必修)	○	○	
	異文化理解講読B		1	○	○	
	異文化理解講読C		1	○	○	
	異文化理解講読D		1	○	○	
	英米文化論		2	○	○	
	日英対照言語学		2	○	○	
	西洋文化		2	○	○	

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程英語教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9－③」を確認すること。

別表　大学が独自に設定する科目

免許教科	授業科目名	単位数	備　考
理　科	理科教育学演習	2	
家　庭	家庭科特別講義A	2	
	家庭科特別講義B	2	
	家庭科演習	2	
	家庭科実験	2	
	材料加工	2	

XI

第１１章
教育実習

1 「教育実習とそれに直接関連した科目」の履修
(1)「教育実習とそれに直接関連した科目」とは
(2)「教育実習とそれに直接関連した科目」の目的
(3)各授業科目の履修方法
2 教育実習の履修資格
3 実習校・実習期間
4 教育実習の履修登録
5 教育実習履修の留意事項
(1)「教育実習生記録」の提出
(2)「事前・事後指導」
6 追実習
7 成績評価等
8 教育実習等特例措置

第11章 教育実習

1 「教育実習とそれに直接関連した科目」の履修

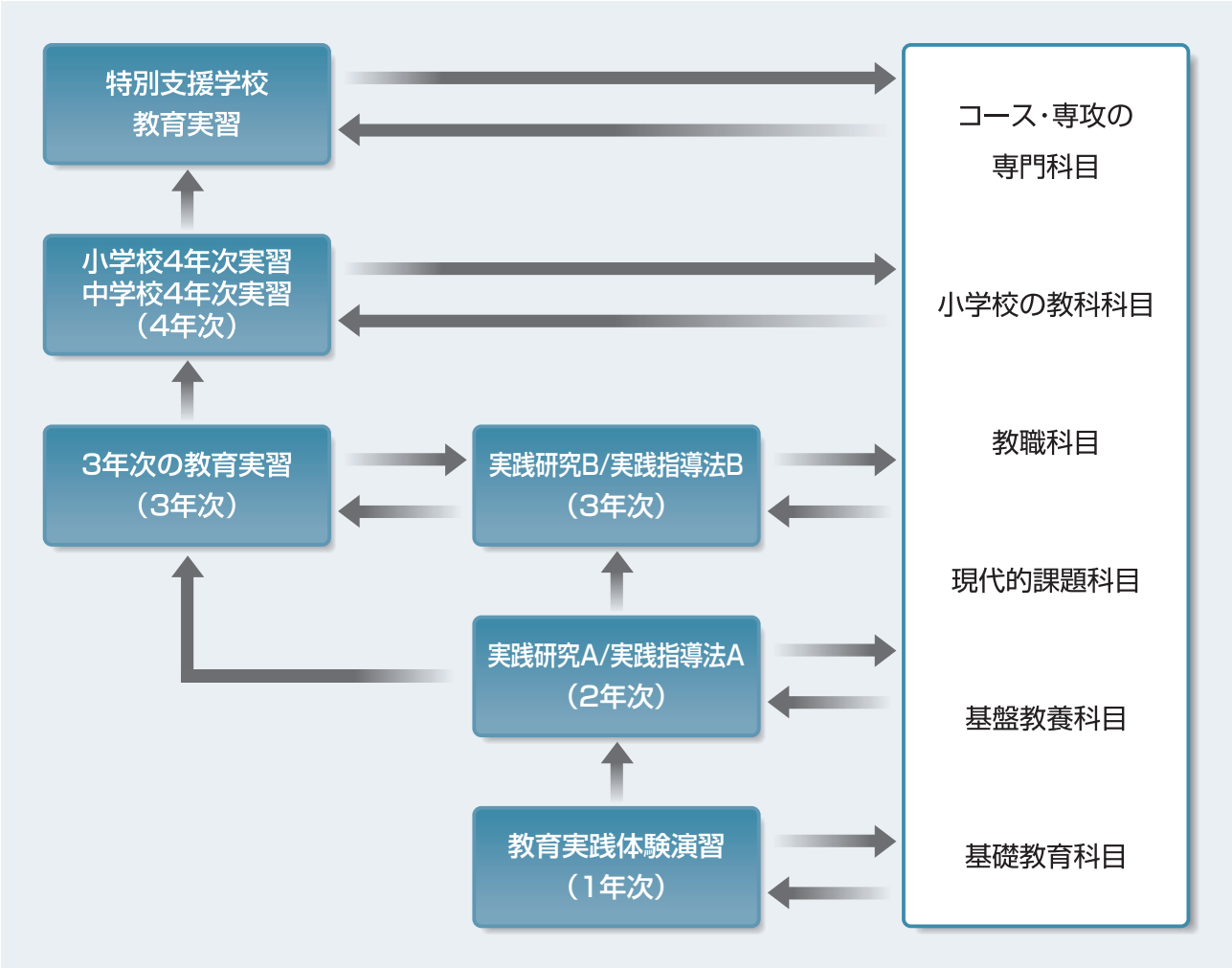
（1）「教育実習とそれに直接関連した科目」とは

「教育実習とそれに直接関連した科目」とは、次の授業科目のことです。

- 1年次の教育実践体験演習（○○実践体験演習）
- 2、3年次の実践研究 / 実践指導法（○○実践研究、○○教育実践指導法（初等）、○○教育実践指導法（中等））
- 3年次の教育実習（幼稚園実習、小学校3年次実習、中学校3年次実習）
- 小学校4年次実習
- 中学校4年次実習
- 特別支援学校教育実習

「3年次の教育実習」「小学校4年次実習」「中学校4年次実習」「特別支援学校教育実習」が教育実習と呼ばれる科目であり、それぞれ1単位の「事前・事後指導」が含まれています。

本学の教育課程における「教育実習とそれに直接関連した科目」の位置づけは、下図のとおりですので、それぞれの科目の意義や役割を十分理解したうえで履修してください。



(2)「教育実習とそれに直接関連した科目」の目的

教育現場での授業観察を含む「教育実践体験演習」、「実践研究 A/ 実践指導法 A」、「実践研究 B/ 実践指導法 B」は、学問体系に基づいた学修と教育現場での体験的な学修を有機的に結びつけるための科目です。これらの科目を1年次から3年次にかけて履修し、さらに3、4年次に教育実習を履修します。体験的な学修を1年次から4年次にかけて段階的に履修することで、問題意識を徐々に深めてゆくことを意図しています。

学問の大切さを知り、生涯にわたって学び続ける教員を養成することを目的とした科目です。

(3) 各授業科目の履修方法

「教育実習とそれに直接関連した科目」は、所属する課程・コース・専攻によって（特別支援教育教員養成課程の場合、履修型によって)、履修する必要のある授業が定められています。

各コース・専攻・履修型の学生が卒業までに単位を修得しなければならない科目と、その履修年次は、以下のとおりです。

【所属するコース・専攻・履修型と、履修する授業】

	初等教育教員養成課程	中等教育教員養成課程	特別支援教育教員養成課程	
			小履修型	中履修型
1年次（教育実践体験演習）	所属するコースの授業	所属する専攻の授業	所属するコースの授業	所属するコースの授業
2年次（実践研究 A）（実践指導法 A）	所属するコースの授業	所属する専攻の授業	初等教育教員養成課程のいずれかのコースの授業を選択（ただし、幼児教育実践研究 A を除く）	中等教育教員養成課程の、取得免許に関わる専攻の授業を選択
3年次（実践研究 B）（実践指導法 B）	所属するコースの授業	所属する専攻の授業	2年次で選択したコースと同じコースの授業を選択（ただし、幼児教育実践研究 B を除く）	中等教育教員養成課程の、取得免許に関わる専攻の授業を選択
（教育実習）	小学校3年次実習（幼児教育コースは幼稚園実習）	中学校3年次実習	小学校3年次実習	中学校3年次実習
4年次（教育実習）	小学校4年次実習	中学校4年次実習	小学校4年次実習 特別支援学校教育実習	中学校4年次実習 特別支援学校教育実習

2 教育実習の履修資格

すべての教育実習には、履修資格が設けられています。**教育実習履修の前年度末までに、次の表に示した要件を満たしていない場合、教育実習を履修することはできません。**指定された学年で教育実習を履修できない場合、4年間で卒業することができなくなりますので、表の下の注の部分も含めてきちんと理解してください。

3年次教育実習

下記の①～④の単位を含めて、合計49単位以上修得していること。

①	教職入門	2単位
②	教育の原理 発達と学習の心理 （いずれかを含めること）	4単位以上
	教育の制度・経営	
	教育と地域社会	
③	教育実践体験演習	2単位
④	幼稚園実習の場合	
	幼児教育実践研究A	4単位以上
	各保育内容指導法	
	各教科の教育法（初等）	
	小学校実習（特別支援の小履修型を含む）の場合	
	実践研究A又は実践指導法A	4単位以上
	各教科の教育法（初等）	
	中学校実習（特別支援の中履修型を含む）の場合	
	実践指導法A	2単位以上
	各教科の教育法（中等）	

4年次教育実習

下記の①～③のいずれも満たすこと。

①	卒業研究参加資格を有すること	
②	3年次教育実習を修得していること	
③	小学校実習（全課程共通）の場合	
	実践研究A、B又は実践指導法A、B	8単位以上
	各教科の教育法（初等）	
	中学校実習（特別支援の中履修型を除く）の場合	
	実践指導法A、B	4単位以上
	各教科の教育法（中等）	
	中学校実習（特別支援の中履修型）の場合	
	実践指導法A、B	4単位以上
	各教科の教育法（中等）	
	中学校の教科科目	18単位以上

高等学校実習

下記①～④のいずれも満たすこと。

①	卒業研究参加資格を有すること	
②	3年次教育実習を修得していること	
③	各教科の教育法（中等）	2単位以上
④	中学校の教科科目	18単位以上

※ただし、地歴、公民については20単位以上、また、理科の場合は、次のA～D群のいずれか1つの群から8単位以上修得していること。

A群		B群	
科目名	単位数	科目名	単位数
物理学講義Ⅰ	4	化学講義Ⅰ	4
物理学講義ⅡA	2	化学講義ⅡA	2
物理学講義ⅡB	2	化学講義ⅡB	2
物理学講義ⅡC	2	化学講義ⅡC	2
物理学実験Ⅰ	2	化学実験Ⅰ	2
物理学実験Ⅱ	2	化学実験Ⅱ	2
C群		**D群**	
科目名	単位数	科目名	単位数
生物学講義Ⅰ	4	地学講義Ⅰ	4
生物学講義ⅡA	2	地学講義ⅡA	2
生物学講義ⅡB	2	地学講義ⅡB	2
生物学講義ⅡC	2	地学講義ⅡC	2
生物学実験Ⅰ	2	地学実験Ⅰ	2
生物学実験Ⅱ	2	地学実験Ⅱ	2

特別支援学校教育実習

下記①～④のいずれも満たすこと。

①	小学校4年次実習または中学校4年次実習の参加資格を有すること
②	「特別支援教育基礎理論」2単位を修得していること
③	取得しようとする免許領域のうち主となるひとつの領域に関わる「心理・生理・病理」、「教育課程・指導論」、「教育支援演習」のうちから4単位以上を修得していること
④	「軽度発達障害への教育支援A」、「軽度発達障害への教育支援B」、「重度・重複障害への教育支援」、「特別支援教育総論」のうちから2単位以上を修得していること

《注》

1. 初等教育教員養成課程と中等教育教員養成課程の場合、「実践研究 A、B 又は実践指導法 A、B」は、所属するコース・専攻のものに限る。
2. 特別支援教育教員養成課程「小履修型」の場合、「実践研究 A、B 又は実践指導法 A、B」は、初等教育教員養成課程のいずれかのコースに関わる授業を履修すること。
3. 特別支援教育教員養成課程「中履修型」の場合、「実践指導法 A、B」は、中等教育教員養成課程のいずれかの専攻に関わる授業を履修すること。
4. 「各教科の教育法（中等）」および「中学校の教科科目」については、取得しようとする教科に関わるものに限る。
5. 「中学校の教科科目」とは、中等教育教員養成課程の専攻専門科目（取得しようとする教科に関わるもの）を指す。
6. 中等教育教員養成課程及び特別支援教育教員養成課程「中履修型」で、副免許状として幼稚園免許状取得のために小学校4年次実習を履修する場合、「実践研究 A、B 又は実践指導法 A、B」は所属する専攻のもの（特別支援教育教員養成課程の学生は選択したもの）をもって充てる。
7. 初等教育教員養成課程及び特別支援教育教員養成課程「小履修型」で、副免許状として高等学校免許状を希望し、中学校4年次実習を履修する場合は、「高等学校実習」の要件を満たすこと。
8. 初等教育教員養成課程及び中等教育教員養成課程で、副免許状として特別支援学校教諭免許状を取得希望の場合、希望者数が特別支援学校教育実習の受入人数を大幅に超える場合は、人数制限を行う可能性があります。

3 実習校・実習期間

教育実習（3年次教育実習、4年次教育実習）は、原則として、次の表に示すとおり実施します。

実施時期や、「事前・事後指導」の日程に関しては、**『開講科目一覧』を確認**してください。また、必要事項の連絡は、掲示によっても行いますので、**掲示にも注意**してください。

課　程	履修年次	コース・専攻	授業科目名	実習校	実習期間
初等教育教員養成課程	3年次	幼児教育コース	幼稚園実習	附属幼稚園	2週間
		上記以外のコース	小学校3年次実習	附属小学校	
	4年次	全てのコース	小学校4年次実習	協力小学校	3週間
中等教育教員養成課程	3年次	全ての専攻	中学校3年次実習	附属中学校	2週間
	4年次		中学校4年次実習	協力中学校	3週間
特別支援教育教員養成課程	3年次	小履修型	小学校3年次実習	附属小学校	2週間
		中履修型	中学校3年次実習	附属中学校	
	4年次	小履修型	小学校4年次実習	協力小学校	3週間
		中履修型	中学校4年次実習	協力中学校	
		全てのコース	特別支援学校教育実習	附属特別支援学校、または協力特別支援学校	2週間

4 教育実習の履修登録

各教育実習を履修するには、前年度の11月に「教育実習履修届」を提出しなければなりません。これを怠った場合は、翌年度に教育実習を履修することはできませんので、注意してください。

「教育実習履修届」提出に関する詳細については、掲示及びポータルサイトにてお知らせします。

5 教育実習履修の留意事項

（1）「教育実習生記録」の提出

各教育実習の履修にあたっては、そのつど、定められた期日までに「教育実習生記録」を提出しなければなりません。提出方法、提出時期等に関しては、掲示及びポータルサイトにてお知らせします。

（2）「事前・事後指導」

すべての教育実習には、「事前・事後指導」1単位が含まれており、事前指導を受けなければ実習を履修することはできません。**「事前・事後指導」の日程等に関しては、『開講科目一覧』を確認してください。**また、掲示及びポータルサイトも見落とさないようにしてください。

6 追実習

疾病その他のやむをえない理由によって、所定の期間に教育実習を履修できない場合、許可を得て別の期間に追実習を履修することができます。詳細は、教務課窓口にお問い合わせください。

7 成績評価等

各教育実習（「事前・事後指導」を含む）の成績評価は、実習校、各担当教員から提出される資料や、学生が提出する「教育実習日誌」等の資料をもとに、教育実習委員会が行います。

8 教育実習等特例措置

やむを得ない事情により教育実習等の科目を履修することができない場合は、学年担当教員と相談し承諾を得た上で、「教育実習等特例措置取扱要領」に従って教育実習等特例措置（以下「特例措置」という。）適用の申請をすることができます。特例措置適用の可否は大学による審査の上で決定されます。

特例措置の申請が認められた場合、その学生は、教育実習等の科目の代替科目を履修することになります。

しかし、その適用を受ける内容によっては、卒業時に教育職員免許状が取得できなくなります。

特例措置の願い出は、2年次授業期間終了時以降から特例措置を受けようとする各学期の開始前までに、教育実習等特例措置申請書（別記様式）を、学年担当教員の意見書を添えて、教務課に提出して、学長に許可を願い出てください。

ただし、最終年次学生については、やむを得ないと判断できる場合には、学期開始後においても申請を受理し、審査することがあります。

なお、申請にあたっては、3年次教育実習の履修資格を満たしている必要があります。

特例措置により免除が可能となる科目（免除科目）は、次のとおりです。

ただし、「実践研究Ｂ又は実践指導法Ｂ」を単独で申請することはできません。

また、幼稚園実習、小学校3年次実習、小学校4年次実習、特別支援学校教育実習（小履修型の学生）は、教職実践演習（幼・小）と組み合わせて申請しなければなりません。

中学校3年次実習、中学校4年次実習、特別支援学校教育実習（中履修型の学生）は、教職実践演習（中・高）と組み合わせて申請しなければなりません。

免　除　科　目	単　位　数
実践研究Ｂ又は実践指導法Ｂ	2
幼稚園実習（事前・事後指導1単位を含む）	3
小学校３年次実習（事前・事後指導1単位を含む）	3
小学校４年次実習（事前・事後指導1単位を含む）	4
中学校３年次実習（事前・事後指導1単位を含む）	3
中学校４年次実習（事前・事後指導1単位を含む）	4
特別支援学校教育実習（事前・事後指導1単位を含む）	3
教職実践演習（幼・小）	2
教職実践演習（中・高）	2

この適用を受けた学生は、免除科目の合計単位数以上の単位数を代替科目から修得しなければなりません。代替科目の履修は、自由選択科目の履修に準じます。

ただし、特別支援教育教員養成課程に在籍する学生で、特別支援学校教育実習を免除された者は、専門教育科目の特別支援専門科目のうち「特別支援学校教育実習」を除いた科目から31単位以上を修得しなければなりません。

XII

第１２章
介護等体験

1 介護等体験
2 実施学年・実施施設・体験期間
3 実施施設の種類
4 体験内容
5 介護等体験の費用
6 介護等体験を行うための要件
7 介護等体験の参加手続き
8 介護等体験の証明書の提出

第12章 介護等体験

1 介護等体験

教育職員免許法の特例等に関する法律により、小学校教諭および中学校教諭の免許状取得希望者には、障害者・高齢者等に対する介護等の体験が義務づけられています。本学の卒業要件を満たしても、介護等体験の証明書がなければ、小学校教諭および中学校教諭の免許状を取得することはできません。

本学においては、介護等体験を以下のとおり実施します。

2 実施学年・実施施設・体験期間

実施学年・実施施設・体験期間は、下の表にまとめたとおりです。

課　　程	実施学年・実施施設・体験期間
初等教育教員養成課程	①2年次・・・特別支援学校において、原則として連続する2日間 ②3年次・・・社会福祉施設等において、原則として連続する5日間 （上記①、②の両方を体験すること）
中等教育教員養成課程	
特別支援教育教員養成課程	特別支援学校における教育実習をもって、介護等体験とする。

注：6級以上の障害を有する者は免除されます。

3 実施施設の種類

介護等体験の実施施設は下記のとおりです。

特別支援学校・・・宮城県内の特別支援学校。

社会福祉施設等・・・法令に定める施設等で、宮城県および仙台市の関係機関と協議して定めた施設等。

4 体験内容

特別支援学校や社会福祉施設等において、障害者・高齢者等に対する介護・介助や、交流等を行います。また、受け入れ施設の職員に必要とされる業務の補助（掃除、洗濯その他）も体験内容に含まれます。

5 介護等体験の費用

社会福祉施設等における体験については、受け入れに必要な経費の徴収が行われますが、これは学生個人の負担となります。費用の詳細は、事前指導の中でお知らせします。

6 介護等体験を行うための要件（事前指導および健康診断等）

介護等体験を行うためには、次のことが必要です。事前指導の実施に関する詳細は、掲示にてお知らせします。

- 介護等体験に対応する事前指導を受講すること。
- 定期健康診断を受診すること。
- 「学生教育研究災害傷害保険」および「学研災付帯賠償責任保険」に加入していること。

以上の要件を満たさないと、介護等体験が実施できなくなる場合があります。

7 介護等体験の参加手続き

介護等体験を行うには、下記のとおり、参加手続きをする必要があります。
詳細は掲示にてお知らせします。

- ●特別支援学校…「申し込み書」を教務課窓口に提出する。
- ●社会福祉施設等…「申し込み書」に介護等体験費用を添えて教務課窓口に提出する。

※教育実習等特例措置が認められた者の介護等体験
教育実習等特例措置（143ページ参照）の適用を受けた者は介護等体験への参加は認められません。
なお、すでに介護等体験の申し込みを済ませた者については辞退の手続きが必要になります。

8 介護等体験の証明書の提出

介護等体験の証明書は、教育職員免許状の申請に必要な書類です。証明書は、介護等体験（特別支援教育教員養成課程の場合は特別支援学校での教育実習）の最終日に、受入先から交付されますので、受領後1週間以内に教務課窓口に提出してください。

XIII

第１３章
教職実践演習

1 教職実践演習
2 単位数と履修資格等
(1)履修時期と単位数
(2)履修資格
(3)履修方法
3 教職実践演習と履修カルテ
(1)資料の蓄積と履修カルテ
(2)履修カルテの作成と管理
4 授業科目表
授業科目表6－①(初等教育･教職科目)
授業科目表6－②(中等教育･教職科目)
授業科目表6－③(特別支援教育･教職科目)

第13章 教職実践演習

1 教職実践演習

「教職実践演習」は、教育職員免許法施行規則の改正により、平成22年度以降の入学者を対象に開講することになった科目です。

大学でのさまざまな授業科目の履修や課外活動等を通じて学生が身につけた資質能力が、教員に必要な資質能力として有機的に統合されているかどうかを確認することが、この科目のねらいです。

教員に必要な資質能力としては、以下のような事項が挙げられます。

- 使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項
- 社会性や対人関係能力に関する事項
- 幼児・児童・生徒に対する理解や学級経営等に関する事項
- 教科・保育内容等の指導力に関する事項

「教職実践演習」は、大学生活の中でこれらの資質能力が身についたかどうかをふり返る、「学びの軌跡の集大成」として位置づけられる科目です。

学生はこの科目の履修を通じて、将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待されています。

2 単位数と履修資格等

(1) 履修時期と単位数

履修時期は4年生の後期です。

必修2単位の科目であり、卒業予定者全員が履修することになります。

(2) 履修資格

「教職実践演習」を履修するためには、履修を希望する年度に、初等教育教員養成課程および中等教育教員養成課程については「4年次の教育実習（小学校4年次実習または中学校4年次実習）」、特別支援教育教員養成課程については「4年次の教育実習（小学校4年次実習または中学校4年次実習）」および「特別支援学校教育実習」の単位を修得済か、あるいは単位修得の見込みがなければなりません。

(3) 履修方法

「教職実践演習」は、所属するコース・専攻ごとに履修すべきクラスが定められています。

「教職実践演習」のクラス指定、および各クラスの授業概要については、**履修する年度の『開講科目一覧』**および**電子化シラバス**を確認してください。

3 教職実践演習と履修カルテ

(1) 資料の蓄積と履修カルテ

「教職実践演習」の履修は4年次の後期になりますが、1に記したように4年間の学生生活全体をふり返るという科目であるため、入学の段階から準備を始める必要があります。その準備とは、皆さんがいつでも自らの学習内容や学生生活をふり返り、自己評価を行い、そして次の目標を確認することができるようにすることです。そのためには、学習の成果物やレポート、成績の資料などを蓄積するとともに、ふり返りの考察・自己評価・目標設定などを記録しておく「履修カルテ」が必要になります。皆さんは在学中に以下のことを継続して実施してください。

・入学から卒業まで、さまざまな授業で作成したレポートや成果物、教育実習の実習日誌、課外活動の資料など、4年間の大学生活をふり返る際に必要なものを整理してファイルなどにまとめ、大切に保管してください。デジタルファイルの資料なども同様です。
・成績が開示される期間に、各自で成績表を印刷するなどして保管してください。
・成績や蓄積した学習の資料などを参考にしながら、自らの学習をふり返り、適宜履修カルテを更新してください。

（2）履修カルテの作成と管理

履修カルテの入力フォームはデジタルファイルとして配布されます。ファイルの配布方法や記入方法については、入学後の適切な時期に連絡します。

履修カルテには、新入生が入学後すぐに記入する項目や、必ず毎年度記入しなければならない項目があります。また、履修カルテは、教職実践演習における４年間のふり返りだけではなく、必要に応じて教員の学生指導にも利用されます。担当教員が履修カルテの提出を求めたり、個人面談の際に利用したりすることがあります。必要なときにいつでも履修カルテを提出できるように作成・管理してください。

なお、履修カルテには個人情報が含まれますので、その取り扱いには十分注意してください。また、デジタルファイルの消失を避けるために、適宜バックアップを保存するなどの対策を行ってください。

4 授業科目表

授業科目表6ー①（初等教育教員養成課程・教職科目）
授業科目表6ー②（中等教育教員養成課程・教職科目）
授業科目表6ー③（特別支援教育教員養成課程・教職科目）

次の表の科目から、自分の所属課程の該当科目を2単位修得してください。

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
教職実践演習（幼・小）	幼稚園・小学校教諭にふさわしい資質や諸能力の確認をし、これまでの履修のあり方をまとめ上げると共に、実際の授業力に結びつける形で学修の内容の総まとめを行う。	2	(2)	演　習	4	必　修
教職実践演習（中・高）	中学校・高等学校教諭にふさわしい資質や諸能力の確認をし、これまでの履修のあり方をまとめ上げると共に、実際の授業力に結びつける形で学修の内容の総まとめを行う。	2	(2)	演　習	4	必　修

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

XIV

第１４章
卒業研究

1 卒業研究
2 卒業研究の参加資格
3 卒業論文の作成・提出・審査
（1）卒業論文の作成
（2）卒業論文題目の提出
（3）卒業論文の提出
（4）卒業論文の審査

第14章 卒業研究

1 卒業研究

「卒業研究」は、4年間の学修成果を集約するものとして、全課程において設定されている科目です。指導教員の指導を受けながら論文を作成する（制作・演奏を含む）形と、指導教員が毎週実施する指定の演習に参加して研究を行う形の二つがあり、いずれをとるかはコース・専攻ごとに定められています。

「卒業研究」の履修にあたっては、以下の決まりに従う必要があります。

2 卒業研究の参加資格

「卒業研究」には参加資格が定められています。

「卒業研究」参加の前年度末までに84単位以上修得し、3年次の教育実習の単位を修得し、なおかつ教科科目の修得単位数が下表に示す単位数を超える者でなければ、「卒業研究」に参加することはできません。

「卒業研究」に参加できない場合、4年間で卒業することはできませんので注意してください。

なお、教育実習等特例措置で、３年次の教育実習（幼稚園実習、小学校３年次実習、中学校３年次実習）の免除の適用を受けた者は、それぞれの課程・コース・履修型で定められた卒業研究参加資格から、３年次の教育実習の単位を修得することが免除されます。

課　　程	コース・専攻・履修型	3年次の教育実習	教科科目の修得単位数	履修前年度末までの総修得単位数
初等教育教員養成課程	幼児教育コース	幼稚園実習	20単位以上	84単位以上
	子ども文化コース 教育学コース 教育心理学コース	小学校3年次実習	30単位以上	
	上記以外のコース	小学校3年次実習	24単位以上	
中等教育教員養成課程	全専攻	中学校3年次実習	28単位以上	
特別支援教育教員養成課程	小履修型	小学校3年次実習	34単位以上	
	中履修型	中学校3年次実習	44単位以上	

注：「卒業研究」の参加に必要な教科科目の修得単位数は、各コース・専攻・履修型の卒業に必要な教科科目の単位数の70%以上と定められています。

3 卒業論文の作成・提出・審査

指導教員の指導を受けながら論文を作成する（制作・演奏を含む）形の「卒業研究」を行うコース・専攻においては、次の決まりに従う必要があります。

（1）卒業論文の作成

指導教員の決定、卒業論文題目の選定方法は、各コース・専攻によって定められています。卒業論文作成の手順、方法についても、各コース・専攻の指示に従ってください。

（2）卒業論文題目の提出

卒業論文（制作・演奏を含む）提出者は、下記の日時までに、指導教員の承認を受けて「卒業論文題目届」を教務課に提出する必要があります。これを怠ると、卒業論文を提出することはできません。

ただし、海外に留学中の者（休学して海外の大学等で学んでいる者を含む）については、提出期限を8月31日（休日のときは次の平日）までとします。

卒業論文題目届

提出期限：**卒業予定年度の5月31日（休日のときは次の平日）17時まで**
提 出 先：教務課窓口

なお、届け出た論文題目を変更する必要が生じた場合は、指導教員の承認を受けて12月20日（休日のときは次の平日）17時までに「卒業論文題目変更届」を教務課に提出してください。

（3）卒業論文の提出

卒業論文は、下記の日時までに教務課に提出しなければなりません。これに遅れた場合、卒業論文は受理されませんので注意してください。

卒業論文の提出期限は以下のとおりです。

卒業論文の提出

提出期限：**1月16日（休日のときは次の平日）正午まで**
ただし、初等教育教員養成課程の理科コース、情報・ものづくりコース、家庭科コースと、中等教育教員養成課程の理科教育専攻、技術教育専攻、家庭科教育専攻の提出期限は、**2月8日（休日のときは次の平日）正午まで**とする。
また、論文題目提出期限の日時において海外に留学中の者（休学して海外の大学等で学んでいる者を含む）の提出期限も、2月8日（休日のときは次の平日）正午までとする。
提 出 先：教務課窓口
《注》卒業論文の体裁については、各コース・専攻の指示に従ってください。

なお、卒業論文のほかに「論文抄録」を提出させる場合もあります。これについては、各コース・専攻の指示に従ってください。

（4）卒業論文の審査

卒業論文の審査は下記の方法で行います。

①論文提出者には、試問（発表行事を含む）を行う。
②審査は、指導教員を含め2名以上の教員が行う。

XV

第１５章
副免許状の取得

1 本学で所要資格を取得できる免許状
2 副免許状の取得に関わる教育実習の履修
3 幼稚園、小学校、中学校、高等学校教諭の免許状取得を希望する場合
(1)「教科(領域)に関する科目」の履修
(2)「各教科(保育内容)の指導法に関する科目」の履修
(3)「教育の基礎的理解に関する科目」の履修
(4)「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」の履修
(5)「教育実践に関する科目」の履修
(6)「大学が独自に設定する科目」の履修
4 特別支援学校教諭の免許状取得を希望する場合
5 中学校、高等学校教諭の免許状の「教科に関する科目」(免許法相当科目表)

第15章 副免許状の取得

この章では、「副免許状」の取得を希望する場合の履修方法について、本学の教育課程に即して説明します。

「副免許状」とは、各課程のコース・専攻の卒業要件を満たすことにより取得資格が得られる免許状（5ページ参照）以外の免許状を指します。

1 本学で所要資格を取得できる免許状

必要単位を修得すれば、次の免許状取得の所要資格を得ることができます。

ただし、時間割の都合等で、希望する授業をすべて履修することは実際には不可能ですので、どの免許状を取得するとよいか、よく考えて、無理のない履修計画を立てるようにしてください。

・幼稚園教諭一種免許状（以下、「幼1種」と略す）
・幼稚園教諭二種免許状（以下、「幼2種」と略す）
・小学校教諭一種免許状（以下、「小1種」と略す）
・小学校教諭二種免許状（以下、「小2種」と略す）
・中学校教諭一種免許状（以下、「中1種」と略す）
・中学校教諭二種免許状（以下、「中2種」と略す）
・高等学校教諭一種免許状（以下、「高1種」と略す）
・特別支援学校教諭一種免許状
・特別支援学校教諭二種免許状

2 副免許状の取得に関わる教育実習の履修

教育職員免許状を取得するためには、所定の教育実習を履修する必要があります。副免許状の場合も、これは同じです。とはいえ、取得を希望する副免許状に関わる校種と同一の校種で必ず教育実習を行わなければならない、というわけではありません。また、中学校、高等学校の免許は、教科ごとに異なりますが、教育実習は教科ごとに履修する必要はありません。特別支援学校に関わる免許も、領域ごとに異なりますが、教育実習は領域ごとに履修する必要はありません。したがって、副免許取得を希望する校種によっては、別途教育実習を行わなくても、卒業要件として履修する教育実習の単位の修得によって教員免許を取得することができます。

なお、特別支援学校教育実習については、希望者数が実習校の受入人数を大幅に超える場合は、人数制限を行う可能性があるため、必ずしも希望者全員が履修できるとは限りません。

下の表は、学生の所属別に、各校種の副免許状取得に必要な教育実習（卒業要件以外の教育実習）をまとめたものです。

《表1》

学生の所属＼副免の校種	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	特別支援学校
初等教育教員養成課程（幼児教育コース）	—	—	—	中学校4年次実習	特別支援学校実習（4年次）
初等教育教員養成課程（幼児教育コース以外）	—	—	—	中学校4年次実習	特別支援学校実習（4年次）
中等教育教員養成課程（各専攻）	小学校4年次実習	—	—	—	特別支援学校実習（4年次）
特別支援教育教員養成課程（小履修型）	—	—	—	中学校4年次実習	—
特別支援教育教員養成課程（中履修型）	小学校4年次実習	—	—	—	—

「－」は、副免許取得に関わる教育実習を別途履修する必要がないことを示します。副免許状の取得に関わる教育実習を履修する必要があるのかないのか、この表によって各自確認してください。

副免許状の取得に関わって教育実習を履修する必要がある場合は、卒業要件としての教育実習と同様に、所定の手続きをへて実習を履修することになります。教育実習への履修登録や、教育実習履修の留意事項等については、卒業要件としての教育実習の場合と同じですので、第11章「教育実習」（139ページ～）の説明を確認してください。

3 幼稚園、小学校、中学校、高等学校教諭の免許状取得を希望する場合

副免許状として「幼1種」「幼2種」「小1種」「小2種」「中1種」「中2種」「高1種」の取得を希望する場合、次の6つの科目区分のそれぞれについて、免許状の種類に応じて定められた単位を修得する必要があります。なお、《表2》から《表5》の「－」は、単位を修得しても修得単位数に加えることができないことを意味していますので、留意してください。

（1）教科（領域）に関する科目
（2）各教科（保育内容）の指導法に関する科目
（3）教育の基礎的理解に関する科目
（4）道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目
（5）教育実践に関する科目
（6）大学が独自に設定する科目

6つの科目区分の合計修得単位数は、次のとおりです。

《表2》

科目区分	最低修得単位数						
	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
（1）教科（領域）に関する科目	6	6	10	4	20 ※理科は24	10～24 ※教科により異なる	20 ※家庭は26
（2）各教科（保育内容）の指導法に関する科目	10	6	20	12	8	2	4
（3）教育の基礎的理解に関する科目	12	12	10	10	10	10	10
（4）道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目	6	6	10	10	10	10	8
（5）教育実践に関する科目	9	9	9	9	9	9	5
（6）大学が独自に設定する科目	8	0	0	0	2 ※理科は0	0	12 ※家庭は6
合計	51	39	59	45	59 ※理科は61	41～55 ※教科により異なる	59

以下、この6つの科目区分ごとに、修得を必要とする単位数の説明を行います。

（1）「教科（領域）に関する科目」の履修

「教科（領域）に関する科目」については、取得を希望する免許状の種類に応じて、次の《表3》にしたがって必要単位を修得してください。

なお、「中1種」「中2種」「高1種」の免許状取得に必要な最低修得単位数は、教科により異なるので、《表10－1》から《表10－10》までの**「免許法相当科目表」（160ページ～170ページ）**のうち、取得を希望する免許教科の表を参照してください。

《表3》

区分	授業科目	単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
幼稚園 小学校	国語	2	国語・数学・生活・音楽・図画工作・体育の中から 6	国語・数学・生活・音楽・図画工作・体育の中から 6	10	4	―	―	―
	社会	2							
	数学	2							
	理科	2							
	生活	2							
	音楽	2							
	図画工作	2							
	体育	2							
	家庭	2							
	外国語活動・外国語	2							
中学校 高等学校	取得しようとする教科の「免許法相当科目」による		―	―	―	―	20 ※理科は24	10～24 ※教科により異なる	20 ※家庭は26
合計			6	6	10	4	20 ※理科は24	10～24 ※教科により異なる	20 ※家庭は26

留意事項

1. 「教科（領域）に関する科目」の単位修得に関しては、**『(6)「大学が独自に設定する科目」の履修』（157ページ）**も参照すること。

（2）「各教科（保育内容）の指導法に関する科目」の履修

「各教科（保育内容）の指導法に関する科目」については、取得を希望する免許状の種類に応じて、次の《表4》にしたがって必要単位を修得してください。

なお、「中1種」「中2種」「高1種」の免許状取得に必要な最低修得単位数は、教科により異なるので、《表10－1》から《表10－10》までの**「免許法相当科目表」（160ページ～170ページ）**のうち、取得を希望する免許教科の表を参照してください。

《表4》

区分	授業科目	単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
小学校	国語科教育法（初等）	2	—	—	10教科20単位	音・図・体から2教科を含め6教科12単位	—	—	—
	社会科教育法（初等）	2							
	算数科教育法（初等）	2							
	理科教育法（初等）	2							
	生活科教育法（初等）	2							
	音楽科教育法（初等）	2							
	図画工作教育法（初等）	2							
	体育科教育法（初等）	2							
	家庭科教育法（初等）	2							
	外国語活動・外国語教育法(初等)	2							
中学校	各教科の教育法（中等）	各2	—	—	—	—	8	2	4
	各教科の実践指導法（中等）	各2	—	—	—	—		—	—
幼稚園	各保育内容の指導法	各2	10 ※1	6 ※2	—	—	—	—	—
合計			10	6	20	12	8	2	4

留意事項

1. **幼1種**を取得する場合、上の表で※1を付した「各保育内容の指導法」に関する科目は、4単位まで小学校教諭免許状にかかわる各教科教育法（初等）(ただし、社会、理科、家庭、外国語は除く）をもってあてることができます。この取り扱いを受けるためには、同時に小学校教諭免許状を取得する必要があります。
（**幼2種**を取得する場合、上の表で※2を付した「各保育内容の指導法」に関する科目は、2単位まで小学校教諭免許状にかかわる各教科教育法（初等）(ただし、社会、理科、家庭、外国語は除く）をもってあてることができます。この取り扱いを受けるためには、同時に小学校教諭免許状を取得する必要があります。）
2. **中1種（国語）**を取得する場合、「国語科教育法Ⅰ（中等)」、「国語科教育法Ⅱ（中等)」、「国語科教育法Ａ（中等)」、「国語科教育法Ｂ（中等)」の4科目8単位を修得すること。
（**中2種（国語）**を取得する場合は、「国語科教育法Ⅰ（中等)」の1科目2単位を修得すること。）
3. **中1種（社会）**を取得する場合、「社会科教育法Ａ（中等)」、「社会科教育法Ｂ（中等)」、「社会・地歴科教育法（中等)」、「社会・公民科教育法（中等)」の4科目8単位を修得すること。
（**中2種（社会）**を取得する場合は、「社会科教育法Ａ（中等)」または「社会科教育法Ｂ（中等)」のどちらか1科目2単位を修得すること。）
4. **高1種（地理歴史）**を取得する場合、「社会科教育法Ａ（中等)」、「社会・地歴科教育法（中等)」の2科目4単位を修得すること。
5. **高1種（公民）**を取得する場合、「社会科教育法Ｂ（中等)」、「社会・公民科教育法（中等)」の2科目4単位を修得すること。
6. **中1種（数学）**を取得する場合、「数学科教育法Ⅰ（中等)」、「数学科教育法Ⅱ（中等)」、「数学科教育法Ａ（中等)」、「数学科教育法Ｂ（中等)」の4科目8単位を修得すること。
（**中2種（数学）**を取得する場合は、「数学科教育法Ⅰ（中等)」の1科目2単位を修得すること。）
7. **中1種（理科）**を取得する場合、「理科教育法Ⅰ（中等)」、「理科教育法Ⅱ（中等)」、「理科教育実践指導法Ａｂ（中等)」、「理科教育実践指導法Ｂｂ（中等)」の4科目8単位を修得すること。
（**中2種（理科）**を取得する場合は、「理科教育法Ⅰ（中等)」の1科目2単位を修得すること。）

(3)「教育の基礎的理解に関する科目」の履修

「教育の基礎的理解に関する科目」については、取得を希望する免許状の種類に応じて、次の《表5》にしたがって必要単位を修得してください。

《表5》

授業科目		単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
教職入門		2	2	2	2	2	2	2	2
教育の原理（必修）		2	2	2	2	2	2	2	2
教育の歴史（選択）		2							
発達と学習の心理		2	2	2	2	2	2	2	2
特別支援教育理解		2	2	2	2	2	2	2	2
教育の制度・経営	（選択必修）	2	2	2	2	2	2	2	2
教育と地域社会		2							
比較教育事情（選択）		2							
教育現場と法（選択）		2							
幼稚園教育課程論		2	2	2	–	–	–	–	–
合計			12	12	10	10	10	10	10

留意事項

1.「教育の基礎的理解に関する科目」の単位修得に関しては、『**(6)「大学が独自に設定する科目」の履修**』**(157ページ)**も参照すること。

(4)「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」の履修

「道徳、総合的な学習の時間等の指導法及び生徒指導、教育相談等に関する科目」については、取得を希望する免許状の種類に応じて、次の《表6》にしたがって必要単位を修得してください。

《表6》

授業科目	単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
教育課程と教育方法	2	2	2	2	2	2	2	2
道徳の理論と指導	2	–	–	2	2	2	2	–
総合的な学習の時間の指導法（特別活動を含む。）	2	–	–	2	2	2	2	2
教育相談（カウンセリングを含む。）	2	2	2	2	2	2	2	2
児童・生徒理解（生徒・進路指導論を含む。）	2	–	–	2	2	2	2	2
幼児理解	2	2	2	–	–	–	–	–
合計		6	6	10	10	10	10	8

（5）「教育実践に関する科目」の履修

「教育実践に関する科目」については、取得を希望する免許状の種類に応じて、次の《表7》にしたがって必要単位を修得してください。

なお、教育実習の履修については、**本章「2 副免許状の取得に関する教育実習の履修」（151ページ）**を参照してください。

《表7》

授業科目	単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
幼稚園実習	3	7（幼稚園、小学校の各実習を充てる）	7（幼稚園、小学校の各実習を充てる）	7（幼稚園、小学校、中学校の各実習を充てる）	7（幼稚園、小学校、中学校の各実習を充てる）	7（小学校、中学校、高等学校の各実習を充てる）	7（小学校、中学校、高等学校の各実習を充てる）	3（中学校、高等学校の各実習を充てる）
小学校3年次実習	3							
小学校4年次実習	4							
中学校3年次実習	3							
中学校4年次実習	4							
高等学校実習	3							
教職実践演習	2	2	2	2	2	2	2	2
合計		9	9	9	9	9	9	5

留意事項

1. 教職実践演習については、卒業要件として修得する単位ですべての免許状にあてることができるので、2科目（教職実践演習（幼・小）、教職実践演習（中・高）の両方）を修得する必要はありません。
2. 「教育実践に関する科目」の単位修得に関しては、『**(6)「大学が独自に設定する科目」の履修**』**（157ページ）**も参照すること。

（6）「大学が独自に設定する科目」の履修

「大学が独自に設定する科目」については、次の《表8》①～④に該当する授業科目の単位を修得し、取得を希望する免許状の種類に応じた必要単位を修得してください。

《表8》

授業科目			単位	幼1種	幼2種	小1種	小2種	中1種	中2種	高1種
①「教科（領域）に関する科目」				《表3》「教科（領域）に関する科目」の最低修得単位数をこえて修得した単位						
②「教育の基礎的理解に関する科目」				《表5》「教育の基礎的理解に関する科目」の最低修得単位数をこえて修得した単位						
③「教育実践に関する科目」				《表7》「教育実践に関する科目」の最低修得単位数をこえて修得した単位						
④「大学が独自に設定する科目」	子ども学		2							
	生涯学習論		2							
	小学校のみ	小学校英語教育概論	2	－	－			－	－	－
	理科のみ	理科教育学演習	2	－	－	－	－			
	家庭のみ	家庭科特別講義A	2	－	－	－	－			
		家庭科特別講義B	2	－	－	－	－			
		家庭科演習	2	－	－	－	－			
		家庭科実験	2	－	－	－	－			
		材料加工	2	－	－	－	－			
合計				8	－	－	－	2 ※理科は0	－	12 ※家庭は6

留意事項

1. ①欄の「教科（領域）に関する科目」については、取得しようとする教科の「免許法相当科目」から修得すること。「免許法相当科目」は《表10－1》から《表10－10》までの**「免許法相当科目表」（160ページ～170ページ）**を参照すること。
2. ④欄の「小学校のみ」の授業科目については、小1種、小2種の免許状を取得する場合にのみ、「大学が独自に設定する科目」の修得単位数に含めることができる。
3. ④欄の「理科のみ」の授業科目については、中1種、中2種、高1種の「理科」の免許状を取得する場合にのみ、「大学が独自に設定する科目」の修得単位数に含めることができる。
4. ④欄の「家庭のみ」の授業科目については、中1種、中2種、高1種の「家庭」の免許状を取得する場合にのみ、「大学が独自に設定する科目」の修得単位数に含めることができる。

4 特別支援学校教諭の免許状取得を希望する場合

特別支援教育教員養成課程の学生が、卒業要件として指定された領域以外の領域の特別支援学校教諭免許状を取得しようとする場合、または初等教育教員養成課程および中等教育教員養成課程の学生が、他の校種の免許状のほかに特別支援学校教諭の免許状を取得しようとする場合は、次の《表9》にしたがって「特別支援教育に関する科目」の必要単位を修得してください。ただし、特別支援学校教育実習については、希望者数が実習校の受入人数を大幅に超える場合は、人数制限を行う可能性があるため、必ずしも希望者全員が履修できるとは限りません。

なお、《表9》には、履修制限のある科目も含まれているため、どの科目を履修すればよいかを整理した一覧表を用意しています。副免許状として特別支援学校免許状の取得を考えている場合、**必ず教務課の窓口でこの一覧表を受け取り、それに従って履修するようにしてください。**

なお、特別支援学校教諭の免許状には下記の5領域があり、それぞれの領域に必要な単位数を満たした場合に、免

許状に領域名が付記されます。したがって、取得しようとする領域に関する科目を中心に、第1欄～第4欄についてそれぞれの授業科目の単位を修得するようにしてください。

・視覚障害者に関する教育の領域（以下「視覚」と略記）
・聴覚障害者に関する教育の領域（以下「聴覚」と略記）
・知的障害者に関する教育の領域（以下「知的」と略記）
・肢体不自由者に関する教育の領域（以下「肢体」と略記）
・病弱者に関する教育の領域（以下「病弱」と略記）

特別支援学校教諭免許状の授与所要資格として免許法が定める「特別支援教育に関する科目」の最低修得単位数は26単位（2種は16単位）ですが、すべての領域を満たすには41単位（2種は33単位）を修得する必要があります。

《表9》

修得すべき最低修得単位数の（　）は、2種免許状の最低修得単位数を示す。

特別支援教育に関する科目【　】内は免許法上必要単位数			授業科目（単位数）	修得すべき最低修得単位数	領域等
第1欄	特別支援教育の基礎理論に関する科目【2（2）】		特別支援教育基礎理論（2）	必修 2（2）	
第2欄	特別支援教育領域に関する科目【16（8）】取得しようとする領域に関する科目のみで上記単位を満たすこと。	心身に障害のある幼児、児童又は生徒の心理、生理及び病理に関する科目【2（2）】	視覚障害の心理・生理・病理（2）	取得しようとする領域の科目について必修 2（2）	視覚
			聴覚・言語障害の心理・生理・病理（2）		聴覚
			知的障害の心理・生理・病理（2）		知的
			肢体不自由の心理・生理・病理（2）		肢体
			病弱の心理・生理・病理（2）		病弱
		心身に障害のある幼児、児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目【2（2）】	視覚障害の教育課程・指導論（2）	取得しようとする領域の科目について必修 2（2）	視覚
			聴覚・言語障害の教育課程・指導論（2）		聴覚
			知的障害の教育課程・指導論（2）		知的
			肢体不自由の教育課程・指導論（2）		肢体
			病弱の教育課程・指導論（2）		病弱

特別支援教育に関する科目【　】内は免許法上必要単位数			授業科目（単位数）	修得すべき最低修得単位数	領域等
	特別支援教育領域に関する科目【16（8）】取得しようとする領域に関する科目のみで上記単位を満たすこと。	・心身に障害のある幼児、児童又は生徒の心理、生理及び病理に関する科目 ・心身に障害のある幼児、児童又は生徒の教育課程及び指導法に関する科目	視覚障害への教育支援A（2）	選択必修 4（0）	視覚
			視覚障害への教育支援B（2）		
			視覚障害への教育支援演習A（2）		
			視覚障害への教育支援演習B（2）		
			視覚障害への教育支援演習C（2）		
			聴覚・言語障害への教育支援A（2）	選択必修 4（0）	聴覚
			聴覚・言語障害への教育支援B（2）		
			聴覚・言語障害への教育支援演習A（2）		
			聴覚・言語障害への教育支援演習B（2）		
			聴覚・言語障害への教育支援演習C（2）		
			知的障害への教育支援演習A（2）		知的
			知的障害への教育支援演習B（2）		
			知的障害への教育支援演習C（2）		
			肢体不自由への教育支援演習（2）		肢体
			病弱への教育支援演習A（2）		病弱
			病弱への教育支援演習B（2）		
第3欄	免許状に定められることとなる特別支援教育領域以外の領域に関する科目【5（3）】		軽度発達障害への教育支援A（2）	必修 8（8）	ADHD, 情緒障害
			軽度発達障害への教育支援B（2）		LD、言語障害
			重度・重複障害への教育支援（2）		重複
			特別支援教育総論（2）		5領域全てを含む
第4欄	心身に障害のある幼児、児童又は生徒についての教育実習【3（3）】		特別支援学校教育実習（3）（事前・事後指導1単位を含む）	必修 3（3）	

5 中学校、高等学校教諭の免許状の「教科に関する科目」(免許法相当科目表)

《表10−1》 国語

下記授業科目から、必修・選択必修を含めて合計20単位以上修得すること。

免許法に定める区分	授業科目名	中学校一種 単位数	高等学校一種 単位数	備考
国語学(音声言語及び文章表現に関するものを含む)	国語学概論	2	2	必修 音声言語及び文章表現に関するものを含む。
	国語学講義A	2	2	
	国語学講義B	2	2	
	国語学演習A	2	2	
	国語学演習B	2	2	
	国語学演習C	2	2	
	国語学演習D	2	2	
国文学(国文学史を含む)	国文学概論	2	2	必修
	国文学講義A	2	2	
	国文学講義B	2	2	
	国文学演習A	2	2	
	国文学演習B	2	2	
	国文学演習C	2	2	
	国文学演習D	2	2	
	国文学史A	2	2	1科目選択必修
	国文学史B	2	2	
漢文学	漢文学概論	2	2	必修
	漢文学講義A	2	2	
	漢文学講義B	2	2	
	漢文学演習A	2	2	
	漢文学演習B	2	2	
書道(書写を中心とする)	書道演習	2	／	中学校の場合のみ必修

注）　この表のうち／欄の科目は、高等学校の免許単位に加えることができない。

注）　中学校2種免許状を取得する場合は、必修・選択必修を含めて合計10単位以上修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程国語教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9−①」を確認すること。

《表10−2》 社会、地理歴史、公民

・中学校一種（社会）については、下記授業科目の該当科目から、必修・選択必修を含めて合計20単位以上修得すること。
・高等学校一種（地理歴史）については、下記授業科目の該当科目から、必修・選択必修を含めて合計20単位以上修得すること。
・高等学校一種（公民）については、下記授業科目の該当科目から、必修・選択必修を含めて合計20単位以上修得すること。

免許法に定める区分			授業科目名	単位数	備考
中学校一種	高等学校一種				
社会	地理歴史	公民			
日本史・外国史	日本史		日本史概論	2	必修
			日本史講義A	2	
			日本史講義B	2	
			日本史講義C	2	
			日本史講義D	2	
			日本史演習	2	
	外国史		外国史概論	2	必修
			外国史講義A	2	
			外国史講義B	2	
			外国史講義C	2	
			外国史講義D	2	
			外国史演習A	2	
			外国史演習B	2	
地理学（地誌を含む）	人文地理学・自然地理学		人文地理学概論	2	必修
			人文地理学講義	2	
			自然地理学概論	2	必修
			自然地理学講義	2	
			地理学実習A	2	
			地理学実習B	2	
			地理学演習A	2	
			地理学演習B	2	
	地誌		地誌学講義A	2	1科目選択必修
			地誌学講義B	2	

免許法に定める区分			授業科目名	単位数	備考
中学校一種	高等学校一種				
社会	地理歴史	公民			
「法律学、政治学」		「法律学（国際法を含む）、政治学（国際政治を含む）」	法律学概論	2	1科目選択必修　国際法を含む。
			政治学概論	2	国際政治を含む。
			法律学講義	2	
			法律学演習	2	
			政治学講義	2	
			政治学演習	2	
「社会学、経済学」		「社会学、経済学（国際経済を含む）」	社会学概論	2	1科目選択必修
			経済学概論	2	国際経済を含む。
			社会学講義	2	
			社会学実習	2	
			社会学演習	2	
			経済学講義	2	
			経済学演習	2	
「哲学、倫理学、宗教学」		「哲学、倫理学、宗教学、心理学」	哲学概論	2	必修
			哲学講義	2	
			倫理学概論	2	
			倫理学講義	2	
			哲学演習	2	

注）この表のうち「　　」は、当該科目群のうちから1科目以上について修得すること。
注）この表のうち／欄の科目は、高等学校の免許単位に加えることができない。
注）中学校2種（社会）免許状を取得する場合は、必修・選択必修を含めて合計16単位以上修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程社会科教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9－②」を確認すること。

《表10−3》 数学

下記授業科目から「免許法に定める区分」ごとに1科目以上選択し、合計20単位以上修得すること。

免許法に定める区分	授業科目名	中学校一種 単位数	高等学校一種 単位数	備考
代数学	代数学入門	2	2	
	代数学基礎講義	2	2	
	代数学講義A	2	2	
	代数学講義B	2	2	
	代数学講義C	2	2	
	線形代数学A	2	2	
	線形代数学B	2	2	
幾何学	幾何学入門A	2	2	
	幾何学入門B	2	2	
	幾何学講義A	2	2	
	幾何学講義B	2	2	
	幾何学講義C	2	2	
解析学	微分積分学A	4	4	
	微分積分学B	4	4	
	解析学入門	2	2	
	解析学基礎講義	2	2	
	解析学講義A	2	2	
	解析学講義B	2	2	
	解析学講義C	2	2	
「確率論、統計学」	確率論・統計学A	2	2	
	確率論・統計学B	2	2	
コンピュータ	コンピュータ	2	2	

注）この表のうち「　　」は、当該科目群のうちから1科目以上について修得すること。

注）中学校2種免許状を取得する場合は、「免許法に定める区分」ごとに1科目以上選択し、合計10単位以上修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程数学教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9−④」を確認すること。

《表10−4》 理科

・中学校一種については、下記授業科目から、必修を含めて合計24単位以上修得すること。
・高等学校一種については、下記授業科目から、必修・選択必修を含めて合計20単位以上修得すること。

免許法に定める区分	授業科目名	中学校一種 単位数	高等学校一種 単位数	備考
物理学	物理学講義Ⅰ	4	4	必修
	物理学講義ⅡA	2	2	
	物理学講義ⅡB	2	2	
	物理学講義ⅡC	2	2	
化学	化学講義Ⅰ	4	4	必修
	化学講義ⅡA	2	2	
	化学講義ⅡB	2	2	
	化学講義ⅡC	2	2	
生物学	生物学講義Ⅰ	4	4	必修
	生物学講義ⅡA	2	2	
	生物学講義ⅡB	2	2	
	生物学講義ⅡC	2	2	
地学	地学講義Ⅰ	4	4	必修
	地学講義ⅡA	2	2	
	地学講義ⅡB	2	2	
	地学講義ⅡC	2	2	
物理学実験（コンピュータ活用を含む）	物理学実験Ⅰ	2	2	必修
	物理学実験Ⅱ	2	2	
化学実験（コンピュータ活用を含む）	化学実験Ⅰ	2	2	必修
	化学実験Ⅱ	2	2	
生物学実験（コンピュータ活用を含む）	生物学実験Ⅰ	2	2	必修
	生物学実験Ⅱ	2	2	
地学実験（コンピュータ活用を含む）	地学実験Ⅰ	2	2	必修
	地学実験Ⅱ	2	2	

高等学校については、必修科目から1科目選択必修

注）中学校2種免許状を取得する場合は、中学校1種免許状と同様に、必修を含めて合計24単位以上修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程理科教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9−⑤」を確認すること。

《表10−5》 音楽

下記授業科目から、必修・選択必修を含めて合計20単位以上修得すること。

免許法に定める区分	授業科目名	中学校一種 単位数	高等学校一種 単位数	備考
ソルフェージュ	ソルフェージュ	2	2	必修
声楽（合唱及び日本の伝統的な歌唱を含む）	声楽基礎	2	2	必修　日本の伝統的な歌唱を含む。
	声楽ⅠA	1	1	
	声楽ⅠB	1	1	
	合唱	2	2	必修
器楽（合奏及び伴奏並びに和楽器を含む）	ピアノ基礎	2	2	1科目選択必修　伴奏を含む。
	ピアノⅠ	2	2	伴奏を含む。
	オルガン・チェンバロ	2	2	
	合奏（弦楽）	2	2	1科目選択必修
	合奏（吹奏楽）	2	2	
	和楽器	2	2	必修
指揮法	指揮法	2	2	必修
	指揮実践演習	2	2	
音楽理論・作曲法（編曲法を含む）・音楽史（日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む）	キーボード・ハーモニー	2	2	
	音楽理論Ⅰ	2	2	必修　作曲法、編曲法を含む。
	作曲演習	2	2	音楽理論、編曲法を含む。
	音楽学概論	2	2	必修　音楽史、日本の伝統音楽及び諸民族の音楽を含む。
	西洋音楽史	2	2	
	日本音楽史	2	2	日本の伝統音楽を含む。
	民族音楽学	2	2	音楽史（諸民族の音楽を含む）

注）中学校2種免許状を取得する場合は、必修・選択必修を含めて合計18単位以上修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程音楽教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9−⑧」を確認すること。

《表10−6》 美術

下記授業科目から、必修を含めて合計20単位以上修得すること。

免許法に定める区分	授業科目名	中学校一種 単位数	高等学校一種 単位数	備考
絵画（映像メディア表現を含む）	絵画基礎	2	2	必修　映像メディア表現を含む。
	絵画Ⅰ	2	2	
	絵画ⅡA	2	2	
	絵画ⅡB	2	2	
	映像表現A	2	2	
彫刻	彫塑基礎	2	2	必修
	彫塑Ⅰ	2	2	
	彫塑ⅡA	2	2	
	彫塑ⅡB	2	2	
デザイン（映像メディア表現を含む）	デザイン基礎	2	2	必修　映像メディア表現を含む。
	デザインⅠ	2	2	
	デザインⅡA	2	2	
	デザインⅡB	2	2	
	映像表現B	2	2	
工芸	工芸基礎	2	／	必修
	工芸Ⅰ	2	／	
	工芸ⅡA	2	／	
	工芸ⅡB	2	／	
	クラフト	2	／	
美術理論・美術史（鑑賞並びに日本の伝統美術及びアジアの美術を含む）	美術理論・美術史基礎	2	2	必修　鑑賞並びに日本の伝統美術及びアジアの美術を含む。
	美術理論・美術史	2	2	
	美術理論・美術史演習	2	2	
	鑑賞	2	2	

注）この表のうち／欄の科目は、高等学校の免許単位に加えることができない。

注）中学校2種免許状を取得する場合は、必修を含めて合計10単位以上修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程美術教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9−⑨」を確認すること。

《表10−7》 保健体育

下記授業科目から、必修・選択必修を含めて合計20単位以上修得すること。

免許法に定める区分	授業科目名	中学校一種 単位数	高等学校一種 単位数	備考
体育実技	体育実技	2	2	必修
	器械運動	1	1	
	陸上競技	1	1	
	サッカーⅠ	1	1	1科目選択必修
	バスケットボールⅠ	1	1	
	バレーボール	1	1	
	水泳	1	1	
	舞踊AⅠ	1	1	1科目選択必修
	舞踊B	1	1	
	柔道	1	1	1科目選択必修
	剣道	1	1	
	特殊種目実技	1	1	
	遠泳	1	1	
	野外活動	1	1	
	スキー	1	1	
	サッカーⅡ	1	1	
	バスケットボールⅡ	1	1	
	舞踊AⅡ	1	1	
「体育原理、体育心理学、体育経営管理学、体育社会学、体育史」・運動学（運動方法学を含む）	体育原理・体育史	2	2	1科目選択必修
	体育心理学	2	2	
	体育経営管理学	2	2	
	体育社会学	2	2	
	スポーツバイオメカニクス	2	2	
	スポーツ運動学	2	2	必修　運動方法学を含む。
生理学（運動生理学を含む）	人体生理学	2	2	必修　運動生理学を含む。
	運動生理学実験	2	2	
衛生学・公衆衛生学	衛生・公衆衛生学	2	2	必修
学校保健（小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む）	学校保健	2	2	必修　小児保健、精神保健、学校安全及び救急処置を含む。

注）この表のうち「　　」は、当該科目群のうちから1科目以上について修得すること。

注）中学校2種免許状を取得する場合は、必修・選択必修を含めて合計15単位以上修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程保健体育専攻の専攻専門科目「授業科目表9−⑩」を確認すること。

《表10−8》 技術、工業

下記授業科目から、必修を含めて合計20単位以上修得すること。

免許法に定める区分		授業科目名	単位数	備考
中学校一種	高等学校一種			
技術	工業			
木材加工（製図及び実習を含む）	工業の関係科目	木材加工入門	2	必修　製図及び実習を含む。
		木材加工実験実習	2	
		木材加工応用	2	
金属加工（製図及び実習を含む）		金属加工入門	2	必修　製図及び実習を含む。
		金属加工実験実習	2	
		製図	2	
		金属加工応用	2	
機械（実習を含む）		機械技術入門	2	必修
		機械技術実験実習	2	必修
		機械技術応用	2	
電気（実習を含む）		電気技術入門	2	必修
		電気技術基礎	2	
		電気技術実験実習	2	必修
		電気技術応用	2	
情報とコンピュータ（実習を含む）		情報工学入門	2	必修　実習を含む。
		情報技術実験実習	2	
		情報技術	2	実習を含む。
		コンピュータネットワークの活用	2	
栽培（実習を含む）		教材植物入門	2	必修
		栽培実験実習	4	必修
		生物育成技術	2	
	職業指導	職業指導	2	高等学校の場合のみ必修

注）この表のうち／欄の科目は、それぞれの免許単位に加えることができない。

注）中学校2種免許状を取得する場合は、中学校1種免許状と同様に、必修を含めて合計20単位以上修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程技術教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9−⑥」を確認すること。

《表10−9》 家庭

・中学校一種については、下記授業科目から、必修・選択必修を含めて合計20単位以上修得すること。
・高等学校一種については、下記授業科目から、必修・選択必修を含めて合計26単位以上修得すること。

免許法に定める区分		授業科目名	単位数	備考	
中学校一種	高等学校一種				
家庭経営学（家族関係学及び家庭経済学を含む）	家庭経営学（家族関係学及び家庭経済学を含む）	家庭の経営	2	1科目選択必修	家族関係学及び家庭経済学を含む。
		家族と生活	2		家族関係学及び家庭経済学を含む。
被服学（被服製作実習を含む）	被服学（被服製作実習を含む）	被服の材料	2	2科目選択必修	
		編織学	2		
		生活と被服	2		
		被服学実験・実習A	1	1科目選択必修	被服製作実習を含む。
		被服学実験・実習B	1		被服製作実習を含む。
食物学（栄養学、食品学及び調理実習を含む）	食物学（栄養学、食品学及び調理実習を含む）	食品の科学	2	1科目選択必修	食品学を含む。
		生活と食物	2		食品学を含む。
		食物と栄養	2	必修	栄養学を含む。
		食物学実験・実習A	1	1科目選択必修	調理実習を含む。
		食物学実験・実習B	1		調理実習を含む。
住居学	住居学（製図を含む）	生活と住居	2	1科目選択必修	
		住居と環境	2		
		住居学実験・実習A	1	必修	製図を含む。
		住居学実験・実習B	1		
保育学（実習を含む）	保育学（実習及び家庭看護を含む）	発達と保育	2	1科目選択必修	
		家族と保育	2		
		保育学実験・実習A	1	1科目選択必修	実習を含む。
		保育学実験・実習B	1		実習を含む。
		健康の科学	2	高等学校の場合のみ必修	家庭看護を含む。
／	家庭電気・家庭機械・情報処理	情報科学	2	必修	
		機械基礎	2	必修	
		電気基礎	2	必修	

注）この表のうち／欄の科目は、中学校の免許単位に加えることができない。
注）中学校2種免許状を取得する場合は、必修・選択必修を含めて合計18単位以上修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程家庭科教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9−⑦」を確認すること。

《表10−10》 英語

下記授業科目から、必修・選択必修を含めて合計20単位以上修得すること。

免許法に定める区分	授業科目名	中学校一種 単位数	高等学校一種 単位数	備考
英語学	英語音声学概論	2	2	必修
	英文法概論A	1	1	必修
	英文法概論B	1	1	必修
	英語学演習A	2	2	
	英語学演習B	2	2	
	英語学演習C	2	2	
	英語学演習D	2	2	
	現代文法論	2	2	
英語文学	英語文学作品論	2	2	必修
	英語文学テーマ論	2	2	必修
	英語文学演習A	2	2	
	英語文学演習B	2	2	
	英語文学論	2	2	
英語コミュニケーション	英会話A（中等）	2	2	1科目選択必修
	英会話B（中等）	2	2	
	英会話C（中等）	2	2	
	英会話D（中等）	2	2	
	英作文A	1	1	1科目選択必修
	英作文B	1	1	
異文化理解	異文化理解講読A	1	1	1科目選択必修
	異文化理解講読B	1	1	
	異文化理解講読C	1	1	
	異文化理解講読D	1	1	
	英米文化論	2	2	
	日英対照言語学	2	2	
	西洋文化	2	2	

注）中学校2種免許状を取得する場合は、必修・選択必修を含めて合計12単位以上修得すること。

各科目の授業概要については、中等教育教員養成課程英語教育専攻の専攻専門科目「授業科目表9−③」を確認すること。

XVI

第１６章
その他の資格の取得

1 学校図書館司書教諭の任用資格の取得
(1)学校図書館司書教諭とは
(2)任用資格の取得
(3)履修上の留意点
2 社会教育主事の任用資格の取得
(1)社会教育主事とは
(2)任用資格の取得
(3)履修上の留意点
(4)「社会教育士」の称号の付与
3 授業科目表
授業科目表11－①(学校図書館司書教諭)
授業科目表11－②(社会教育主事)

第16章 その他の資格の取得

卒業に必要な単位に加えて、さらに所定の単位を修得すると、教育職員免許状のほかに「学校図書館司書教諭」「社会教育主事」の任用資格を取得することができます。この章では、これらの資格の取得について説明するとともに、開設されている資格関連科目の詳細とその履修方法が記された「授業科目表」を掲載します。表の見方については**第2章「6 授業科目表の見方」(9ページ～) を参照**してください。

1 学校図書館司書教諭の任用資格の取得

(1) 学校図書館司書教諭とは

学校図書館司書教諭は、学校図書館法に基づき学校図書館に配置される専門的職員です。小学校・中学校・高等学校または特別支援学校の教育職員免許状を有し、かつ学校図書館の管理・運営や図書館メディアを活用した教育についての知識・技能を修得したうえで、学校図書館の専門的職務を担う教諭のことをいいます。

平成15年度以降、12学級以上を擁するすべての学校に司書教諭を置くことが学校図書館法で義務づけられました。情報化が進む今日、学習情報センター、メディアセンターとしての学校図書館の役割が重視されるようになってきましたが、このような状況の中で司書教諭の役割への期待もまた高まってきているといえるでしょう。多様なメディアの発達に対応した情報サービスや、児童・生徒の主体的な学習活動の推進およびメディアリテラシー能力の育成のための適切な支援等を行うことが、近年、司書教諭に求められています。

(2) 任用資格の取得

司書教諭の資格は、教育職員免許状を有する者が、文部科学大臣の委嘱をうけた大学等で「学校図書館司書教諭講習規程」による講習を受け、所定の単位を修得することによって得られます。また、大学在学中に当該科目の必要単位をすべて修得し、さらに教育職員免許状を取得した場合は、上記の講習に書類参加すれば修了証書が授与されます。大学で必要な単位を修得しただけでは資格の取得にはなりませんので、注意してください。

本学では、「学校図書館司書教諭講習規程」で定められた学校図書館司書教諭の資格取得関連科目を、次に示す表のとおり5科目開設しています。この5科目の単位をすべて修得すれば、司書教諭の資格取得に必要な単位を満たすことができます。授業科目の詳細や履修方法については、**「授業科目表11－①」(174ページ～)** を確認してください。

【大学において修得すべき科目および単位数】

学校図書館司書教諭講習規程		左記に対応する本学の授業科目名			
科目名	単位数	授業科目名	単位数	対象年次	備考
学校経営と学校図書館	2	学校経営と学校図書館	2	全	必修
学校図書館メディアの構成	2	学校図書館メディアの構成	2	全	必修
学習指導と学校図書館	2	学習指導と学校図書館	2	全	必修
読書と豊かな人間性	2	読書と豊かな人間性	2	全	必修
情報メディアの活用	2	情報メディアの活用	2	2・3	必修

(3) 履修上の留意点

本学において学校図書館司書教諭の資格取得を希望する場合、**「授業科目表11－①」**に掲載されている授業科目の単位をすべて修得する必要がありますが、これらの科目の多くは隔年開講となっています。履修計画を立てる際には、**『開講科目一覧』**で開講予定を確かめてください。

2 社会教育主事の任用資格の取得

（1）社会教育主事とは

社会教育主事は、社会教育法に基づき都道府県および市町村教育委員会に置かれる社会教育に関する専門的職員です。地域の社会教育行政の中核として、社会教育事業の企画・実施および専門的技術的な助言と指導にあたることを職務としていますが、近年さらに、社会の成熟化に伴う生涯学習のニーズの増大、情報化・国際化・高齢化等の進展による社会の急速な変化に伴い、幅広い人々の自由で自主的な学習活動を側面から援助する行政サービスの提供者としての役割を果たすことも求められています。例えば、社会教育に関する専門的知識・技術を生かし、公民館等社会教育施設を中心に行われる社会教育事業と学校教育、文化、スポーツ、さらには社会福祉や労働等のさまざまな分野の関連事業等との適切な連携・協力を図り、地域の生涯学習を推進するコーディネーターとしての役割を担うことが期待されています。

また、社会教育法第9条の3第2項では、「社会教育主事は、学校が社会教育関係団体、地域住民その他の関係者の協力を得て教育活動を行う場合には、その求めに応じて、必要な助言を行うことができる」と定められています。学校と地域の連携協力を進める上での重要な役割を担う社会教育主事の役割を知ることは、教員を志望する学生にとっても有意義であるといえます。

（2）任用資格の取得

社会教育主事の資格は、大学に2年以上在学して62単位以上を修得し、かつ大学において文部科学省令（「社会教育主事講習等規程」）で定める社会教育に関する科目の単位を修得したうえで、1年以上社会教育主事補の職にあれば得ることができます。大学で必要な単位を修得しただけでは資格取得にはならず、実務経験が必要ですので、注意してください。

本学では、「社会教育主事講習等規程」で定められた社会教育主事の資格取得関連科目を、次に示す表のとおり開設しています。この表の、本学で開講している授業科目の中から必修・選択必修を含んで24単位以上修得すれば、社会教育主事の資格取得に必要な単位を満たすことができます。授業科目の詳細や履修方法については、**「授業科目表11－②」（174ページ～）**を確認してください。

なお、資格取得には、文部科学大臣の委嘱をうけた大学等が行う講習を受講する方法もあります。

【大学において修得すべき科目および単位数】

社会教育主事講習規程		左記に対応する本学の授業科目名			
科目名	単位数	授業科目名	単位数	対象年次	備考
生涯学習概論	4	生涯学習論	2	2	必修
		教育と地域社会	2	1	必修
生涯学習支援論	4	生涯学習実践論	2	2・3	必修
		社会教育講義	2	2・3	必修
社会教育経営論	4	社会教育経営論	2	2・3	必修
		教育調査論	2	2・3	必修
社会教育特講	8	現代社会教育論	2	2・3	必修
		人権教育	2	1・2	必修
		環境・防災教育	2	1・2	必修
		学校図書館メディアの構成	2	全	2単位以上選択必修
		情報メディアの活用	2	2・3	

社会教育主事講習規程		左記に対応する本学の授業科目名			
科　目　名	単位数	授　業　科　目　名	単位数	対象年次	備　考
社会教育実習	1	社会教育実習	1	3	必修
社会教育演習、社会教育実習、社会教育課題研究のうち1以上の科目	3	社会教育課題研究Ⅰ	2	3	必修
		社会教育課題研究Ⅱ	1	3	必修

(3) 履修上の留意点

①「社会教育実習」の履修資格

3年次対象の必修科目「社会教育実習」には履修資格が設けられています。「教育と地域社会」の単位を履修の前年度末までに修得していなければなりません。この単位を修得していない場合、「社会教育実習」の履修はできませんので注意してください。

②「社会教育実習」の履修予備登録

「社会教育実習」の履修希望者は、履修開始の前年度の12月に、所定の手続きをへて「社会教育実習予備登録届」を提出する必要があります。これを怠った場合には、翌年度の「社会教育実習」を履修することはできません。

「社会教育実習予備登録届」提出の詳細については、掲示にてお知らせします。

③「社会教育課題研究Ⅱ」の履修

「社会教育課題研究Ⅱ」は、できるだけ「社会教育実習」を履修する年度にあわせて履修してください。

④その他の科目

社会教育主事の資格取得に関わる科目（**「授業科目表11－②」**掲載）の一部は、必修・選択必修となっていますが、これらの科目には隔年開講のものがあります。**『開講科目一覧』**で次年度開講予定を確認のうえ、履修計画を立てるようにしてください。

(4)「社会教育士」の称号の付与

令和2年4月施行の省令改正により、社会教育主事の資格取得に必要な単位を満たすことにより、「社会教育士」の称号が取得できることになりました。

できたばかりの新しい制度であるため、社会教育士の活躍の場については、まだ具体的な点は不明です。学習成果を活かし、NPO や企業等の多様な主体と連携・協働して、社会教育施設における活動のみならず、環境や福祉、まちづくり等の社会の多様な分野における学習活動の支援を通じて、人づくりや地域づくりに携わる役割が期待されています。

3 授業科目表

次の表の科目は、全課程共通科目です。修得した単位は、自由選択科目の単位と認定されます。

授業科目表11ー①（学校図書館司書教諭）

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
学校経営と学校図書館	教育活動の視点から学校図書館の理念と教育的意義を押さえ、その機能と役割を学ぶ。そのために、教育行政とのかかわりにおける学校図書館の歴史、学校図書館法、また司書教諭の役割と学校図書館活動など、学校図書館全般について理解を深めていく。	2	(2)	講　義	全	必　修
学校図書館メディアの構成	学校図書館メディアの種類・特性と教育的意義を理解し、児童・生徒、教員に適切な情報を提供できるようメディアの組織化について学び、実務能力の育成を図る。	2	(2)	講　義	全	必　修
学習指導と学校図書館	学習指導において、学校図書館の果たす役割は大きい。その認識・理解を深めるとともに、学校図書館メディアの活用をめぐって、児童・生徒の発達段階や、各教科の特性に応じた指導方法を学び、司書教諭として児童・生徒・教員にどのような支援ができるのかを考える。	2	(2)	講　義	全	必　修
読書と豊かな人間性	児童・生徒の発達段階に応じた読書教育の理念と方法を探る。読書の意義と目的に対する理解を深めるとともに、児童・生徒向け図書館メディアの種類や活用法、読書指導・支援の方法等を学び、さらに読書を通じた家庭・地域との連携についても考える。	2	(2)	講　義	全	必　修
情報メディアの活用	学校図書館を中心に、教育現場における多様な情報メディアの特性と活用の方法を学ぶ。コンピュータや教育用ソフトウェアの活用のほか、視聴覚メディアの活用、データベースと情報検索、インターネットによる情報検索と発信について理解を深める。	2	(2)	講　義	2·3	必　修

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

授業科目表11ー②（社会教育主事）

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
生涯学習論	「生涯教育」から「生涯学習」に至る国内外の議論や事業・政策の動向をふまえた上で、学校教育・家庭教育・社会教育の各領域において「生涯学習」の理念がもつ意味を検討する。学校以外を含む多様な機会に子どもからおとなまでが関わる営みとしてとらえることで、教育の本質について理解を深める。	2	(2)	講義	2	必　修
教育と地域社会	社会教育における学習活動と学習支援のしくみについて、理論的・学説史的な整理とともに具体的な事例の検討を行う。学校教育のみにとどまらない教育の豊かな可能性を理解するとともに、学校および教員の立場から見た社会教育との関わり方（連携・協力を含む）について理解を深めることをめざす。	2	(2)	講義	1	必　修
生涯学習実践論	社会教育における学習活動とその支援について、学齢期の子どもと若者・青年に焦点を当て、実例を交えながら検討する。学習要求や課題の把握とそれに基づく適切な支援、学習成果の評価・活用など、学習活動の展開過程全体について実践的な考察を行う。	2	(2)	講義	2·3	必　修

授業科目名	授業概要	単位数	毎週授業時数	講義・演習・実験等	対象年次	備考
社会教育講義	学校教育という枠組みに限定されない視野で、学習活動と学習支援のしくみについてさまざまな角度から検討をおこなう。	2	(2)	講義	2·3	必修
社会教育経営論	地域社会の状況に基づく社会教育の事業計画にはじまり、社会教育施設の運営や行政のあり方に至るまで、社会教育の計画立案の全般について、理論的・実際的な理解を深める。	2	(2)	講義	2·3	必修
教育調査論	教育調査に用いる技法について、具体的な事例紹介や実習的な活動を交えながらその基礎的な知識を学習する。質問紙法、面接法、参与観察／エスノグラフィーなど、社会調査で用いられる技法の概要を紹介しつつ、「教育」調査が固有に持つ特徴について考えてゆきたい。	2	(2)	講義	2·3	必修
現代社会教育論	現代社会において人びとの意識や行動は多様化の傾向を示し、それを反映して社会教育の内容、方法も多様化している。このような状況の中で特に注目される現代的学習課題をトピック的に取り上げ、今日の社会教育の特色と問題とを理解するとともに、現代社会を生きる「私たち」にとっての課題をさぐる。	2	(2)	講義	2·3	必修
人権教育	近年、人権教育をめぐる議論が盛んになってきた。「国連人権教育の10年」や「子どもの権利条約」に関する国内外の行動に触れつつ、日本における子どもの人権保護と教育をめぐる問題、子どもの人権意識の形成にかかわる問題について検討する。	2	(2)	講義	1·2	必修
環境・防災教育	気候変動に伴う環境の変化や災害リスクの想定に関する基礎的知識をもとに、想定外の事態に対応できる能力を多様なアプローチで育成する。環境問題に関わる国内外の議論や取り組み、自然環境の本質や災害発生のメカニズム、危機的状況に対応できる野外活動など、学校における防災教育、安全管理及び環境保全教育について最低限身に付けておくべき事柄を学ぶ。	2	(2)	講義	1·2	必修
学校図書館メディアの構成	学校図書館メディアの種類・特性と教育的意義を理解し、児童・生徒、教員に適切な情報を提供できるようメディアの組織化について学び、実務能力の育成を図る。	2	(2)	講義	全	2単位以上選択必修
情報メディアの活用	学校図書館を中心に、教育現場における多様な情報メディアの特性と活用の方法を学ぶ。コンピュータや教育用ソフトウェアの活用のほか、視聴覚メディアの活用、データベースと情報検索、インターネットによる情報検索と発信について理解を深める。	2	(2)	講義	2·3	
社会教育実習	社会教育の現場における実習を中心に、適宜、事前・事後指導を行う。実習期間中は、職員の仕事の観察・体験（補助）を通じて、学習活動とその支援のあり方について理解を深める。	1	(1)	実習	3	必修
社会教育課題研究Ⅰ	社会教育実践の記録の読解や、事業の聴き取り等をとおして、社会教育に関する理論的な知識を改めて整理するとともに、社会教育に関する理解をさらに深める。	2	(2)	演習	3	必修
社会教育課題研究Ⅱ	社会教育実習への参加に向けて、社会教育に関する理論的な知識を改めて整理し、それを活用して学習プログラムの企画立案を行う。	1	(1)	演習	3	必修

注）毎週授業時数欄の（　）は、前期または後期のみの時数を示す。

MEMO

MEMO

MEMO

履修のしおり

令和3年度（2021年度）入学生用

令和3年3月31日発行

編集・発行者：宮城教育大学 学務委員会
〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149番地
電話：（022）214−3331
FAX：（022）214−3621
印刷所：（株）ホクトコーポレーション